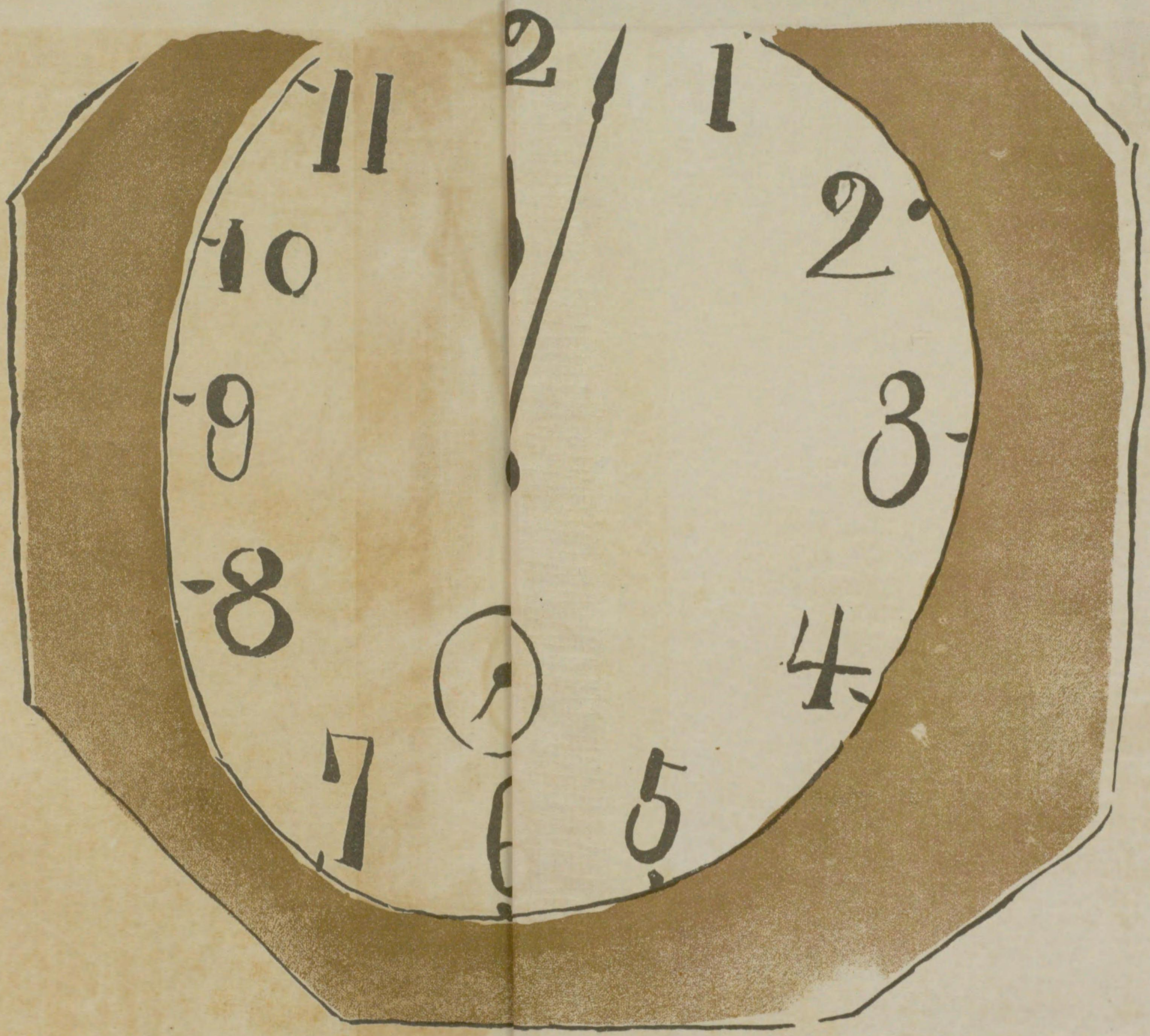


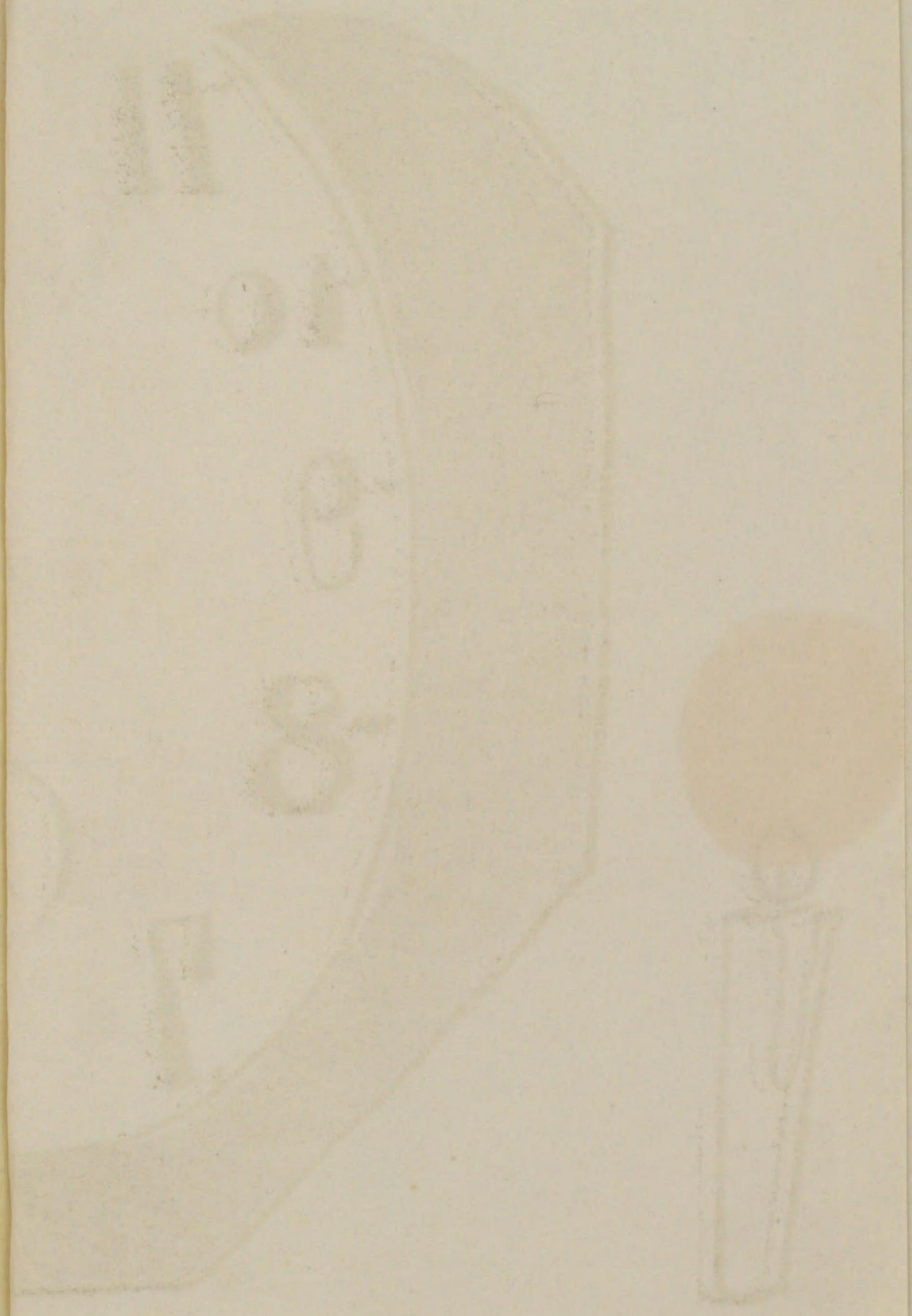
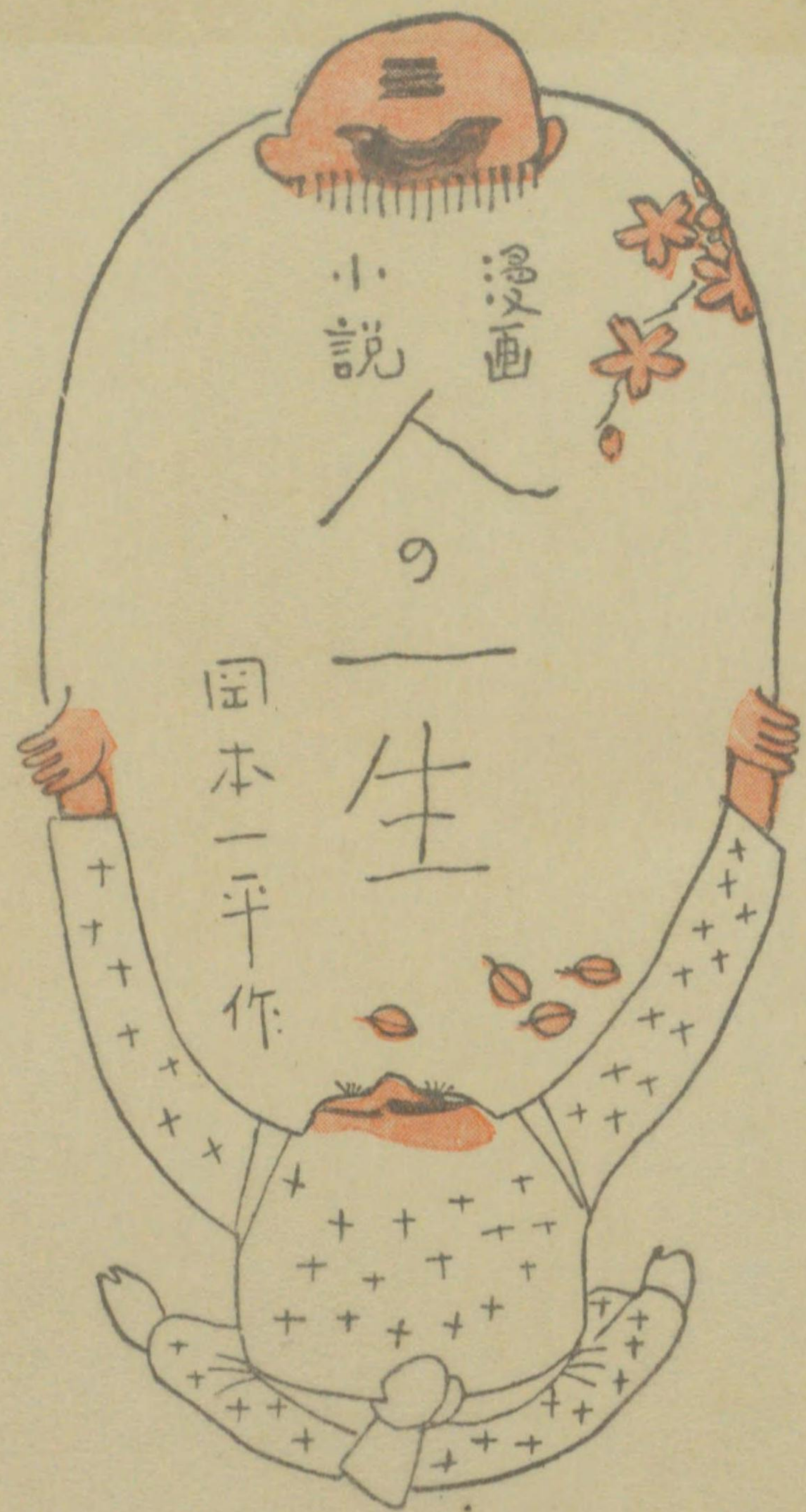
517-535

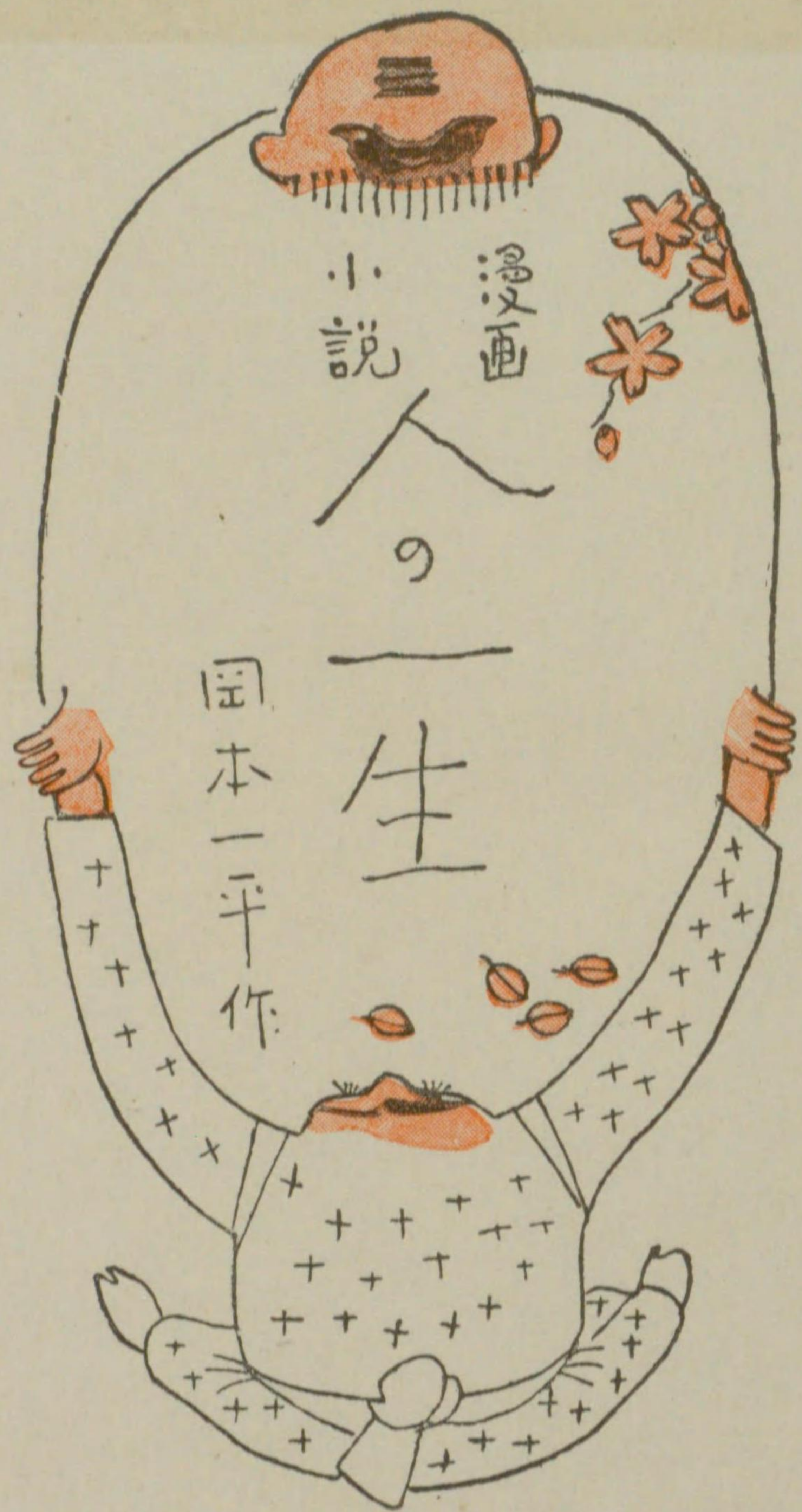


\*1200301171648\*









小説 漫画

の

一生

岡本一平作

517-535

### 序

この「人の一生」の繪物語は、僕が大正十年東京朝日新聞の漫畫欄を擔任して居た時描き始めたものであります。

描き續けて來るうち、僕が洋行したり、自然が地震を起したり、その爲め度々中絶の運命に遇ひました。然し、その後雑誌「婦女界」との縁が調うて、今日までも描き續けて居る次第であります。

この先いつ迄續くか判りません。

僕がこの繪物語を描き出した最初の考へは、身いやくも明治大正に生きて來て時代の世態人情を表現する漫畫家としての使命を享けた以上、この時代の一個の人間に纏はるあらゆる事情あらゆる境遇あらゆる感情を描き遺して、後世へ錢する事が一種の藝術家の重い責任の一つではあるまいか、かう思つたからであります。



I 種  
W



\*1200301171648\*

この考へに推し進められて筆を繼いで行つてゐる事は、年號の新しきを更に一つ加へた昭和の今日でもなほ變りはありません。恐らく將來とてもさうでありませう。僕の分際としては随分覺悟をきわめた仕事の一つであります。

一方から申すと、この仕事は僕に取つて僕の生涯を賭けた藝術的の一大投機です。この仕事へたに終れば僕の生涯の一部は無駄に費された事になりますし、うまく行けば生涯の一部を有効に費したといふ事になります。

なにしろ作中の主人公も筆者も生涯を賭けての永い投機です。急な勝負には参りません。養老保険が満期になつて、始めて仕合せだつたといふ調子のものだらうと存じます。

讀者に願つて置く事は、此繪物語に對して華々しい拍手の聲援は要りません。「兎も角も續けて行くがよい」といふ善諾を與へられたい事です。編み續けて行くうち、いつか毛綱のやうな念力と強さをもつた長いものが出来て居たといふ驚きを結果に於

て見たいのです。

この作は筆者の藝術的投機だといつたとて、僕はこれを自分の我儘な興味から一つも描いては居りません。現代に於て書くべきものを書くといふ責任感を常に筆に傳へて居る積りです。若しこれをしも作中に認め得ないといふなら、筆者はいつでもこの物語を打ち切ります。作中の主人公成君をたちどころに筆殺いたします。

人成君の生命は、たとへ紙上で筆殺されても、必ずや他に「適當」を見付けて何かの形式で筆者を通じて現實に生きて出る。これではなくては眞の生命とはいへません。唯野人成とは、筆者が生命の不思議を現す爲めに操る傀儡の名前です。

昭和二年新春

一平生

# 人の一生目次

四

オギアより饅頭まで……………(一)

一 出生前後(一)……………(三)

二 出生前後(二)……………(一一)

三 出生前後(三)……………(一九)

四 名前のつけ方……………(二七)

五 人左衛門の話……………(三五)

六 祝の商品切手……………(四三)

七 お宮詣り……………(五一)

八 子守難……………(六五)

幼年時代……………(六七)

九 來客と襦袢……………(六九)

一〇 ウービンヤチャン……………(七七)

一一 兵隊ごっこ……………(八五)

一二 筒井筒……………(九三)

一三 幼稚園入り……………(一〇一)

一四 根問ひ葉問ひ……………(一〇九)

一五 先生の結婚……………(一一七)

一六 海水浴と黛……………(一二五)

少年期……………(一三三)

一七 メンタルテスト……………(一三五)

一八 兒童衛生……………(一四三)

一九 盜癖……………(一五一)

二〇 卷ちゃんの生立ち……………(一五九)

五

一一	父の失業	.....	(一六七)
一二	春の眼覚め	.....	(一七五)
一三	入學難	.....	(一八三)

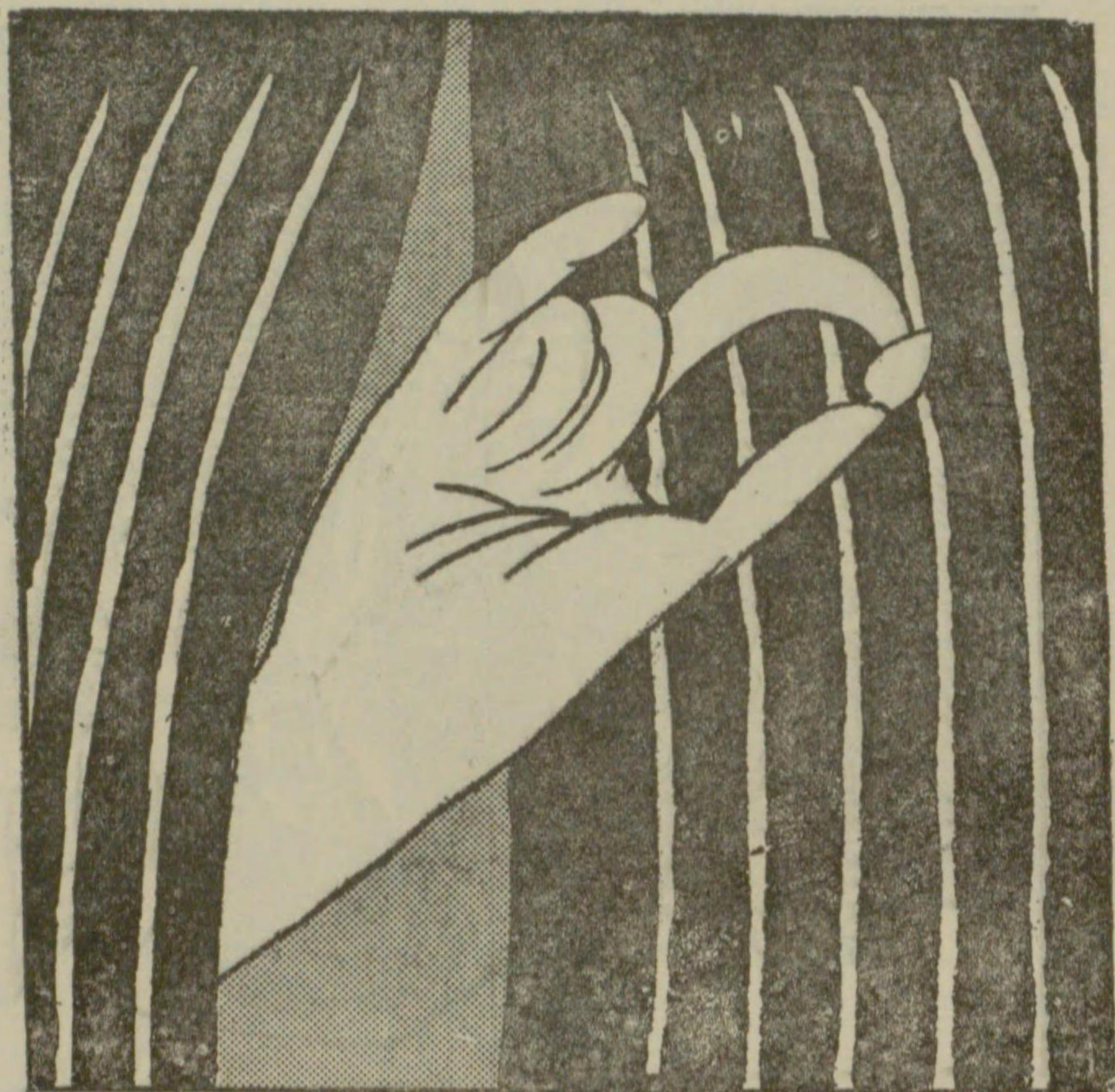
青 年 期..... (一九一)

一四	中 學 生	.....	(一九三)
一五	書生々活(一)	.....	(二〇一)
一六	書生々活(二)	.....	(二〇九)
一七	空 想	.....	(二一七)
一八	給 仕 生 活	.....	(二二五)
一九	學資の後援	.....	(二三三)
三〇	女 難(一)	.....	(二四一)
三一	女 難(二)	.....	(二四九)
三二	女 難(三)	.....	(二五七)

三三	墮落の経路	.....	(二六八)
三四	結婚か生活か	.....	(二七九)
三五	商 賣	.....	(二九〇)
三六	都 落 ち	.....	(三〇一)



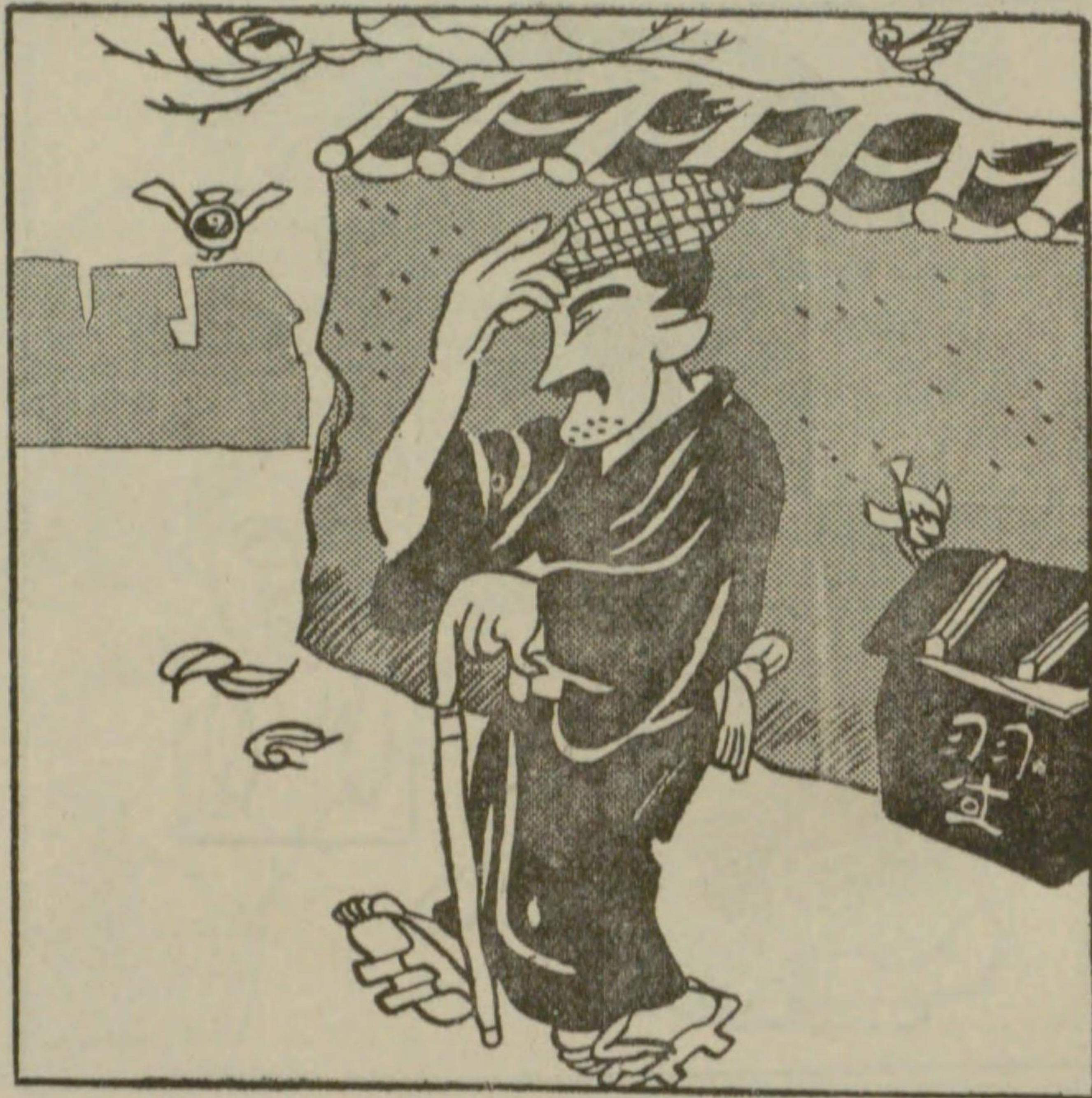
オギアふり饅頭まで



出生前後 (一)

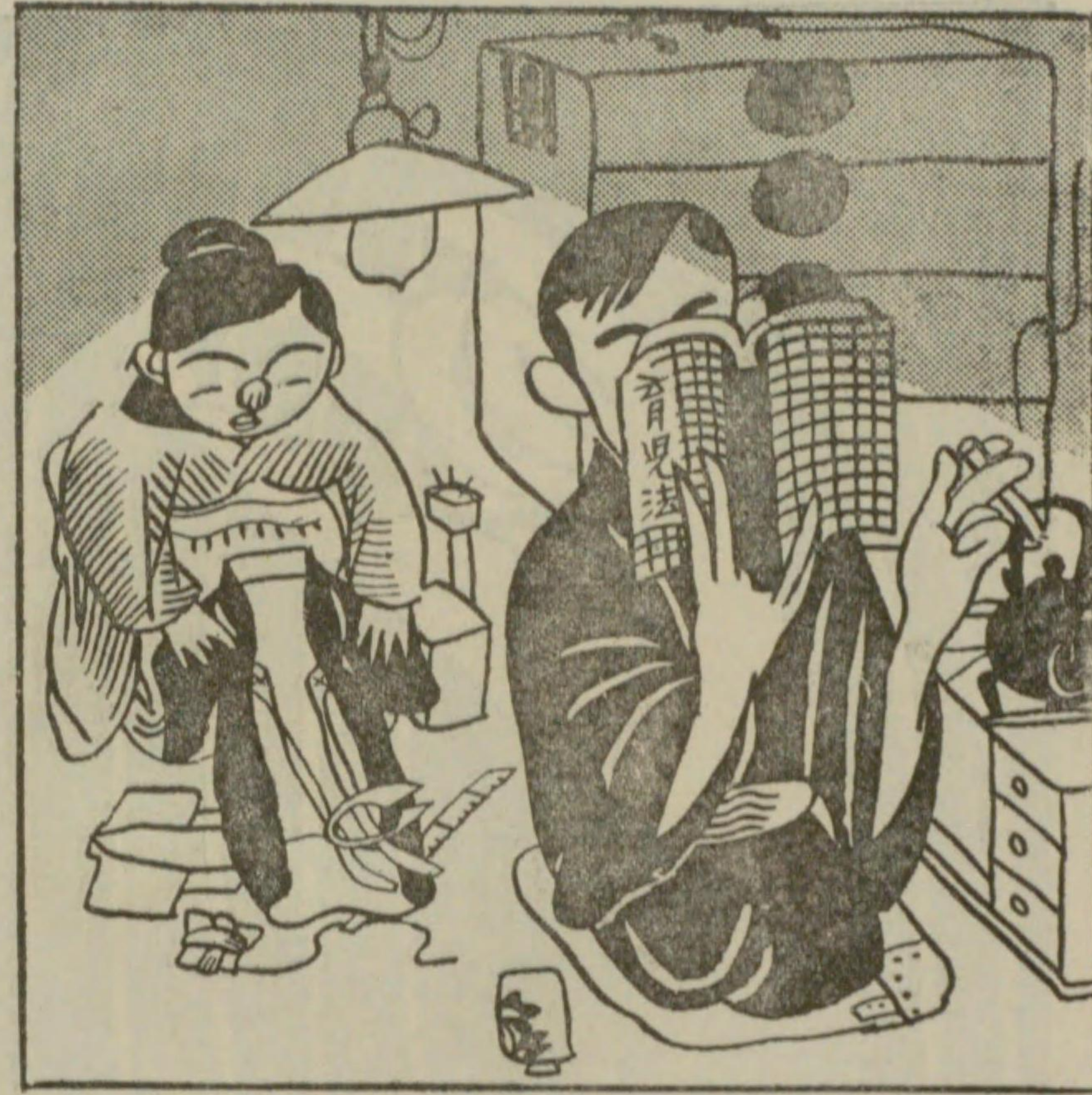
—

今こゝに一つの生がこの世の中に宿つたのである。夫は誰が齎したのか？ 何處より？ 何の爲めに？……此等の疑ひは總て神祕の彼方に問へ。



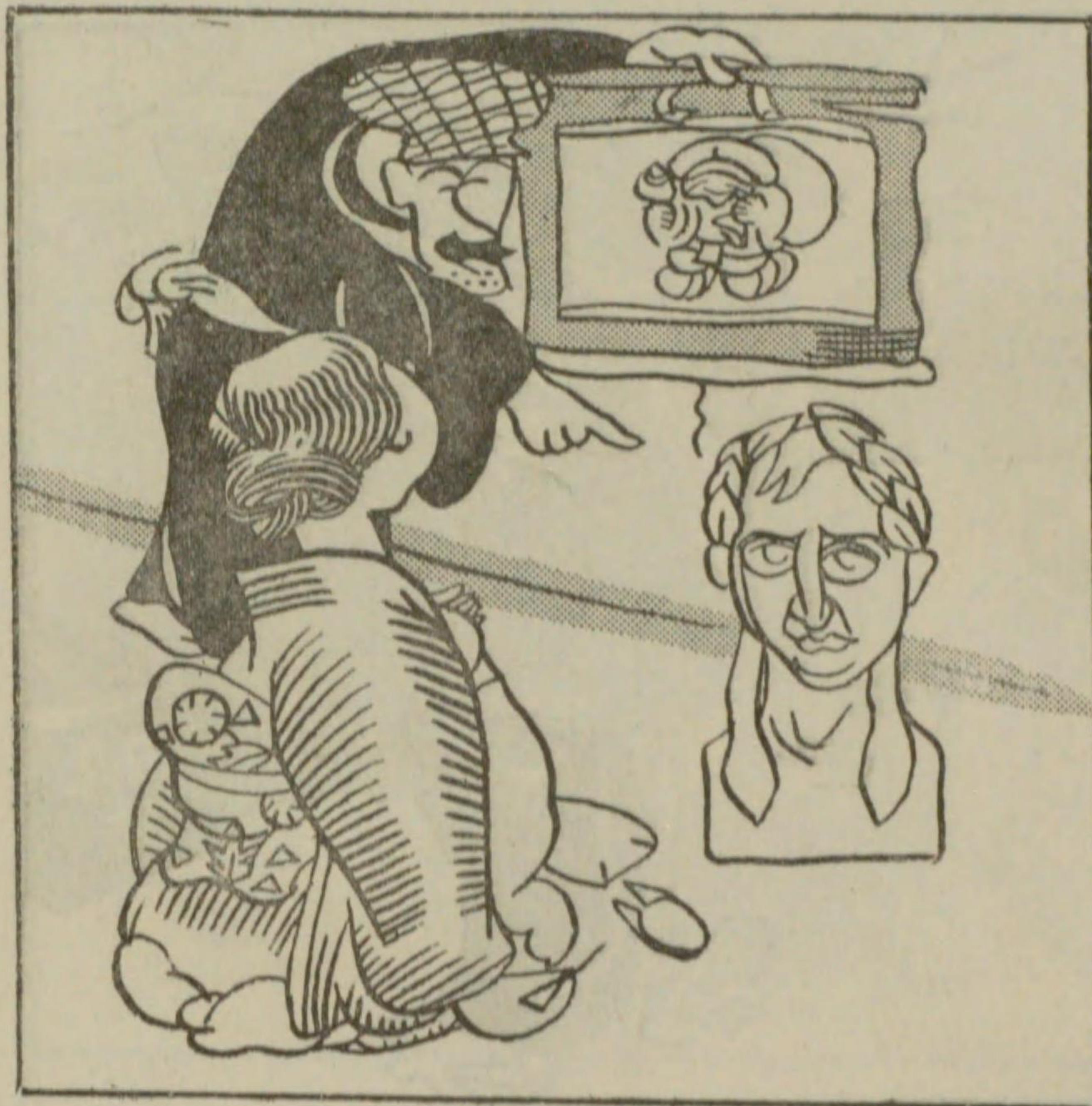
翌朝幹人は朝飯が済むなり早速  
 外出に出掛けた。どこの古物店  
 をどう漁ったか、いかゞはしい大  
 黒天の軸とナポレオンの石膏像と  
 を買って来た。

三



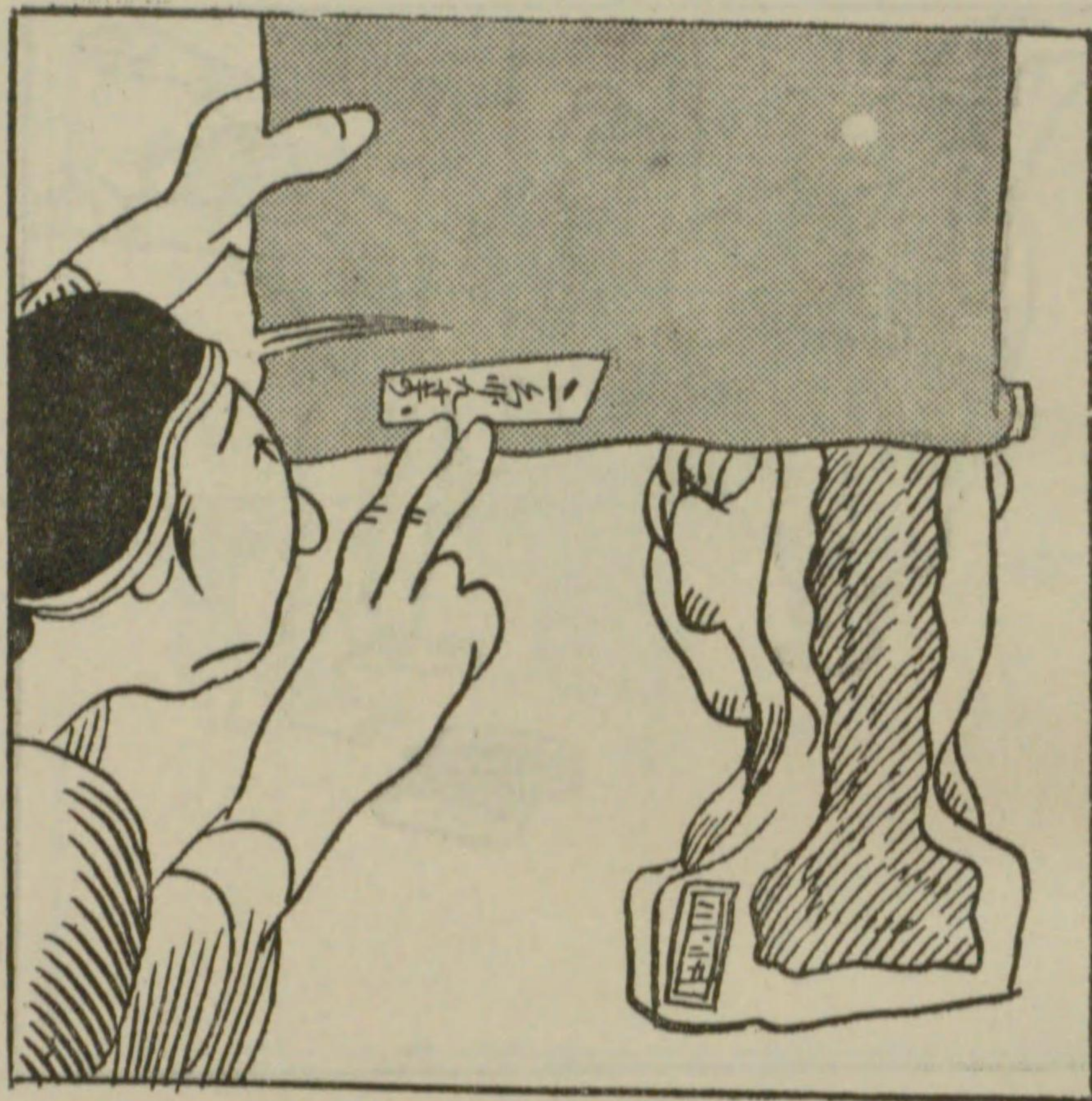
唯野幹人の妻、つま子は妊娠早  
 五箇月の太鼓腹である。幹人は食  
 後の煙草を喫乍ら育兒法の本を繰  
 つて居たが、胎内教育の條に至つ  
 て大いに感じた。

二



四

幹人「つま子、いゝか、此大黒様  
とナポレオンの像をじつと見詰め  
て居るんだ、腹の赤ん坊が自然と  
感化を受けて福と力とを授かつて  
生れる。」つま子「本當？」



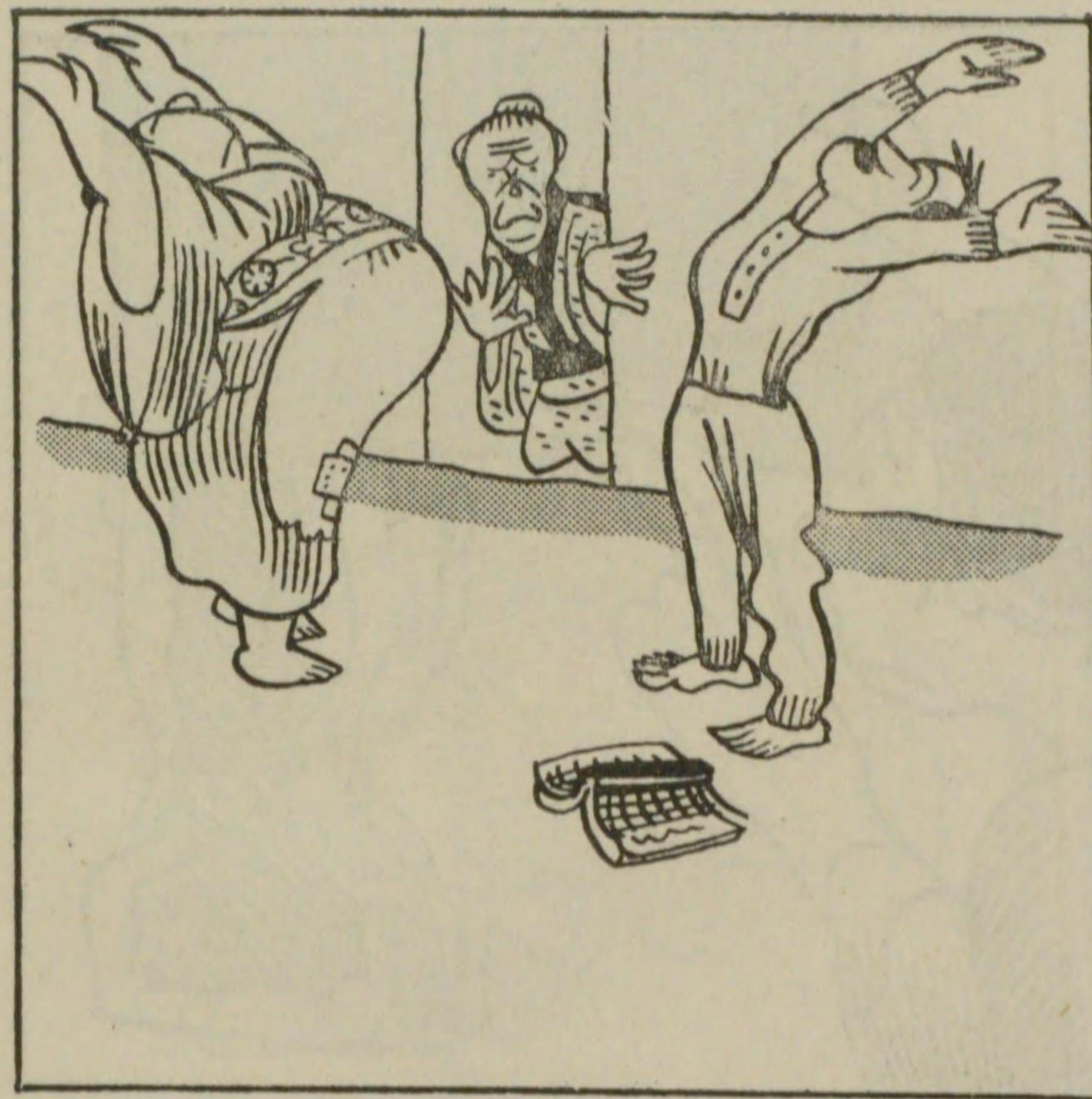
五

つま子は「大黒天やナポレオンを  
眺めるよりも其裏に貼つてある値  
段を見た。「うちも考へなしで困  
る。今浪人してるのにこんな無駄  
に五圓も六圓も遣つて。」

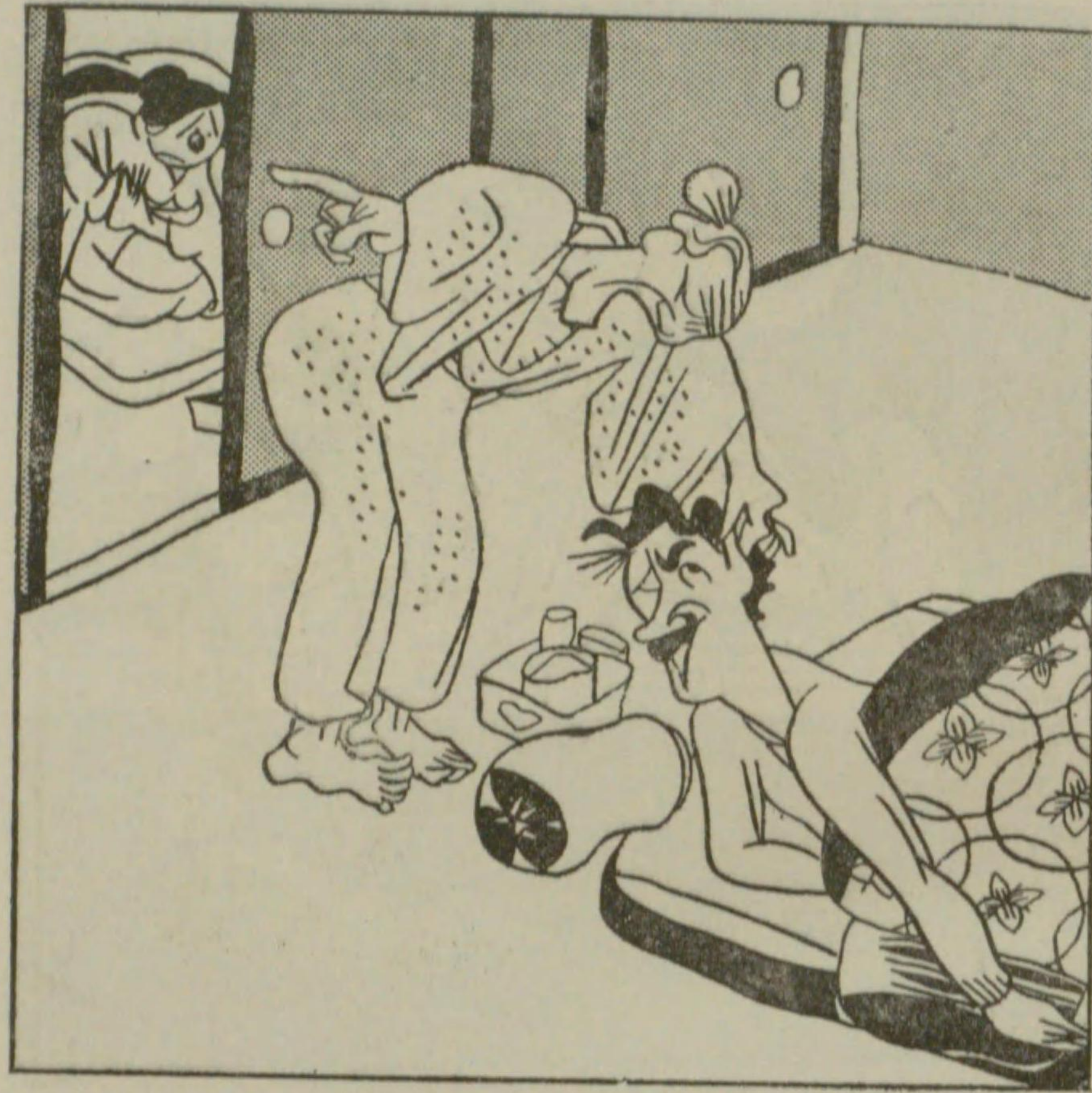


それを老母のおひさが見附けて  
 飛んで入り「飛んでもない。昔か  
 ら高い處へ手を擧げる事さへ誠め  
 てあるお産婦さんへ何と云ふ真似  
 をさせるのです。」

七



六  
 幹人は育兒法を讀んで今度は妊  
 娠中の母體の健康法に就て感じた  
 らしい。つま子を自分の正面に立  
 たせ、自分がシャツ一枚で教師と  
 なり簡易體操を始めた。



出生前後 (二)

或夜中つま子に産氣がついた。

老母おひさ「コレ幹人や、起きて

お呉れよ、蟲が冠つて來たよ。お

前の子が生れるのだよ、お寢ほけ

でないよ。」



八

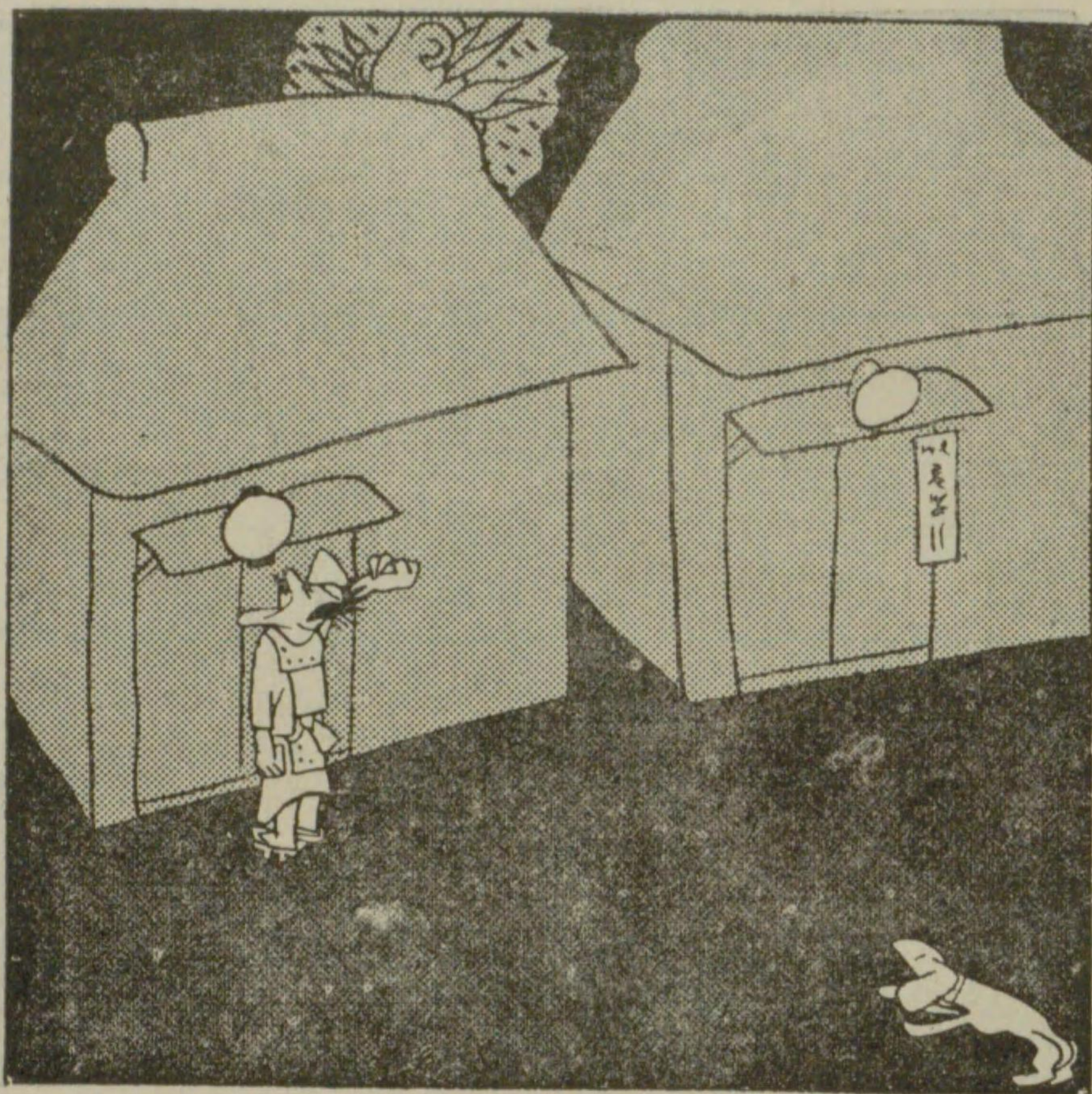
幹人「近頃では適當にせよと藪井

博士のお説です。」おひさ「博士で

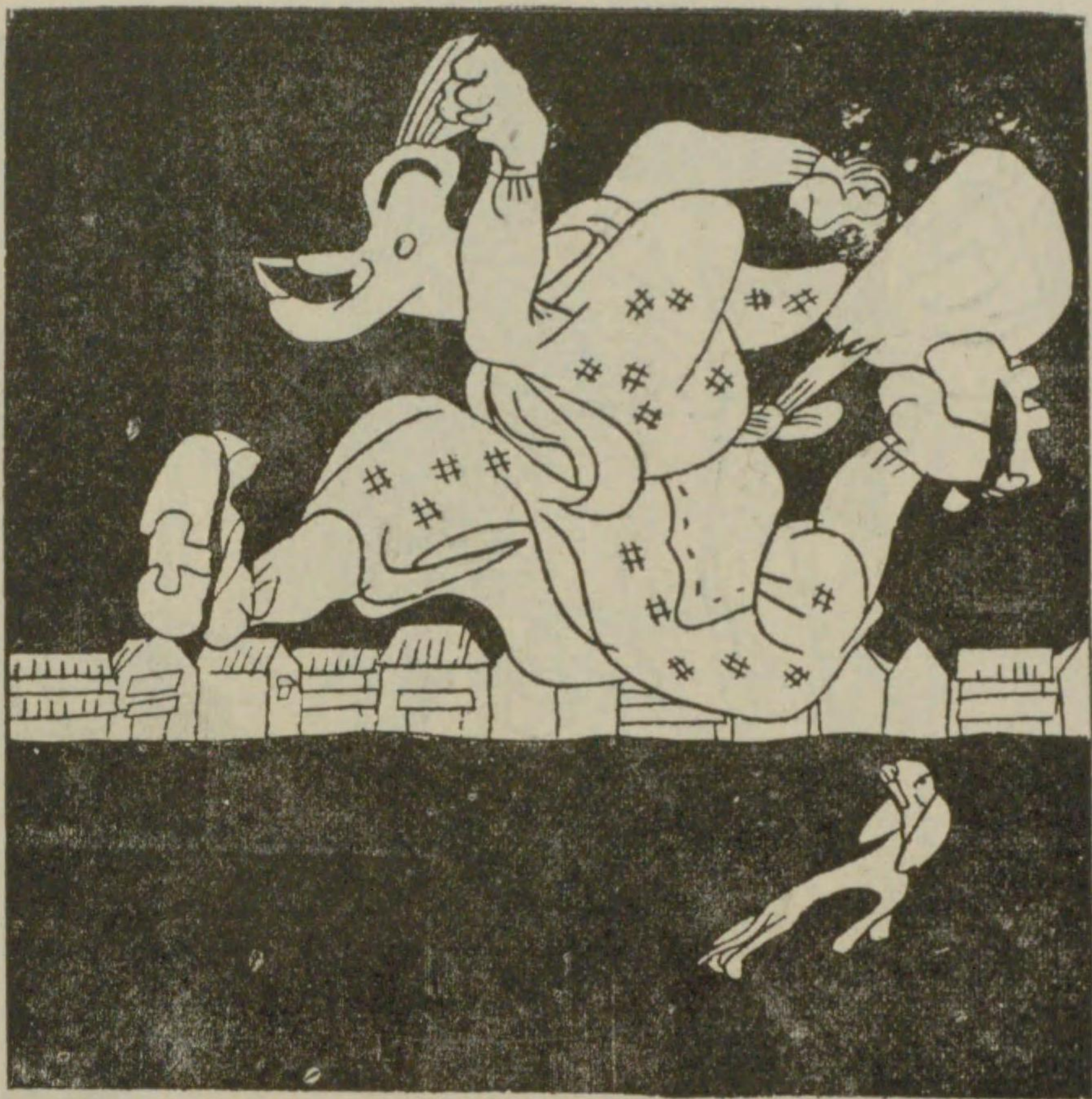
も何でもいけません。其様にさせ

なければ私が身代爲てあげよう。

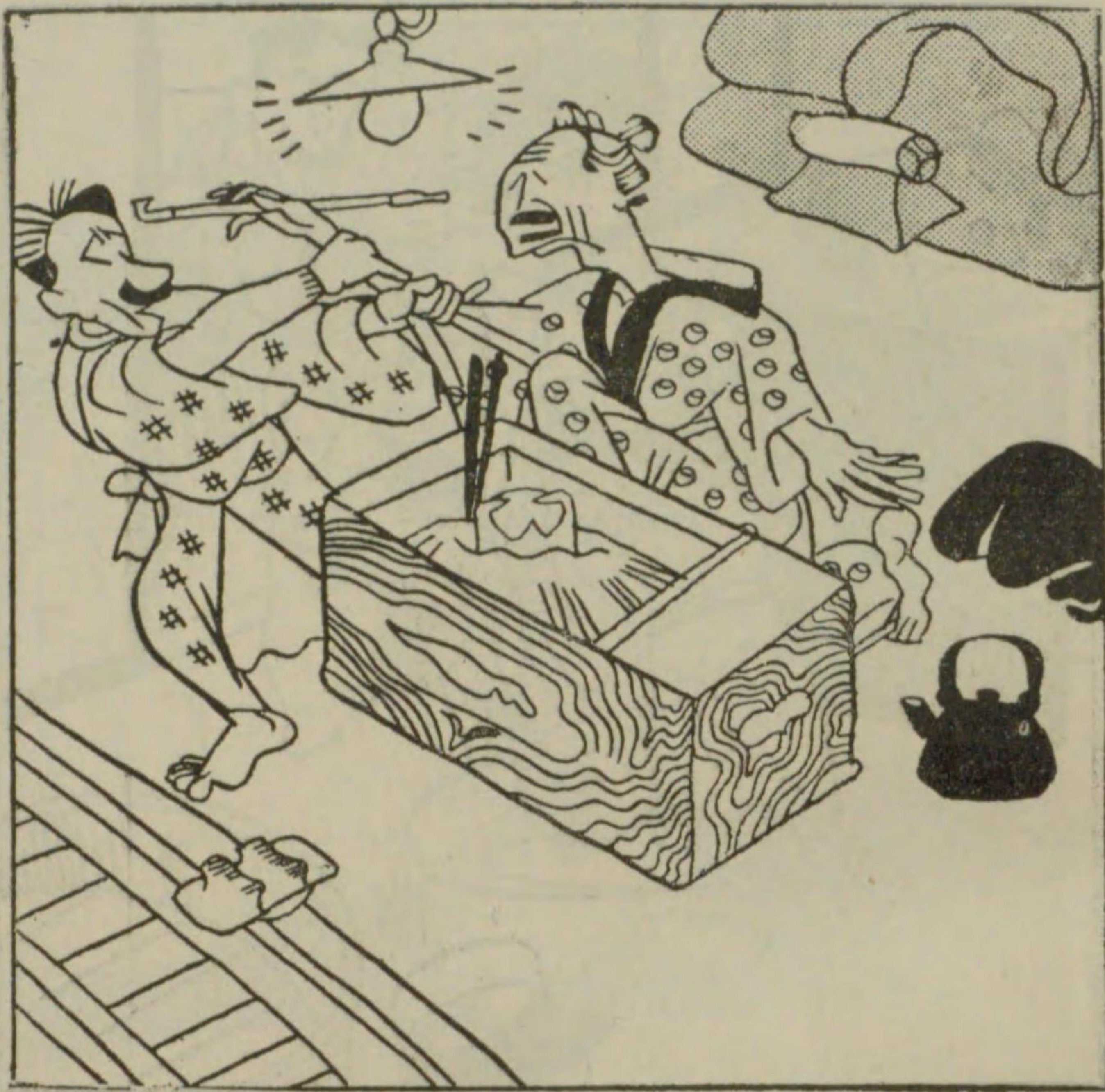
オチ、ニイ、オチ、ニイ。」



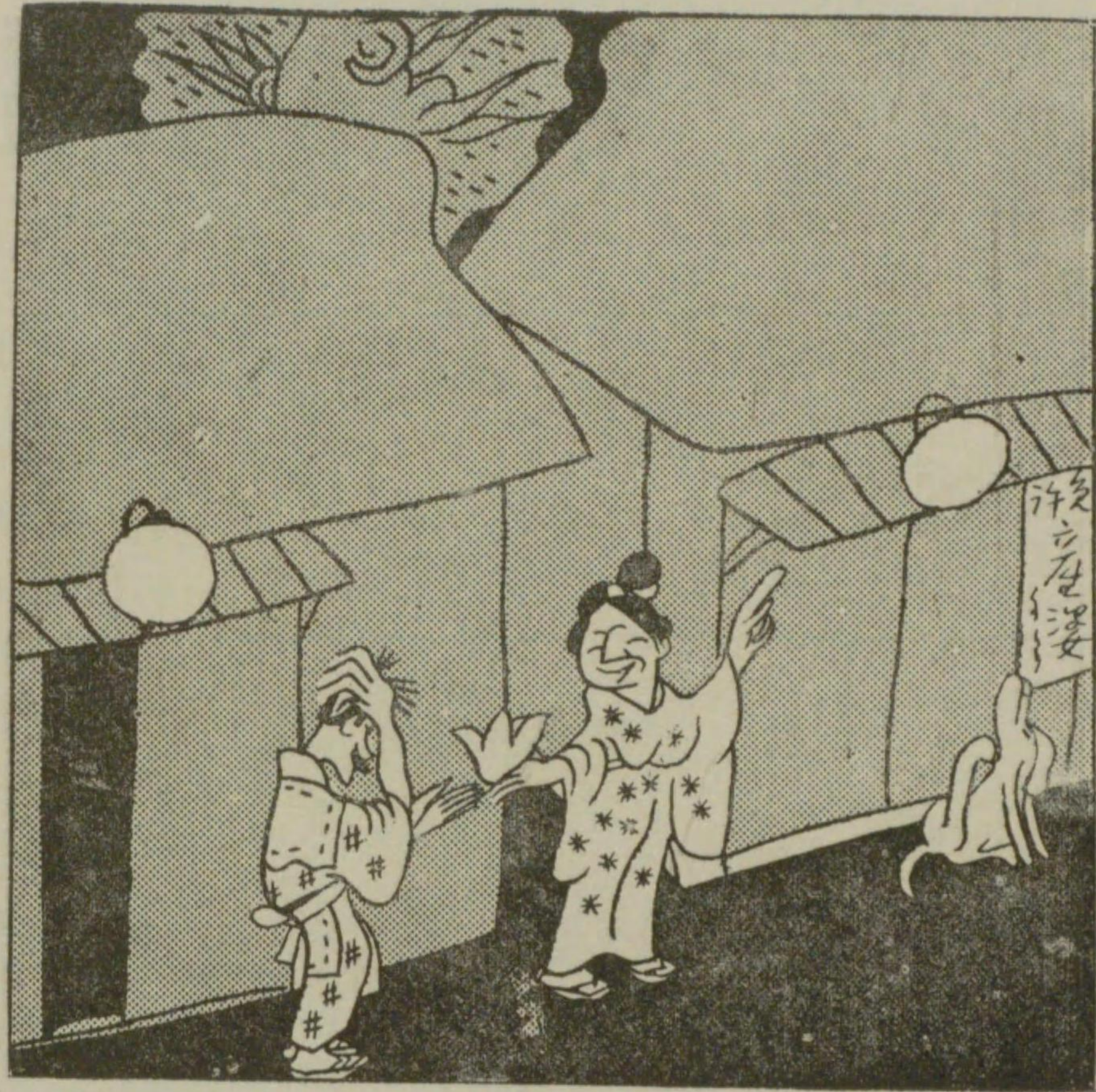
幹人「トントン」~~~~こん晩  
 は！ 唯野から来ましたよ——？  
 トン~~~~子供が生まれさう  
 ですよ？ トン~~~~来て  
 貰ひたいのです。』



二  
 幹人周章て着物をひっかけ産婆  
 を迎へに行く、眞夜中の風を切り  
 走りつゝ念ずらく「赤ん坊め、待  
 つて呉れ、産婆が来るまで出て呉  
 れるな。』

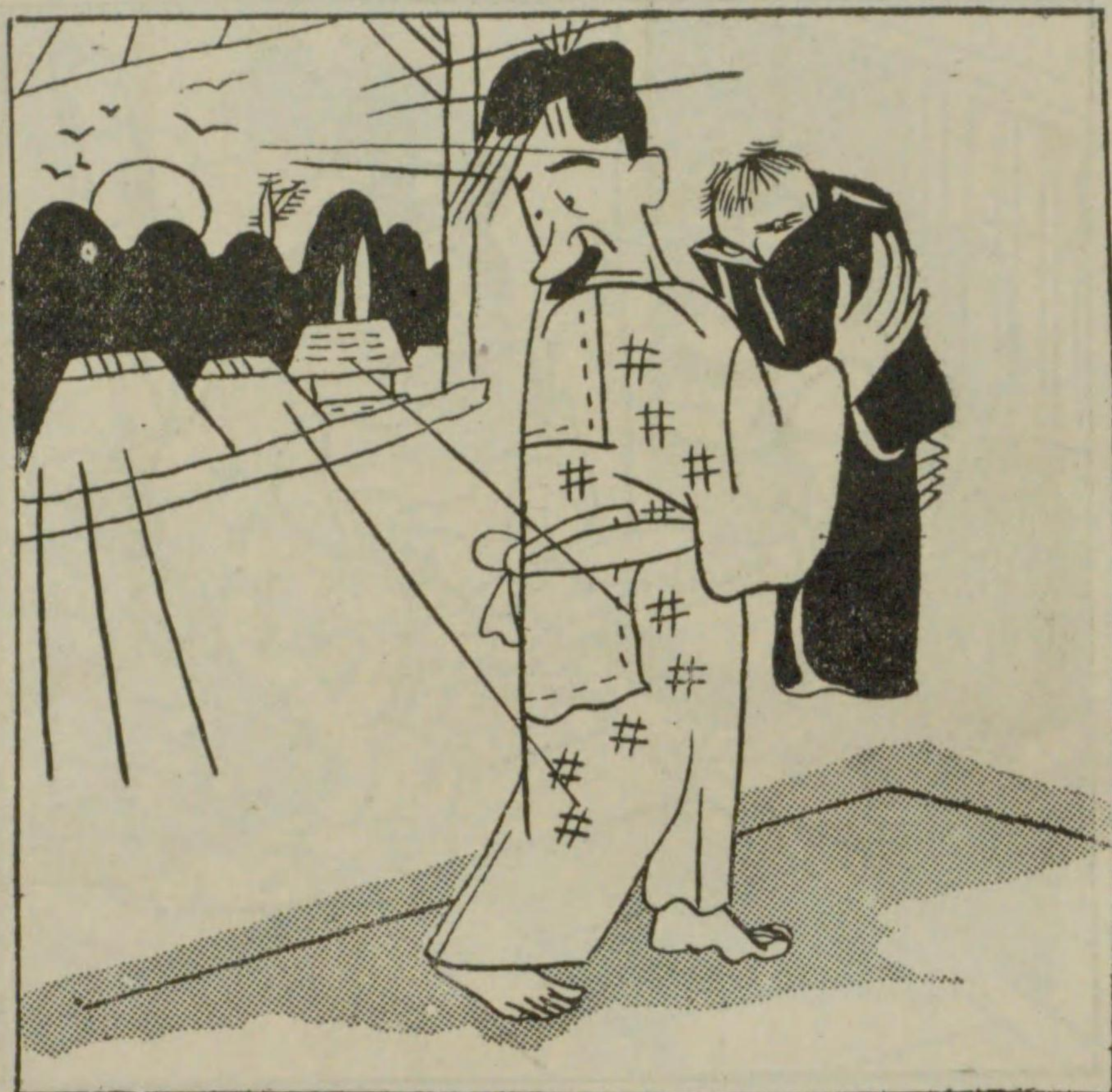


産婆「それはお目出度うムいます  
ね、でも、あなたお産は潮時でム  
いますから、ゆつくり遊ばして  
……………」幹人「早く来て下さい。  
今時の赤ん坊は氣短です。」

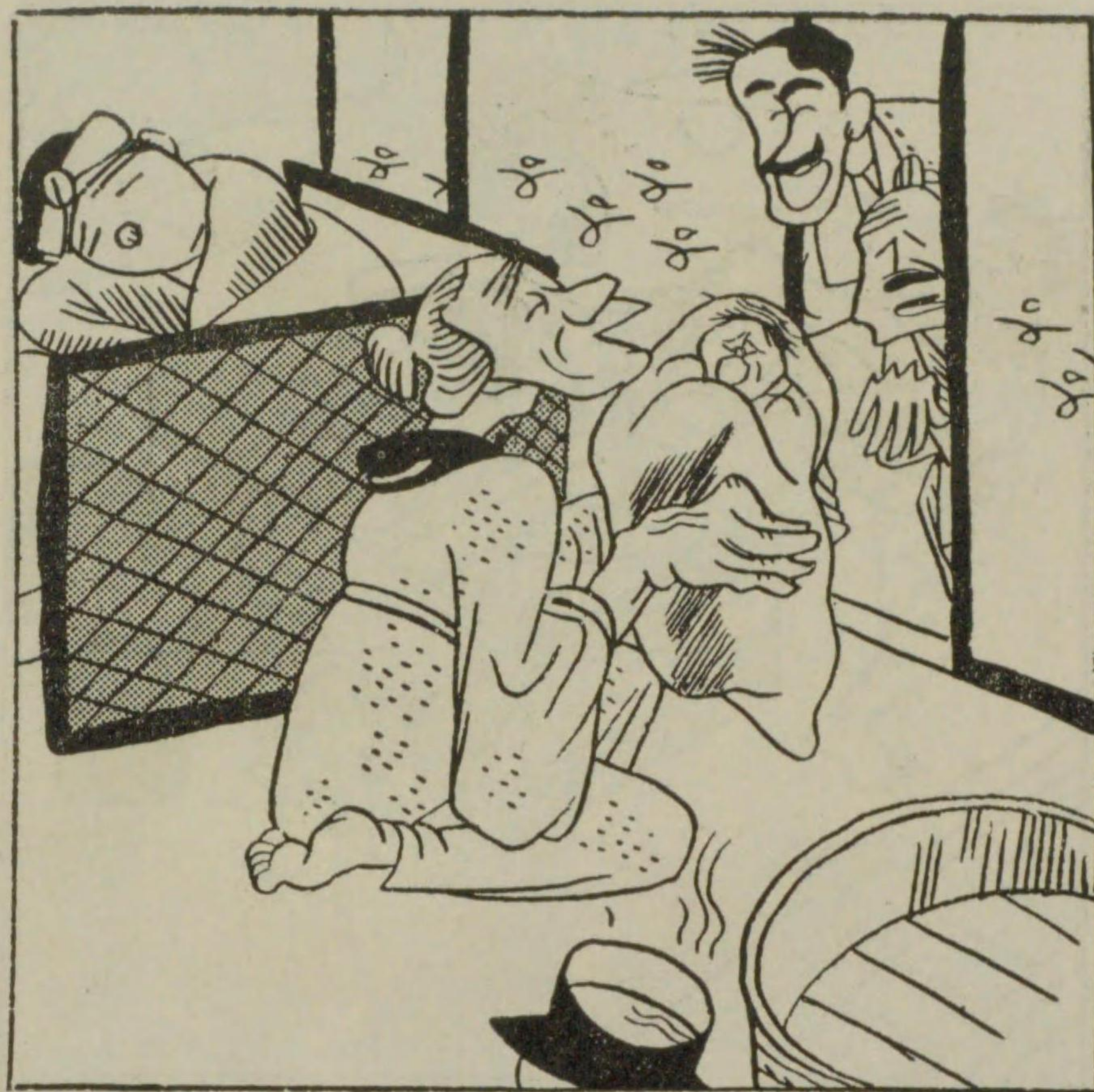


戸がガラリと開いて「お産婆さ  
んなら隣ですよ……………」でも、そこ  
のおかみさん親切に安産のお呪と  
して鹽釜様の燃さしの蠟燭を捜し  
て呉れる。

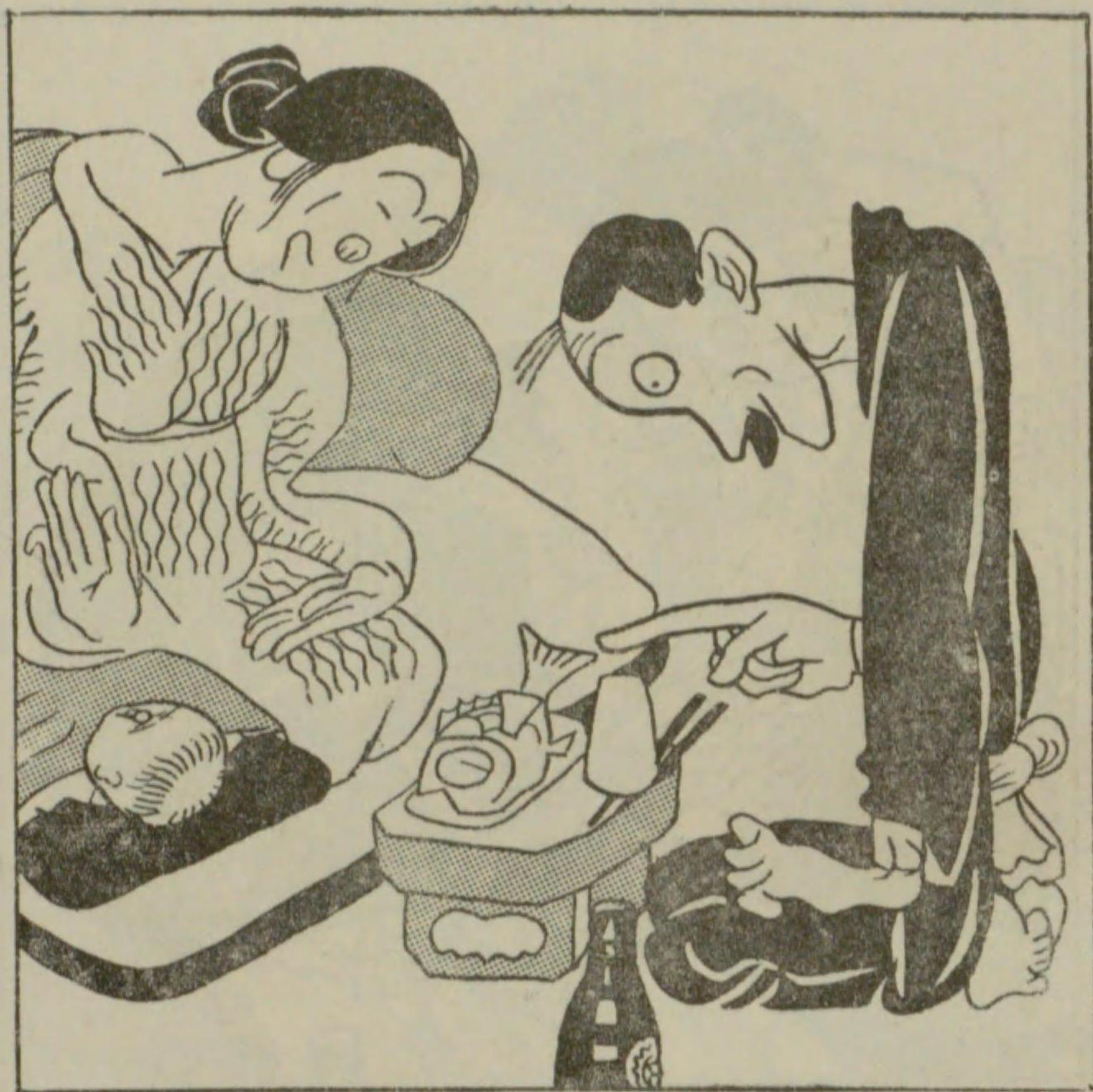




幹人初めて子といふものを持つ  
 て抱く腕に軽き手答へも嘗て覚え  
 し事なき悦びである。落付くと着  
 物を裏返しに着てたのを知る。



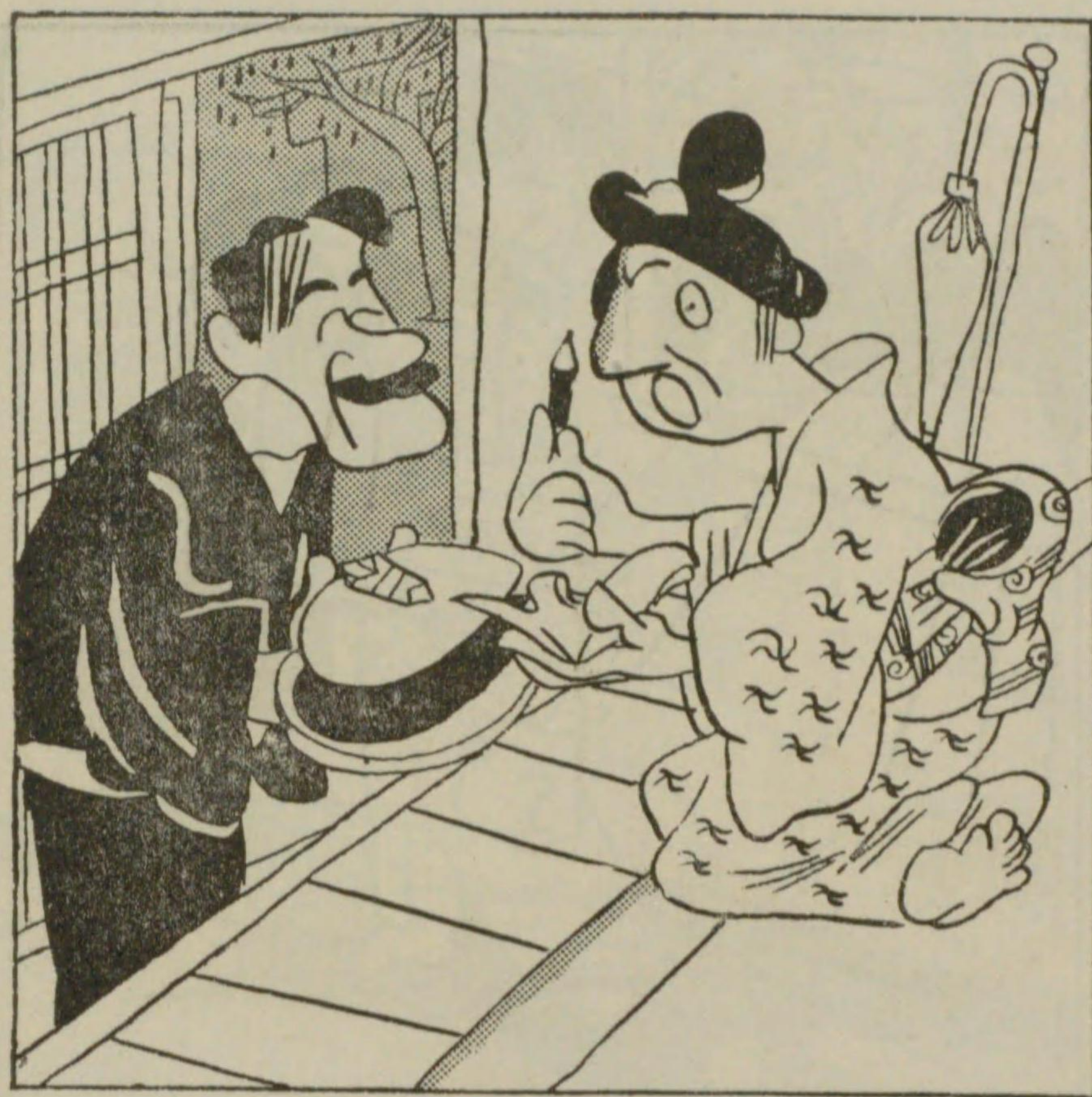
六十七のお産婆さんの道中は骨  
 の折れる事である。幹人は急ぎ漸  
 く家へ辿り着くと、赤兒は老母お  
 ひさの手で易々と取上られてる。



出生前後 (三)

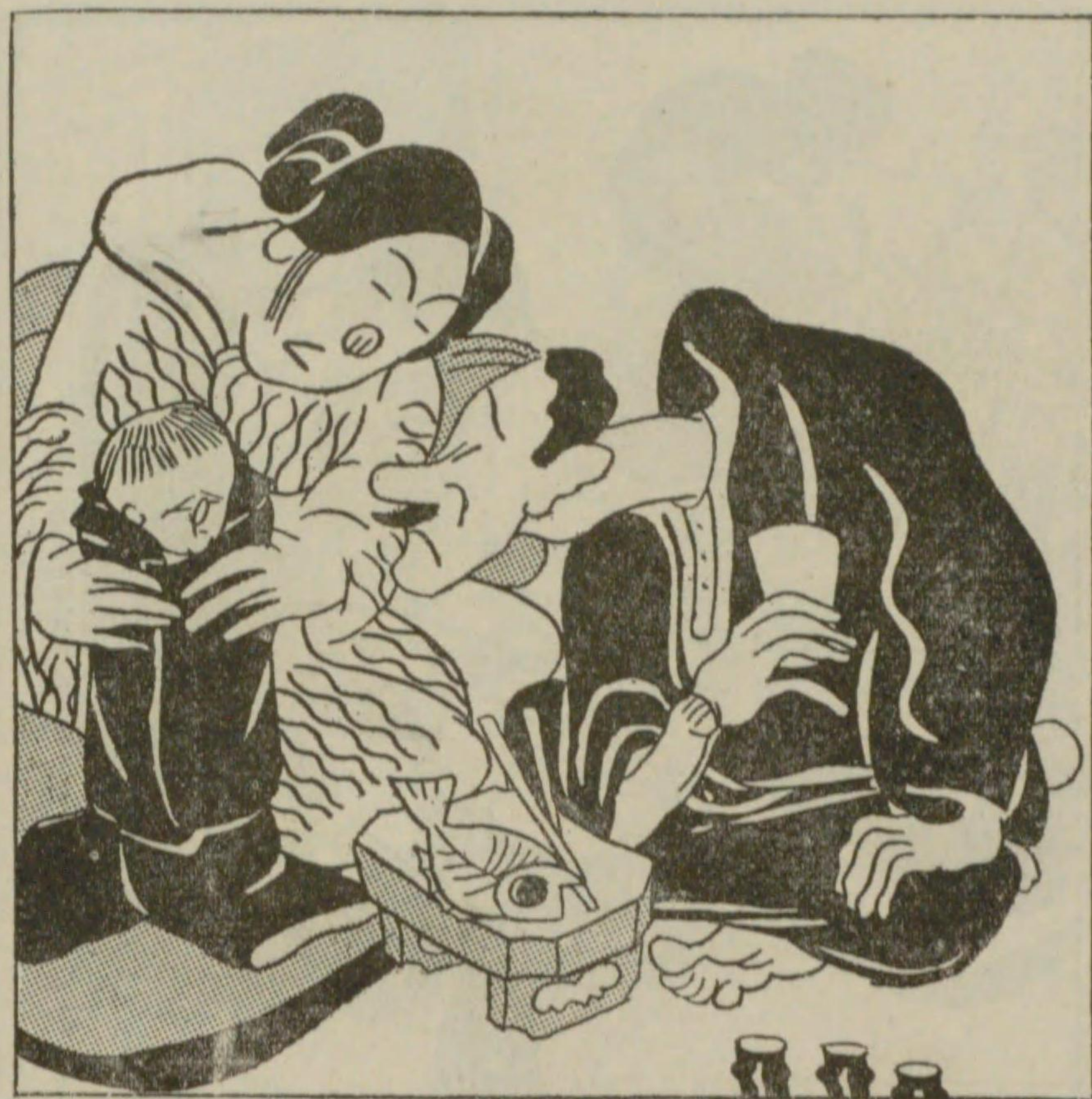
一

幹人「ヨウこりやなんだ。御馳走  
 だな。鯛とはえらく奮發したも  
 だ。」つま子「この子のお七夜な  
 よ、祝つて貴郎も一つお酔ひな  
 い。」幹人「それは有難い。」



八

翌朝産婆の隣のかみさんへ鹽釜  
 様の蠟燭を返しに行く。包紙を開  
 けて見て、實はかみさんも、闇の  
 中を周章た爲鉛筆の切れ端しを包  
 んで居たのが判つた。



二

幹人「ウーイ、ア、いゝ氣持ち  
だ、だがつま子酔つて云ふんぢや  
ないが正直のところを云へばだ、  
怒つちやいかんよ、この子はソノ  
なんだ鼻が低いな。」



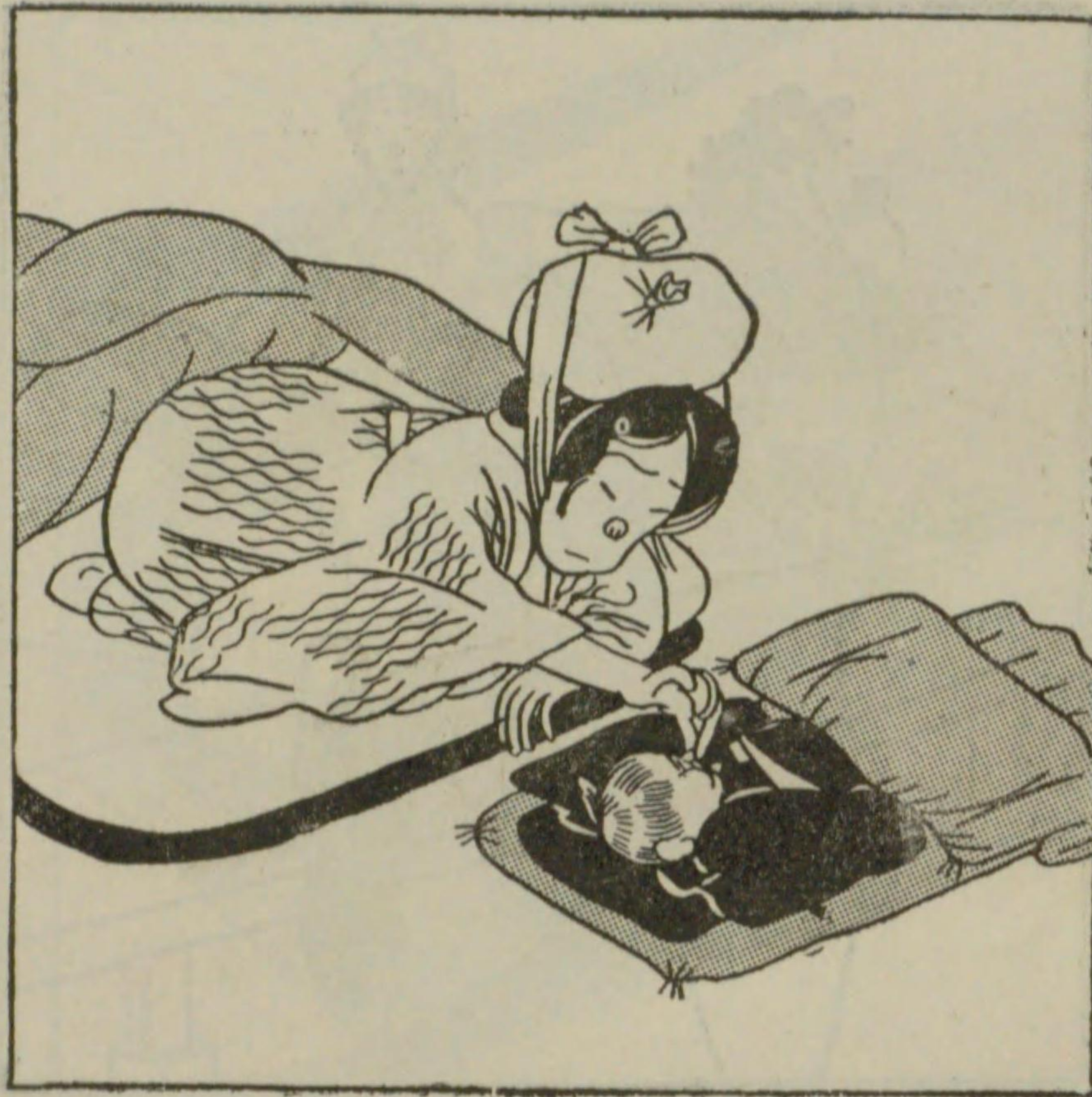
三

つま子「貴郎見方が悪いのです。  
かうやつて透してご覽なさい。ほ  
れ立派に鼻が有るぢやありません  
か。」幹人「透して漸く存在を認め  
させるは心細い。」



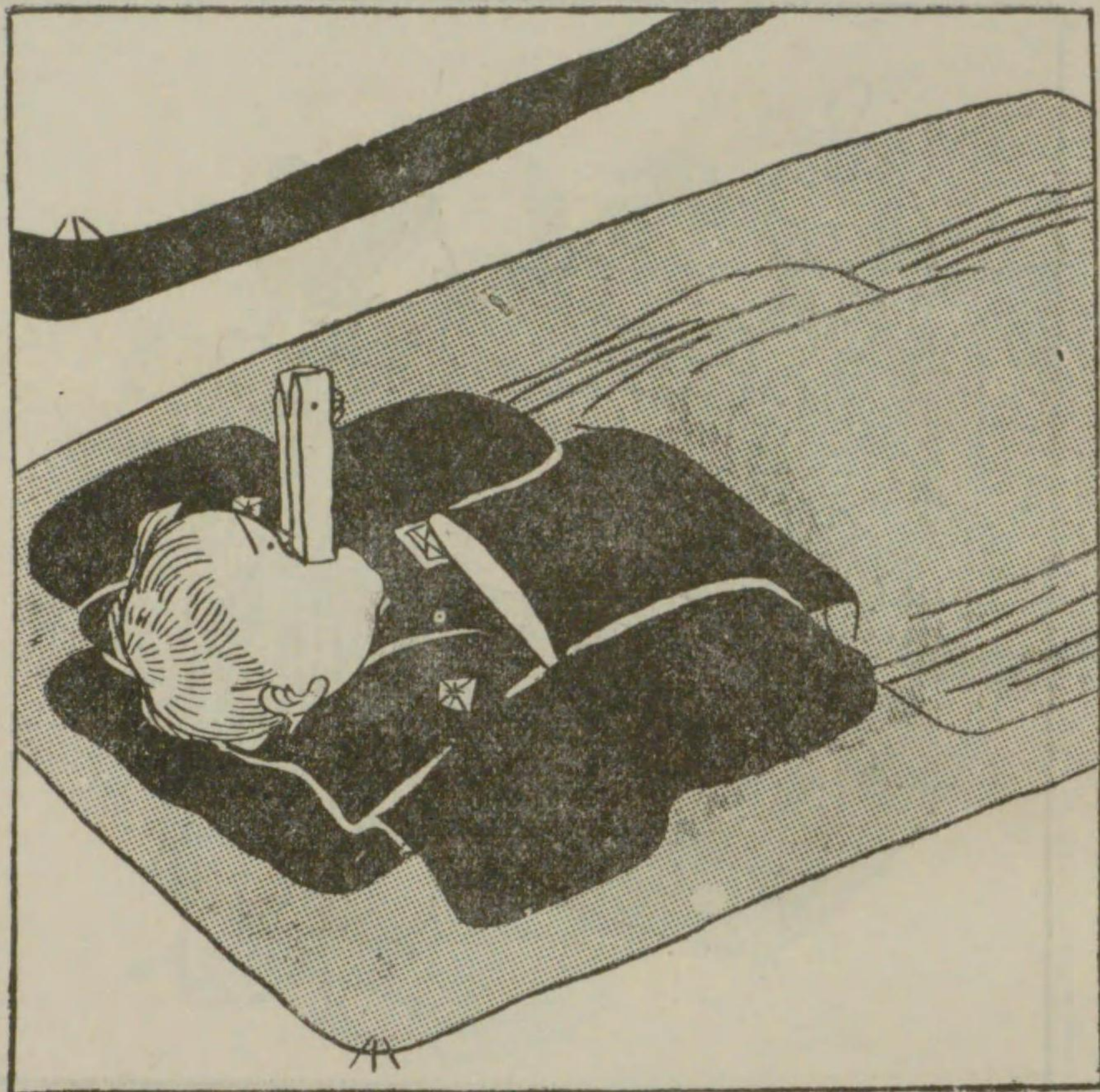
四

幹人「ウイ、ゲーブ、俺の高い鼻  
 にこの子が似ないとは可笑しい。  
 ウイ、ゲーブ、この子はどうも俺  
 に似てないぞアハハ、ハ、ハ。」つま子  
 「いくらお酒の上の冗談にしろそ  
 れはあんまり……」

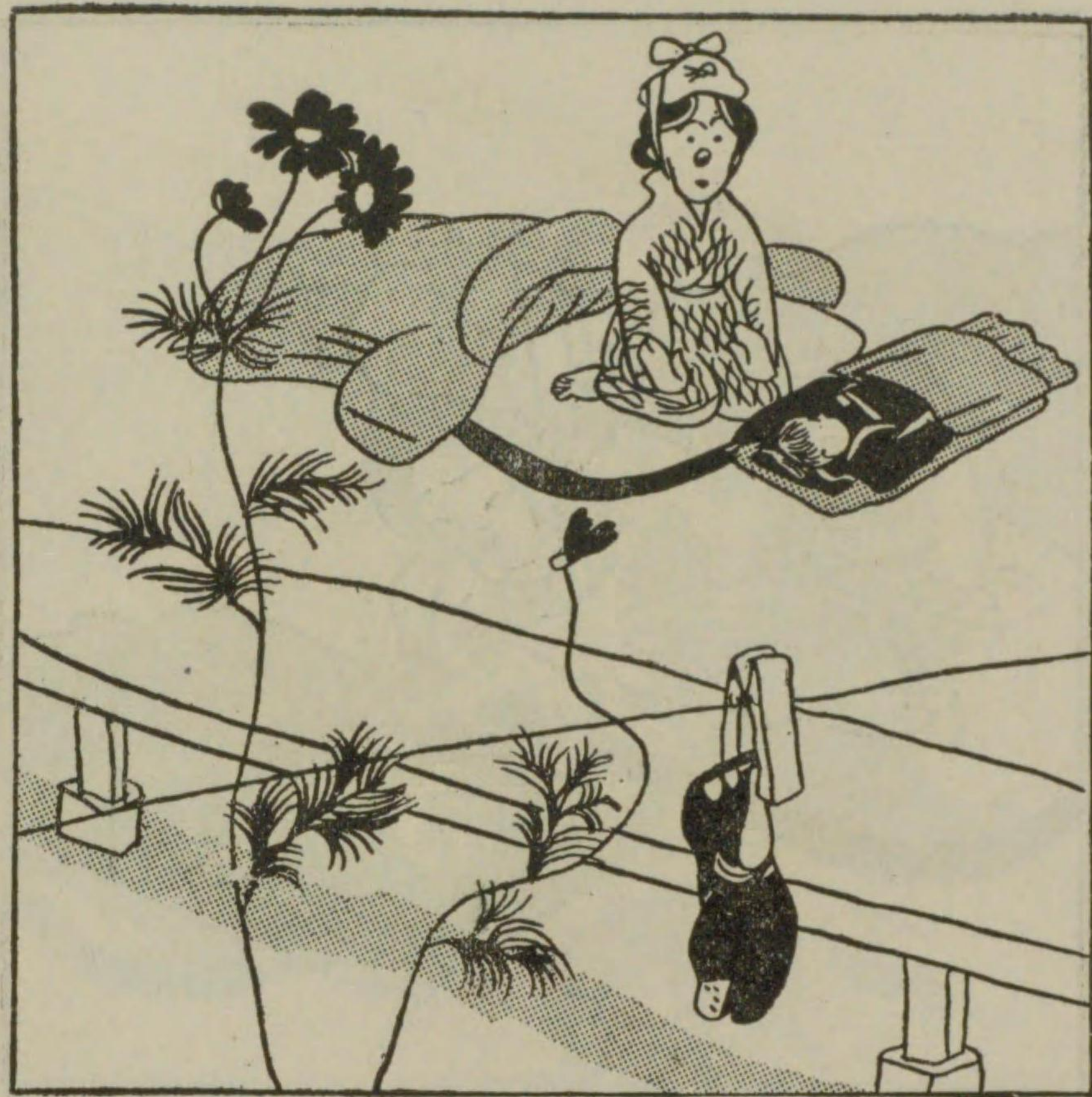


五

つま子産後の神経過敏のところ  
 へ性の悪い冗談を言はれヒステリ  
 ーを起し卒倒、正氣づいて後も暇  
 さへあれば氣にし赤兒の鼻をつま  
 み伸す。



つま子は庭から干物挟みを持つて来た。赤兒の低い鼻を挟んだ。指でつまむより骨折も少く形も整つてのびるであらう。



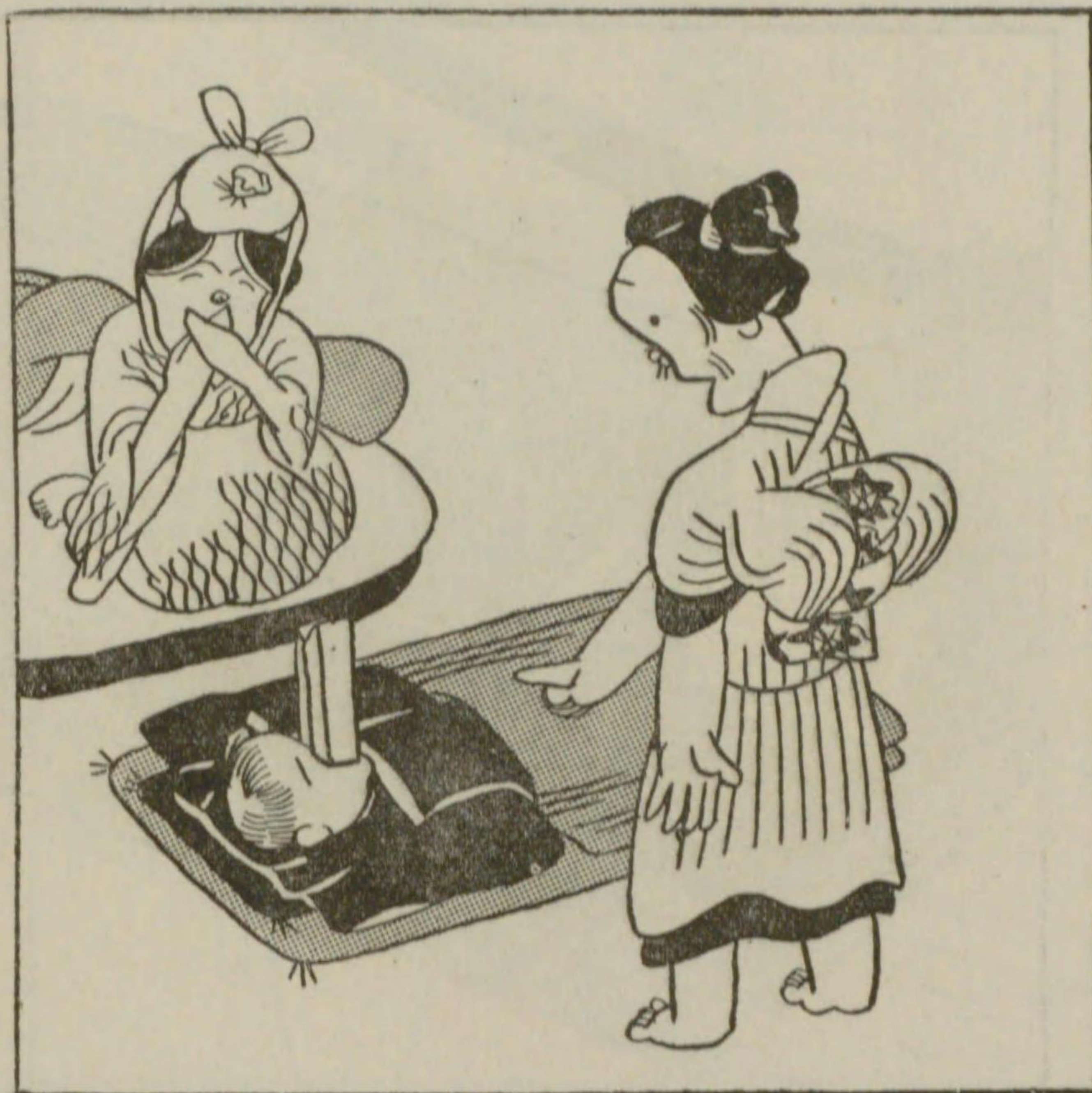
秋も既に終りである。つま子の産室に面する庭にはコスモス盛りを過ぎ顔のみすくくと氣弱な女の如くのび出でて居る。つま子はふと干物に眼をつけた。



名前のつけ方

一

幹人「もう子供には貧乏の憂目を見せぬやう名前を成金とつけちや  
 どうだ。」母つま子「成金はあんまり露骨よ。逆にして金成はどう。」



八

産前に茨城より雇ひ入れた女中のゑそは低能である。赤子に干物挟みのあるを見て、「奥さんこの赤さんは、風に飛ばねえやう干して来るだかね。」



幹人「——」

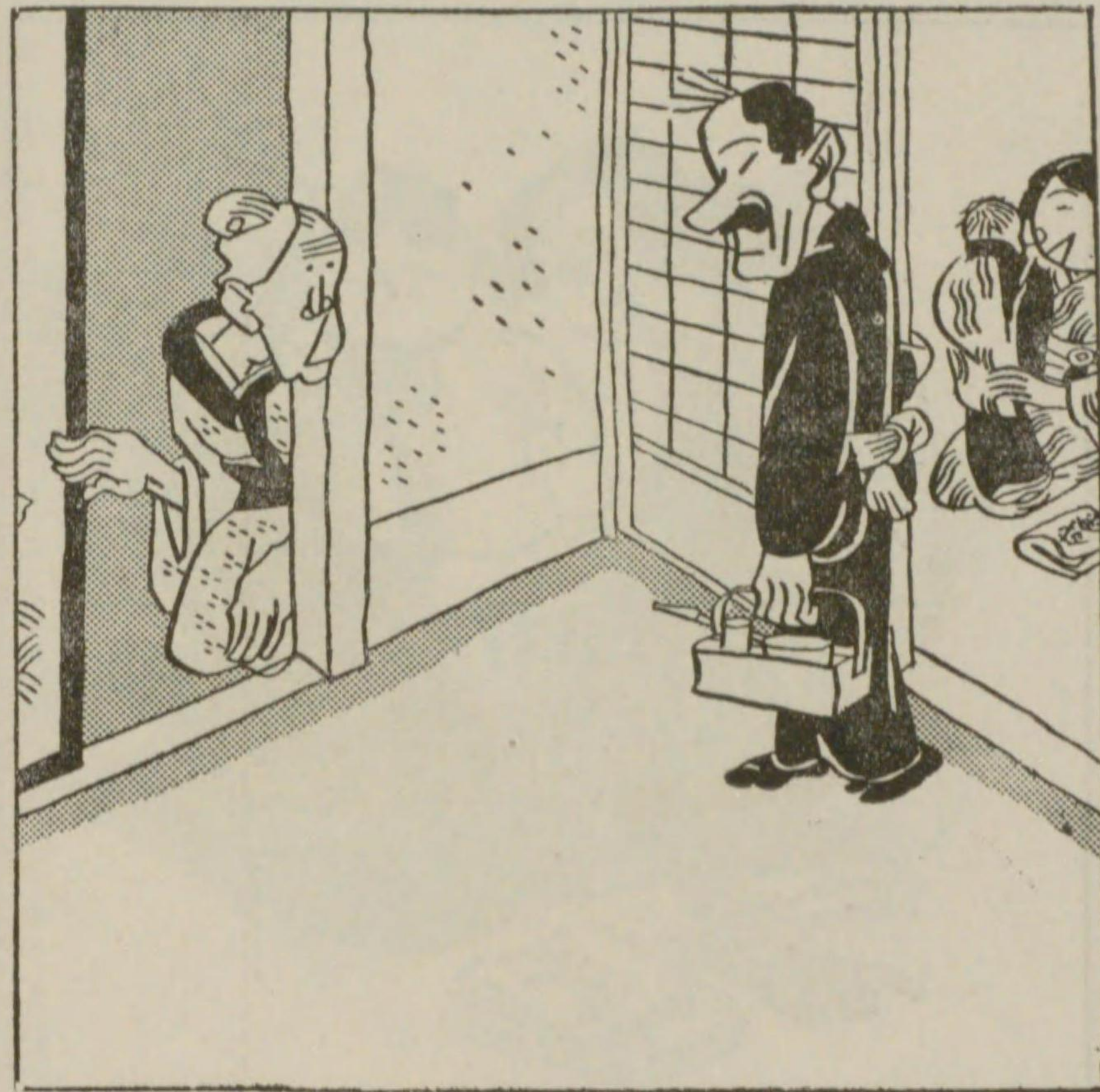
前は人左衛門と付けて貰ひたい。」

おやぢ殿の遺言がムる。赤子の名

ひ男ぢやで、それで死なしやつた

祖母おひさ「今度生れた赤子は幸

三



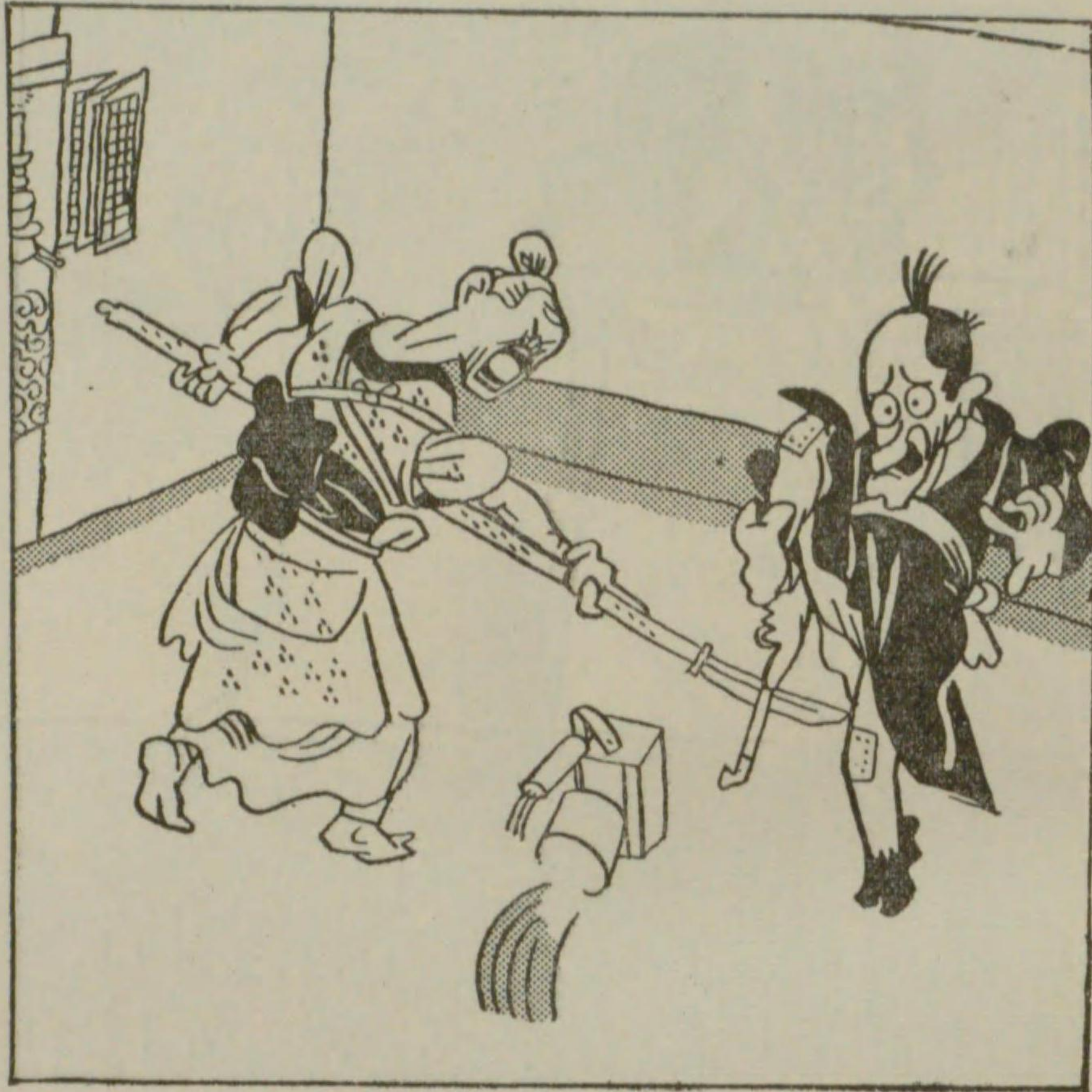
二

祖母おひさ「これよ幹人、一寸來

て下さい、相談があります。何か

の、あの生れた赤子に名前はつけ

たかの、は、あまだかの——」



祖母おひさ「言葉を左右に致すは  
不承知と見える——。いでや先祖  
へ不孝の子を、おやぢ殿に代つて  
成敗な致す、エイ、ヤツ！」

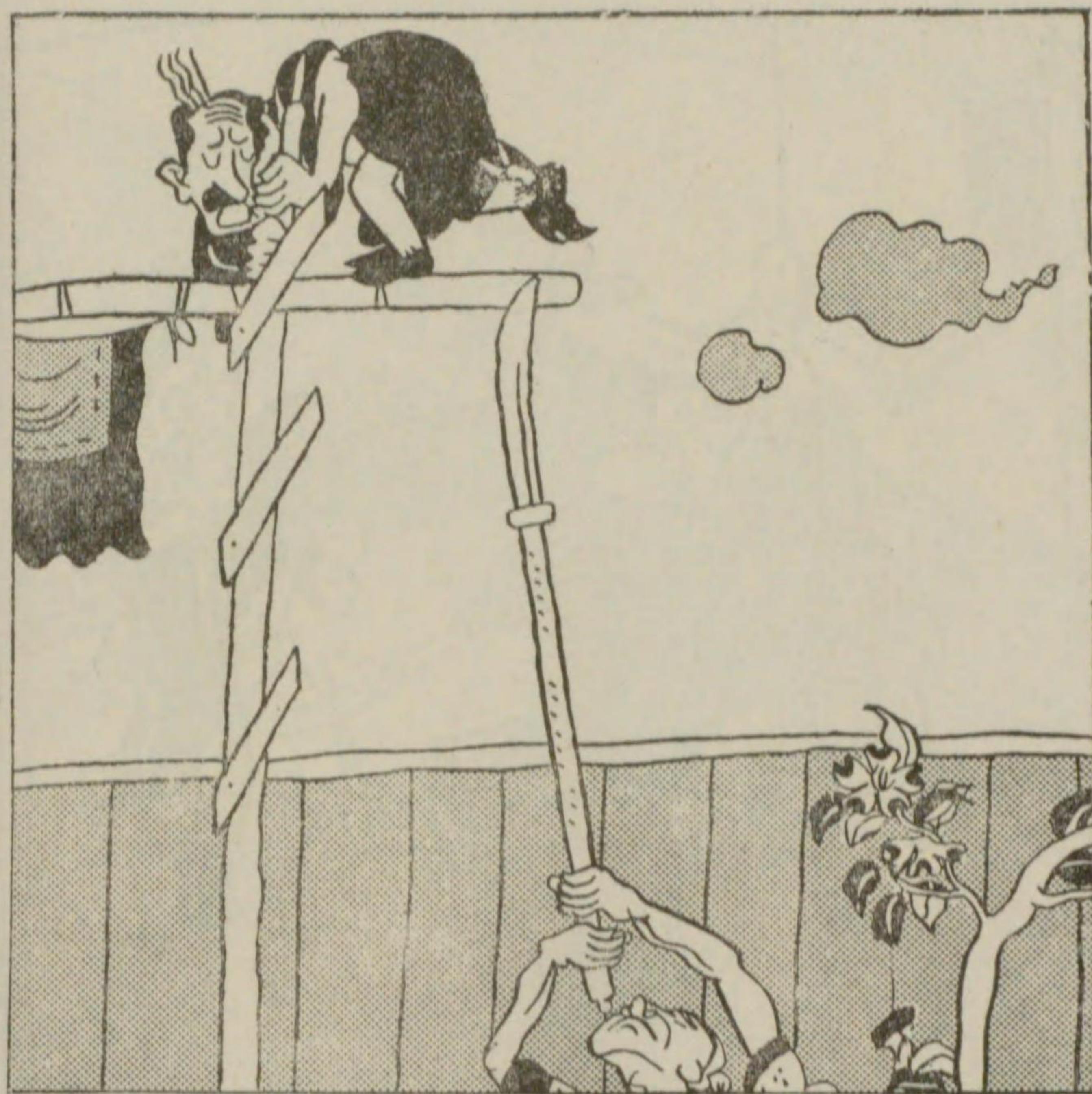
五



祖母おひさ「いなやの返答が無  
い所を見ると不承知でござるか  
の？」幹人「いえ、不承知ではあ  
りませんが今時、人左衛門など舊  
式な名を——」

四





六

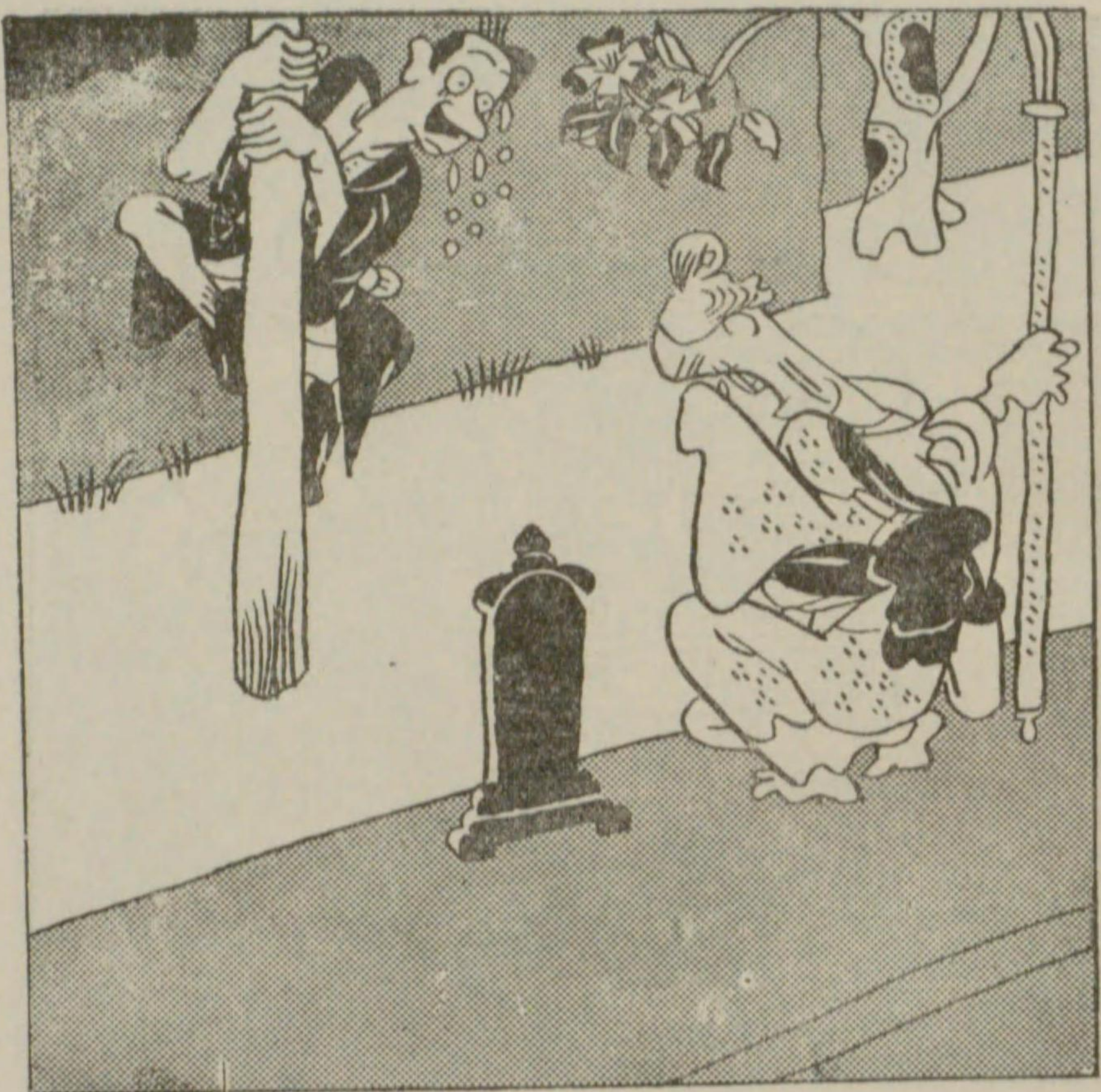
祖母おひさ「逃がさうとて逃がす

ものか、おのれ待ち居れ。」

幹人「こゝゝこれは又亂暴だな。

年寄の癖に直接行動に訴へると

は。助けて——」



七

幹人「どうにでもお言葉に従ひま

すから其譯を話して下さい。子供

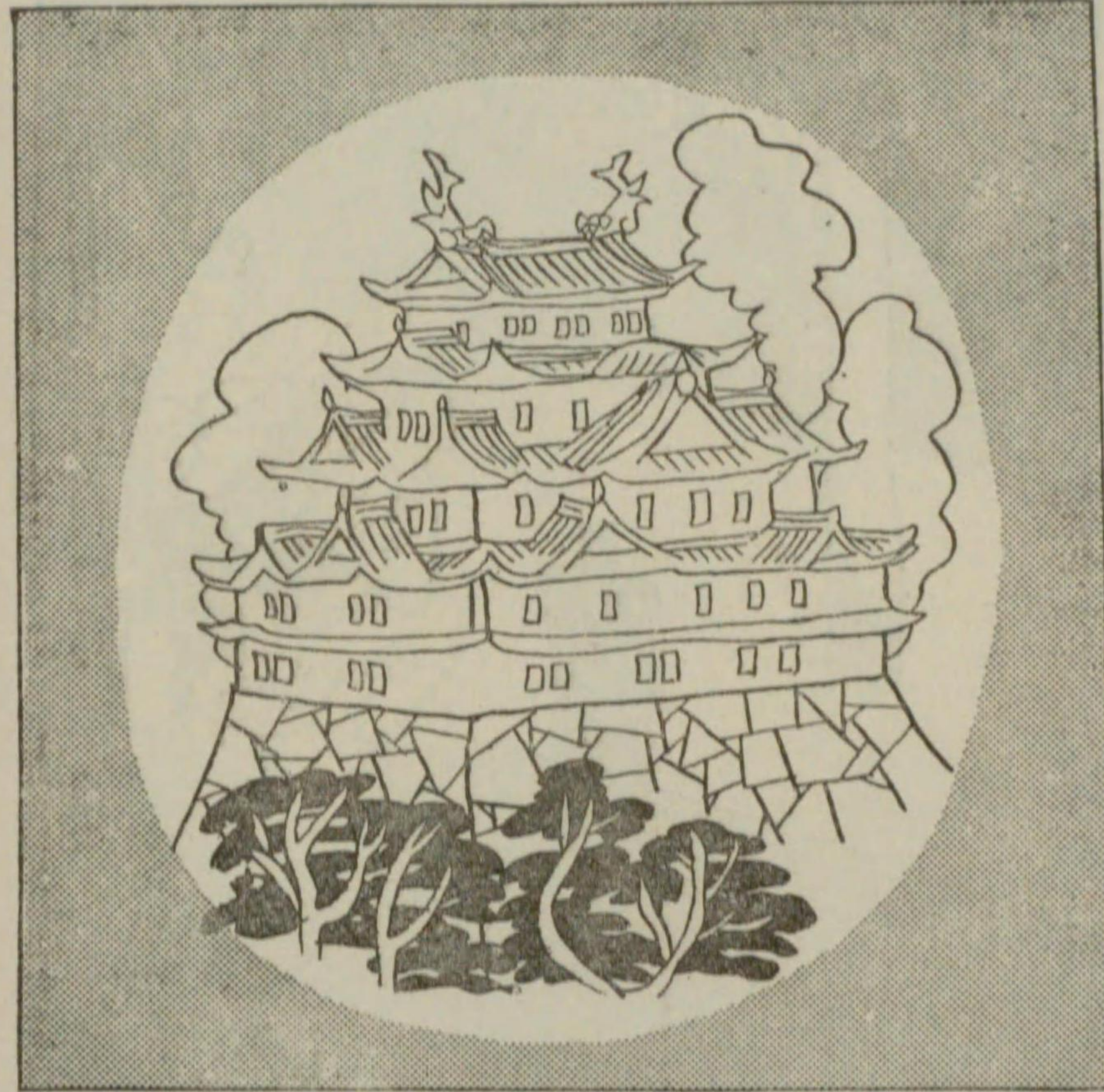
に人左衛門とかけねばならぬ譯

を？」そこでおひさは古い位牌を

持出した。

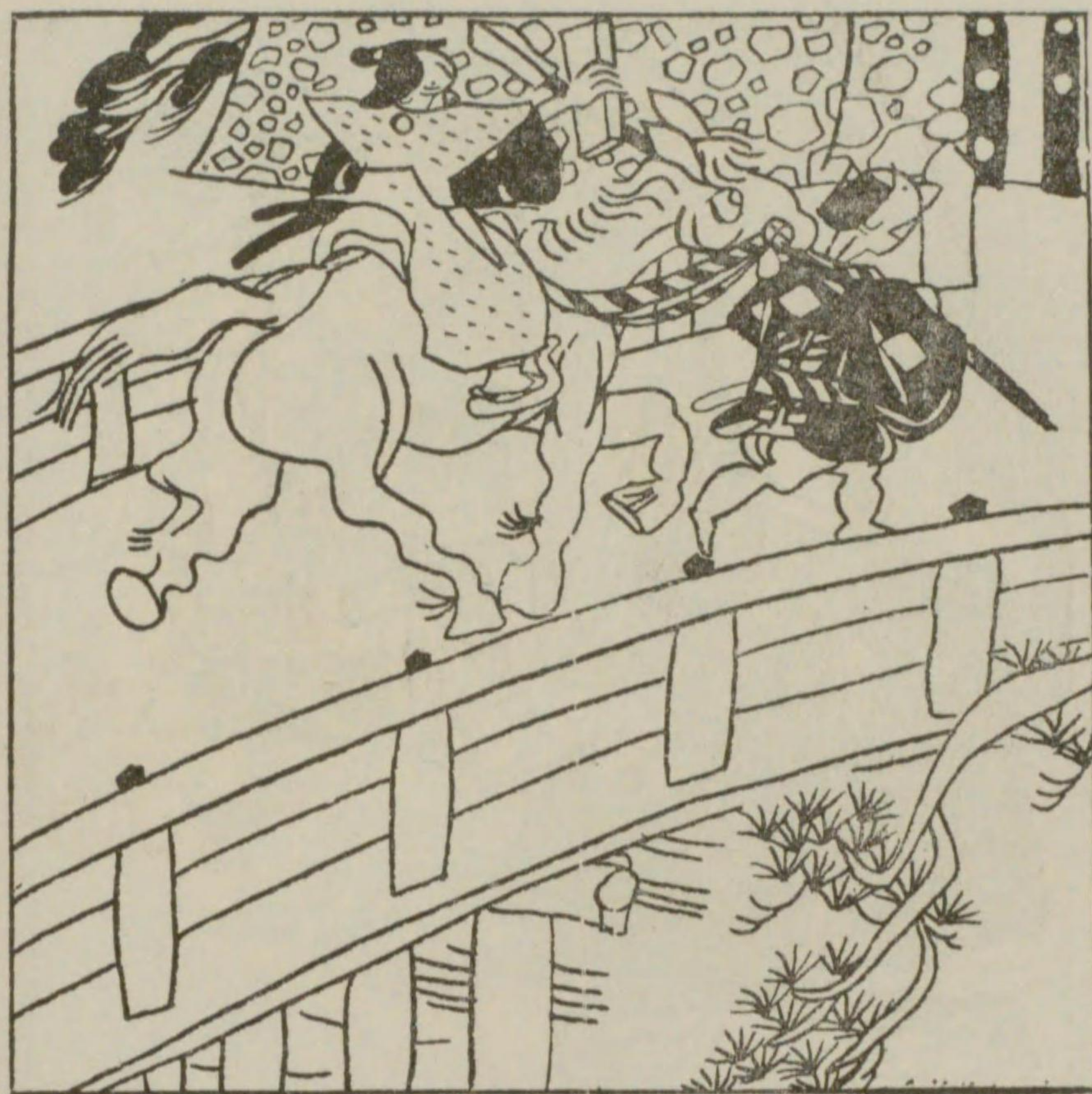


猪子出城の城主猪子出主計之介  
 は死んで今は「方」と鶴姫だけだ。  
 鶴姫は頗る美しい。ある花の山で  
 界限切つての豪族唐獅子大膳が姫  
 を見染めた。



そして涙ながらに祖母おひさの  
 語るやうは。むかしく但馬と播  
 磨の國境に猪子出山といふ山、そ  
 の山に猪子出城といふ名城があ  
 った。

人左衛門の話



二

猪子出城へ主計之介の生前より

仲の悪い大膳から珍らしくお使者

が来た。使の趣意は「姫を妻に貰

ひ度い、それが嫌なら城を譲り渡

されよ。」



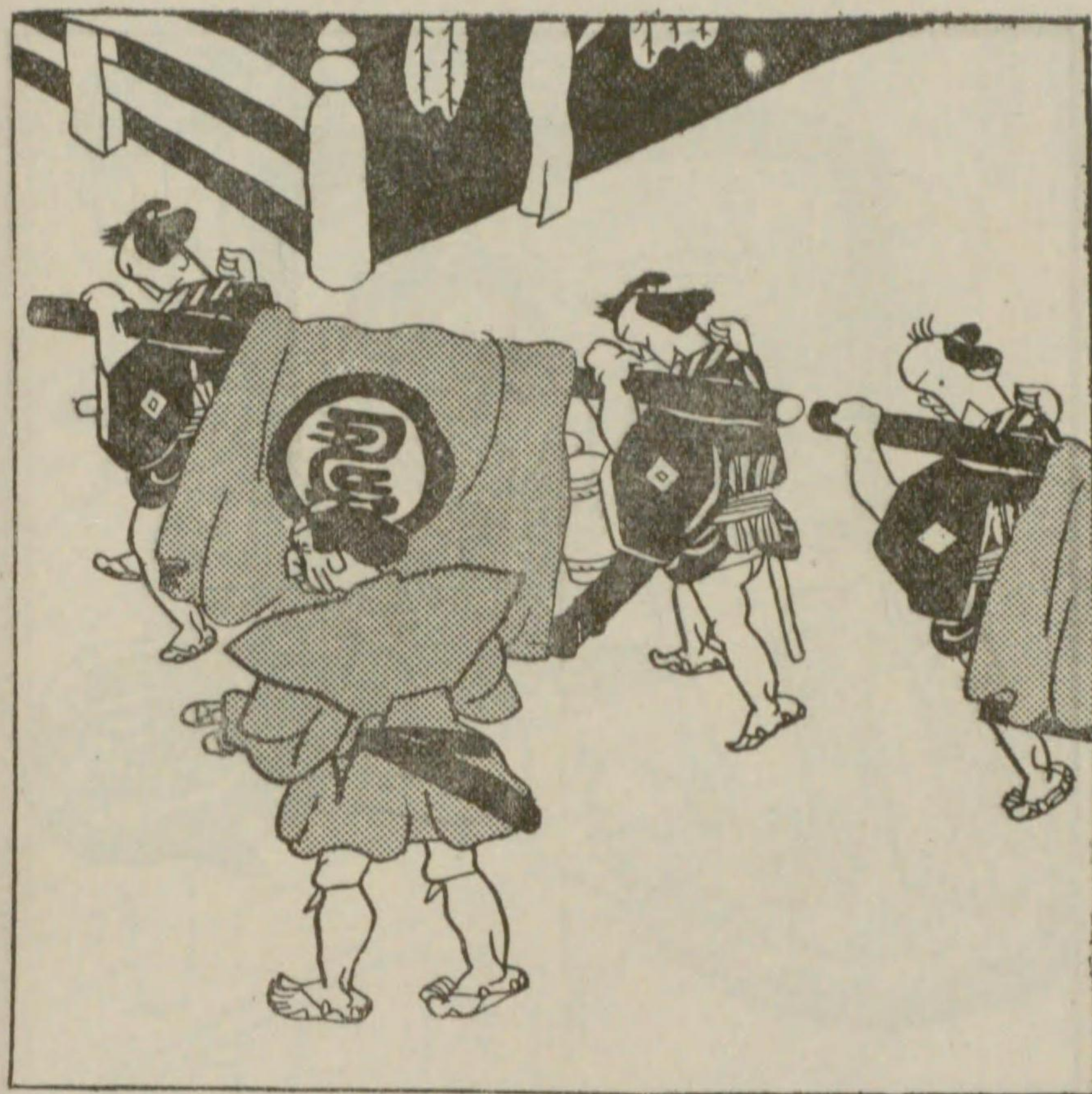
三

大膳の無理難題。聞き入れずば

一堪りも無く攻滅ほされよう。聞

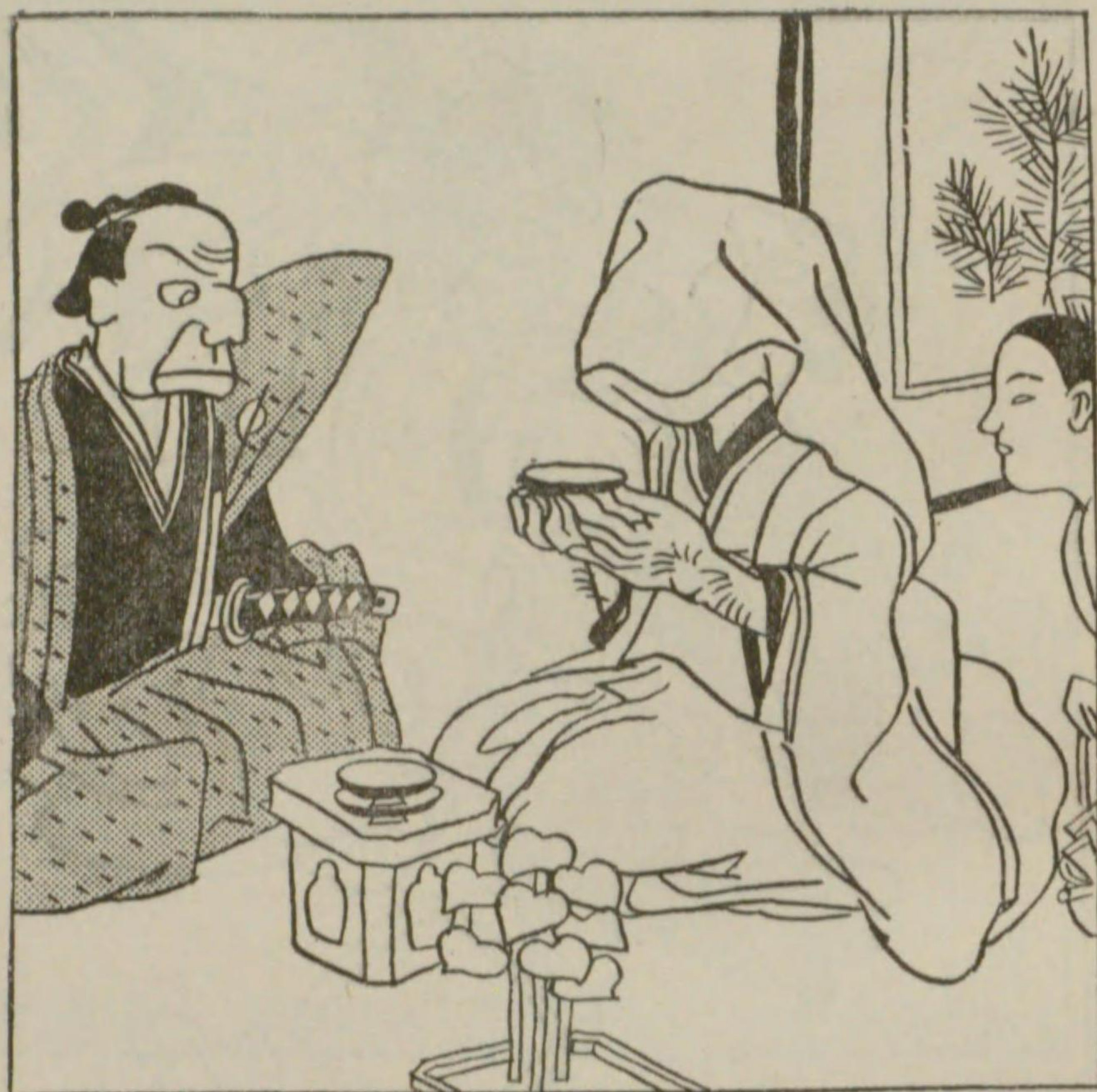
き入れる事は姫は死ぬより嫌だと

嘆く。母子手を取り合ひ泣く。



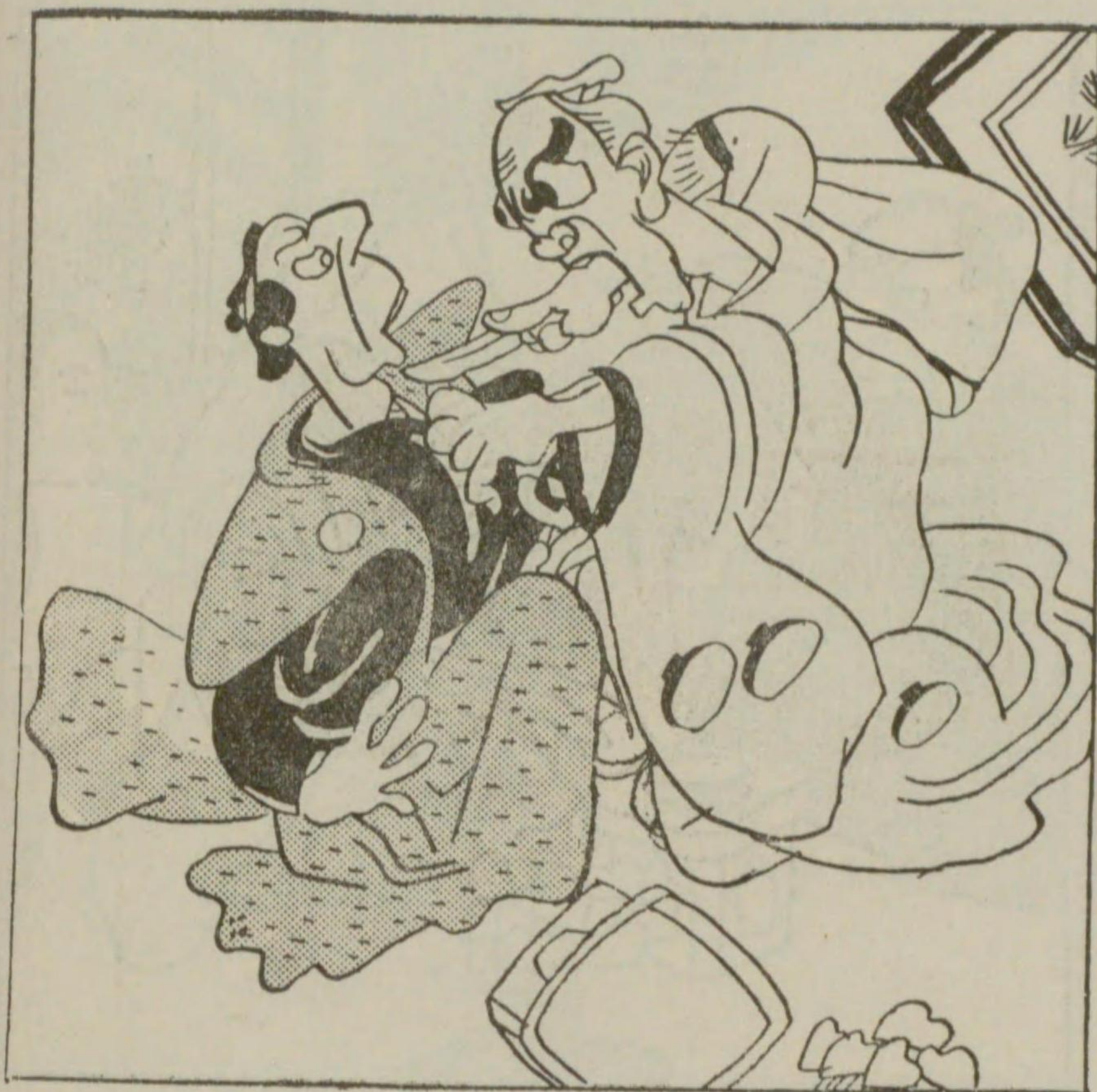
四

衝立の蔭に聞いてた唯野彌左衛門は忠義な奥家老である。君臣何と相談したか、大膳よりの縁談は承知して早速結納の品も取り交した。



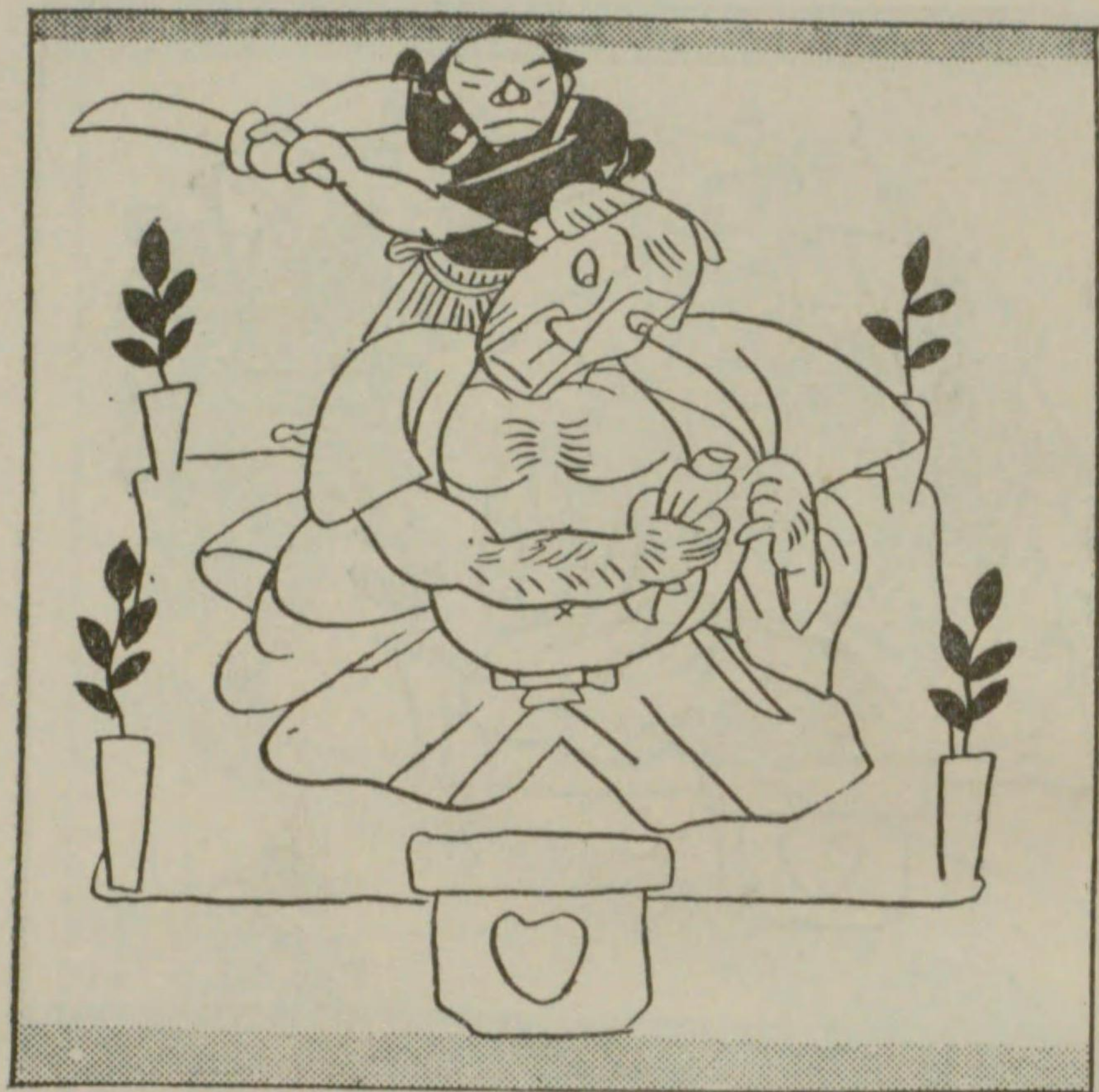
五

いよく嫁入りの盃である。待焦れた大膳向合つた戀しの鶴姫を見ると意外に頑丈な體格の女である。そして手に熊の様な毛が生えてる。



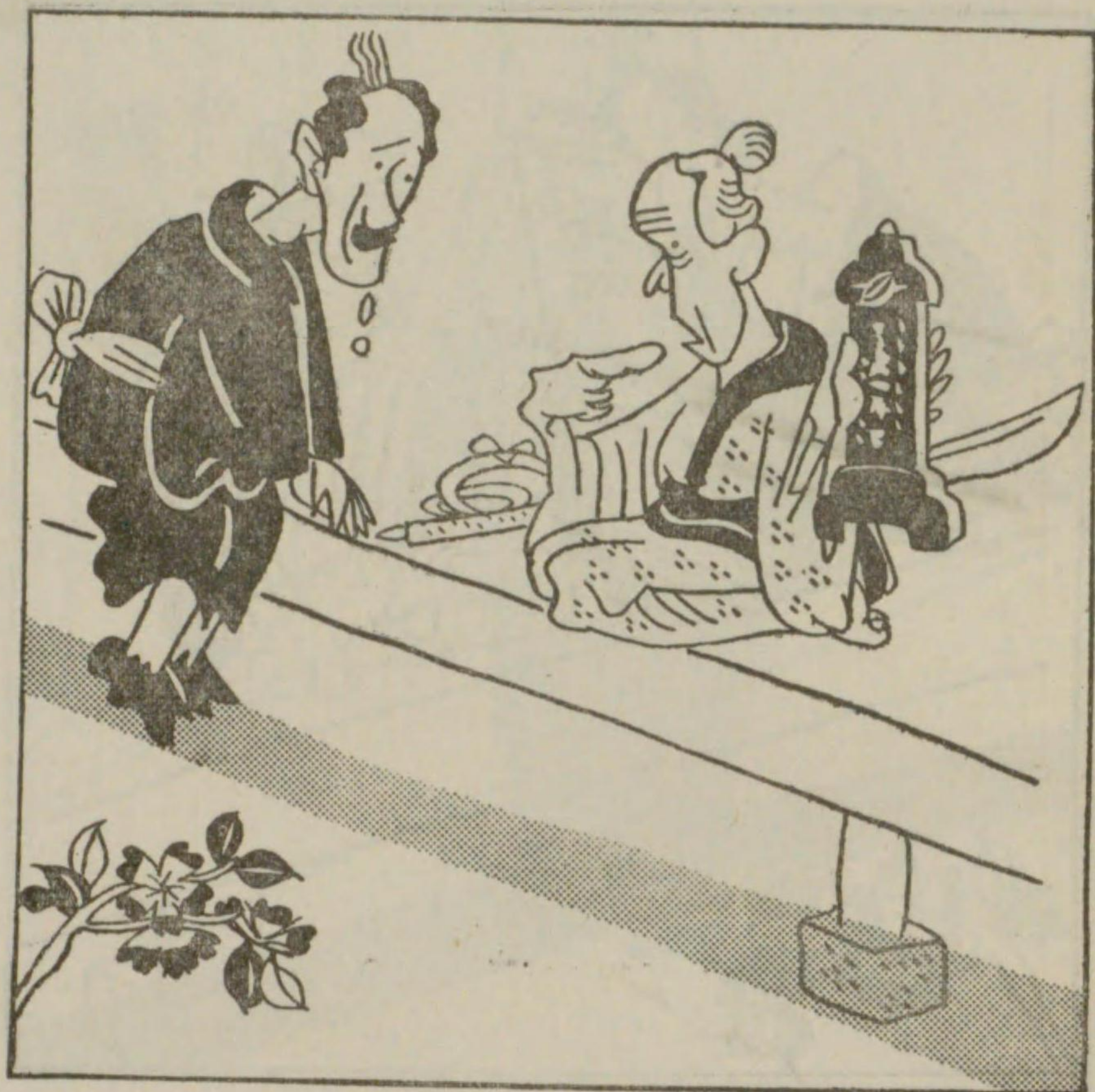
六

不審がる暇もあらせず綿帽子を  
 かなぐり捨て大膳の咽喉元へ短刀  
 の切尖を向けた。それは彌左衛門  
 である。「理不盡な縁談はやめて  
 貰ひ度い。」



七

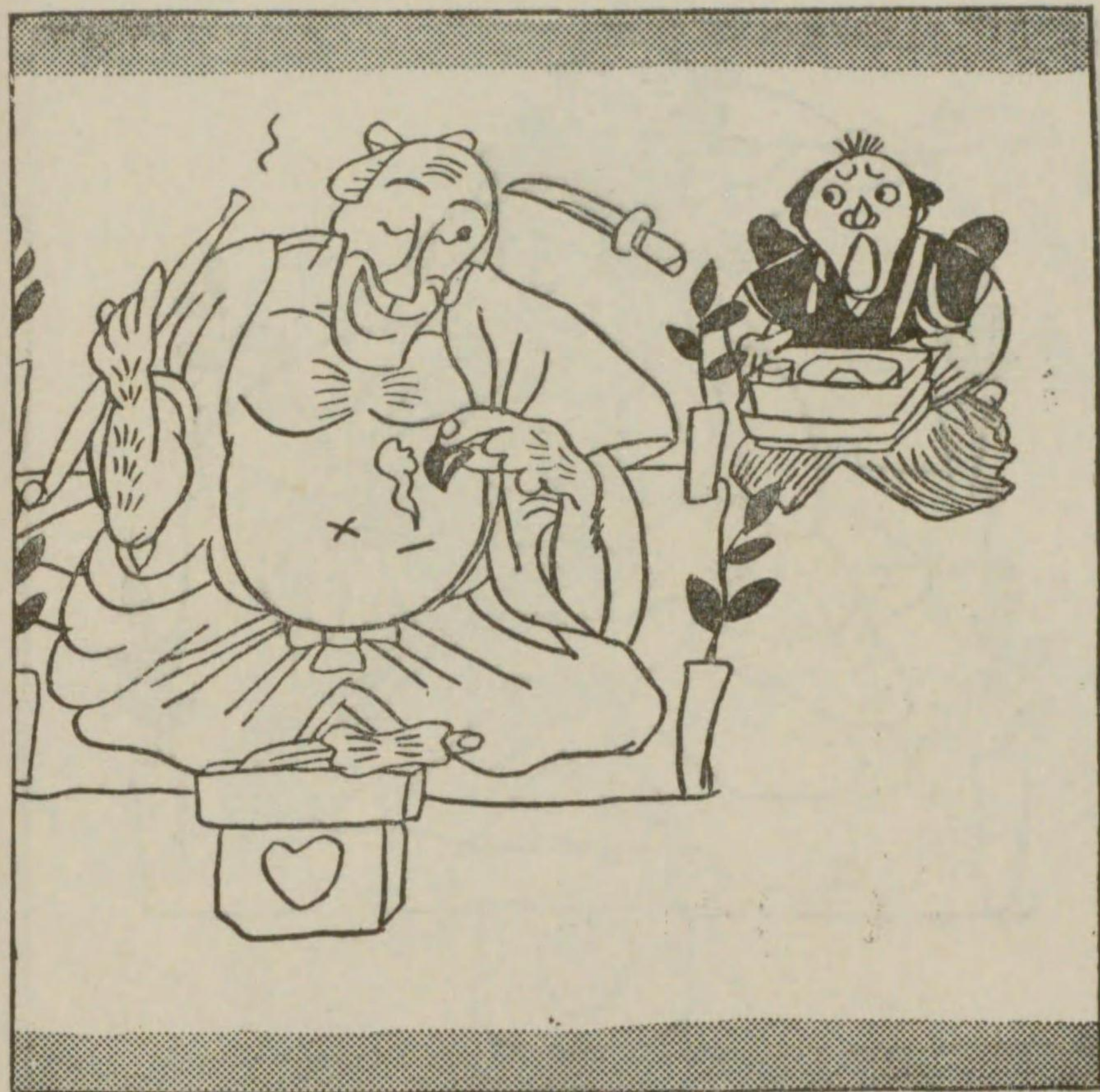
大膳は思切つた勇士の志に感  
 じ鶴姫をあきらめ、尙將來猪子出  
 家の後楯となるを誓つた。彌左衛  
 門望み達した上は責を引き切腹を  
 申出る。



祝の商品切手

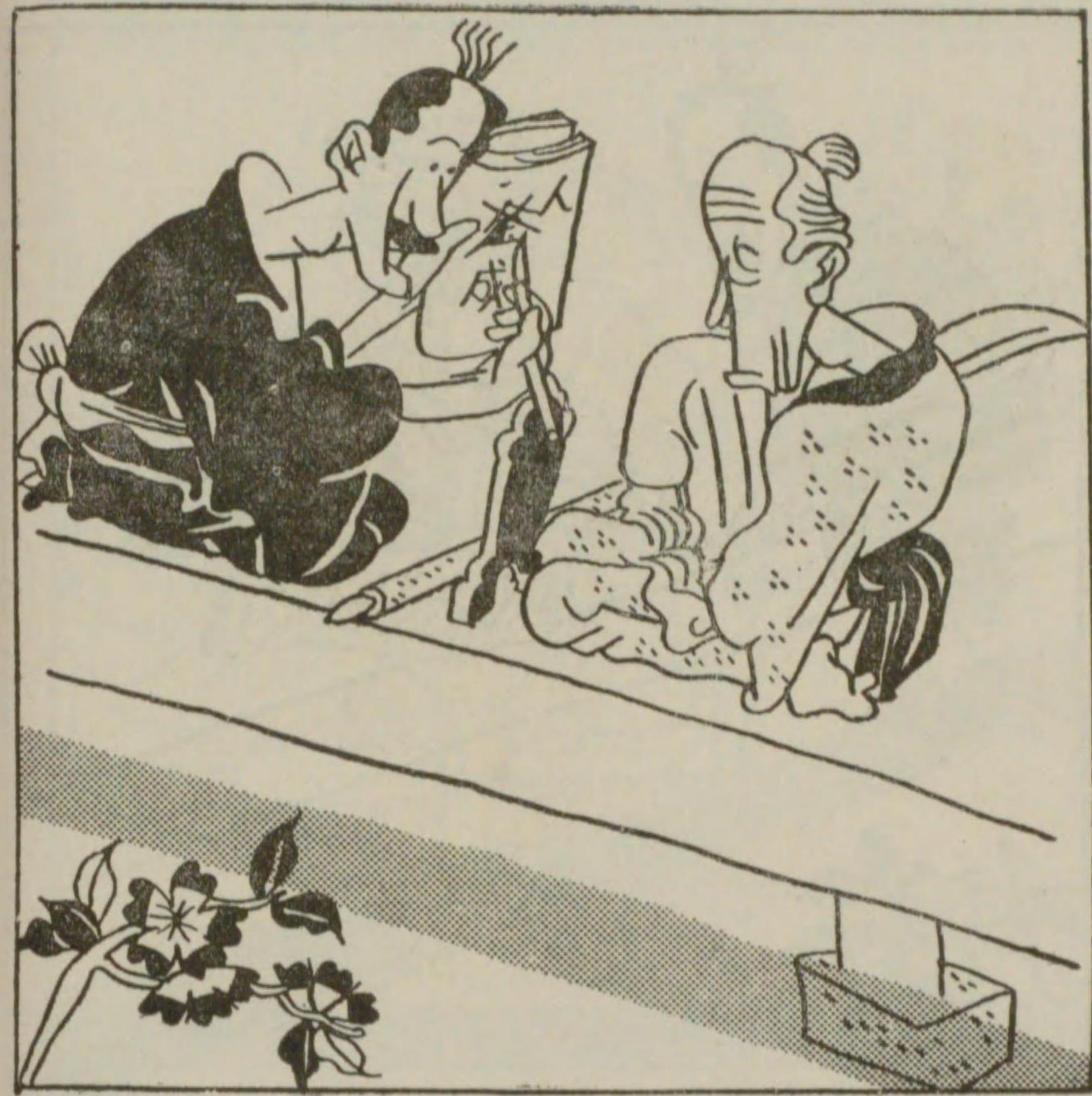
一

祖母おひさ「それで彌左衛門様の  
 事を人呼んで人左衛門様と言った  
 のぢや。人左衛門様こそ取りも直  
 さずうちの御先祖。」



八

彌左衛門双を突立て、後、今生  
 の思ひ出に好きな煙草を所望し喫  
 むと切口から煙が吹き出るので櫛  
 の葉を取つて貼た。大膳感嘆し「彌  
 左衛門は人ぢやなア。」と云つた。



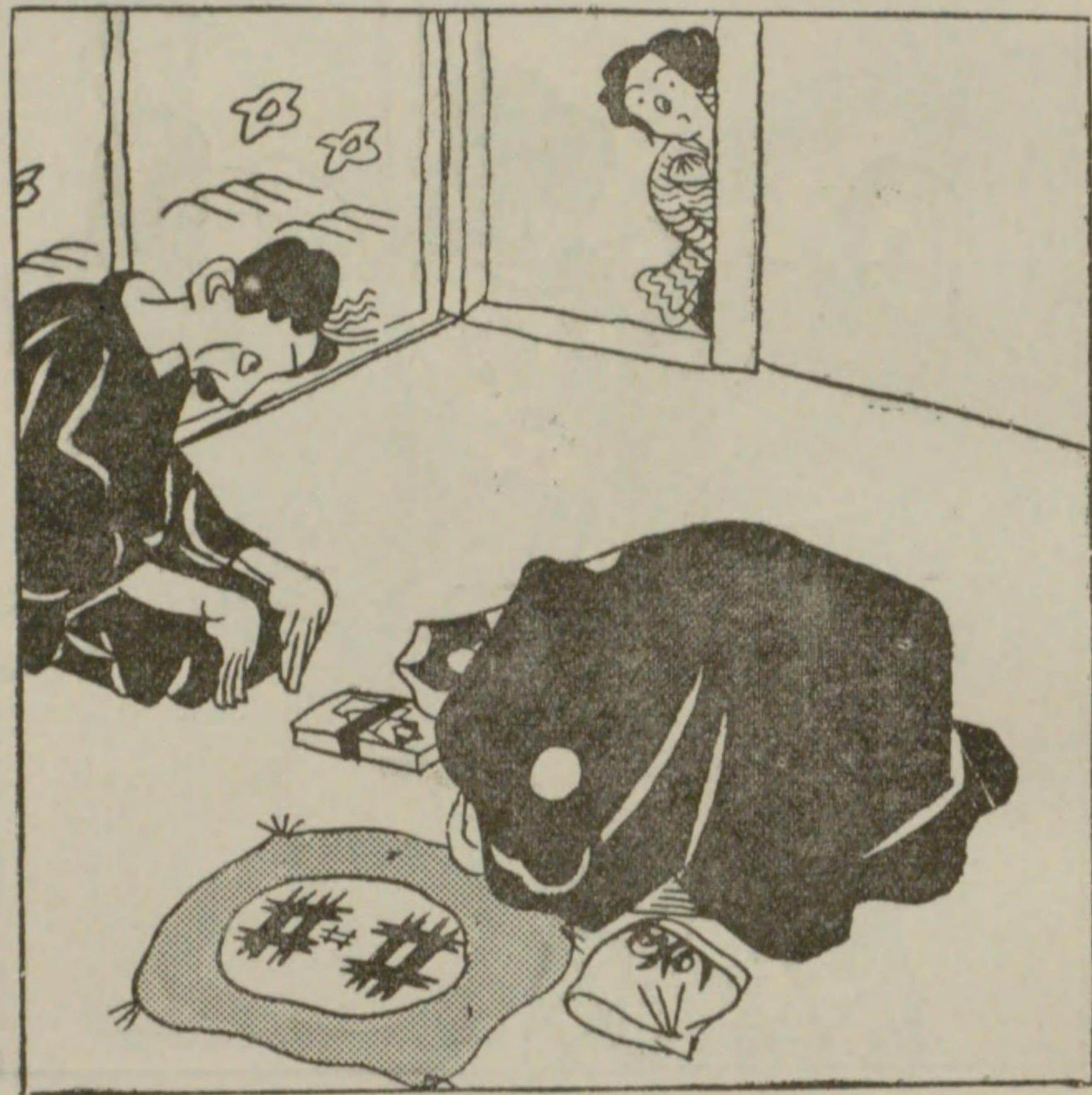
二

祖母おひさ「初孫は御先祖のお名前を頂くと死んだおやぢ殿の遺言でゐる。」幹人「仕方ありません、では金成と人左衛門とを折衷して人成とつけませう。」



三

話變つて京橋五郎兵衛町に鈴木木助といふ商人が居る。今朝其處へ一葉のハガキが抛り込まれた。木助見て「ナンダ唯野が子を生んだか、ヤレ〜。」



木助唯野へ祝ひに行く。木助「承  
 はれば男子御生誕なさうで、お手  
 柄で△います。これはほんの心許  
 して——」 幹人「イヤこんな事を  
 して頂いては却つてソノ——」

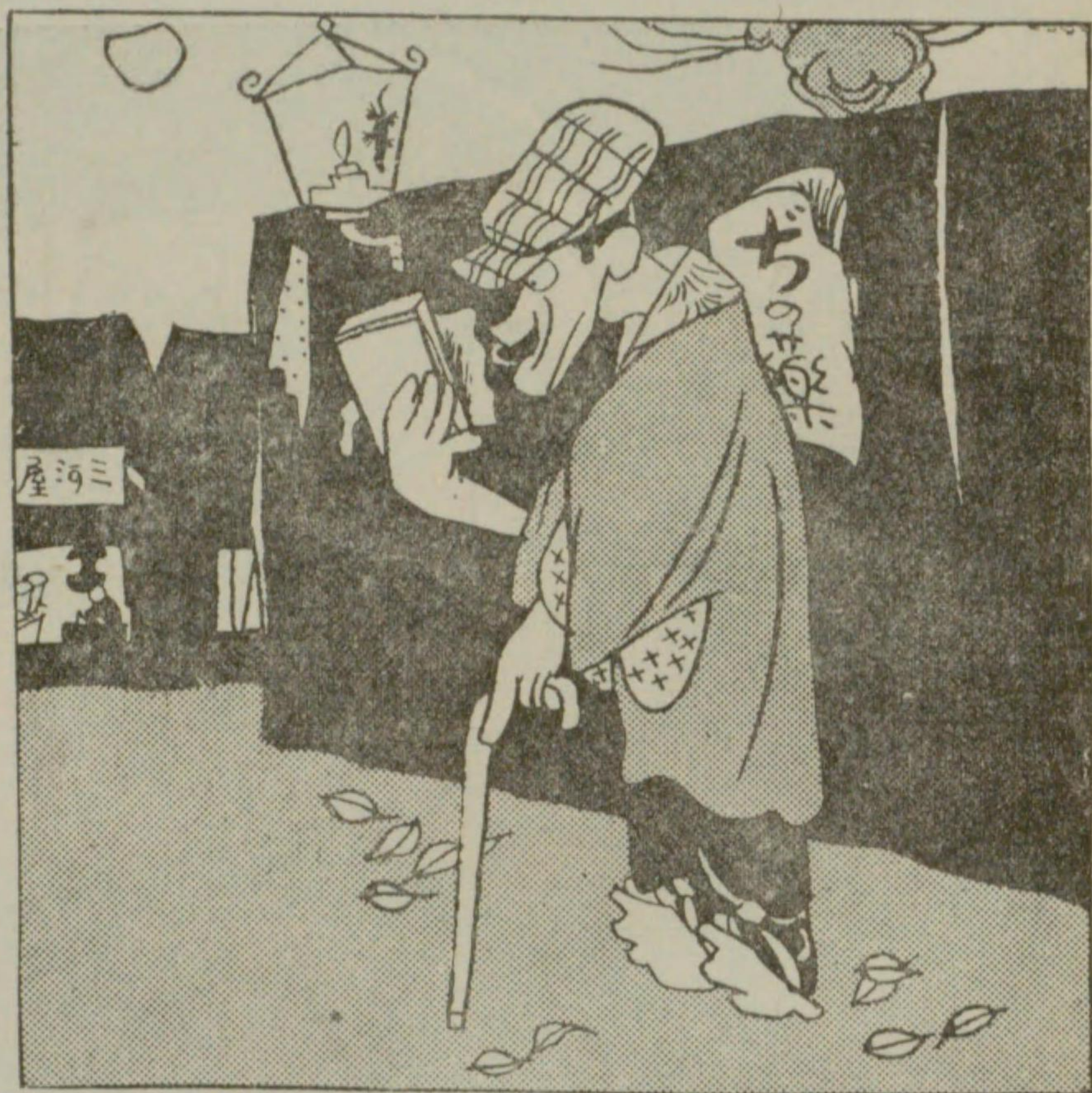


木助「ヤレ子が生れたヤレお袋が  
 死んだと、親類交際も得のいく事  
 は一つも無い、ドリヤー一つ隣の三  
 河屋で割引の商品切手を安く買つ  
 て行かう。」

四

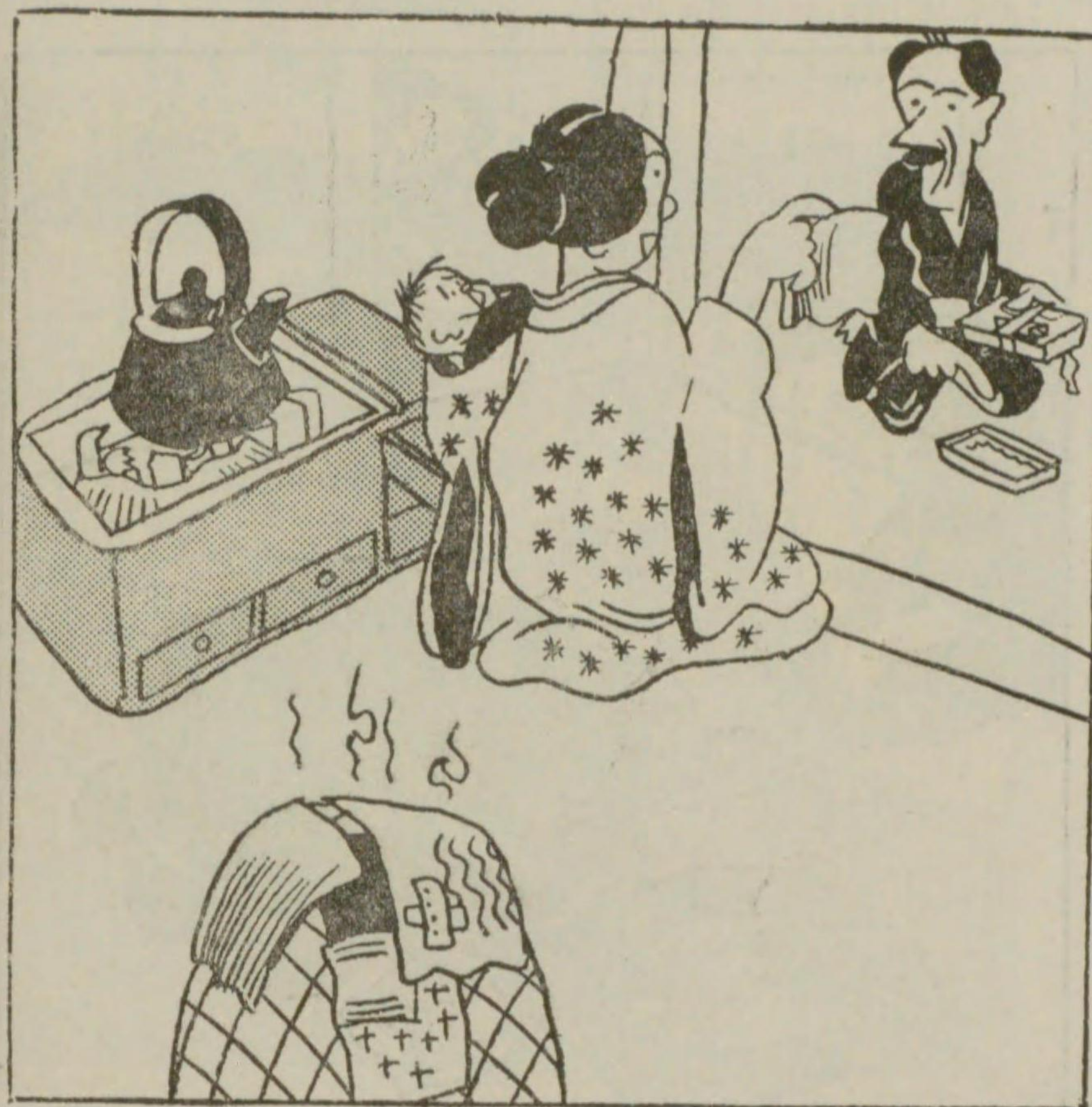
五





幹人「夜陰に乗じて切手を金に替  
 へに行くとは乃公も少々墮落した  
 な。これが所謂現代式かな。とこ  
 ろで切手の割引店は五郎兵衛町  
 の——」

七



幹人「木助の客ん坊が四ッ越の切  
 手を持つて来るとは奇蹟だ。」  
 つま子「サウ〜切手を割引で金  
 に替るといふ店の廣告が来てまし  
 たよ。」

六



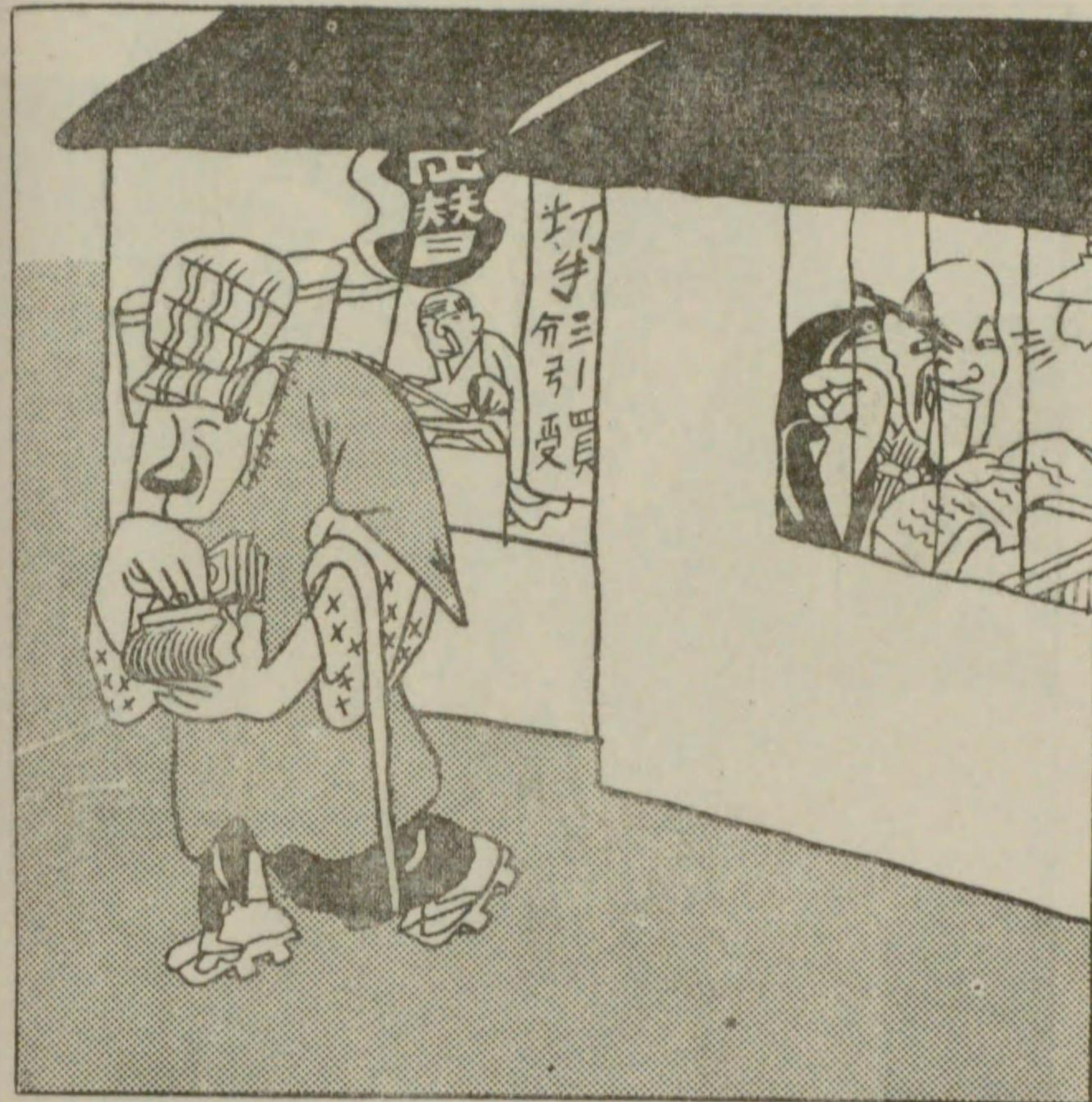
お宮詣り

人成のお宮詣りの日が来た。

幹人すゝまぬが祖母おひさがやい

やいいふので澁々祝着を拵へた。

おひさ大得意。



八

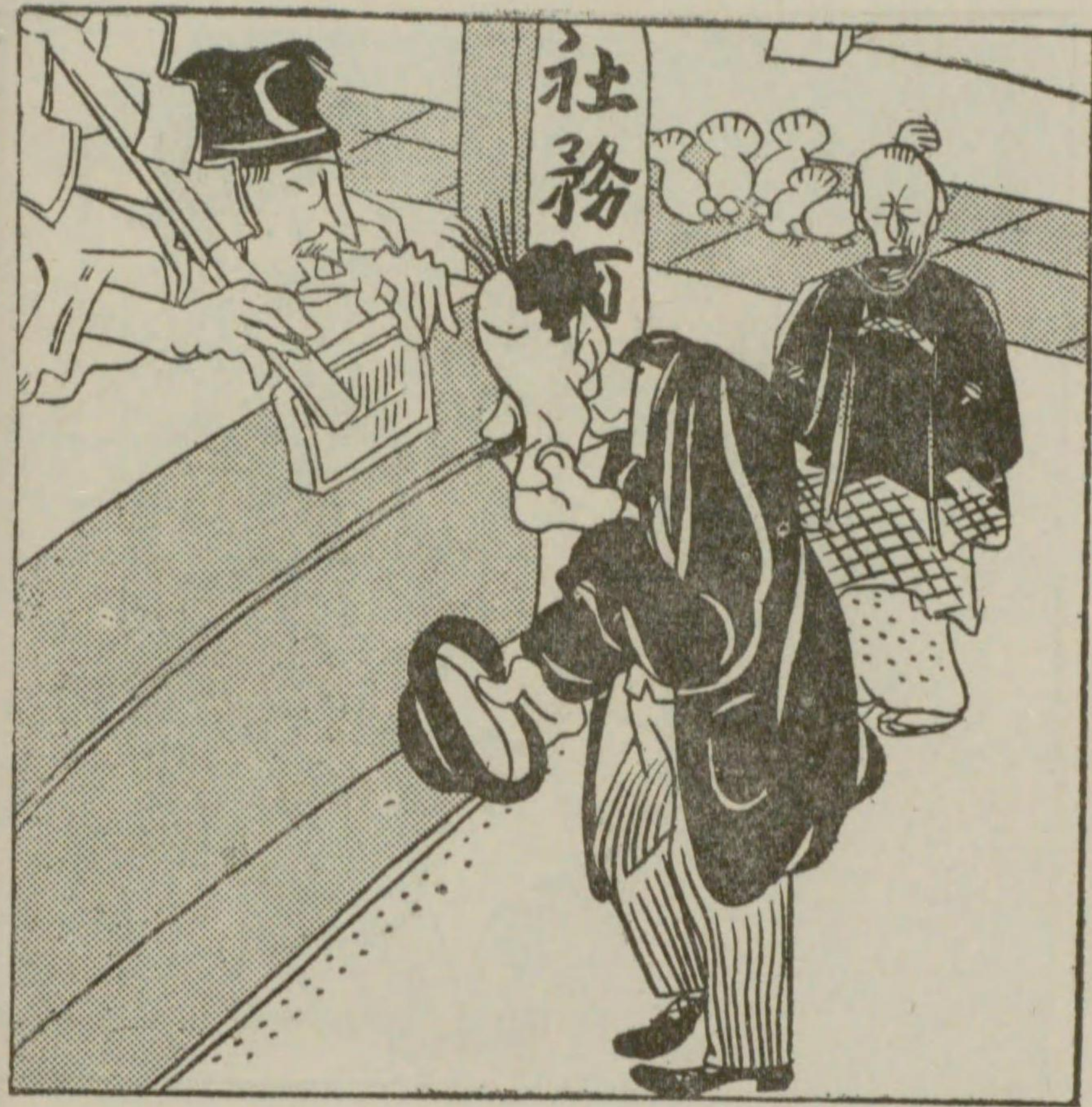
木助隣の三河屋切手引店より

ニコ／＼し乍ら幹人の出て来る姿

を發見して苦笑「唯野の奴も切手

の兩替を知つてたかい、こいつあ

どうもイヒ、。」



二

頼守社の社務所へ行き参拜を頼

むと若い神主が印刷した定價表を

示し「略式の方ですとお神酒にお

祓ひがついて壹圓貳拾五錢です。」



三

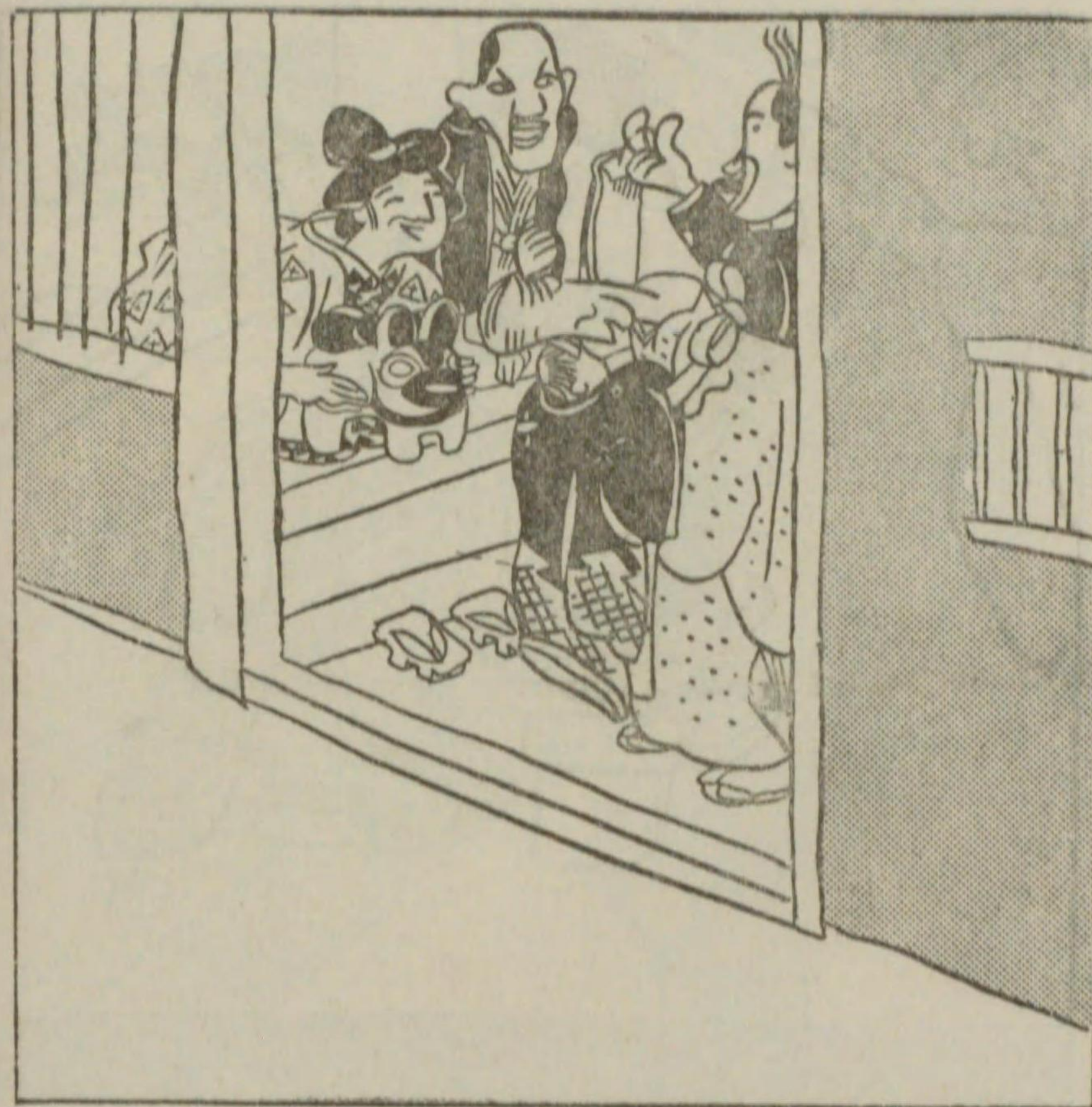
幹人人成の代理として土器のお

神酒を頂き乍ら「ナンダ淡い酒だ

な。まるでおでん屋の酒だ。神様

も物價騰貴で悩まされてると見

える。」



四

参詣終り千歳飴を買ひ、祝を買  
つた禮に鈴木木助の家へ寄る。木  
助の家では犬張子を用意し居り、  
人成の宮詣りを祝つて贈る。



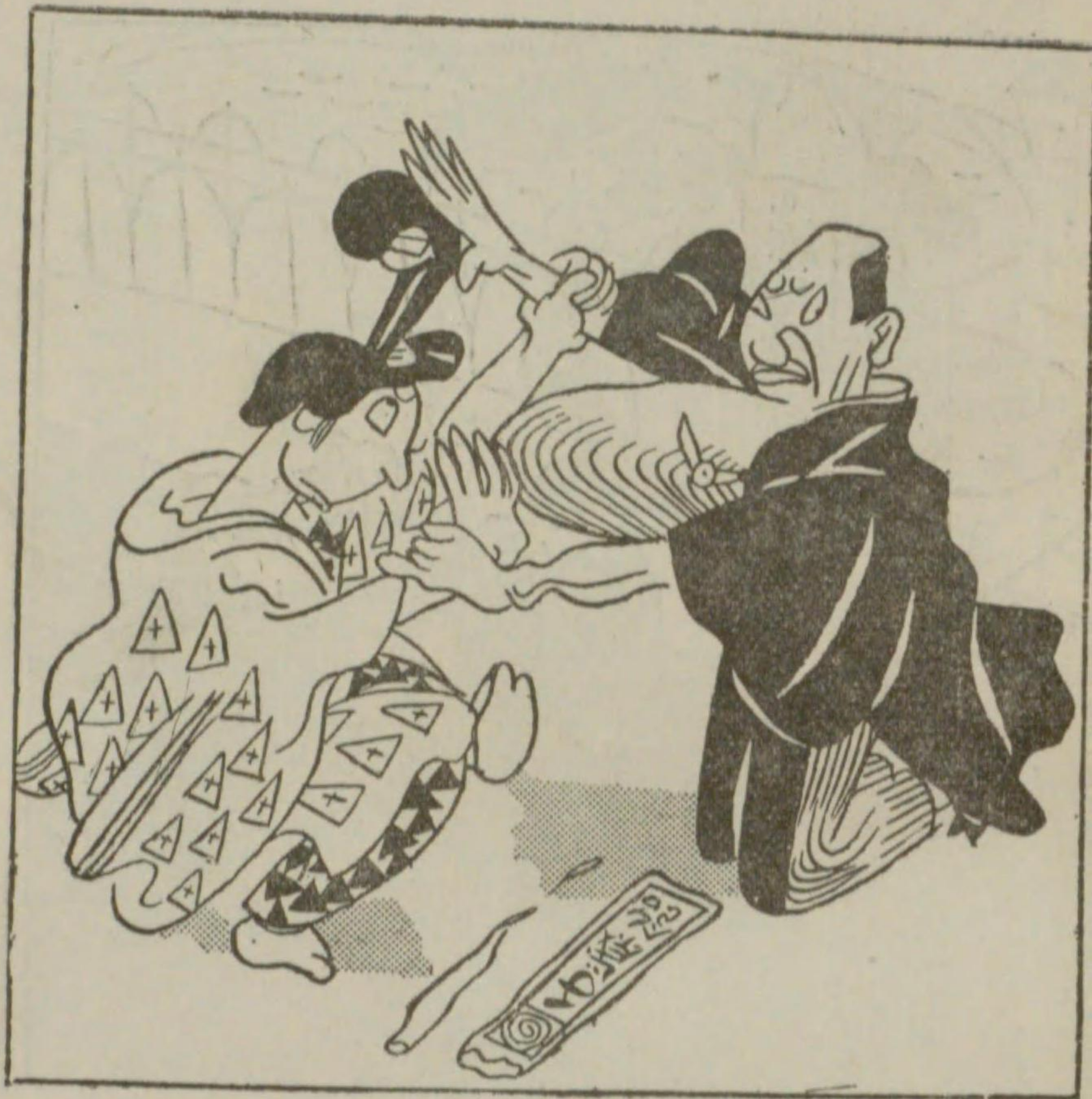
五

木助妻おつめ愛想に人成を抱き  
取り「なンテ温順いよい子でせう  
お笑ひなさい、オット、、、。」  
といふと、人成ワアツと泣き出し  
小便を垂れる。



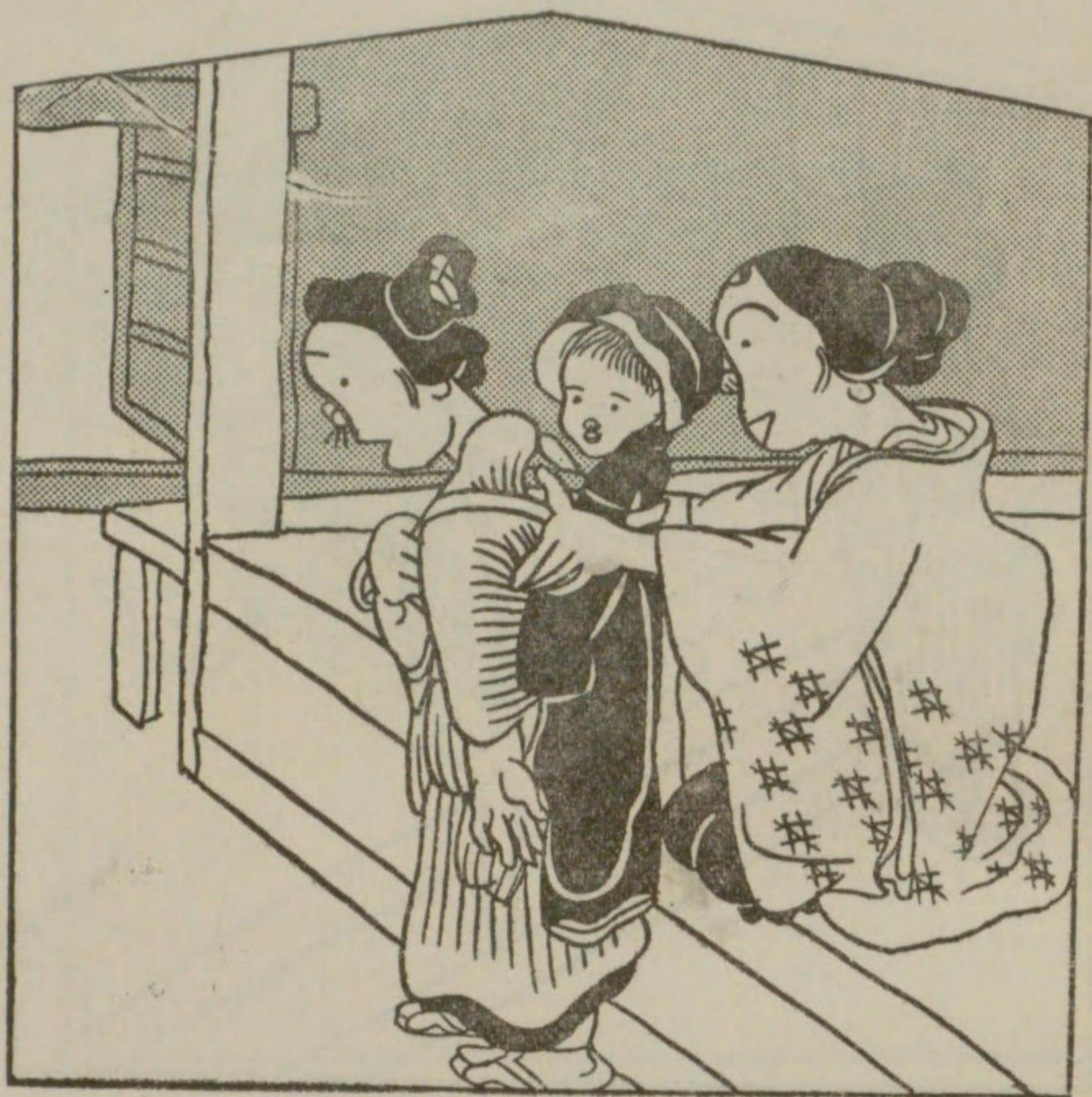
六

お宮詣り連、歸つた後、土産の  
千歳飴を嚙り乍ら木助夫妻の對話  
「なアおつめ、(モガ〜)うちで  
も一人無いと、(モガ〜)寂しい  
なア(モガ〜)。」



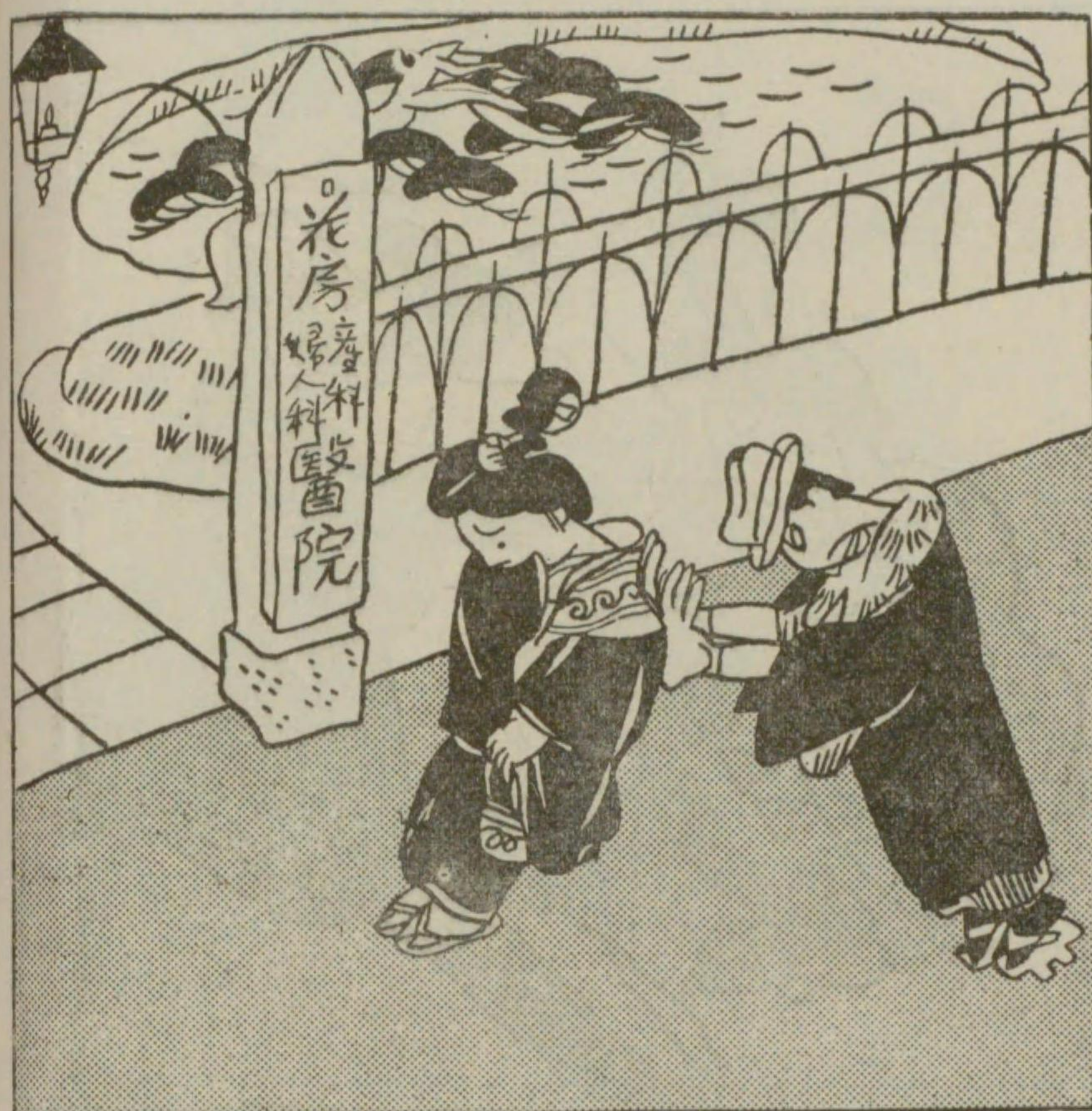
七

おつめ「寂しいつたつて(ムニヤ  
ムニヤ)良人が不身持ちだから、  
(ムニヤ〜)出来つこ無いわ。」  
木助「貴様が冷性のせるだ(モガ  
モガ)。」遂に夫婦喧嘩!



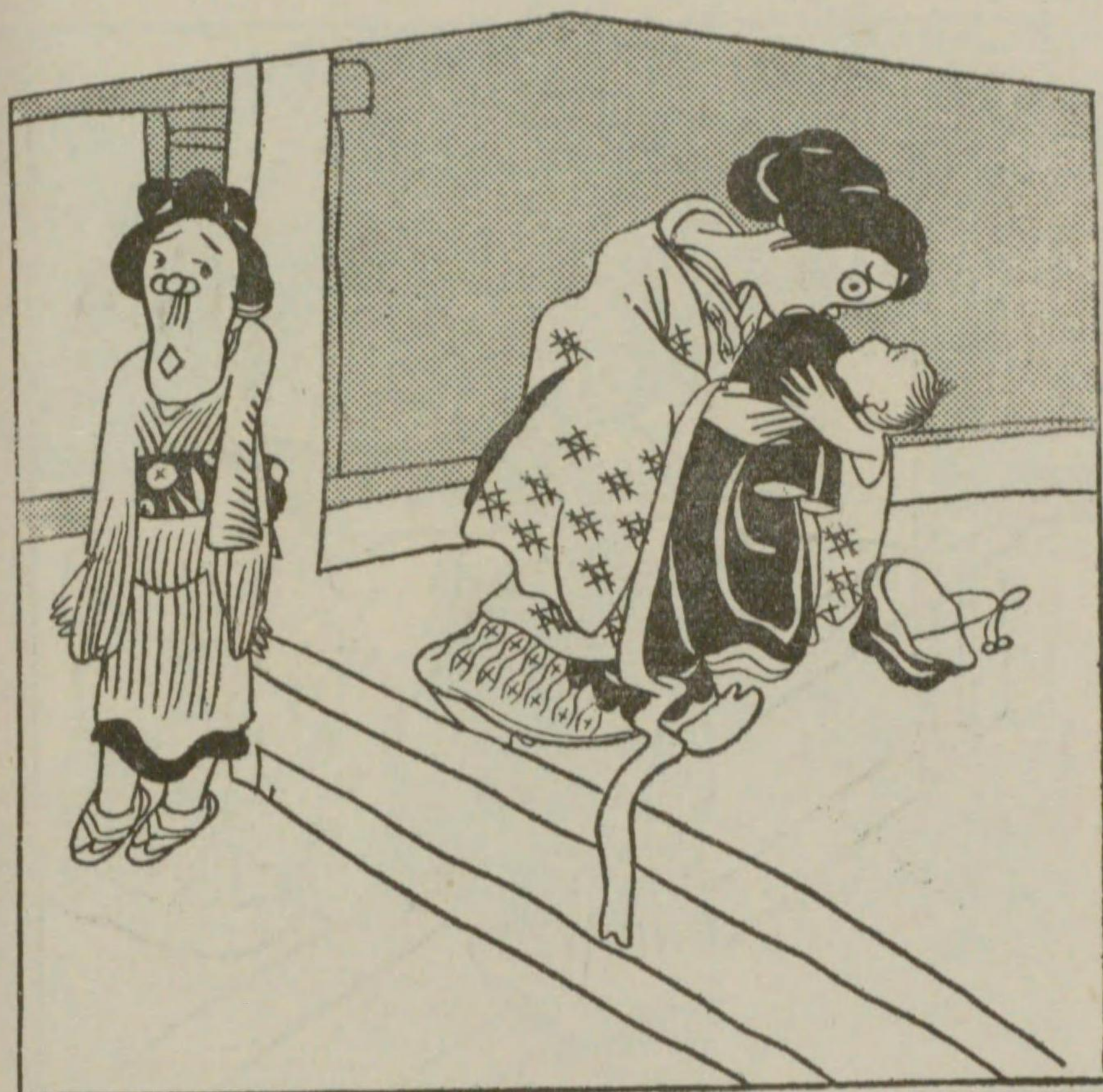
子守難

一人成は背中に負はれ外へ遊びに出る程に育つた。母つま子、女中ゑそに人成を負ふはせ「夕方は寒くならぬうちに歸るんですよ。」



八

そのうち喧嘩もつまらないと悟り「兎に角専門醫へ相談に行かうぢやないか。」「あたしやきまりが悪くて。」「馬鹿ッお國の爲めになる事だ。何が恥かしいッ。」



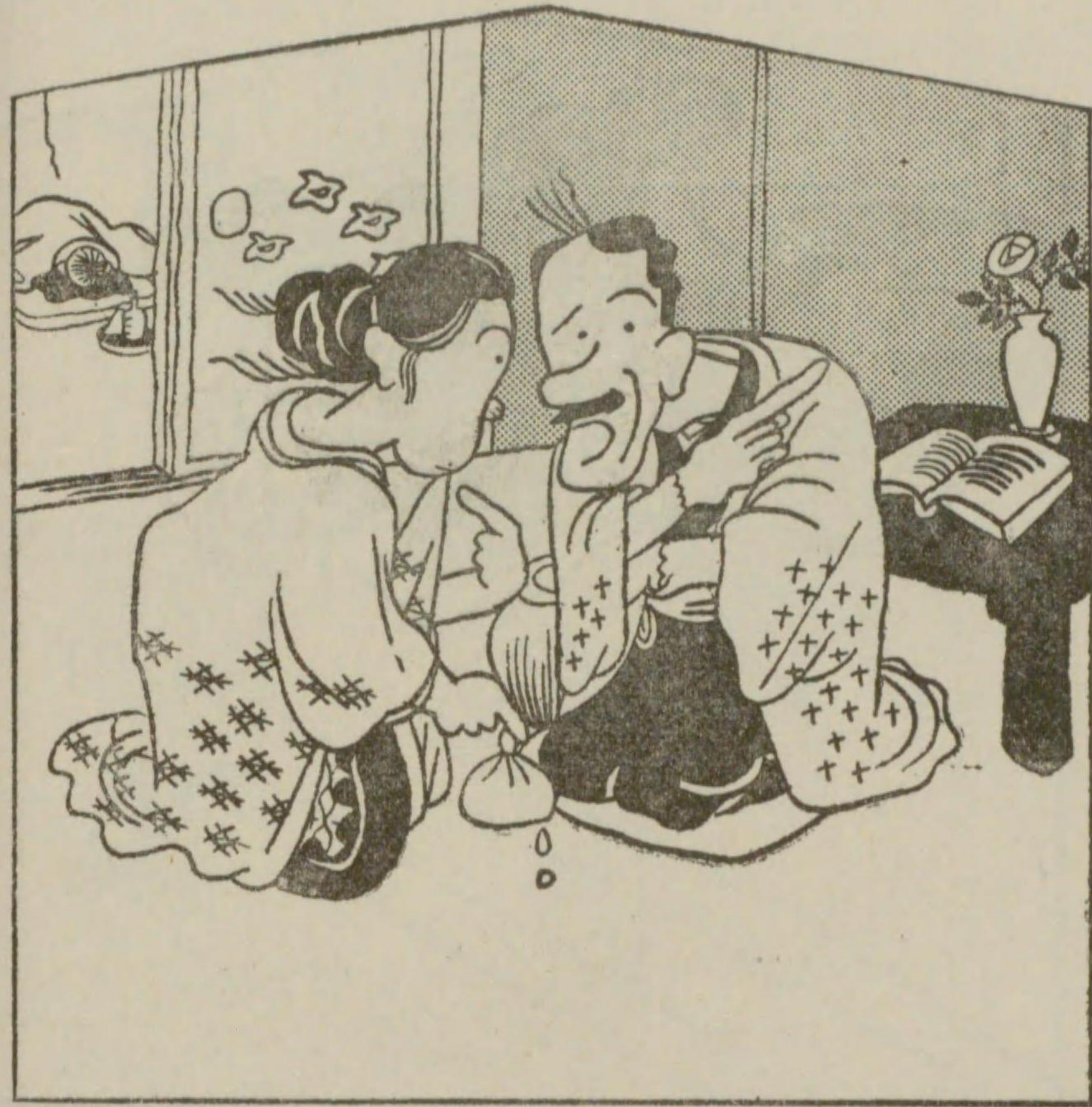
二

夕方遅く歸つたゑ、その背中から  
 人成を抱取つて、つま子吃驚「オ  
 ヤどうしたのだらう、こんな冷々  
 くなつて？ 唇なぞ紫になつ  
 ちやつて？」



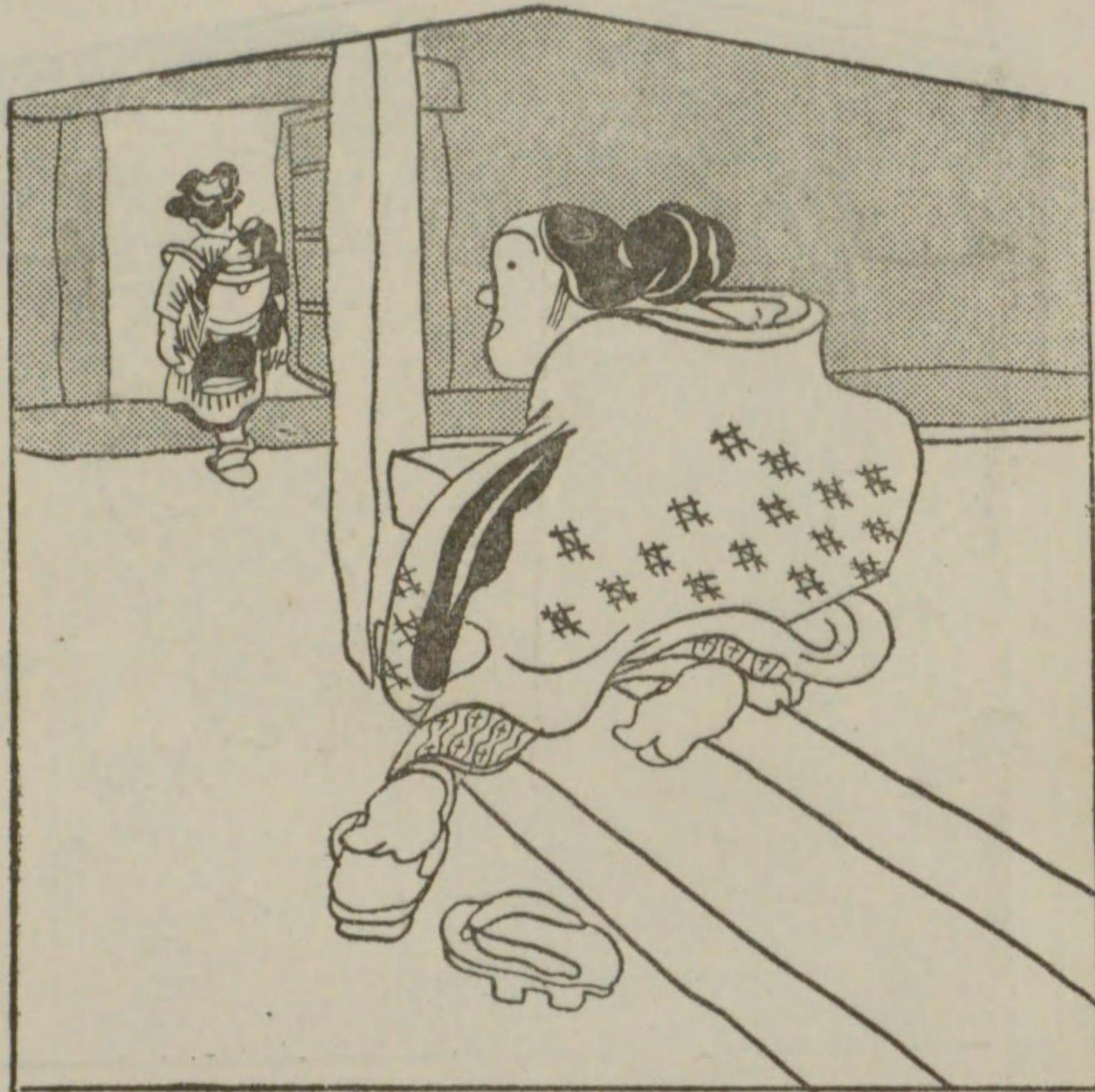
三

醫者「無論たいした事はありませ  
 んが、可笑しいですな、着物も充  
 分だし氣候も寒くないにこんなに  
 冷えるといふ譯は？ 可笑しいで  
 すな。」



四

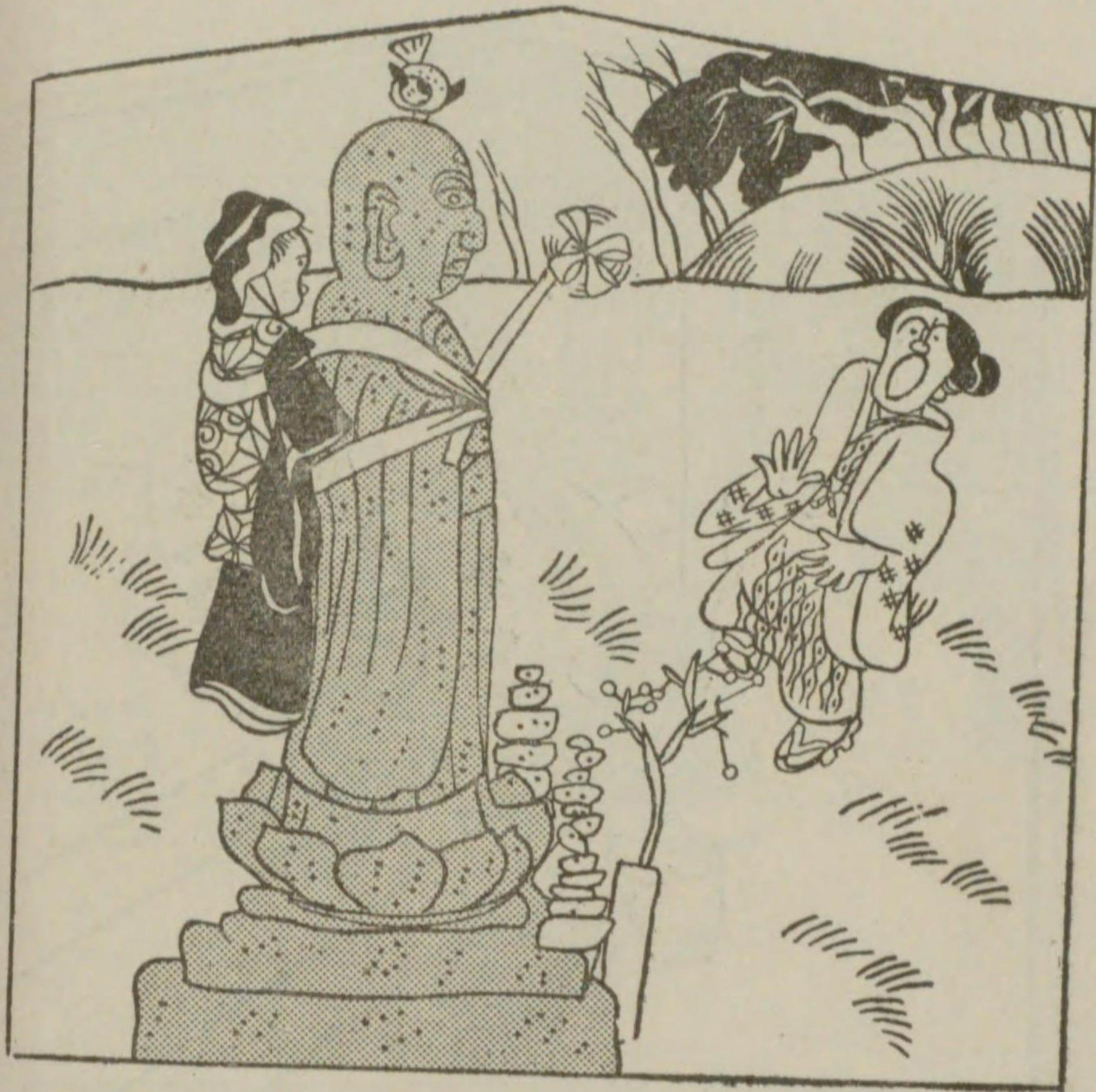
幹人「こりや、どうもゑ、その仕業  
らしいぞ。あいつ低能だから外へ  
出て人成をどうしてるか知れやし  
ない。」つま子「ソツとついてつて  
見ませうか。」



五

つま子「一日置き、稍病氣恢復し  
た人成をゑ、そに負ぶはせ表へ出し  
やり、自分は後から氣取られぬや  
う見えつ隠れつ跟けて行く。」





六

ゑそは野に出た。そして背中の

人成を野中の石地藏に負ぶせ更へ

自分は志すものある如き足取り

にて急ぎ丘の向ふへ去つた。

つま子「マア呆れた。」



七

丘の日當りにてゑそは朋輩の女

中達と身軽になつて八木節を踊つ

てる「赤い顔して黄ろい聲でチャ

カボコ〜〜ナ。ハア。ドッコ

イ。

幼年時代



八

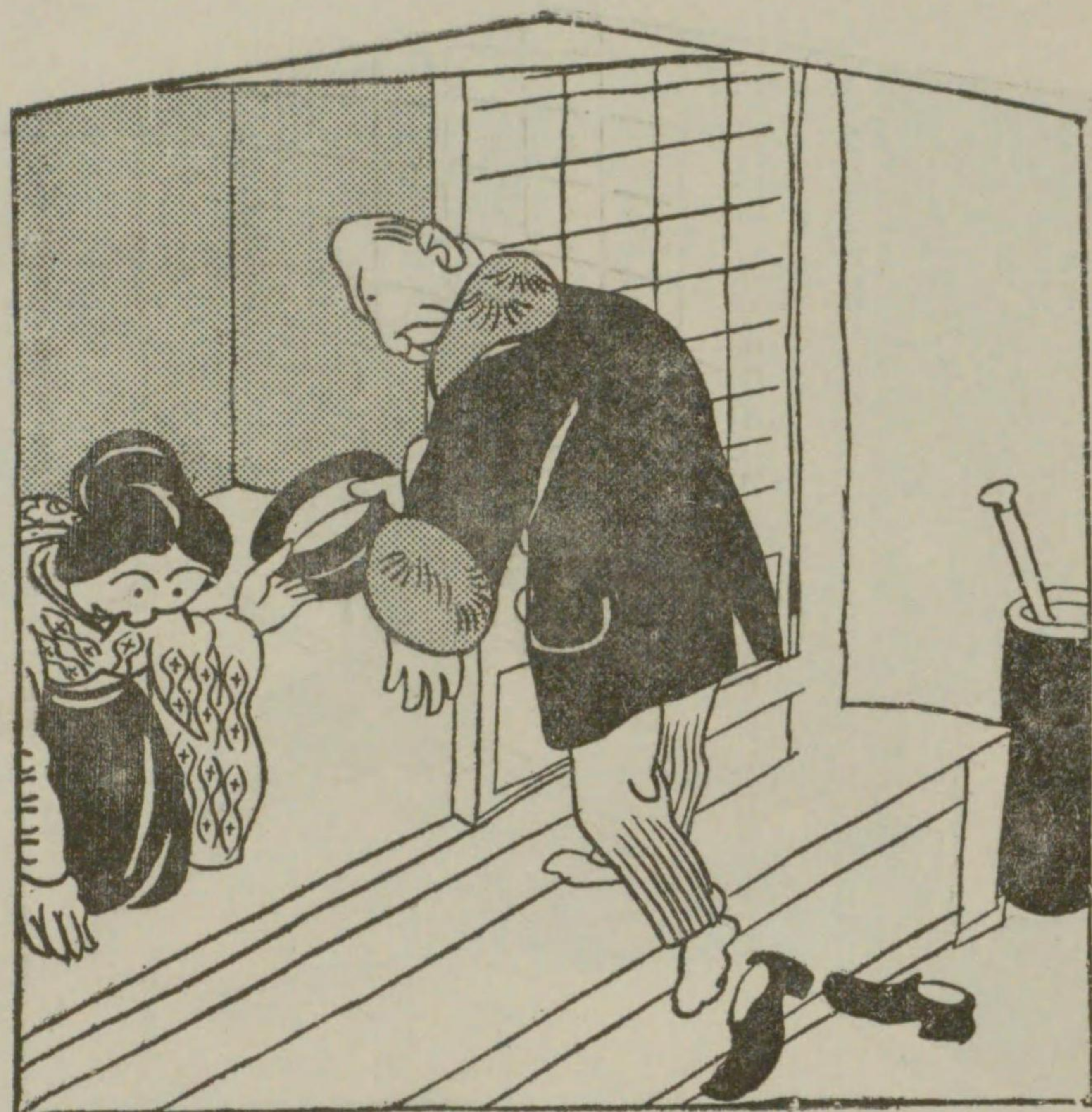
初冬しとふゆの日は西せいに沈しづむ、ゑそ、八や

木節きぶしを終しひ、前まへの石地藏いしぢざうのもとへ

人成ひとなりを取りとりに行く。人成ひとなりは無なくて

地藏ぢざうの背せ中に奥様おくさまの手てで貼札はりかたがし

てあつた。



來客ご襦袢

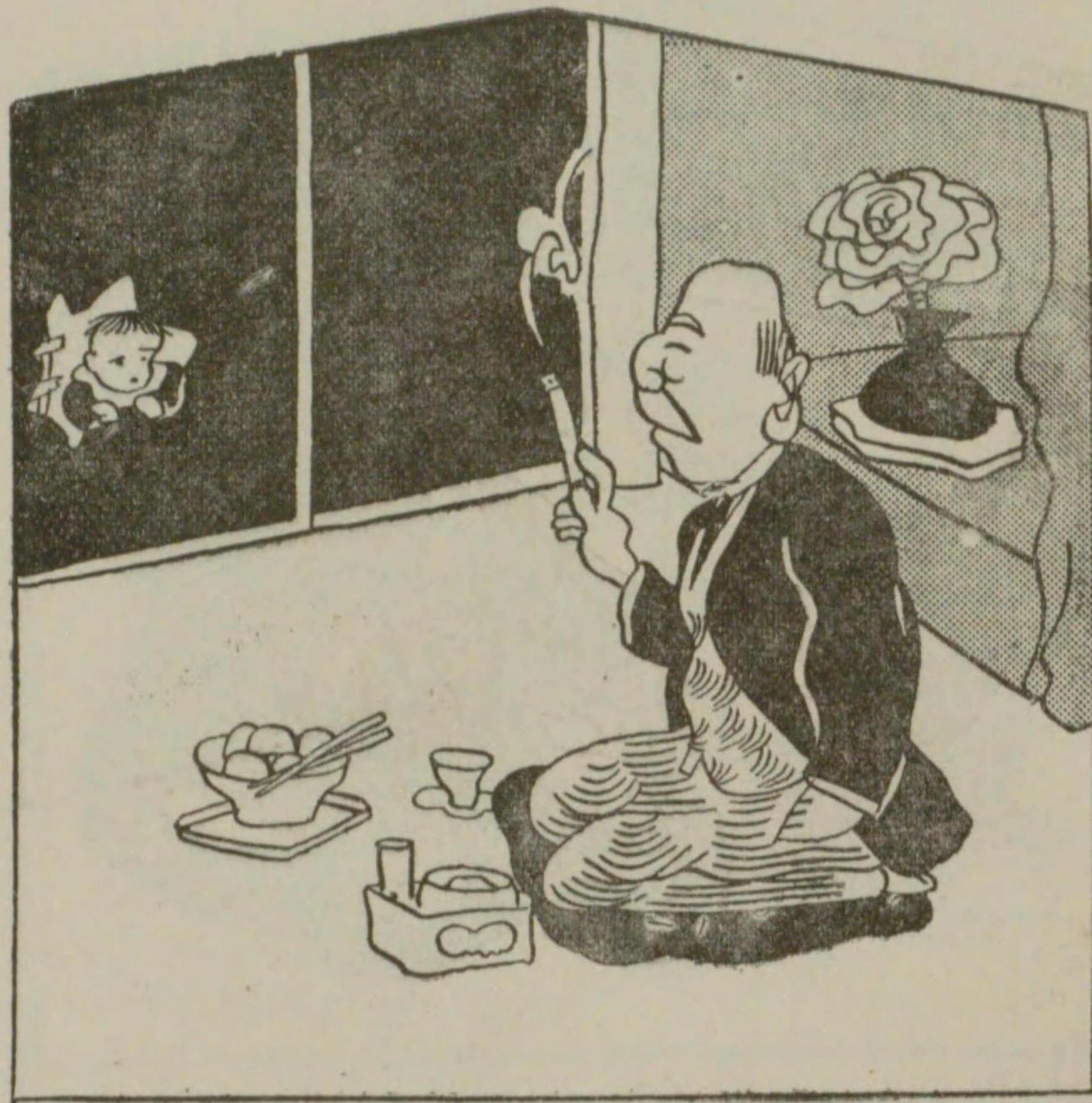
唯野の家を訪なふ客があつた。

それは幹人が嘗て勤めた役所の上

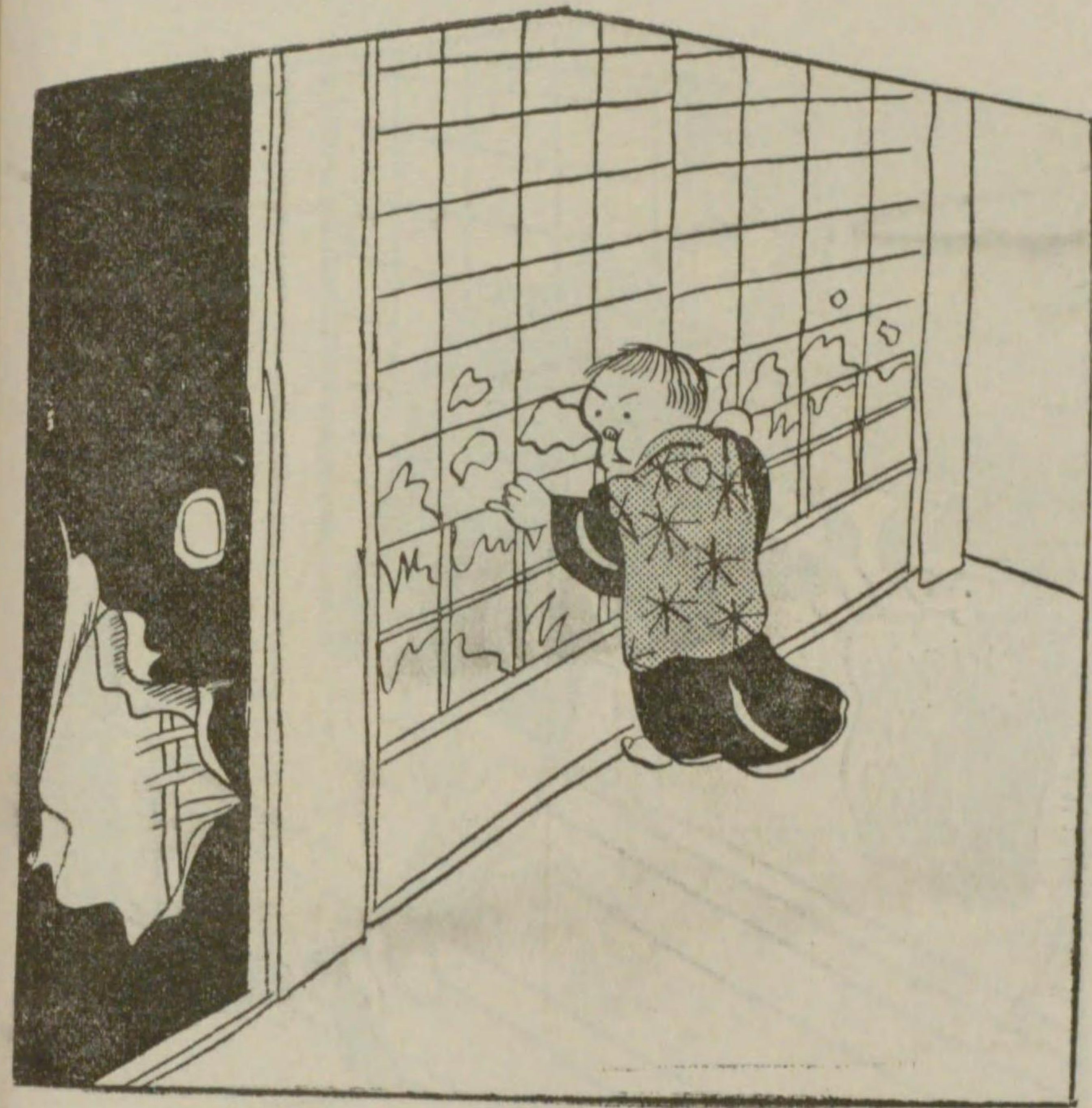
役、髭尾である。取次ぎに出たつ

ま子懇勲に客間へ導き、下へも置

ぬ待遇。



三  
 髭尾「ヤア。坊ちゃんですか。ここへいらつしやい。うま〜あけませうか。をぢさん恐いですか。」  
 と愛想する。人成襖の穴より入る。



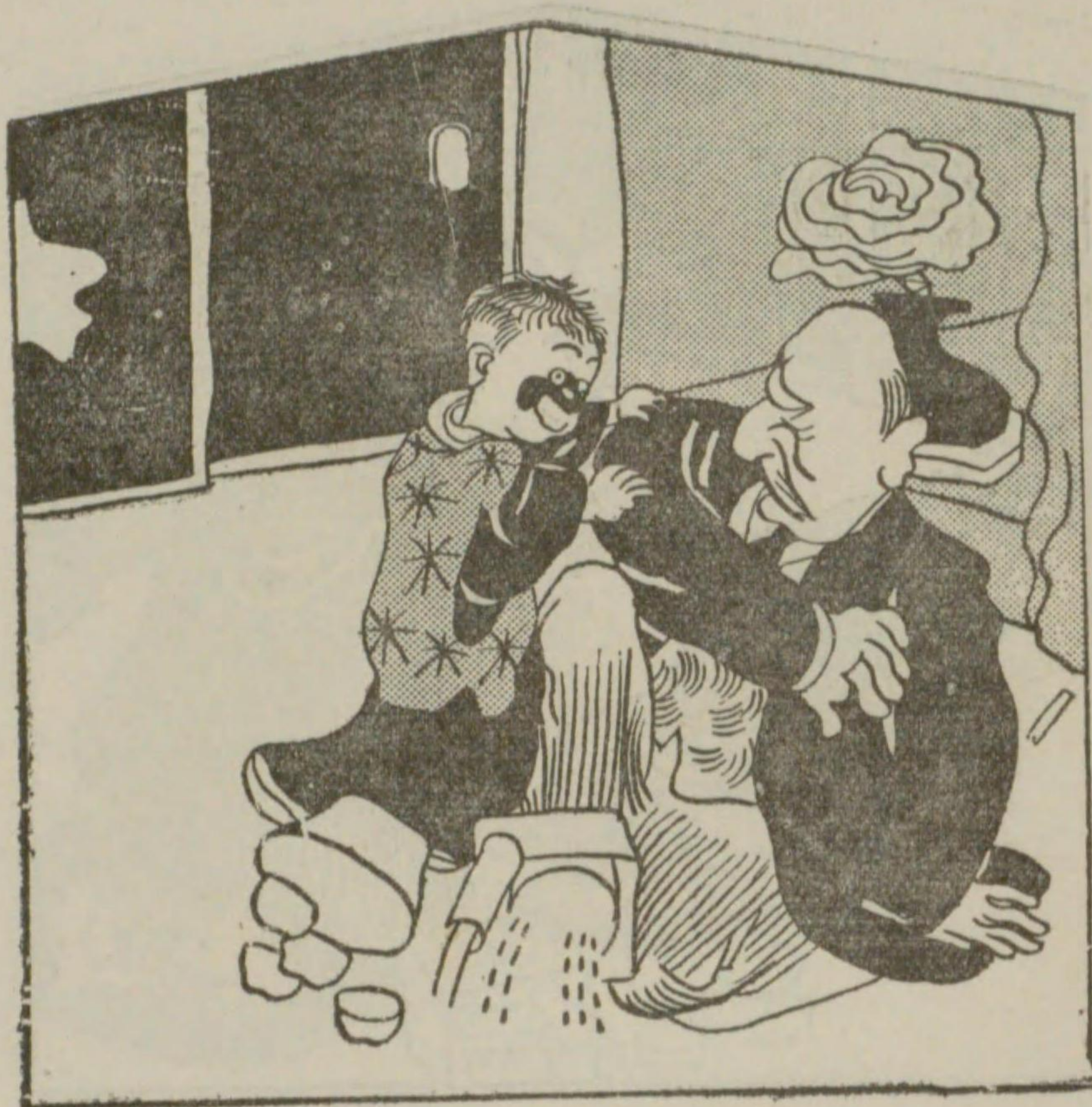
二  
 髭尾を客間に待たせ久し振りに大に饗應さんとつま子、幹人、茶の間で相談してる。その際に人成障子につかまり、立りして傳はり襖の穴へ——。



四

髭尾「ハ、、、坊つちやん中々  
豪傑がうけつですな。襖ふすまを潜ひそつて本當ほんたうに來  
ましたね。ハ、、、イヤこのう  
まくはお母かあさんがきぶてからでな  
いと上げられぬ。」

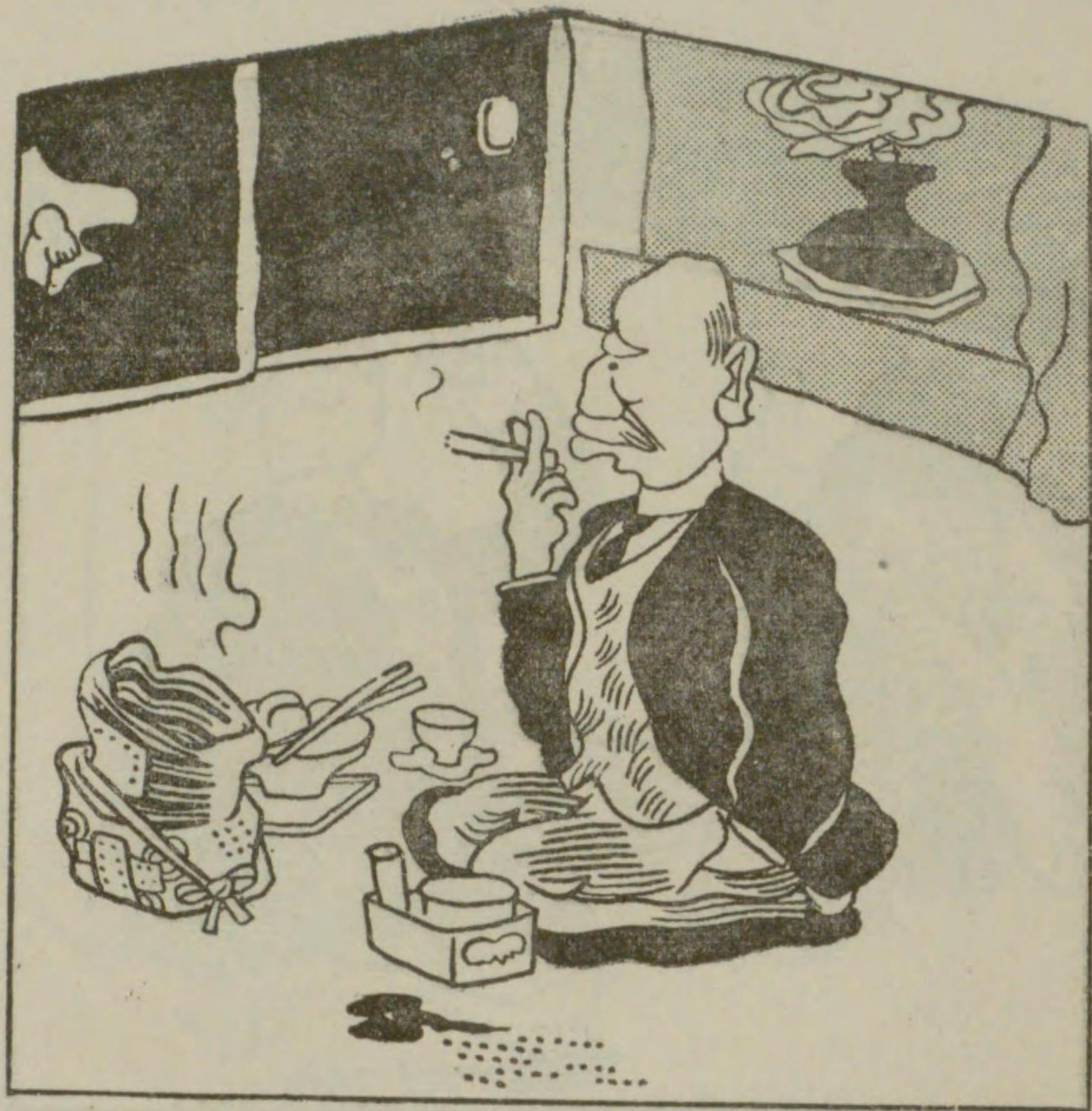
72



五

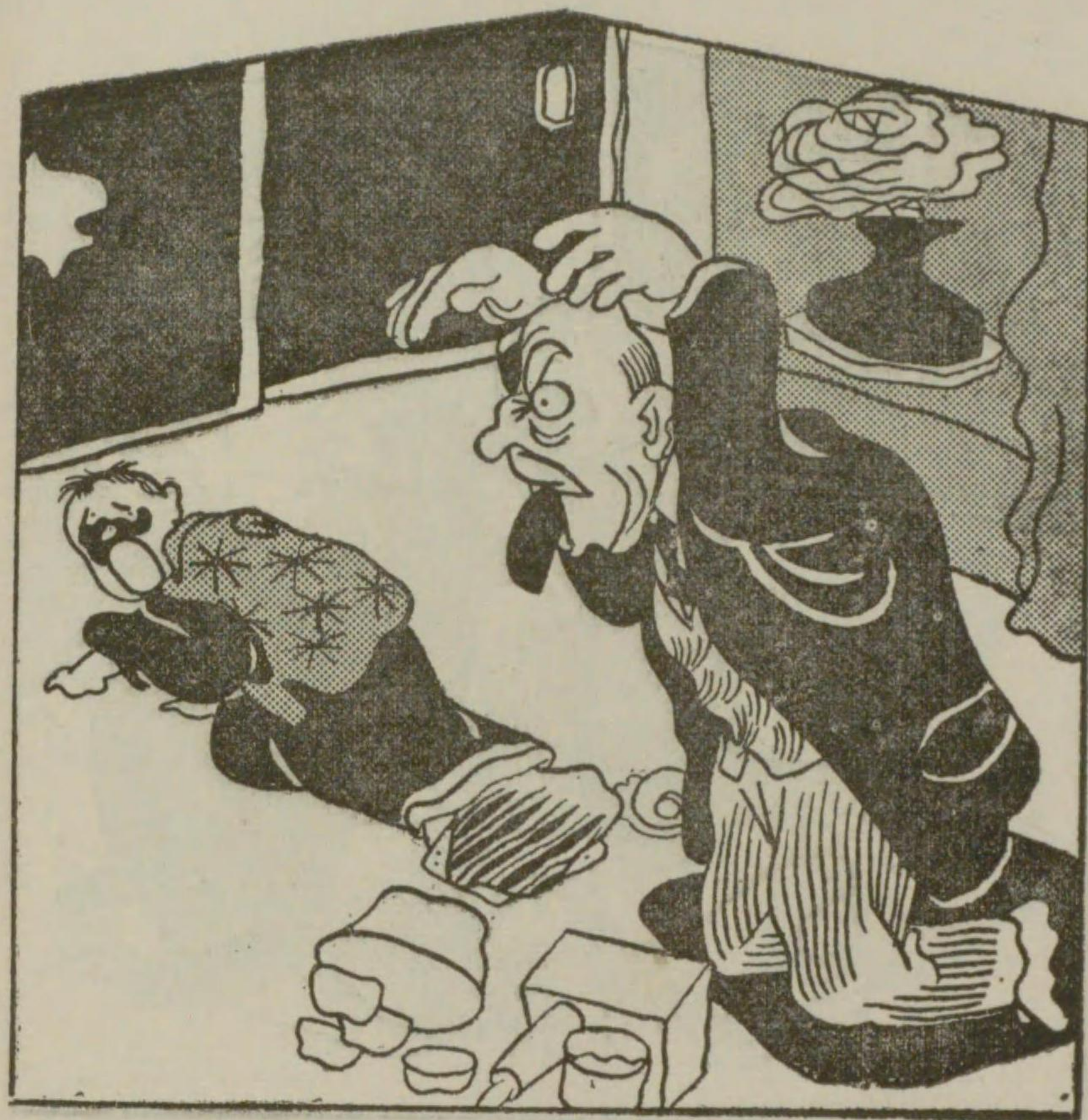
人成ひとなり、平氣へいきで菓子かしを掴つかみ取り顔かほ  
や手を餡あんだらけにしその手で髭尾  
の洋服やうふくへ掴つからうとする。 髭尾「ヒ  
ヤツ——坊ぼちやんイカン〜。」

73



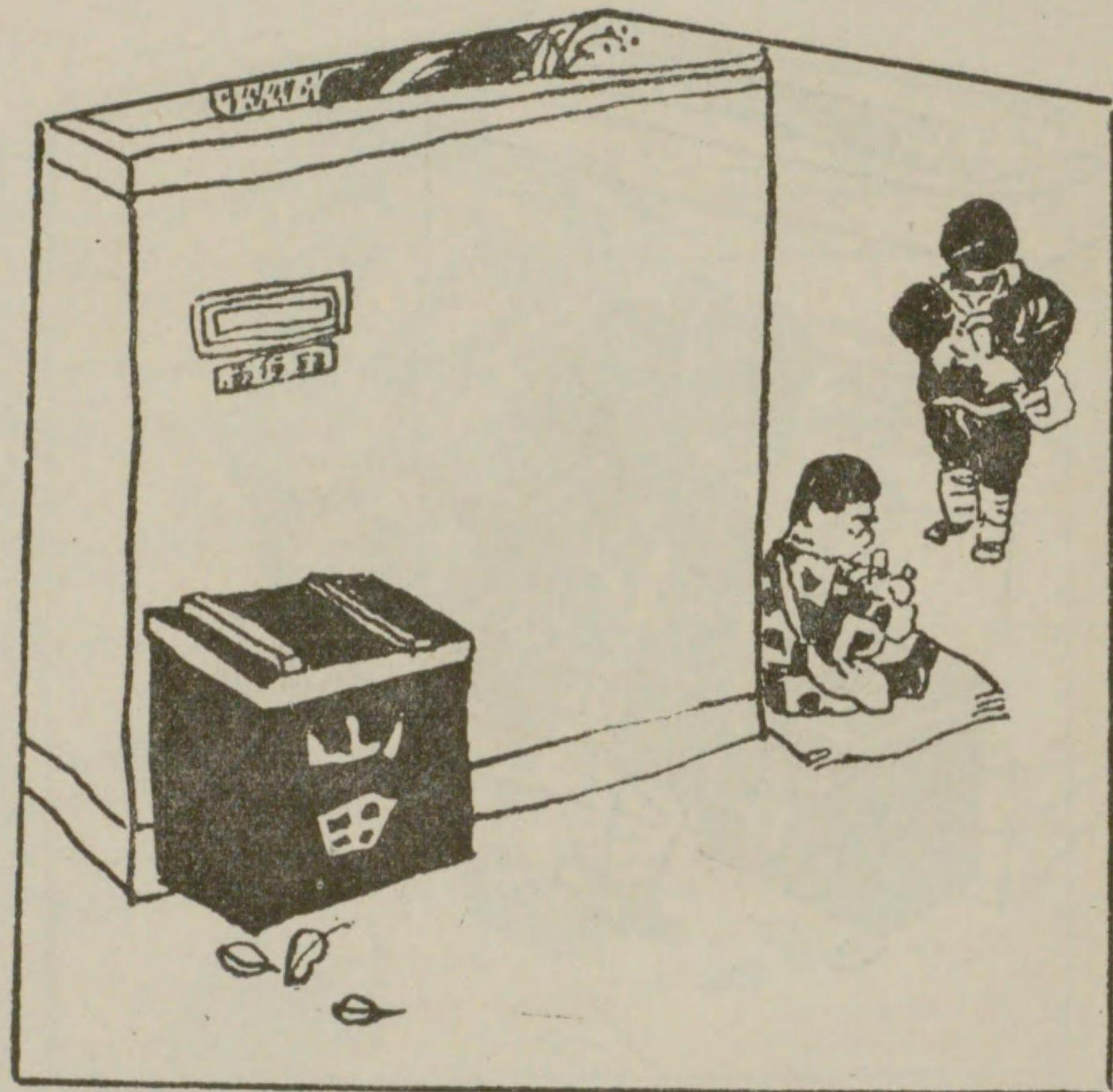
人成去りし後、髭尾は其處等取  
 片附け元の様にしたが人成の置  
 て行つたお襤褸だけはどう仕末す  
 る事も出来ず、苦い顔で暫し睨み  
 合ひ。

七

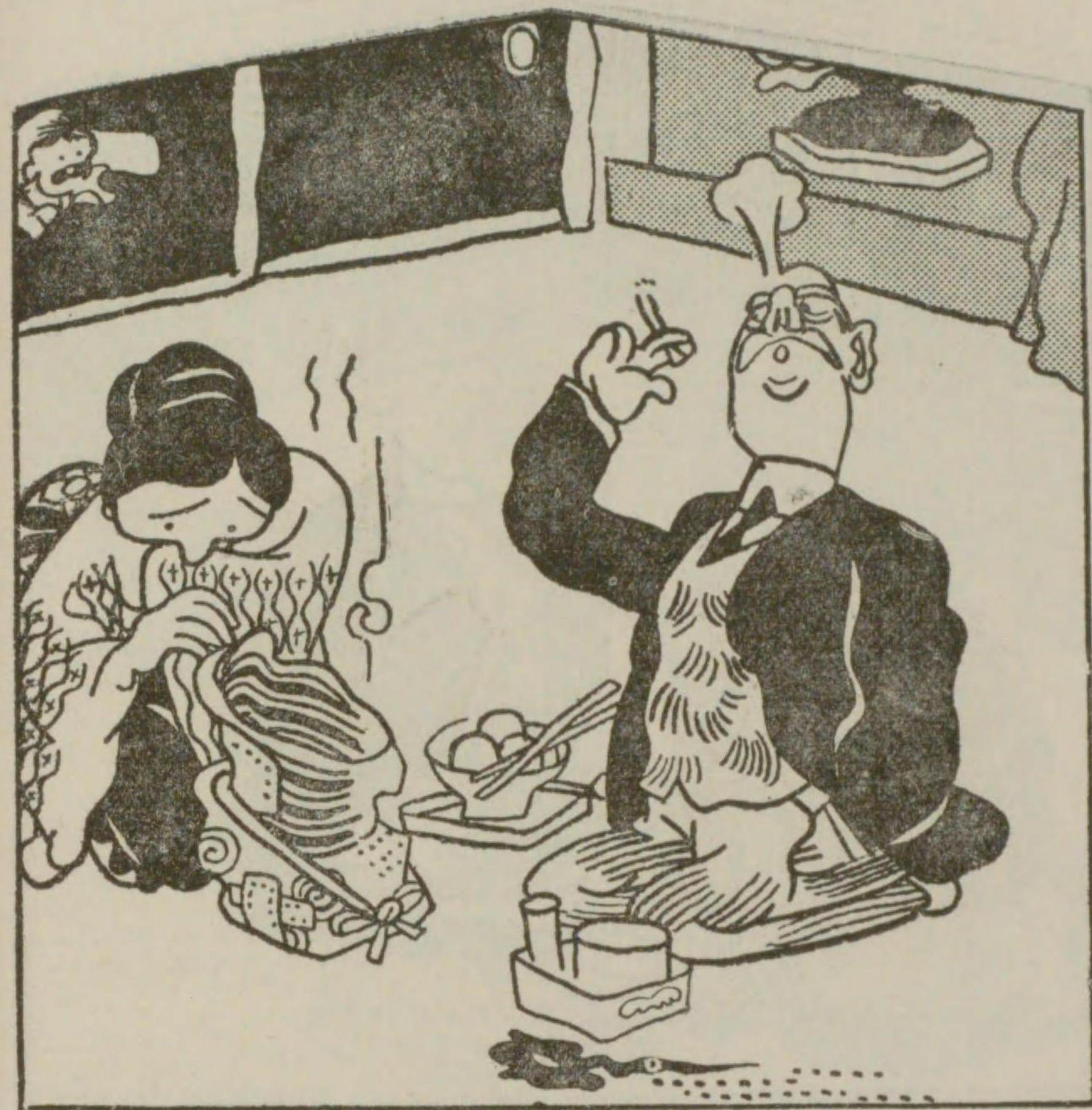


イカン／＼位では人成なかく  
 退かない。そこで窮餘の一策、眼  
 を剥き舌を出して髭尾「オーバーケ  
 ー。」人成、吃驚して匍ひ逃けて  
 行く。

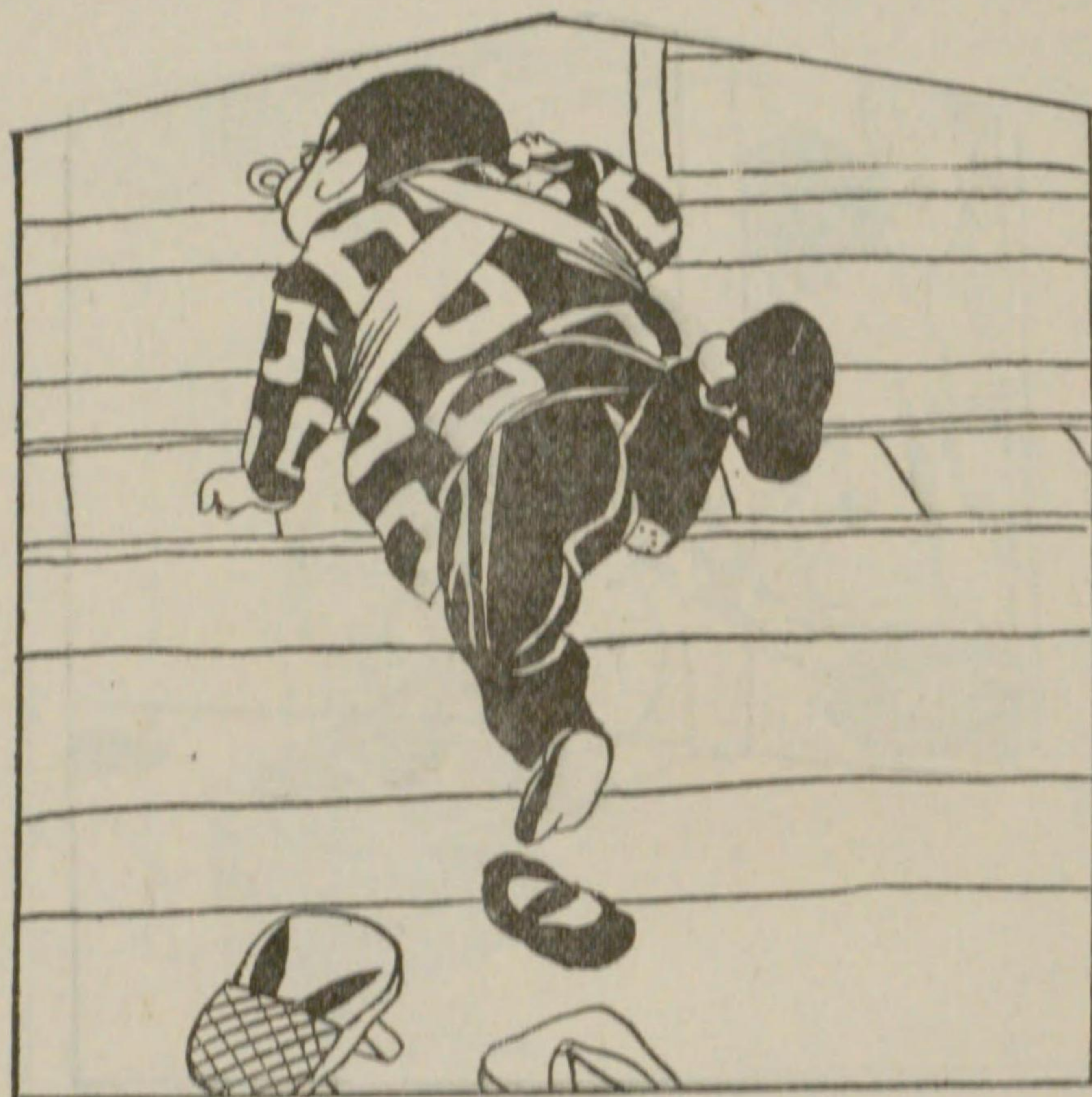
六



人成は早春の陽の當る塀の前に  
 席を敷き玩具を持つて一人で遊ん  
 で居る。乳離れし難くてまだ口に  
 は牛乳の吸口を銜へて居る。向ふ  
 から郵便屋来る。



「たいそうお待ち致して失禮  
 許り——」と茶を入れかへに來た  
 つま子フトお襦袢が目につくや眞  
 つ赤になり顔を得上けずお襦袢を  
 引いて行く。



郵便屋去る。其をちつと見詰て  
 居た人成何思ひけん、しよつこ  
 らく自宅に歸り女調から伺ひ上  
 る時に靴を脱がうとしたが一方は  
 どうしても脱げぬ。

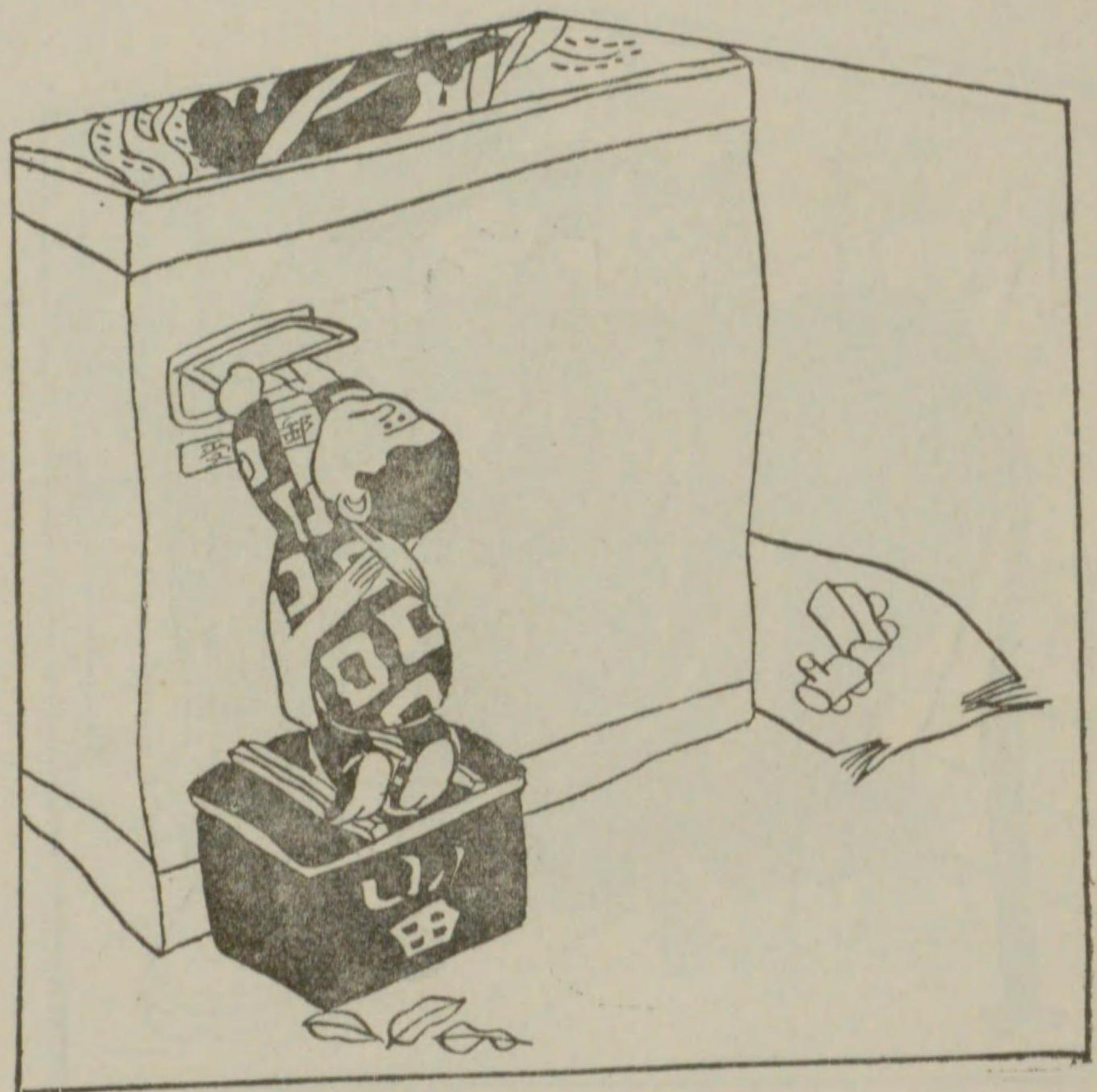
三



郵便屋は歩いて人成の前まで来  
 て一寸立止まり「坊ちゃん一人か  
 い。まだ乳の口衝へて可笑しいな  
 ア。」と擲擲ひ其儘行過ぎ隣の塙  
 へ行き「郵便——ン」。

二





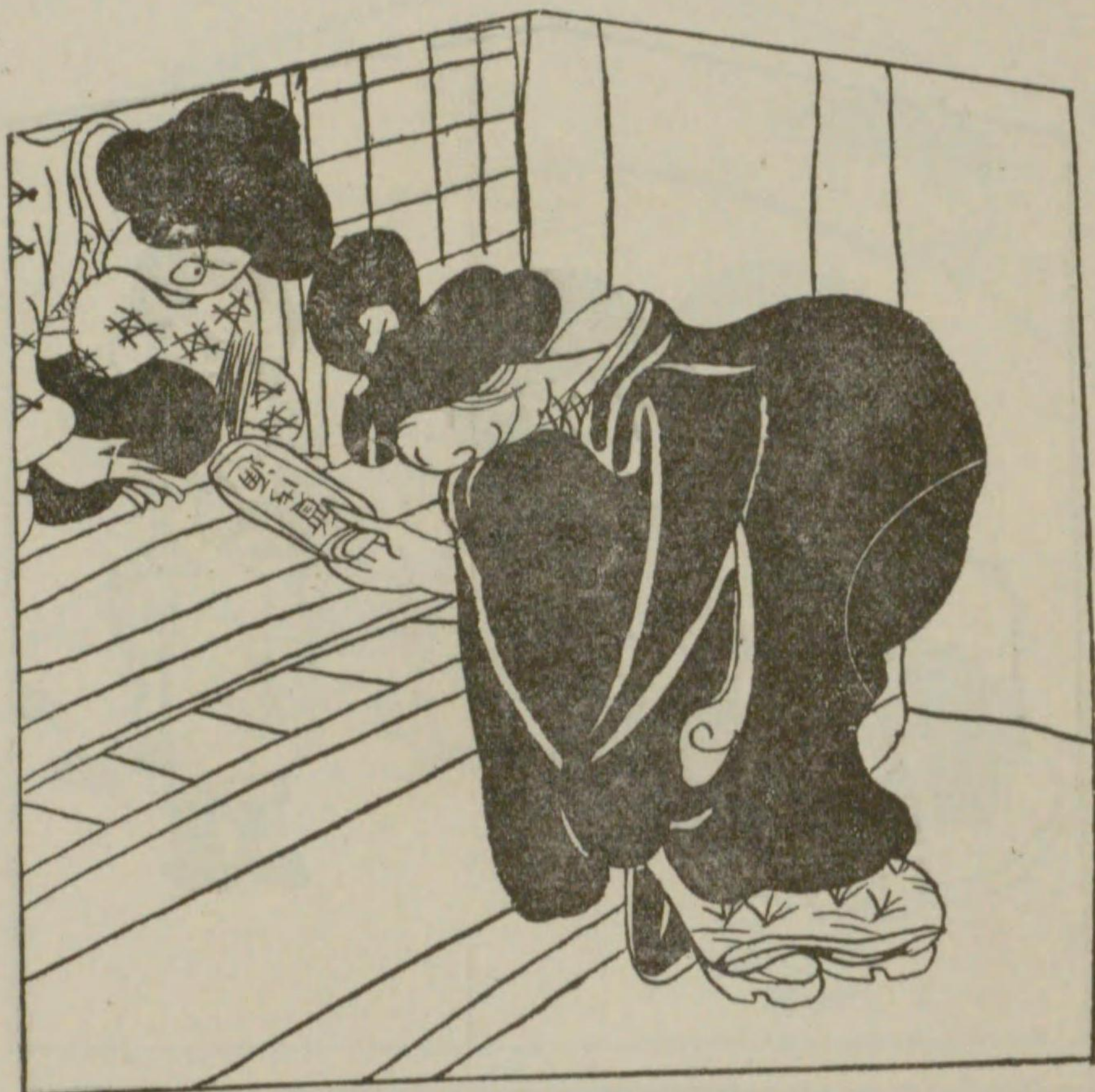
人成は抜き足さし足紋付羽織の  
 上に載せてある質屋の通帳を取  
 るや表へ出て行き、芥箱を踏臺に  
 お隣の郵便受口の中へかの質の通  
 帳を「ウーピン——」。



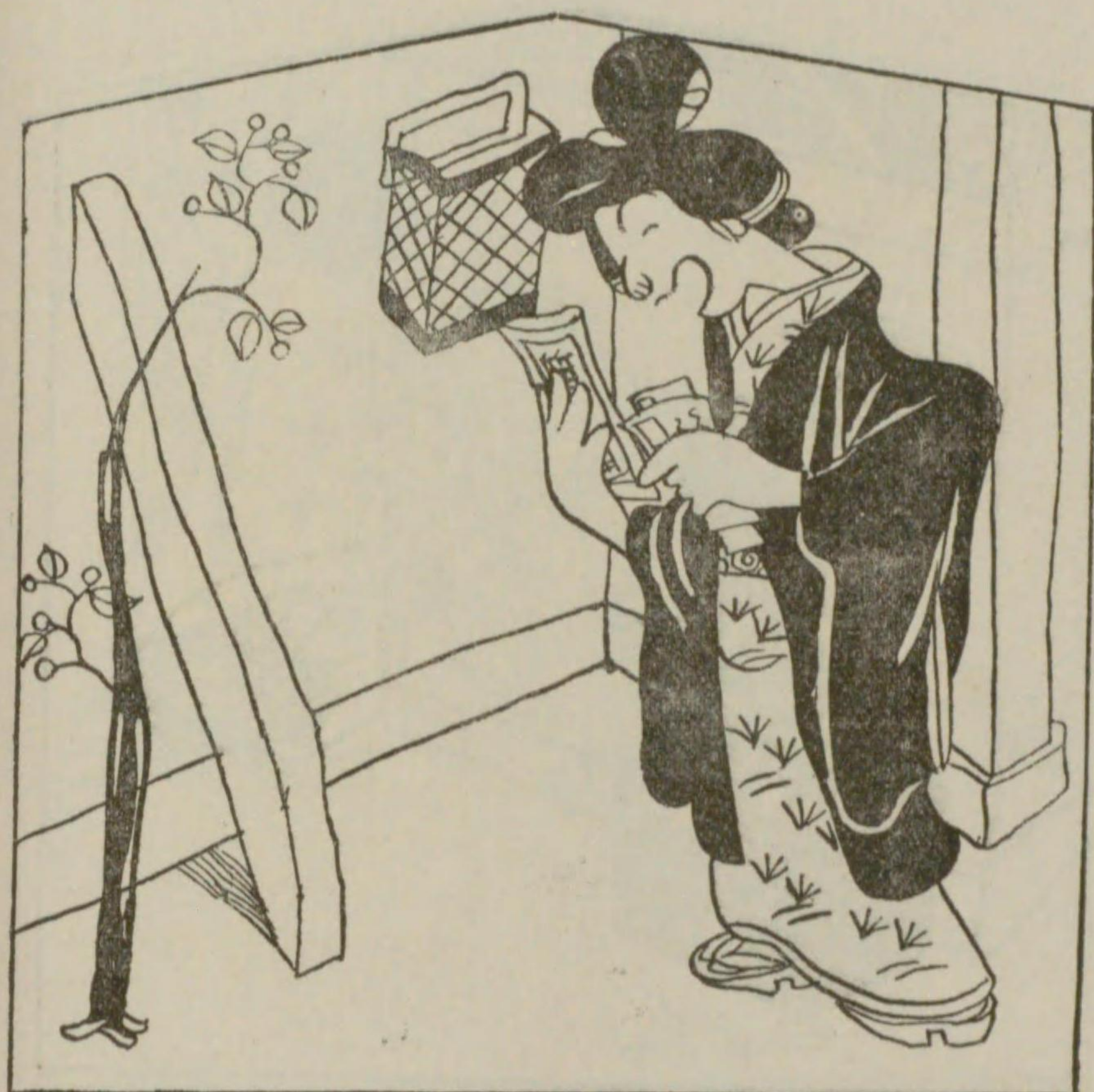
茶の間で幹人と妻子ヒソ／＼話  
 「あれを入れて仕舞つちやちよい  
 ちよい出に妾困りますわ。」「ちや  
 矢つ張りその紋付か。」人成そつ  
 と入つて来る。

四

五



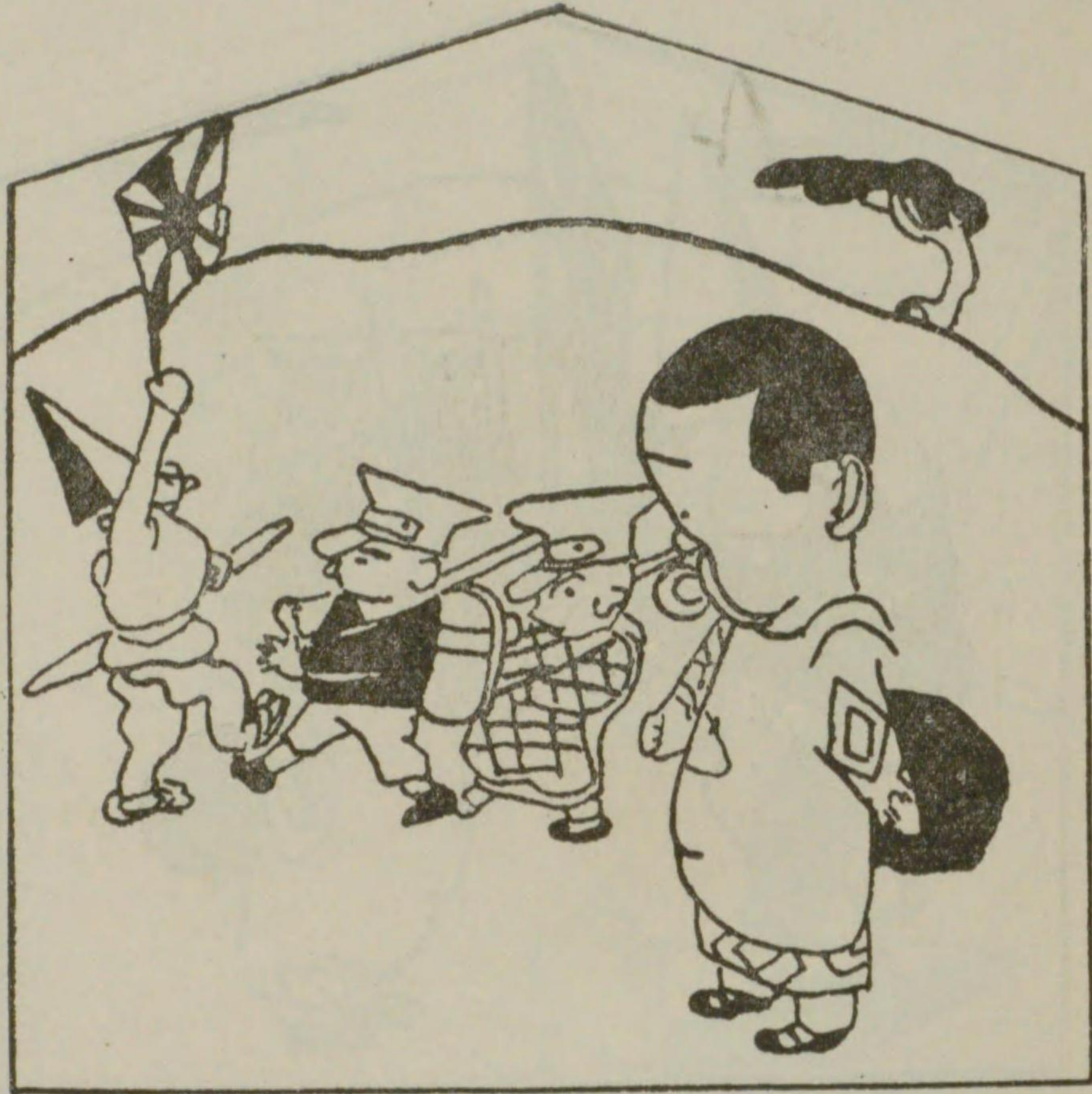
「あのどういふ間違ひか存じま  
せんがあの、か様なものが私共の  
箱に入つて居りましてあのひよつ  
として若しやこちらさまの——。」  
「アラマア——。」



お隣の奥さん郵便の聲に受箱の  
中から郵便を取り出し家へ入らうと  
する時、又蓋の音がして「ツービ  
ン——。」行つて見ると質の通帳  
然もそれはお隣の——！

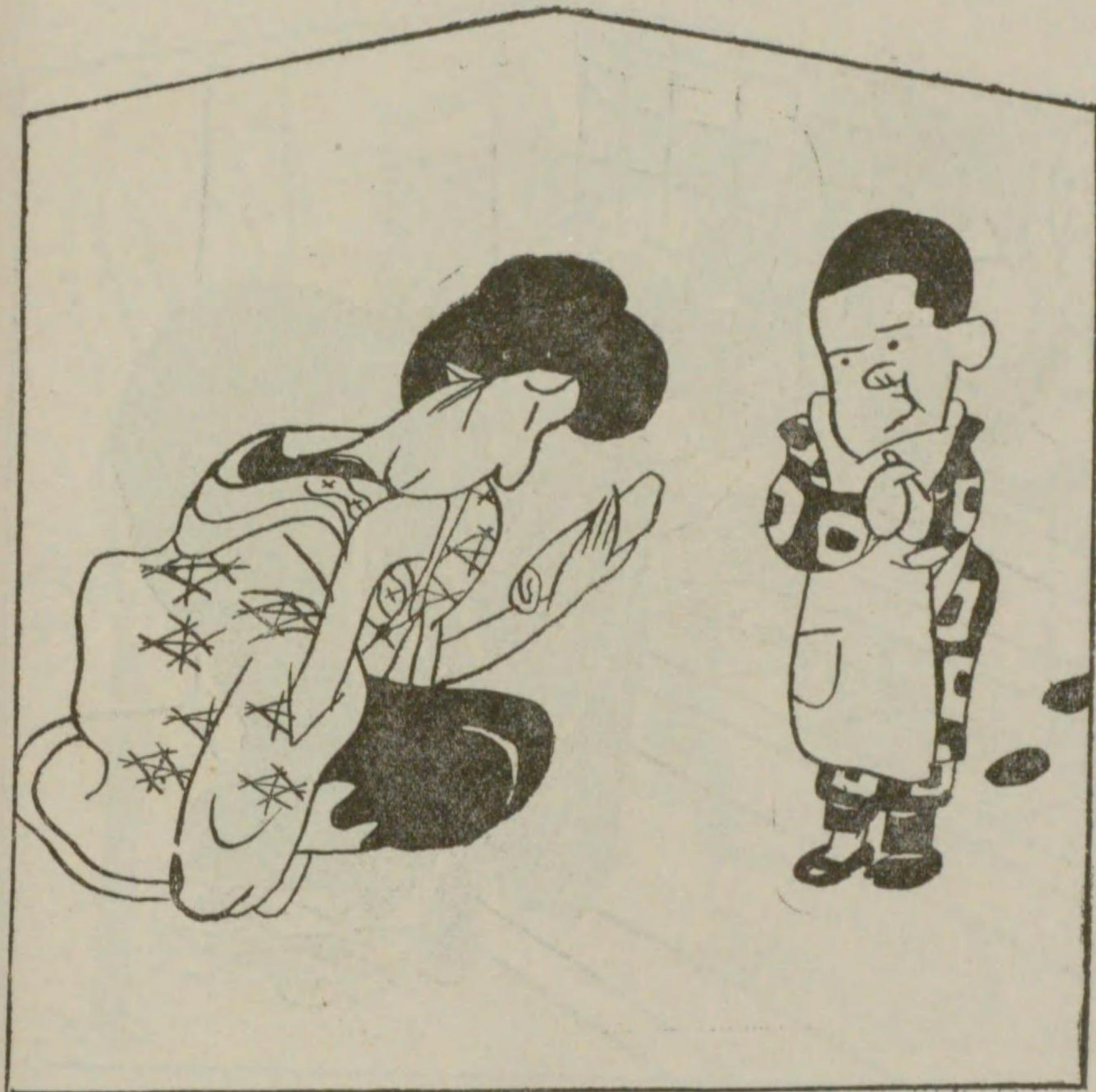
六

七



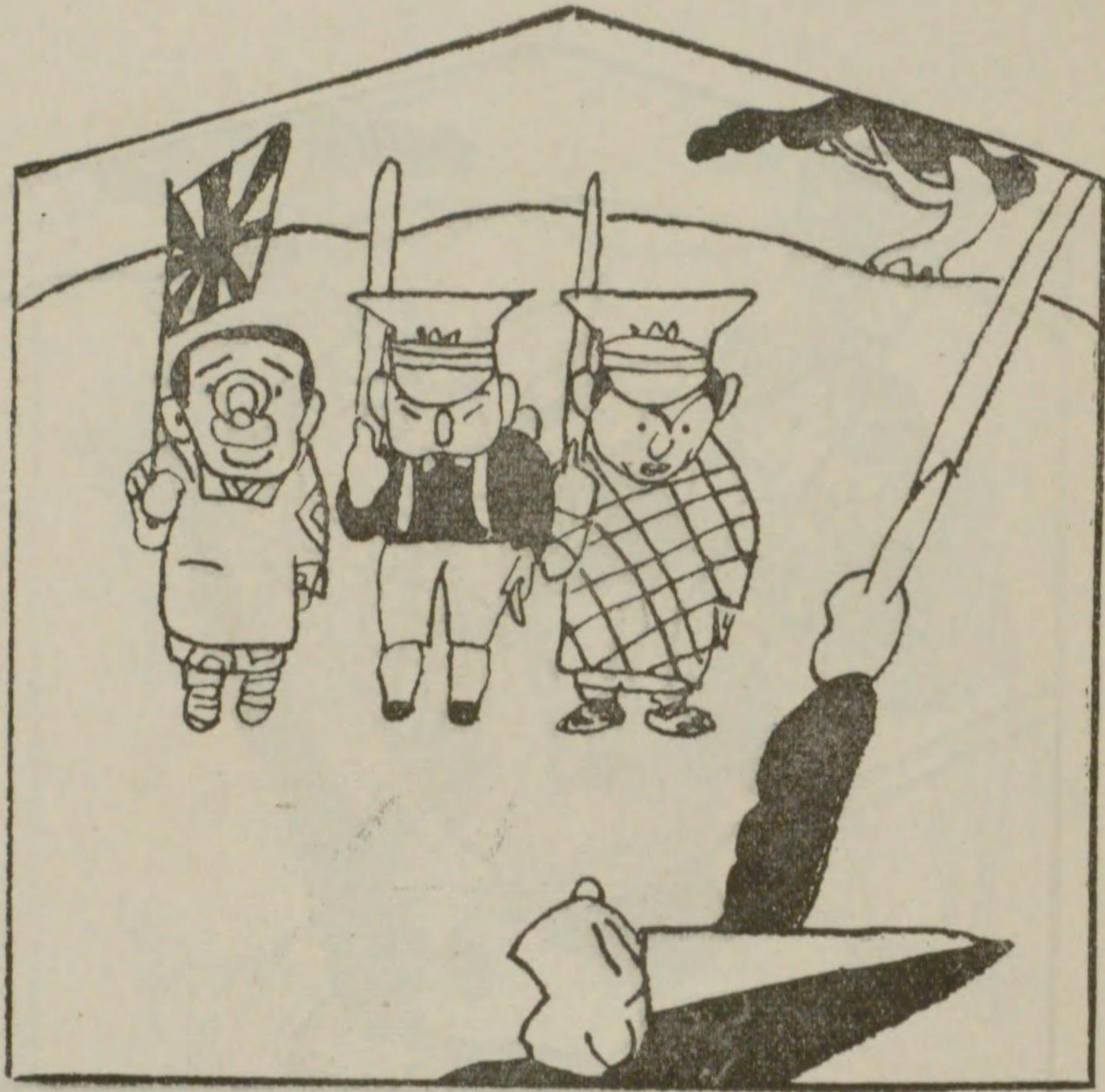
兵隊ごっこ

人成は母親よりお甘諸を貰ひ  
 温順く遊んでいらつしやいと表へ出  
 された。表へ出る。町内の悪太郎、  
 鍛冶屋の爲公が大將で兵隊ゴッコ  
 をしてる。



八

つま子「どうしてお隣の郵便箱へ  
 入つたらう入れる譯は無いんだが  
 ほんとに可笑しい。」人成「ボチャ  
 ン、ウービンヤチャン〜」『オ  
 ヤこの子かえ〜』。



爲公「人ちやんお甘諸本當に呉れるのかい。有難うよ。ぢやねえ君は旗持ちにしてやらう旗を持つて先頭に立つんだよ。」

三



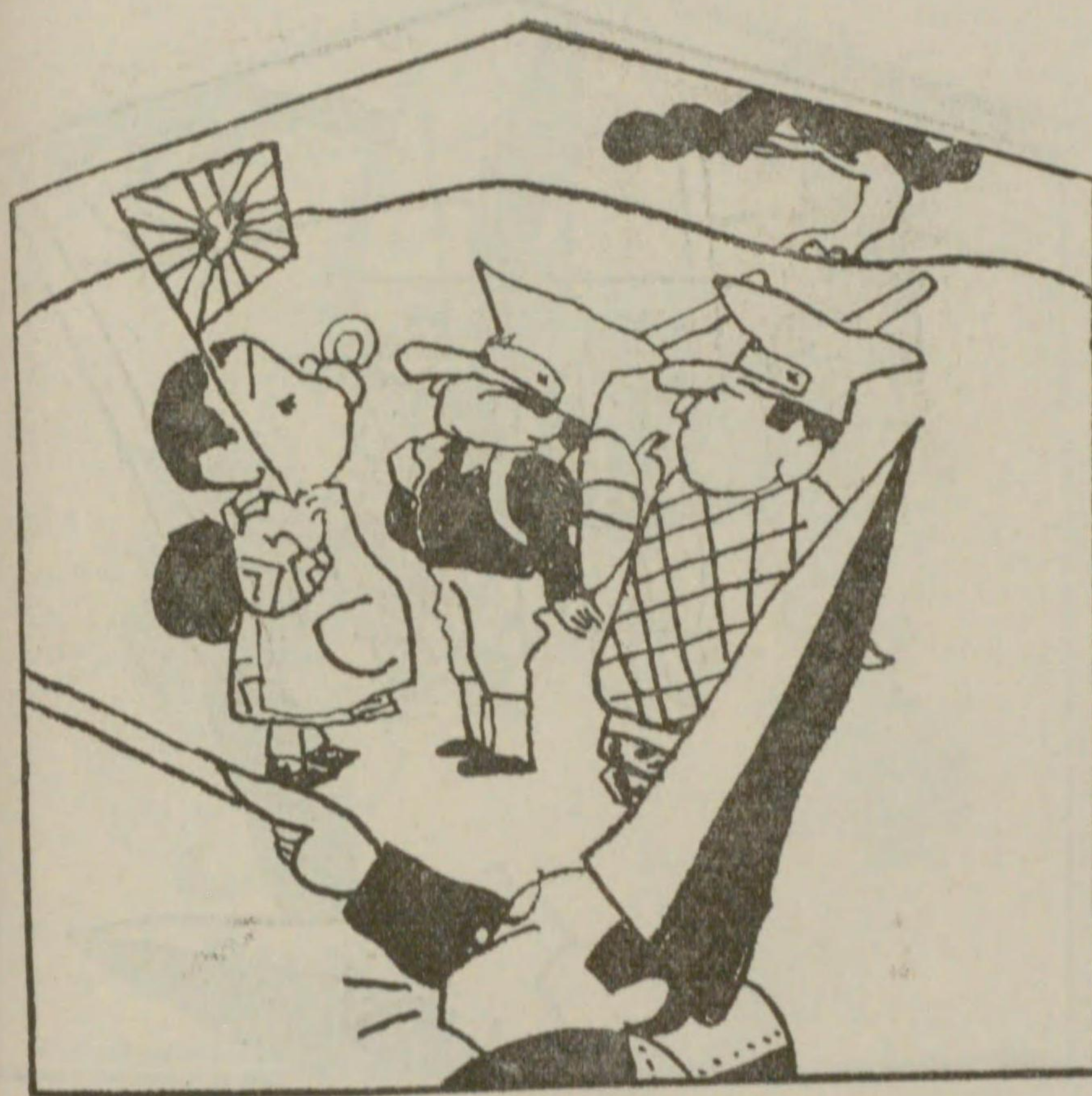
見て居ると面白さうだ。然し慾張りの爲公却々たゞでは仲間に入れて呉れさうもない。大事の大事のお甘諸を提供する。

二



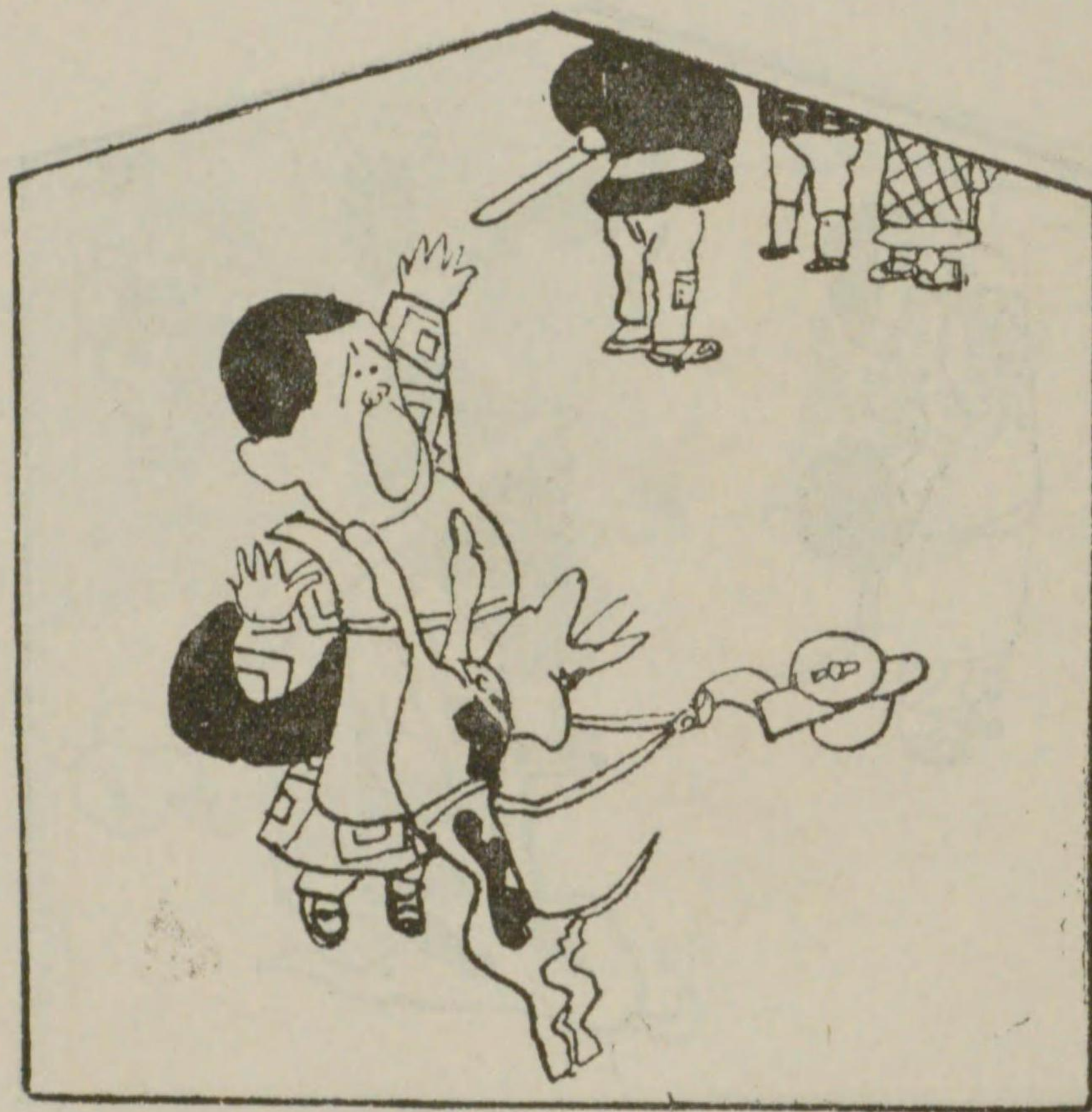
爲公「今ねエ、右向イ右イと號令  
 かけるよ、そしたら、お箸を持つ  
 手の方を向くんだよ、間違へると  
 役を下るよ。いゝかい右向ケー右  
 イッ！」

五

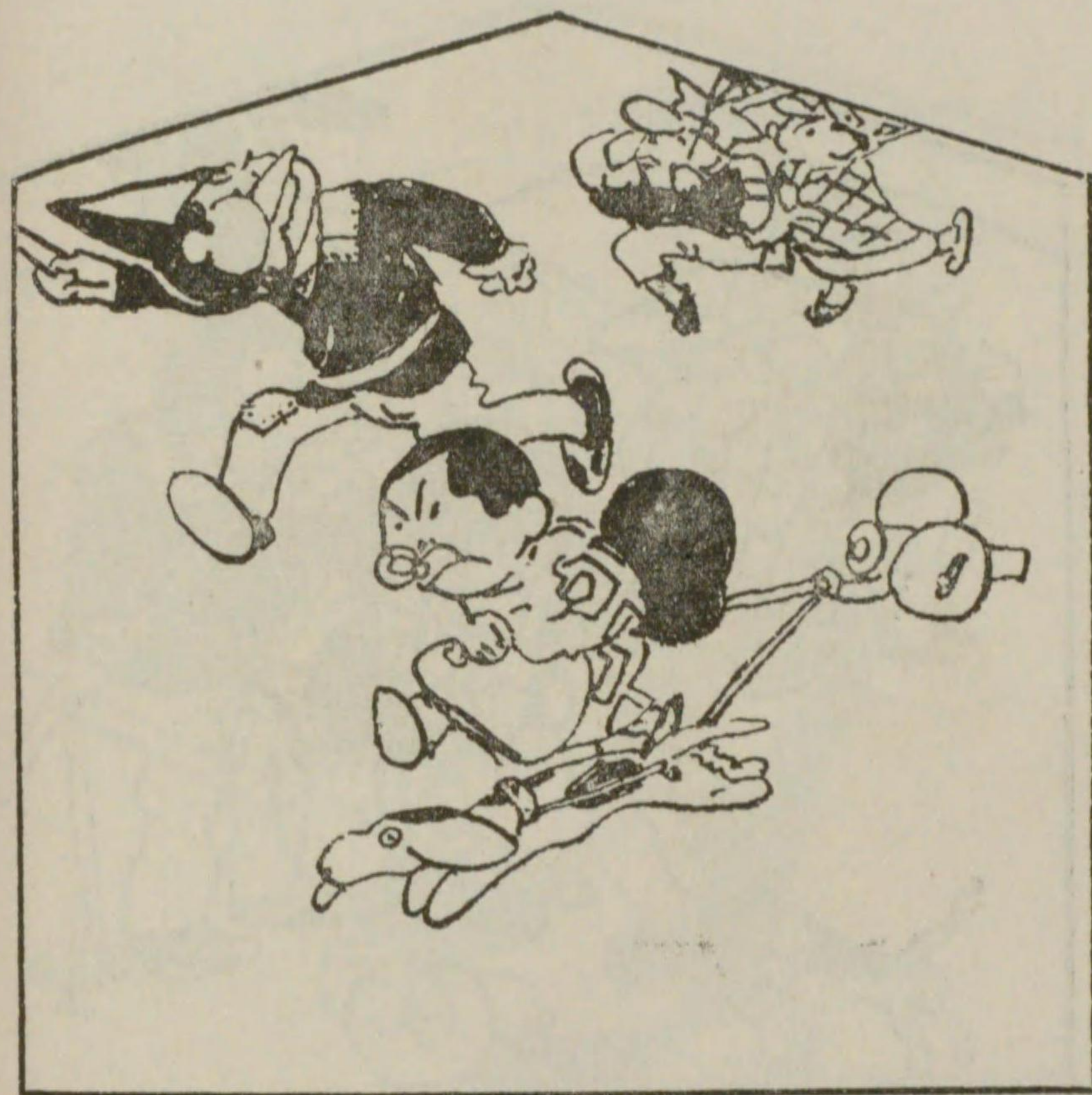


爲公は人成に旗を持たせ先頭に  
 立たせ皆一列に並べる。人成嬉し  
 く大得意。隊長爲公は先づ各個教  
 練から練習を始める。

四



人成犬と並べられて大砲を一生  
 懸命に曳く。犬も同僚に親愛の情  
 を表す積りか、人成に前足をかけ  
 戯れる。人成「ワア——」。



爲公「人ちゃん駄目だ。君はね  
 え、兵隊は難かしくて出来ないか  
 ら砲兵の馬にしよう。こつちへ來  
 い」人成「僕馬嫌だア。」

六

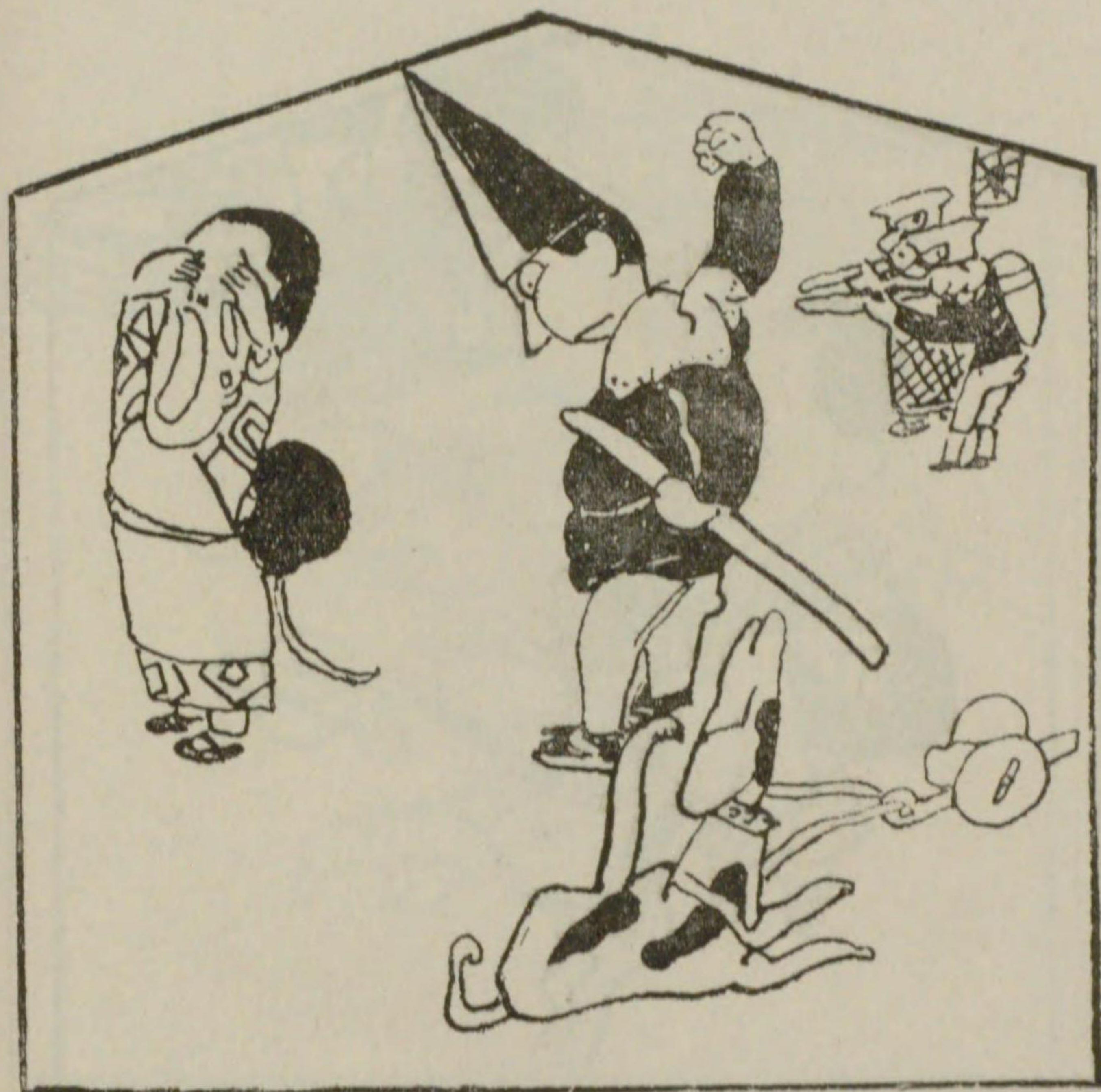
七



筒井筒

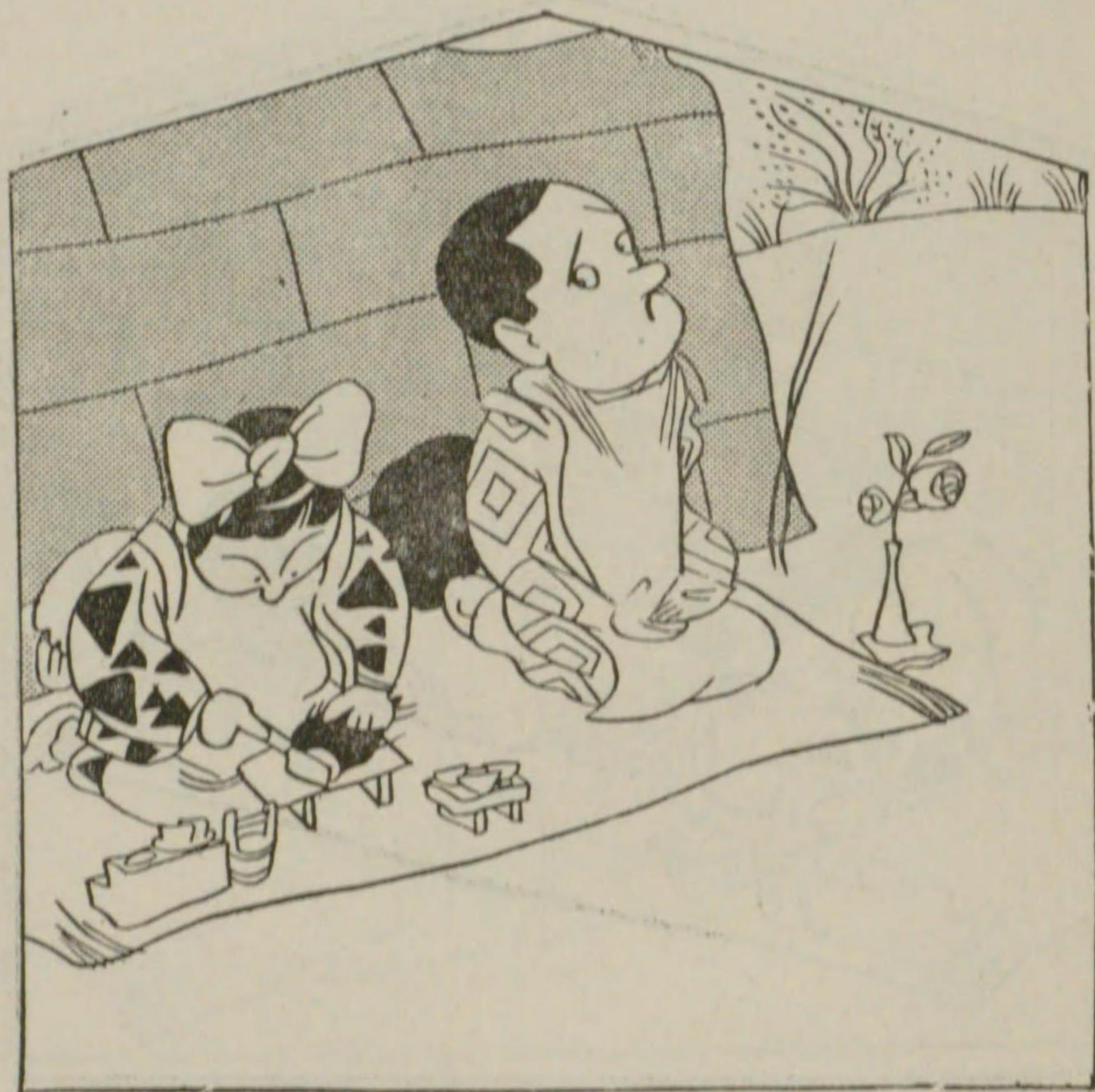
一

人成は仲間外れにされて一人で泣いて居る、自分の泣き聲に誘はれていつまでもく泣いて居る。向ふから隣の巻ちゃん来る。



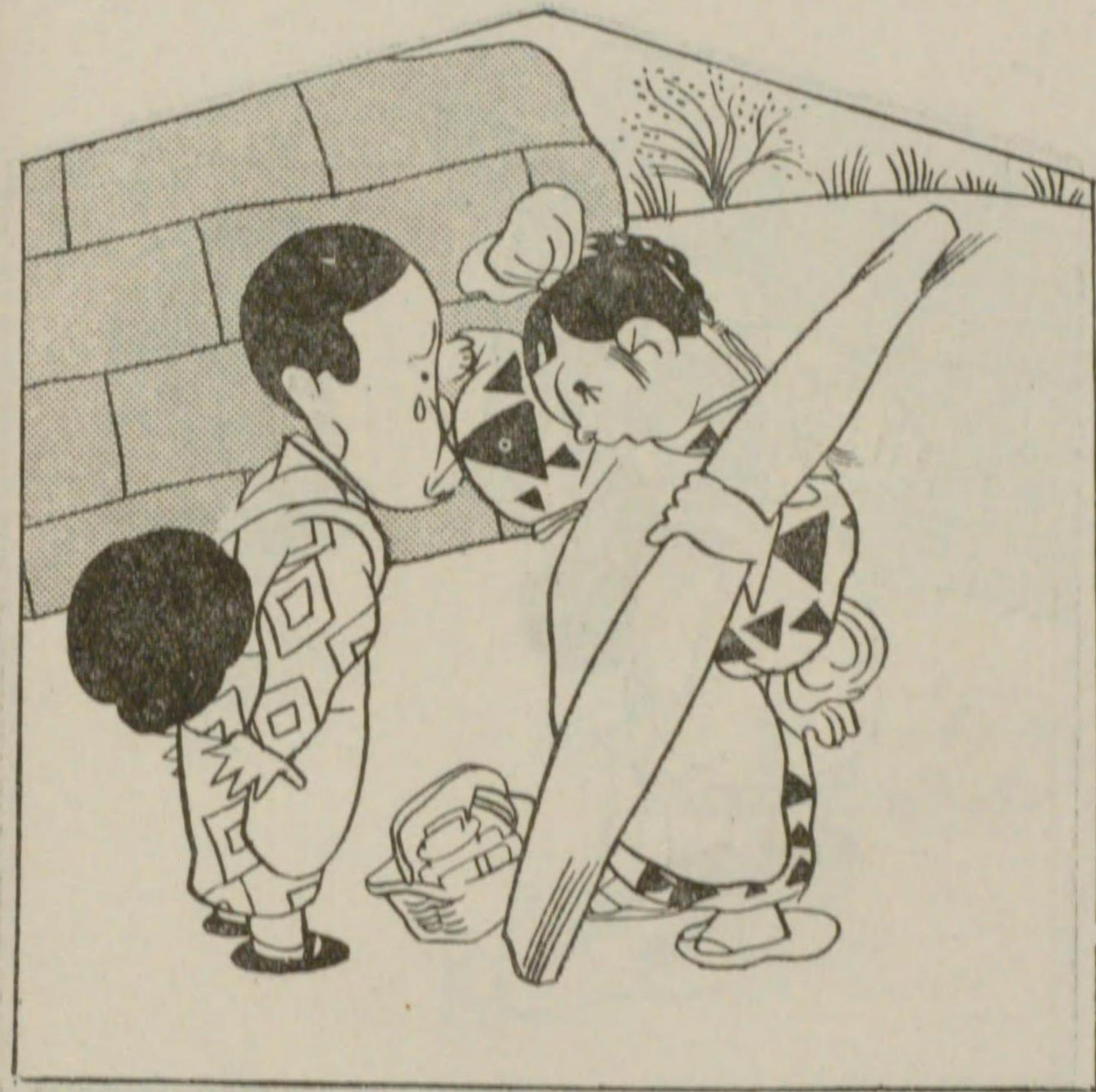
八

爲公「夫が恐くちや。大砲の馬にも遣へやしない。人公あつちへ行けい。みんな人公を射つて仕舞へ——オイ。」兵卒達「ズドン、バンバン。」



卷ちゃん「人ちゃんあたし遊んで  
 あけまちようねえ、ござの上へち  
 やんと坐つてらつしやい。あなた  
 旦那よ。あたし奥さん。」

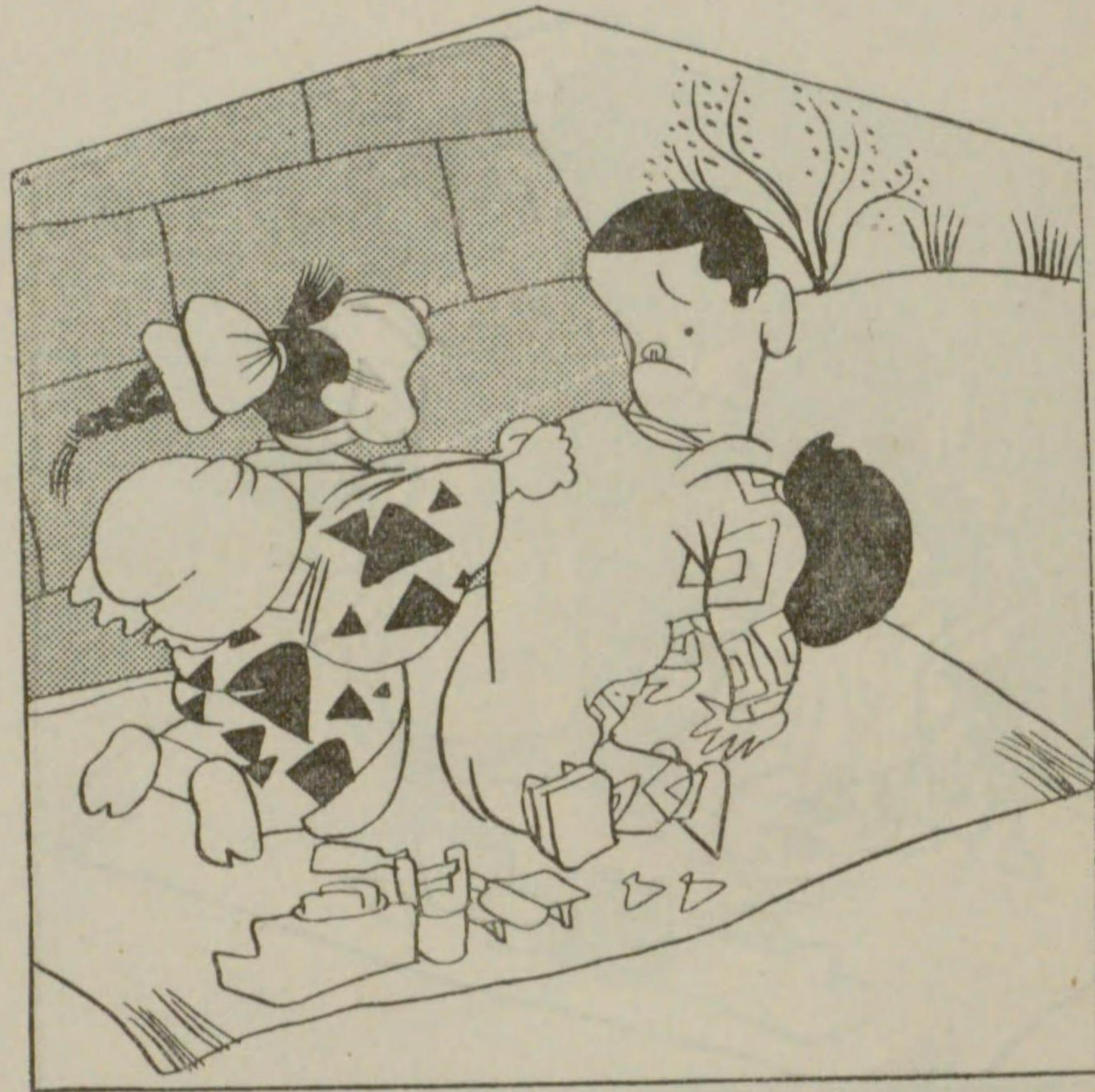
三



卷ちゃん「人ちゃん何故泣いてる  
 の？ 爲公が苛めたの？ さう？  
 憎らしい爲公ね。」 卷ちゃん袖で  
 涙を拭いて哭れる。

二





卷ちゃん「旦那と奥さんはお酒を  
 飲んで喧嘩するものよ。あたしや  
 つてよ。チヨイト貴郎は毎晩何故  
 かう御歸りが遅いのです。」

五



卷ちゃん「チヨイトあなた晩のご  
 飯よ。旦那は威張つて髭を引つば  
 つてお酒飲むのよ。それでなくち  
 やア可笑いわ。」

四



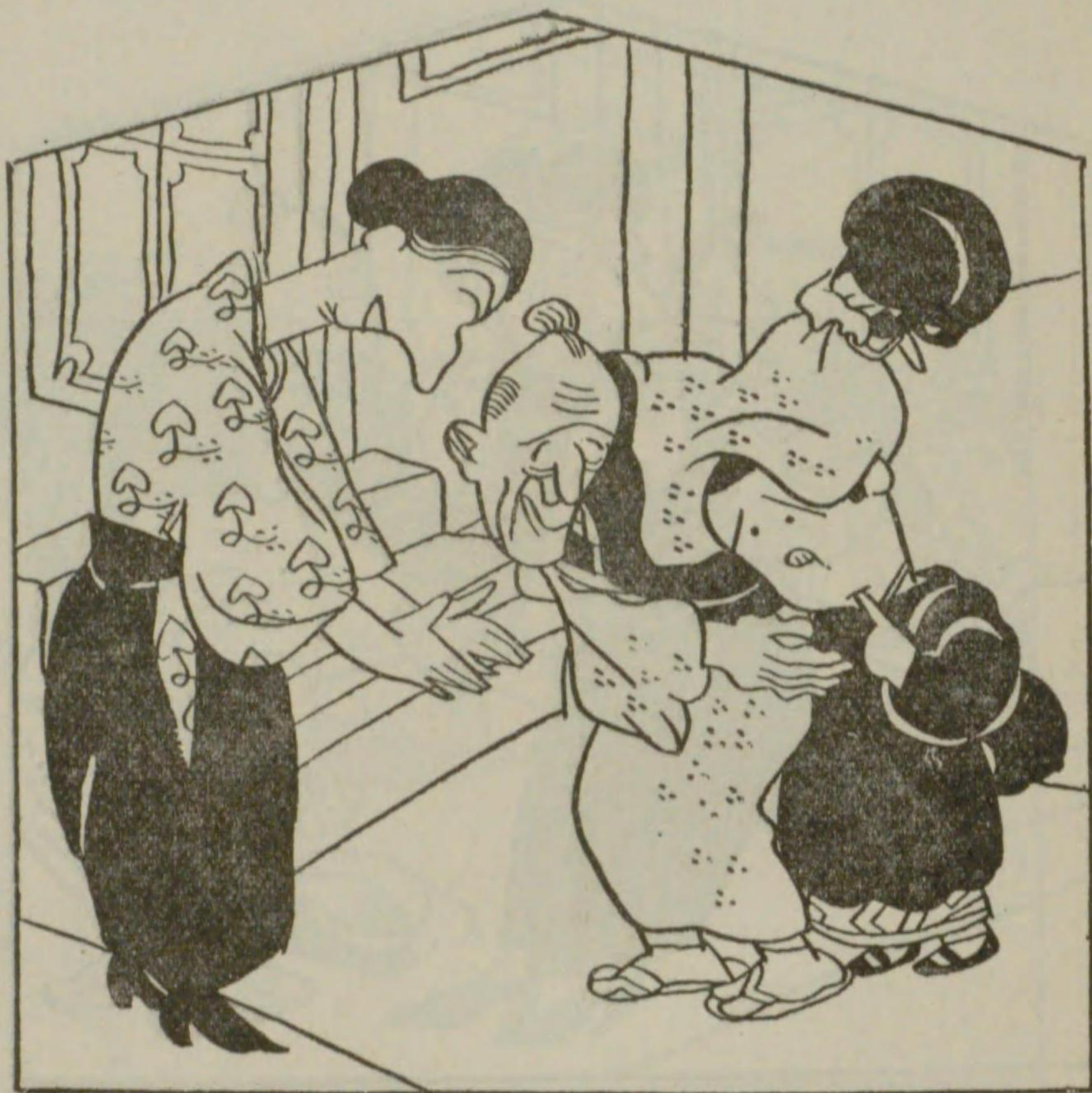
七

卷ちゃん「アラ貴郎は弱い女に亂暴ちまちゆね妻は實家へ歸りまちゆ。」人成「その時に僕の處のおとつちちゃんかうやつてあやまるよ。」



六

卷ちゃん「さうすると旦那は怒つて奥さんを苛めるのよ。」人成「コラッ！一巻ちゃん」そんな怒りやうぢや駄目、奥さんの髪毛引つ張るのよ。」



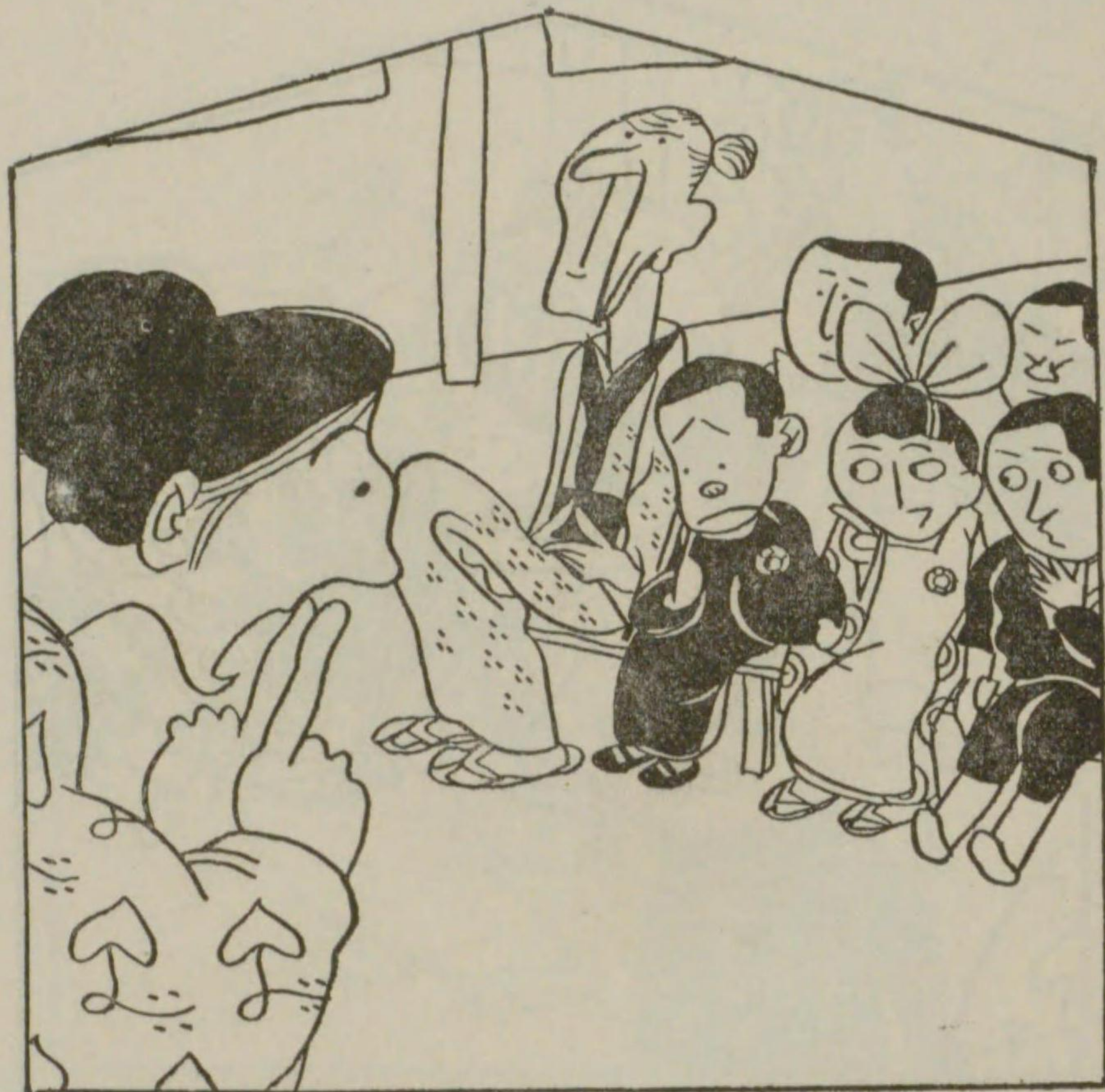
幼稚園入り

家うちに置くと近所きんじよの悪い子供こどもと許はかり遊んで碌ろくな事ことを覺おぼえぬから、と人成ひとなりは祖母そぼおひさに連れられ幼稚園えんい入り。

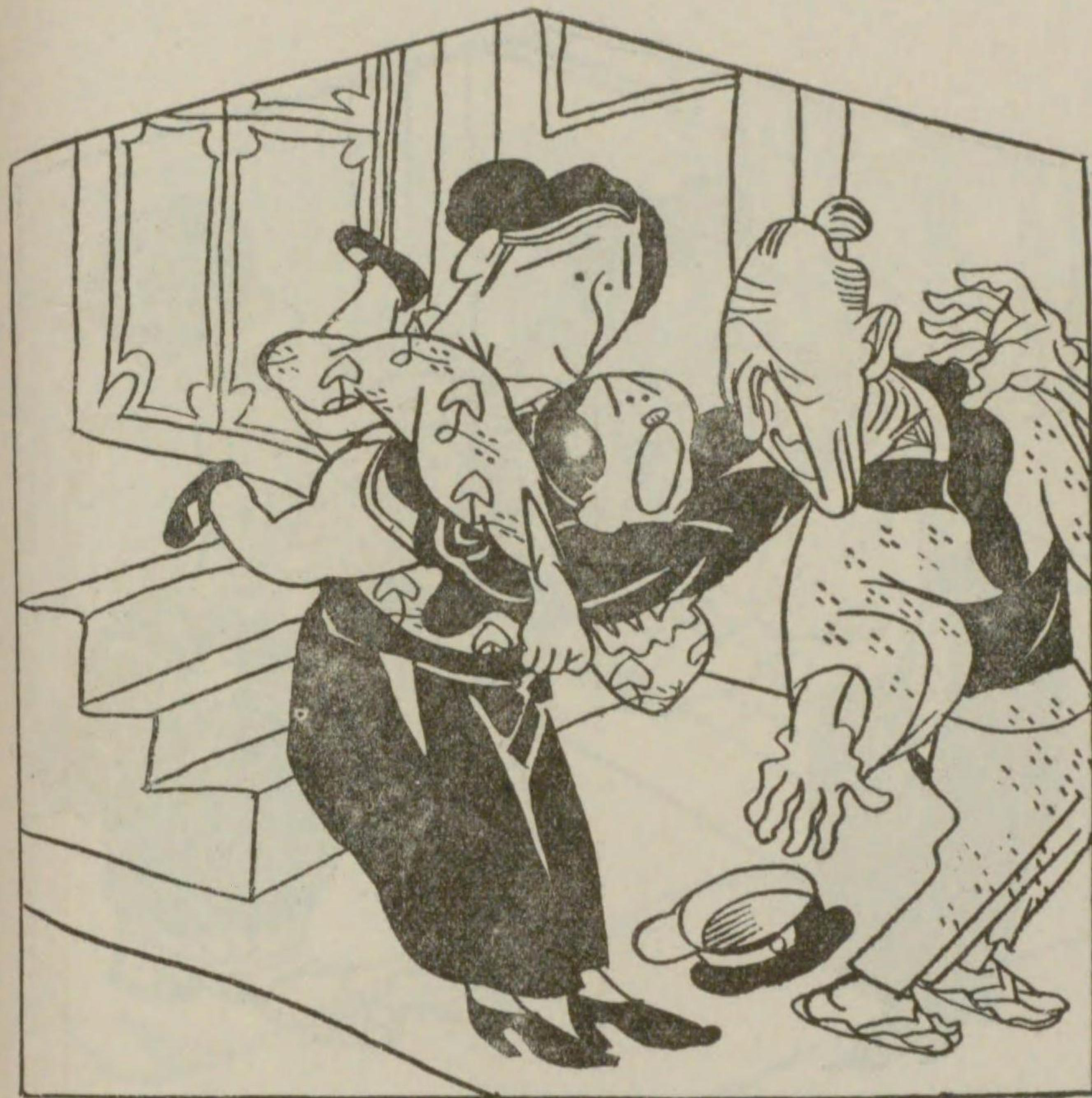


八

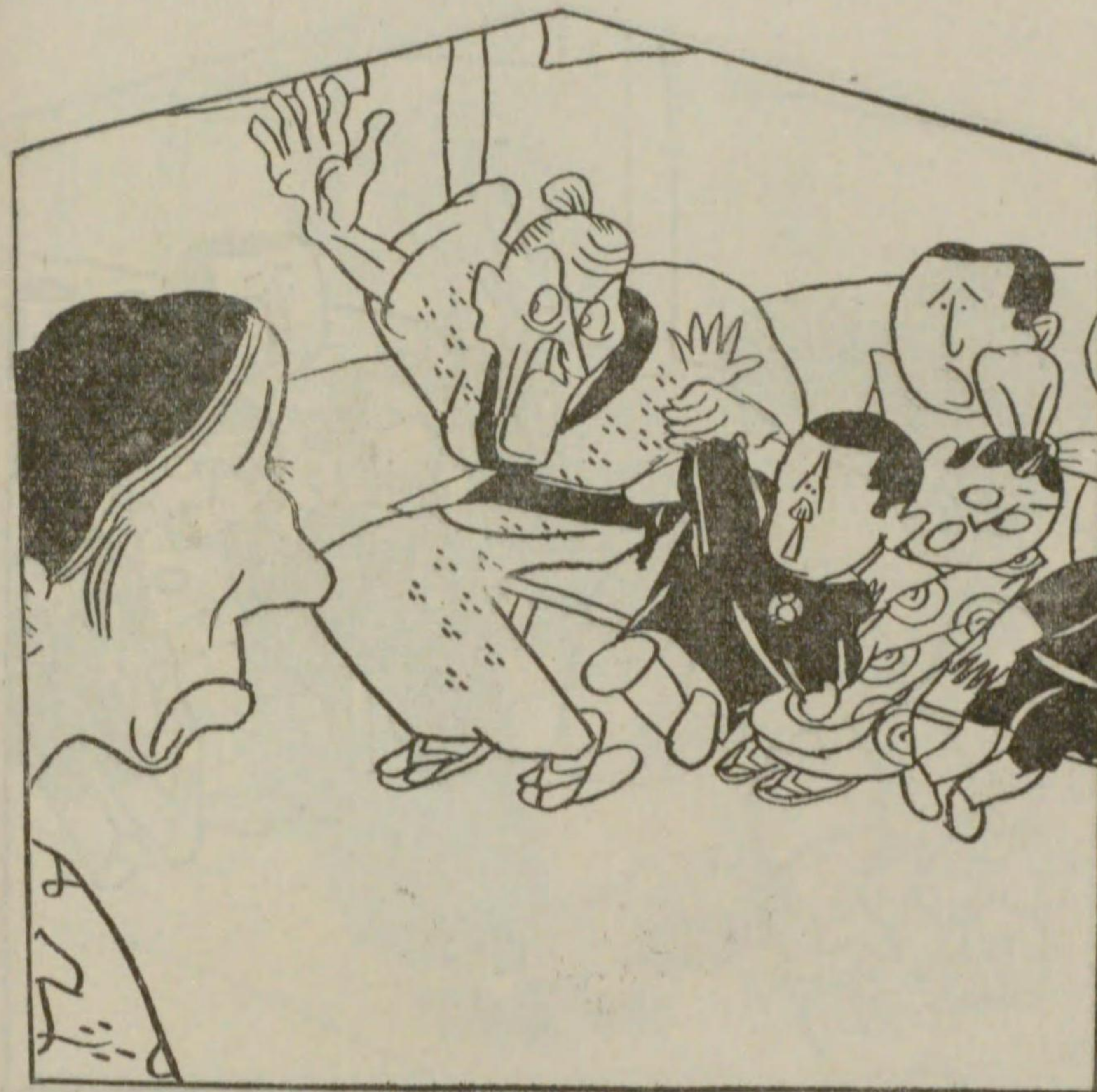
人成ひとなり「僕ぼくの家うちのお父とうちゃん母かあちゃんに出て行いかれると、困こまつてかうやつてるよ。」卷まちゃん「うちのお母おははさん出いても一廻ひとまりして直すぐ歸かへつて來くるのよ。」



仕方なく附添のおひさを附けた  
 儘教室へ人成を並べる。先生「サ  
 ア皆さん、これから数を覚えるの  
 ですよ。」



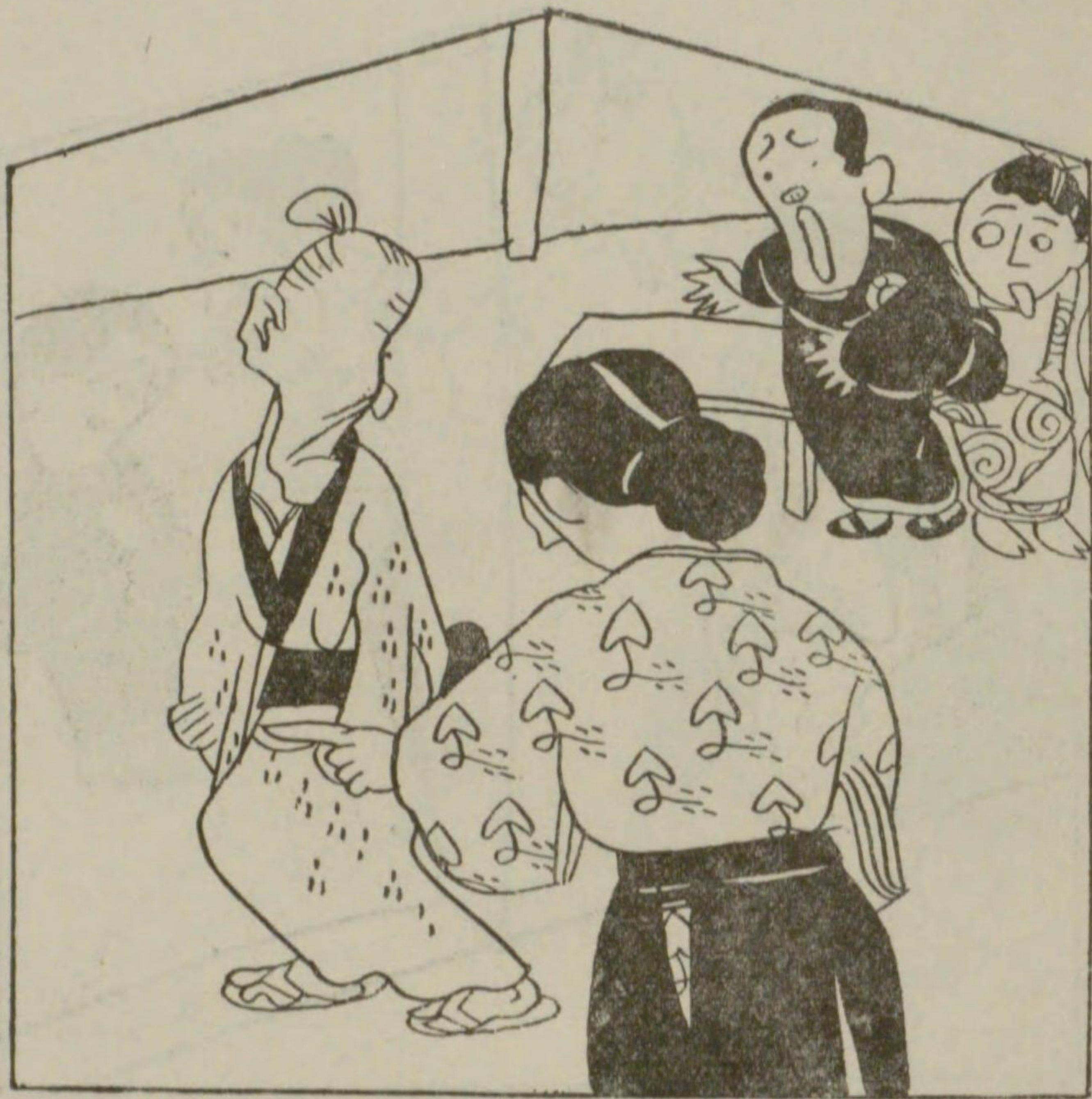
家の中の蛤貝外へ出りや蜆貝で  
 「サア人成さんこれから先生と仲  
 よく致しませうねえ。」先生抱き  
 取らんとすれば「ヤダーイ〜。」



四

先生「よームいますか、先生のこ  
のお指が一本こちらのお指が一本  
合せて幾つで△います。」

おひさ「これ人成二つぢやく〜。」



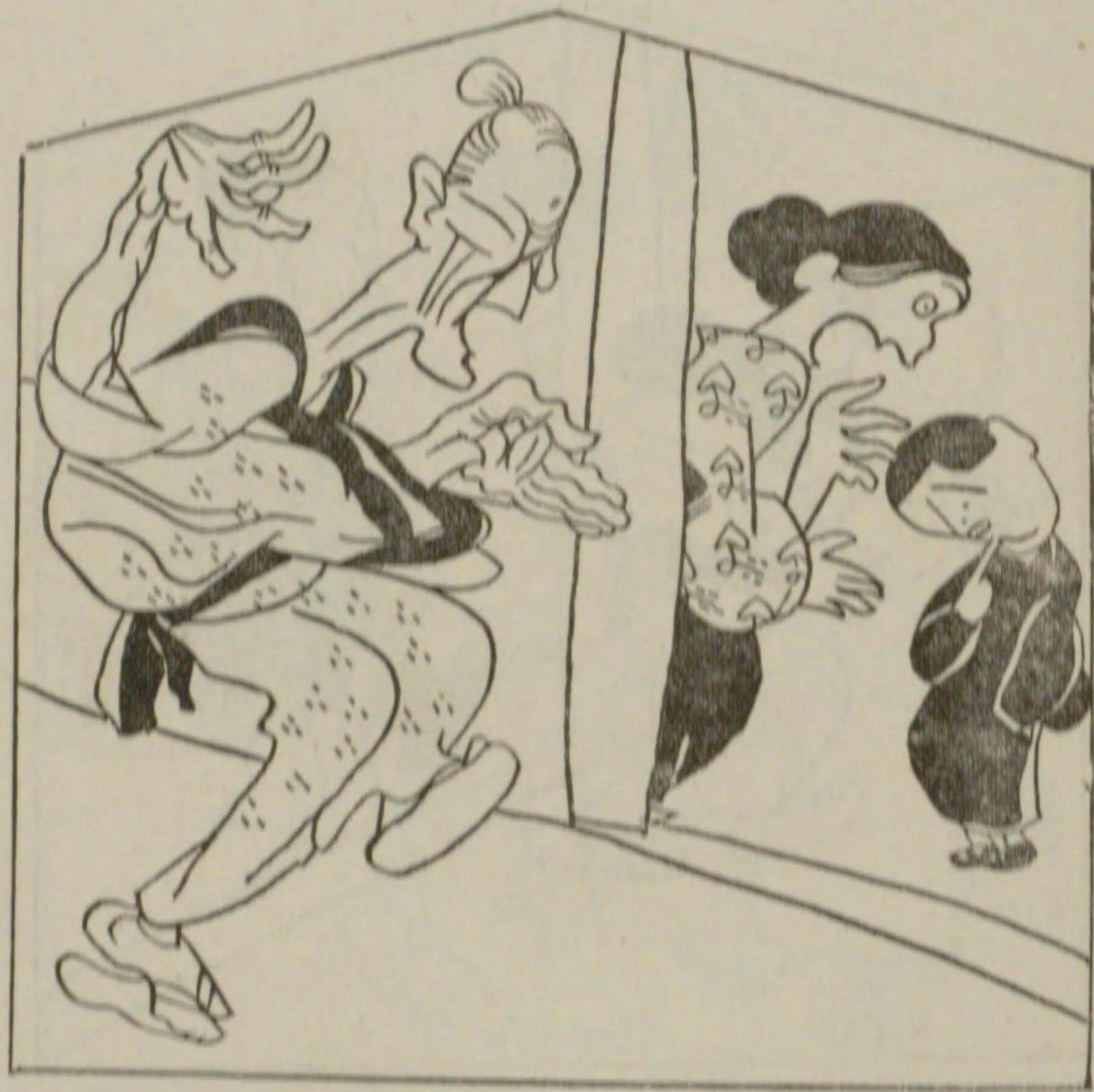
五

先生「御隠居様誠に申兼ねます

あなたが側にお出でなさいますと

却つてお孫さんの教育になりませ

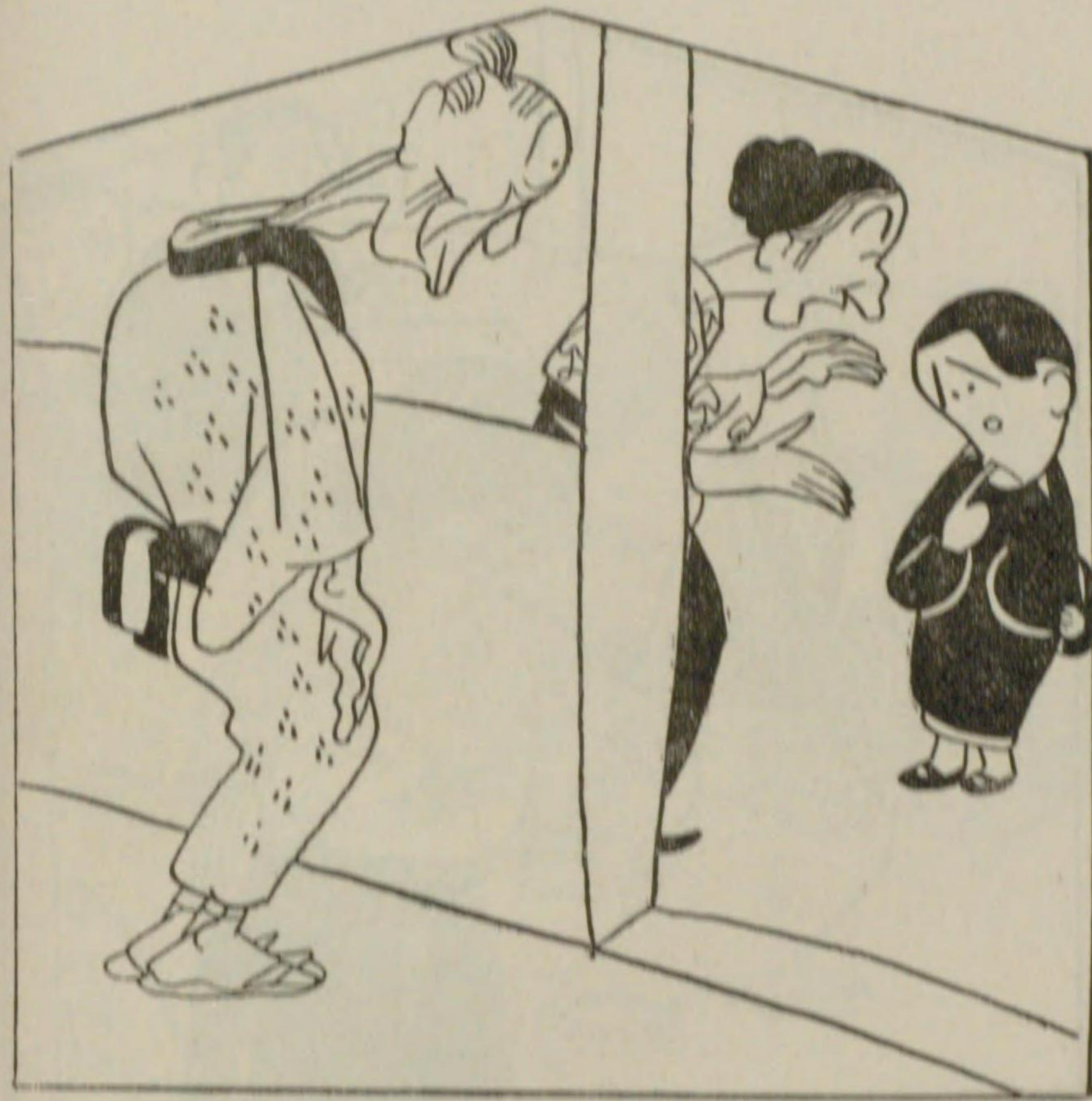
ん廊下でお待ちなす。」



先生「——豆を遣るからといふ時は  
 かなさるのですよ。ホレ豆を  
 遣るから皆喰へよ——」。

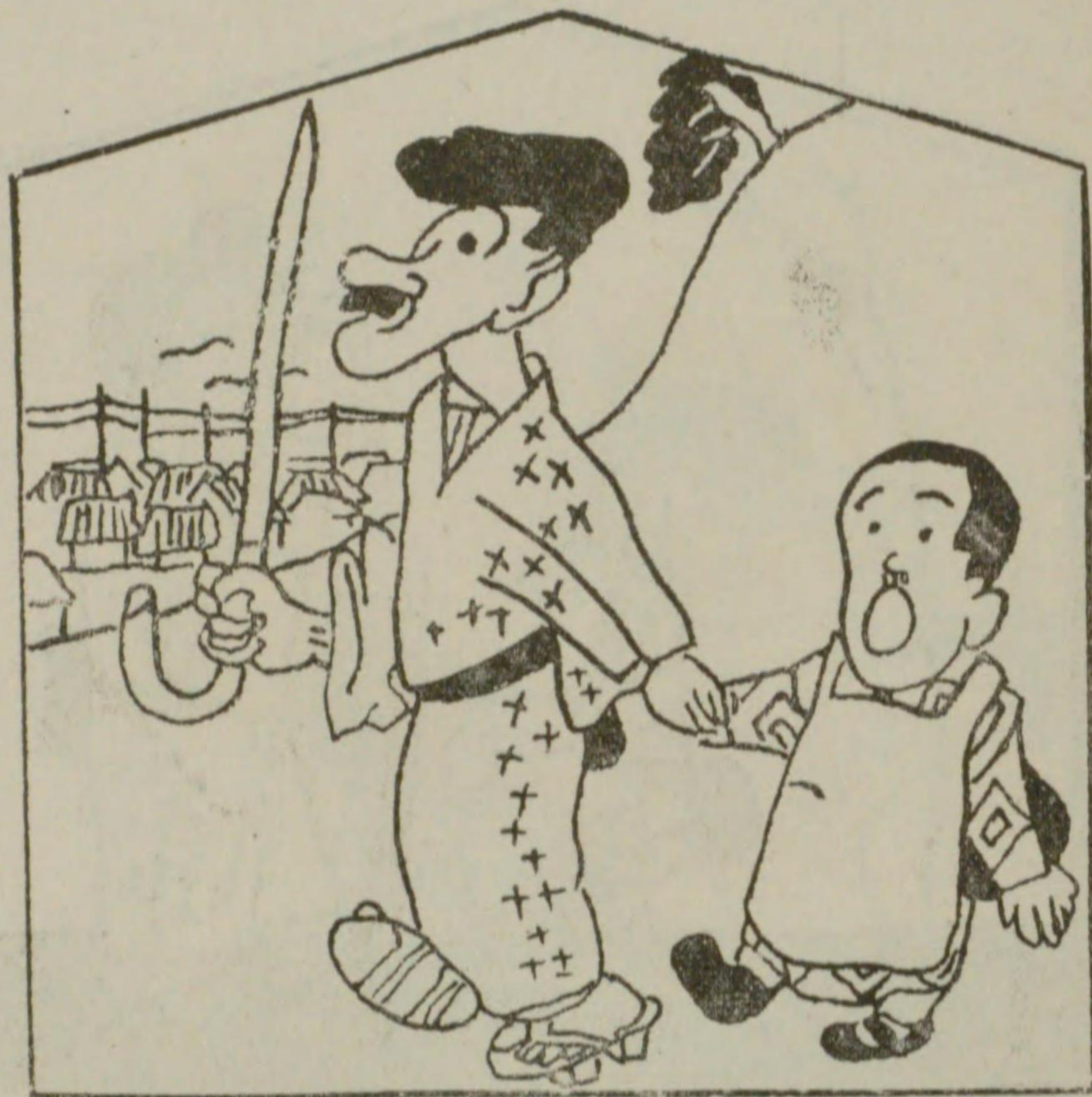
おひさ「人成かうぢやく、豆を遣  
 るから皆喰へよ。」。

七



おひさ廊下より窓を距て孫に氣  
 を注げてる。中では先生「サア人  
 成さん、今度は先生と鳩ボツボを  
 一しよにやりませう——」。

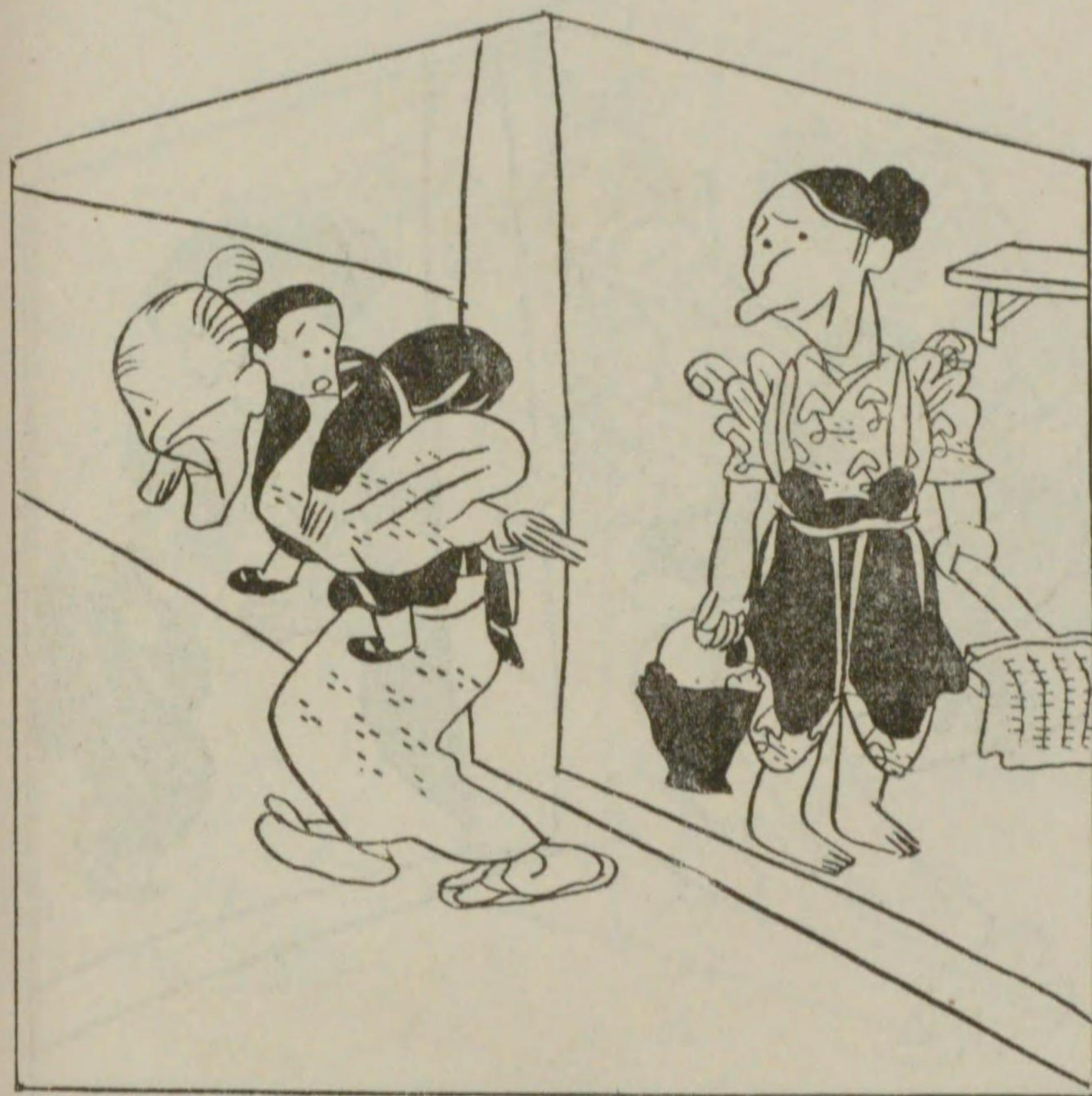
六



根問ひ葉問ひ

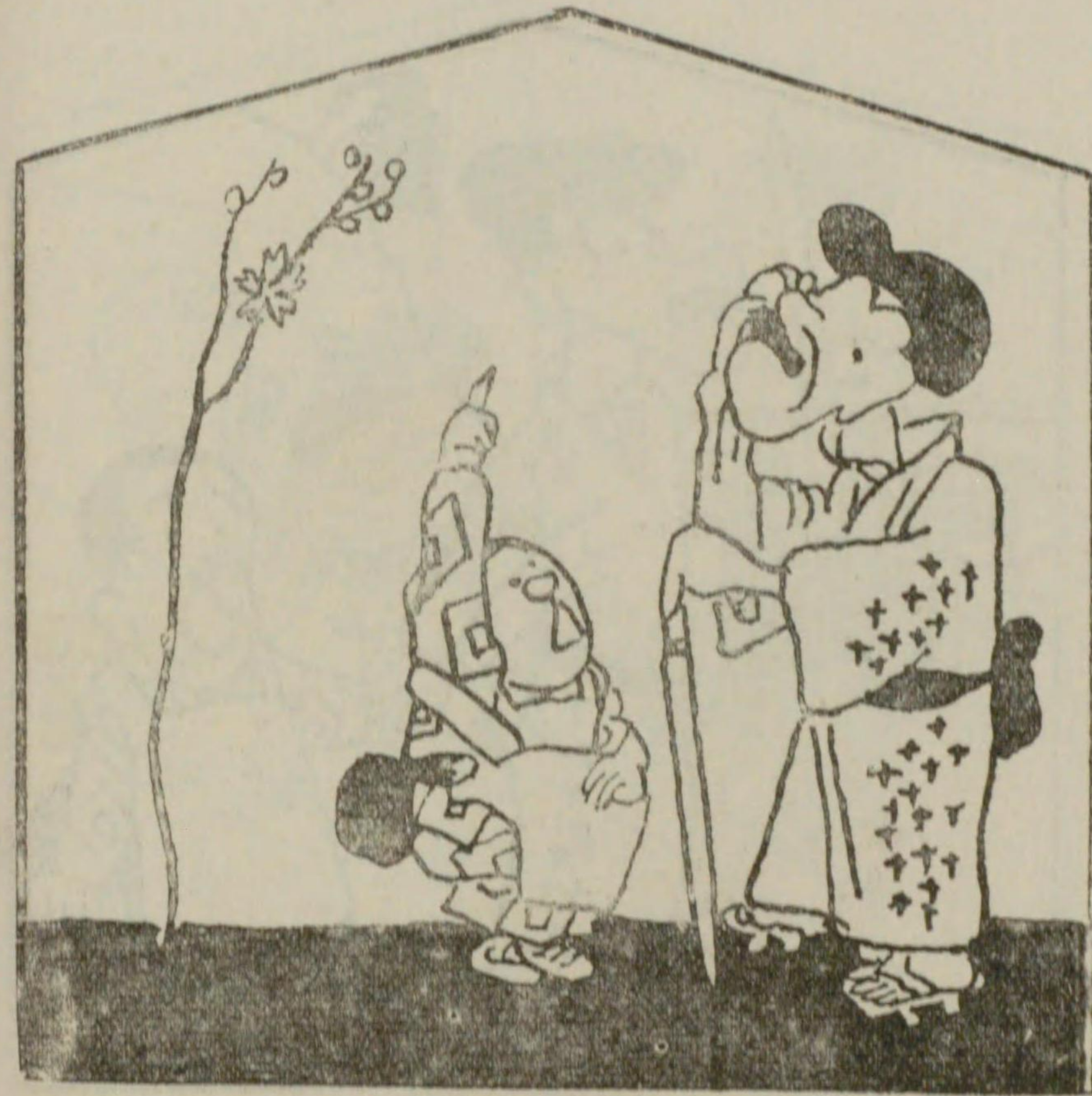
—

春もや、景色と、なふ日曜の朝  
 おやぢ幹人、人成を連れて裏の原  
 へ散歩に行く。幹人、人成唱歌を唄  
 つて見ろ。」



八

先生「人成さん黙つて立つたまゝ  
 大變な事をなさいましたねえ。先  
 生すつかり掃除屋に成りました。」  
 おひさ「孫は冷性でござりますか  
 ら——。」



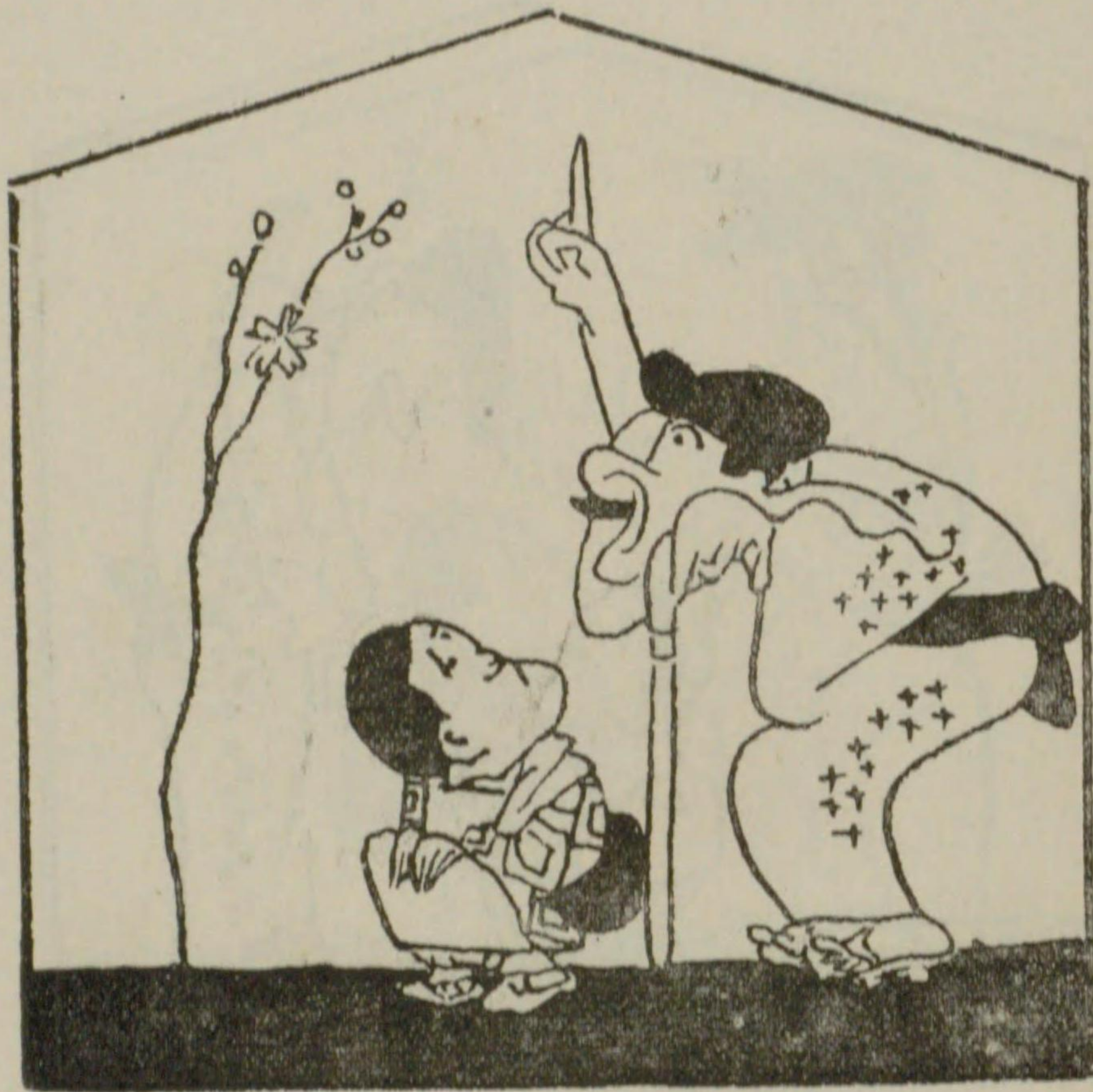
二

原の一隅に一本の若木の櫻があ

る。枝の一輪は、はにかみ乍らに

咲いて居る。その前にしやがんだ

人成根問ひ葉問ひを始める。



三

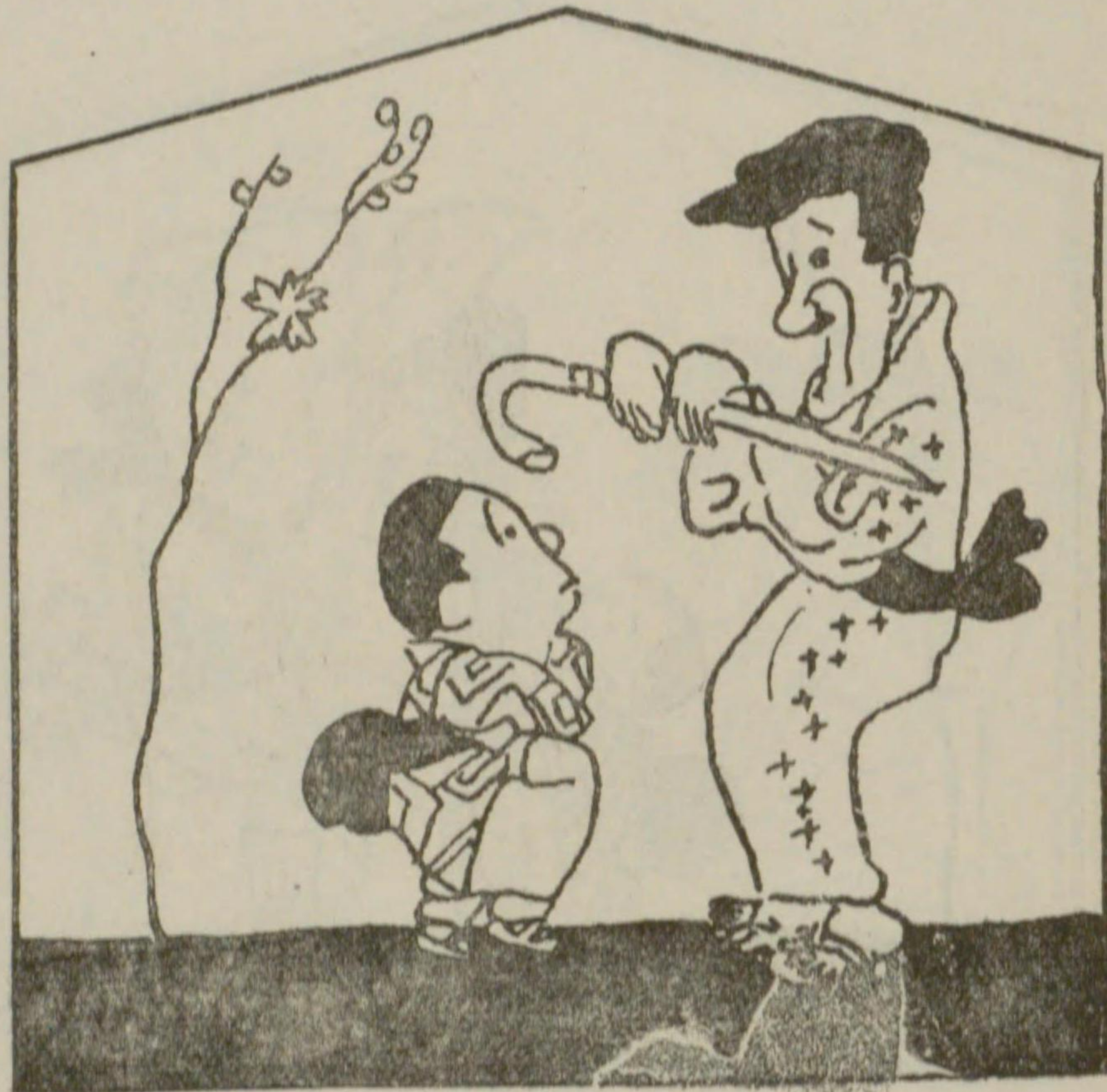
人成「おとうちやん花ねえどうし

て咲くの？」おやぢ「そりや空の

お太陽さまが可愛がつて日をあて

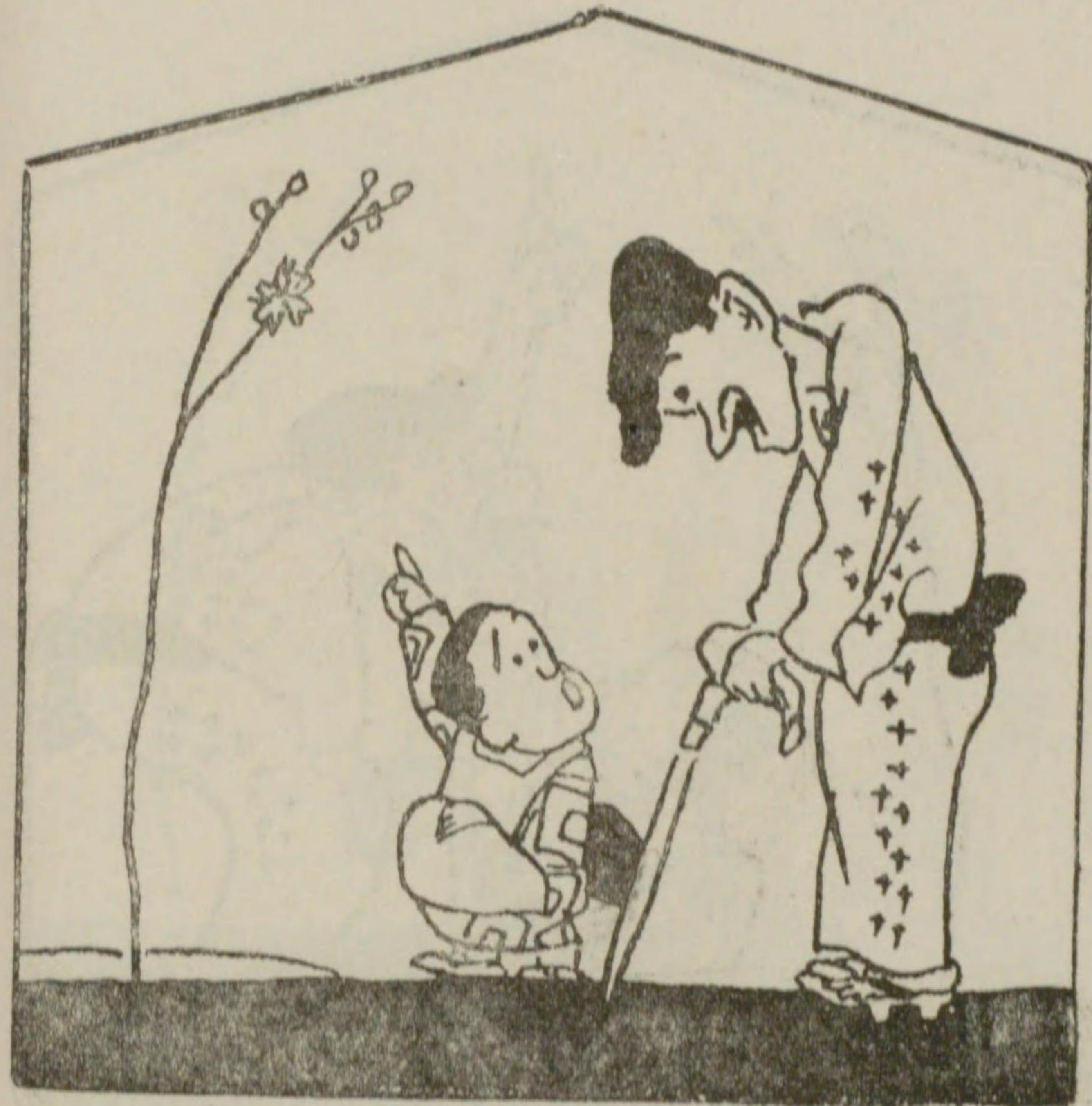
て暖めるからです。」





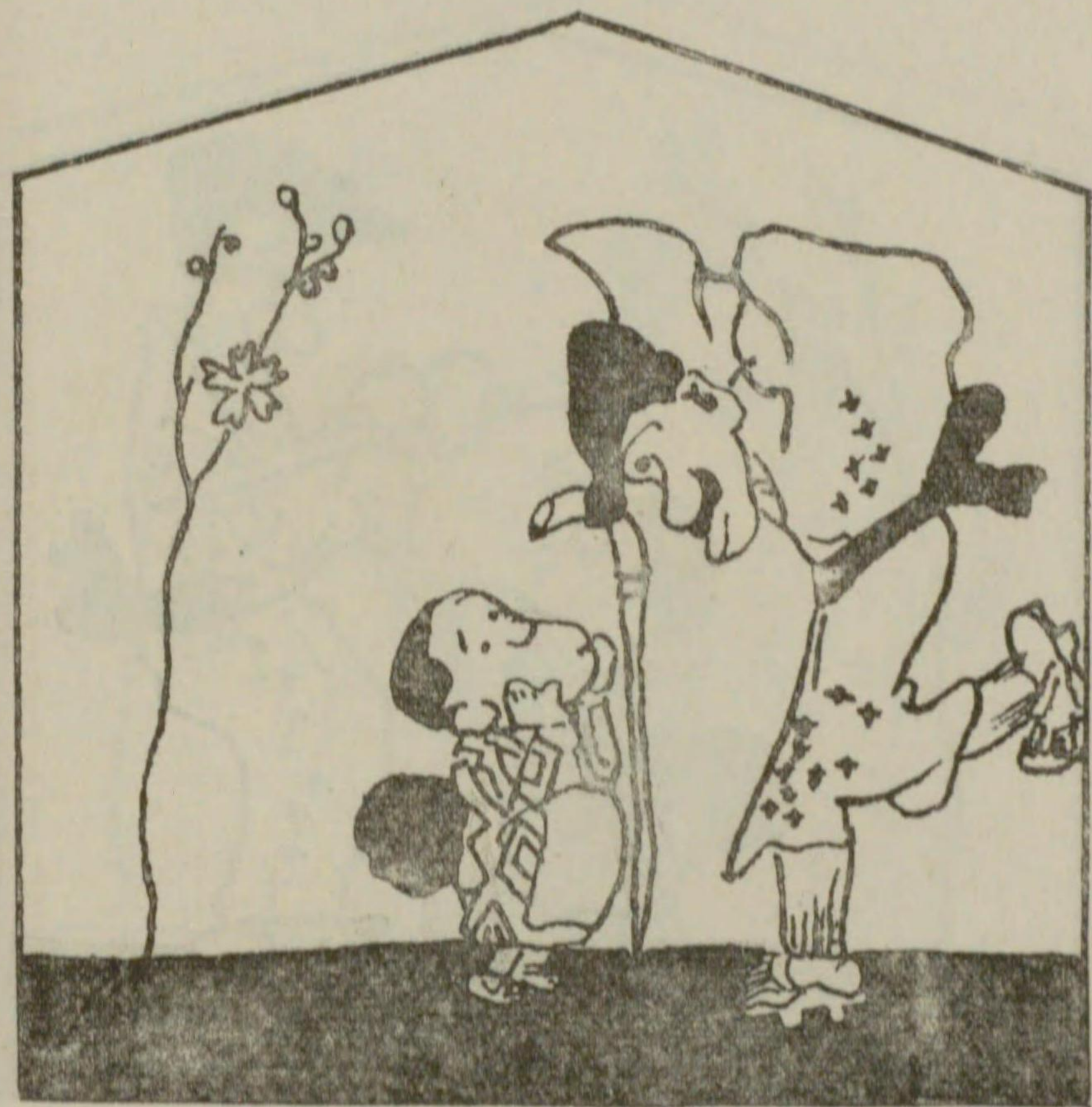
おやぢ「まア、かうだ、お太陽さまが目をあてるとね、花が働いてねえ、ポンプで一生懸命水を吸上げるからです。判つたらう。」

五



人成「お太陽さま目をあてると、どうして花咲くの？」おやぢ「それはそのエートどうも子供には一寸説明しにくいなア——。」

四



六

人成「花何故咲くの。」

おやぢ「うるさいなア。綺麗に咲

き度いから咲くのです。」

人成「綺麗に咲いてどうする

の？」

おやぢ「鳥に来て貰ふのです。」



七

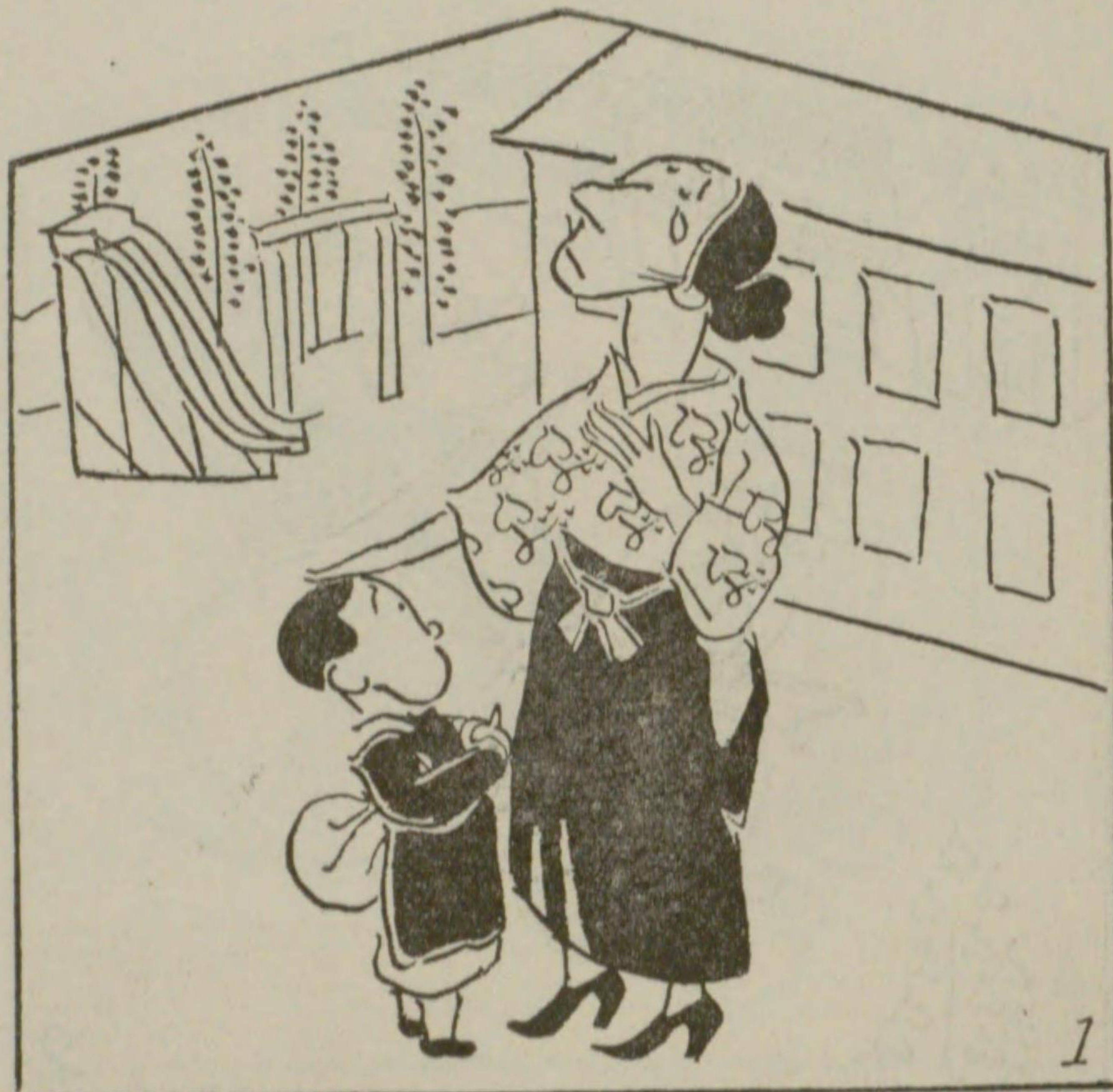
人成「鳥来てどうするの？」

おやぢ「チョツ、こいつはやり切

れない。あのね鳥が花と花と仲良

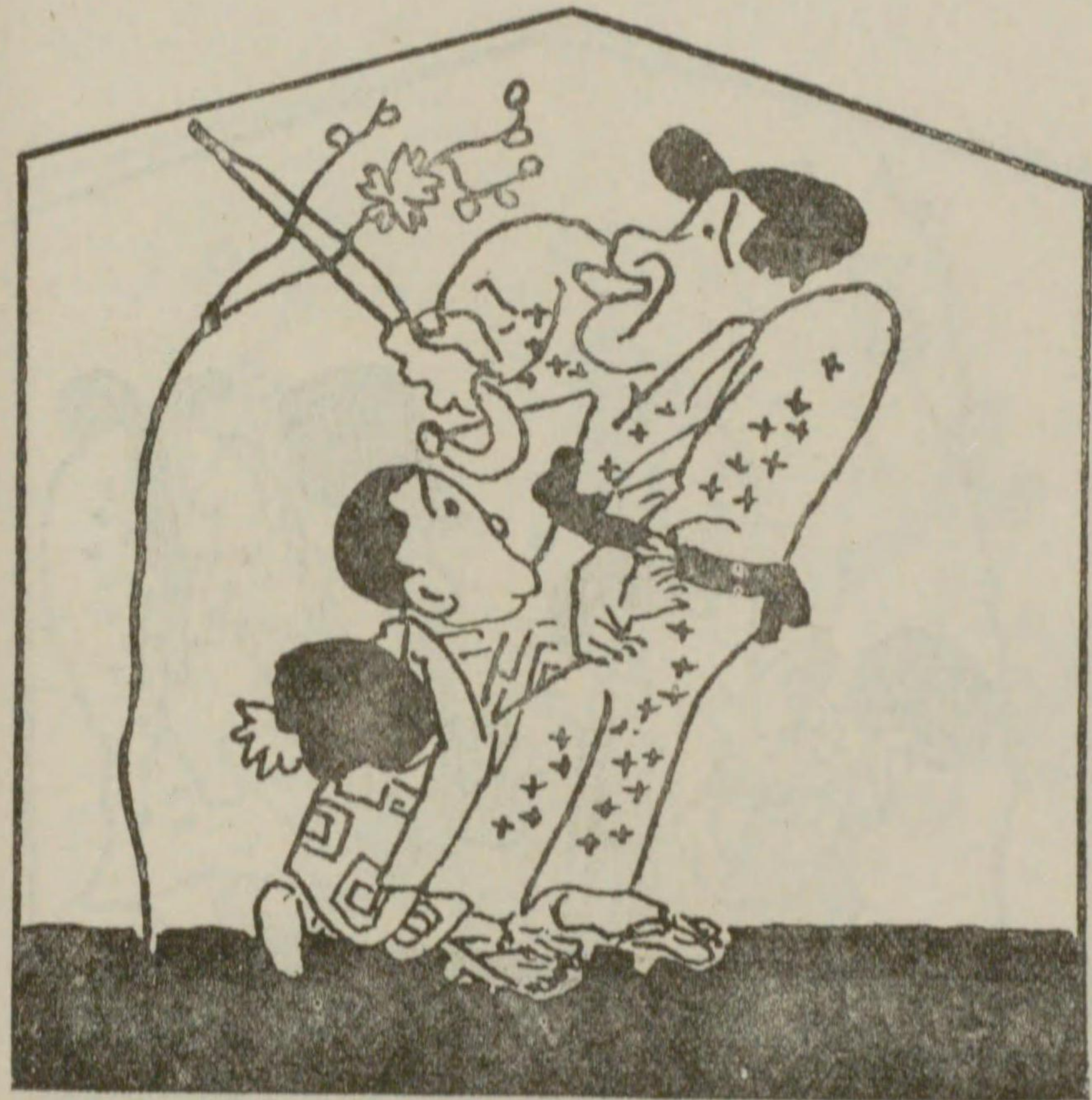
くさして種子を落して地から生や

すのです。」



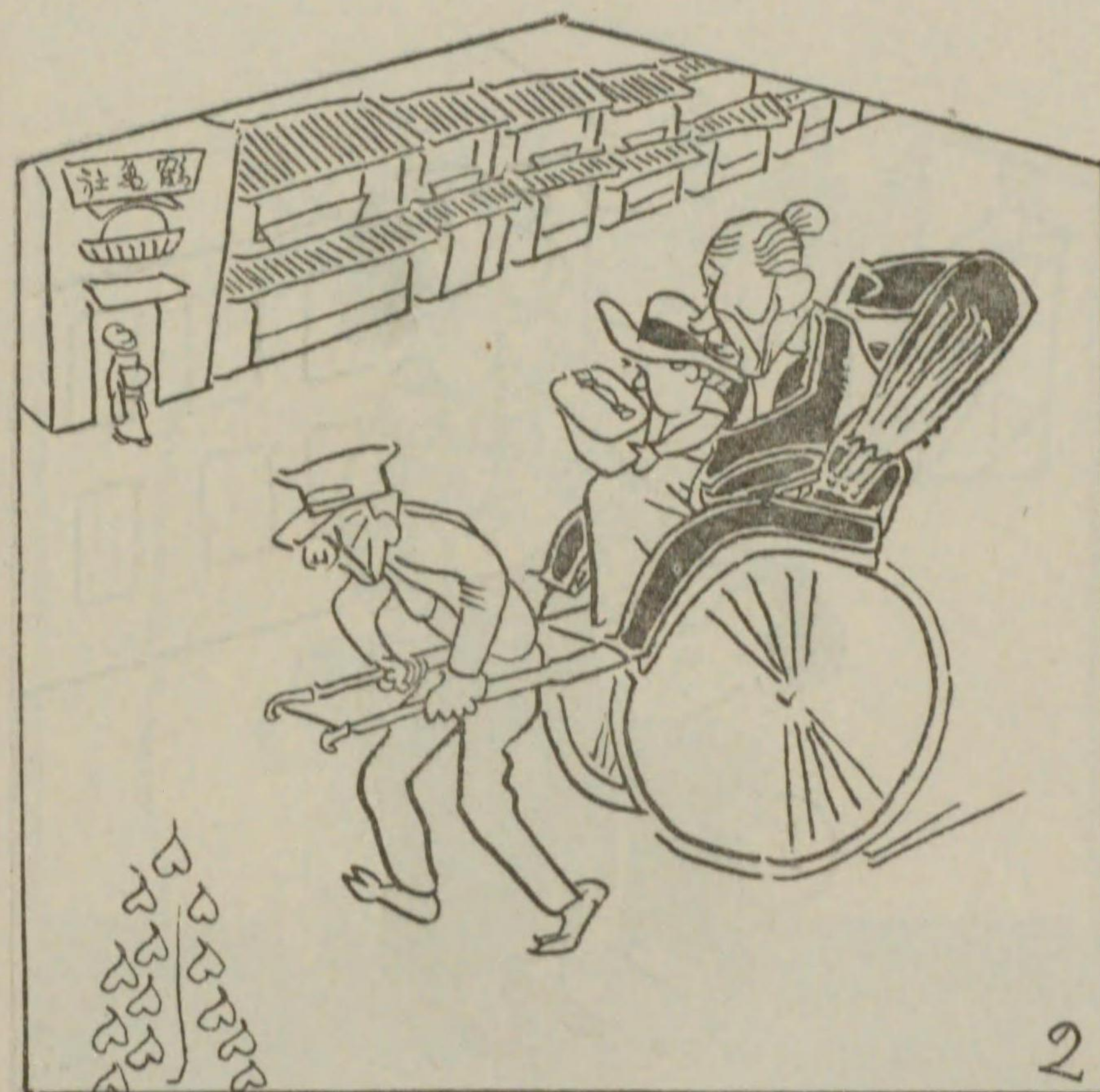
先生の結婚

夏休みにならうとする最後の日に幼稚園の運動場で保母初宮先生は人成を呼止め頭を撫で乍ら申しました。「先生はねえ。いつまでも天使のやうなあなた方と一しょにお遊戯をしたりお唄を唄つたりしてゐたいですけど——さうも行かないのです——もし先生が居なくなつても——人成さん、いつまでも先生を覚えて居て下さいね、ね。」



八

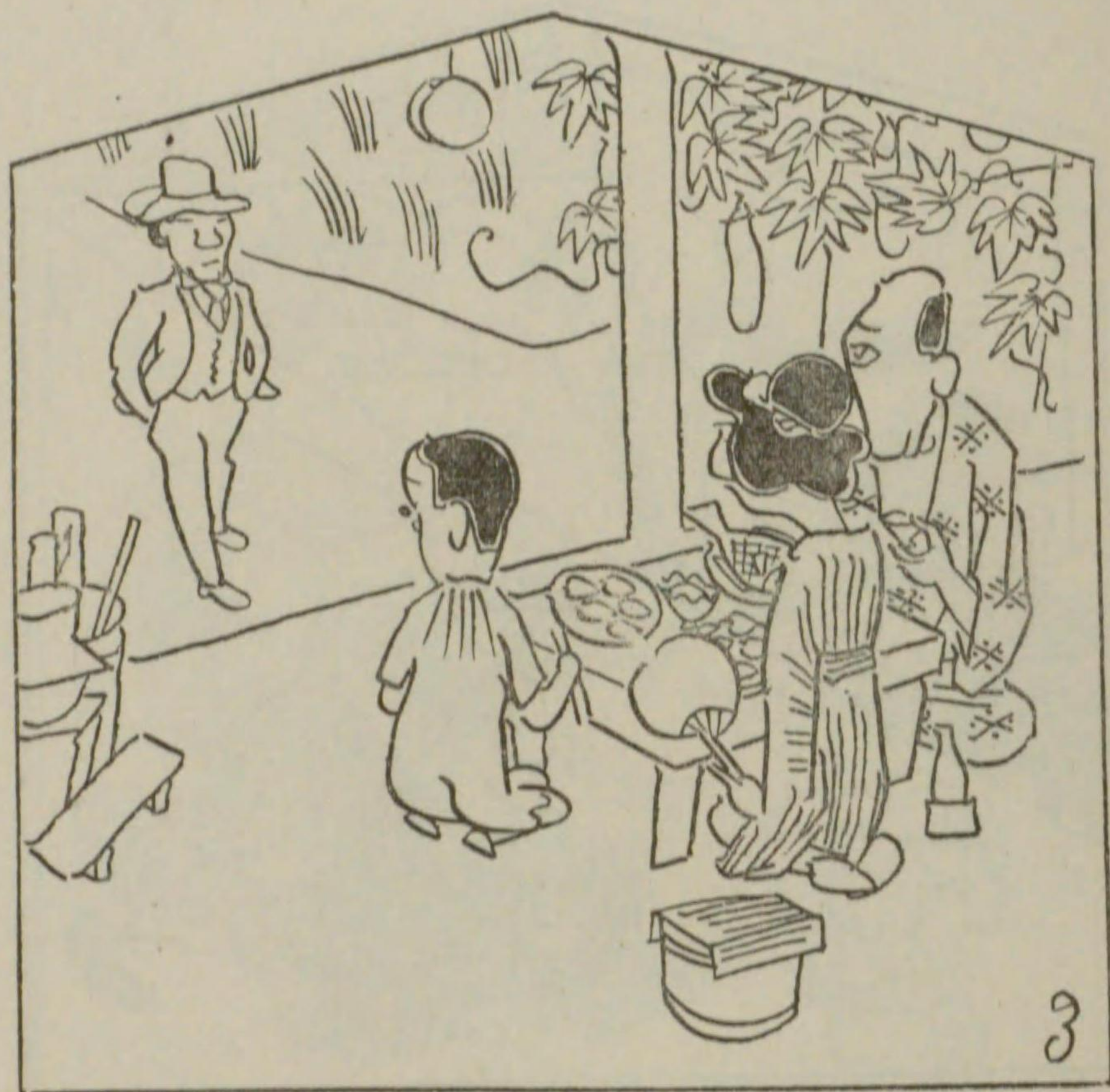
人成「種子落して地から生やしてそれからどうするの？」  
 おやち「こりや堪まらん櫻の爲めに折角の頭を痛くしちやつた行かうく。」



2

夏休みが来ました。親類の商人鈴木木助はこの頃の不景気にすっかり痛めた頭を安ませる爲め常陸の海岸へ一間を借り、夫婦して避暑に行きました。人成の父幹人は人成の身體の榮養が悪いので木助に頼み避暑地先へ一夏預かつて貰ふ事にしました。人成は祖母おひさに連れられ、俵で停車場へ行く。途中結婚媒介所鶴龜社の入口を入つて行く初宮先生らしい女の姿を認めました。

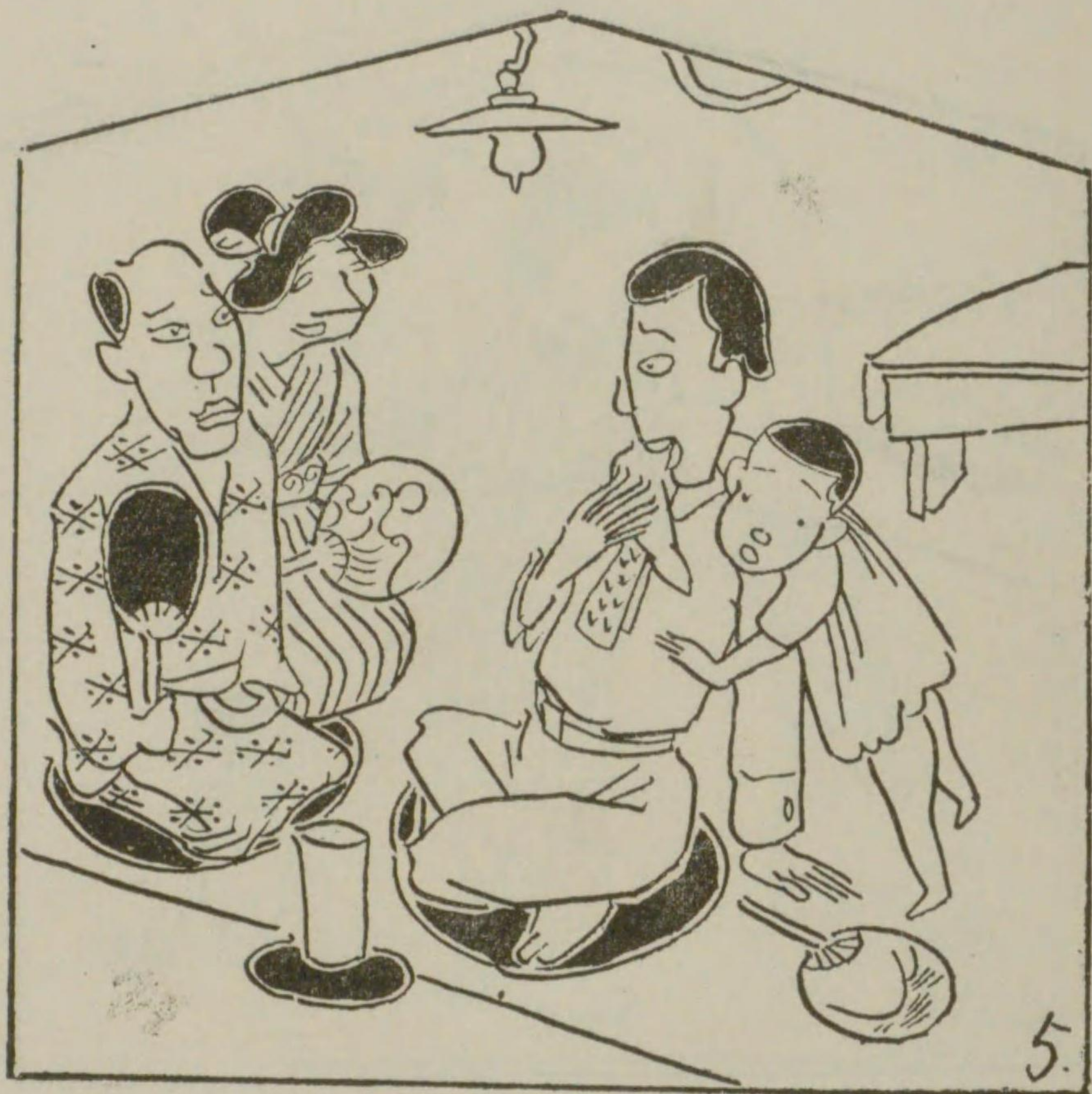
二



3

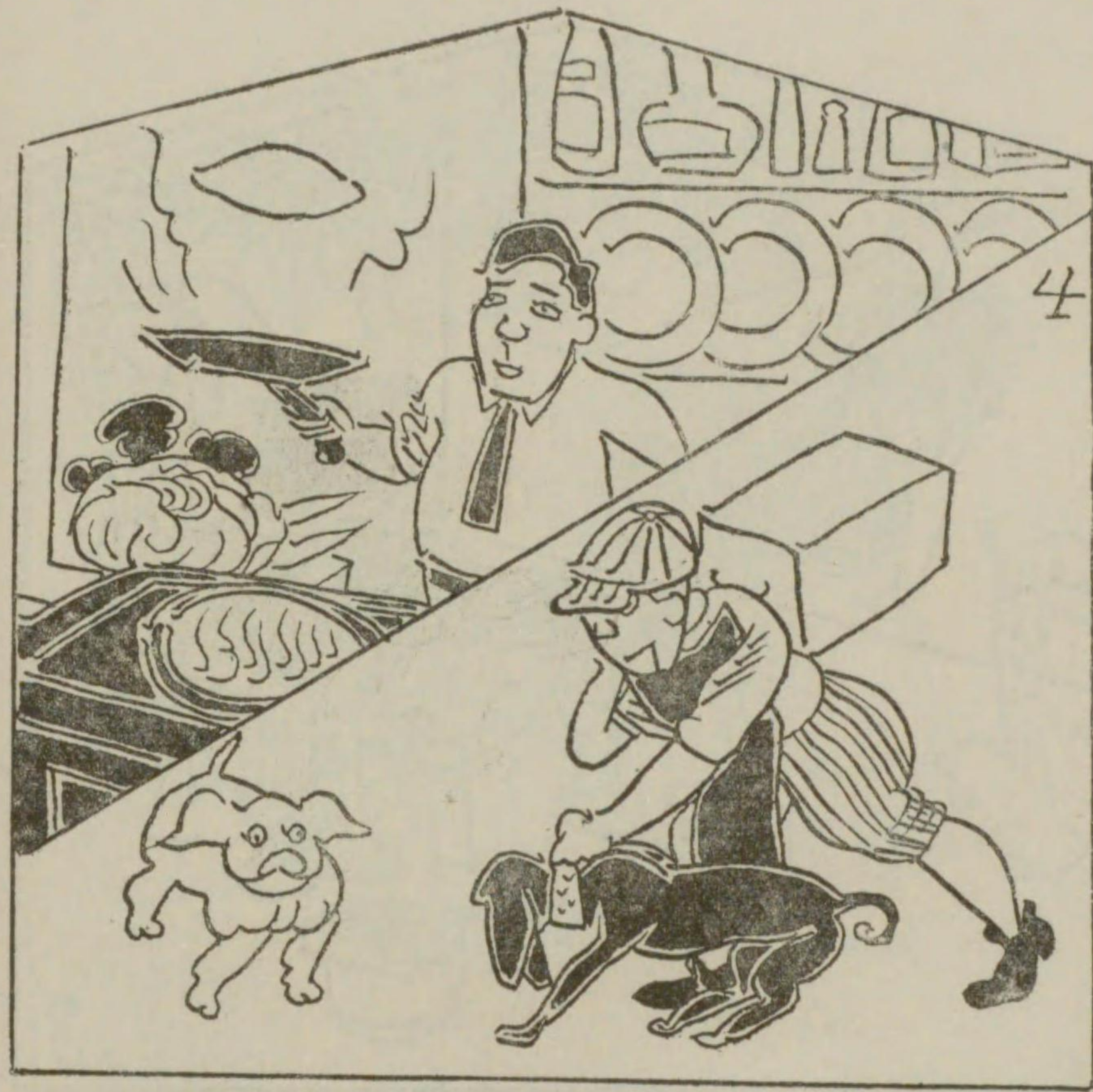
三

轉地先へつきし祖母おひさは自分の臍繰を紙に包んで木助夫婦の前に差出し人成に呉々もおさかなを澤山喰べさして呉れるやう頼んで歸りました。晩餐になりました。食卓の上には木助の前だけおさかながついて居ます。人成が「僕おさかな好きだよ。」と申しても木助の妻おつめ「坊やおいもが好きでしたね。さあさおいもをお喰べなさい。」と申します。そこへ丁度木助の弟達吉が来ました。



5.

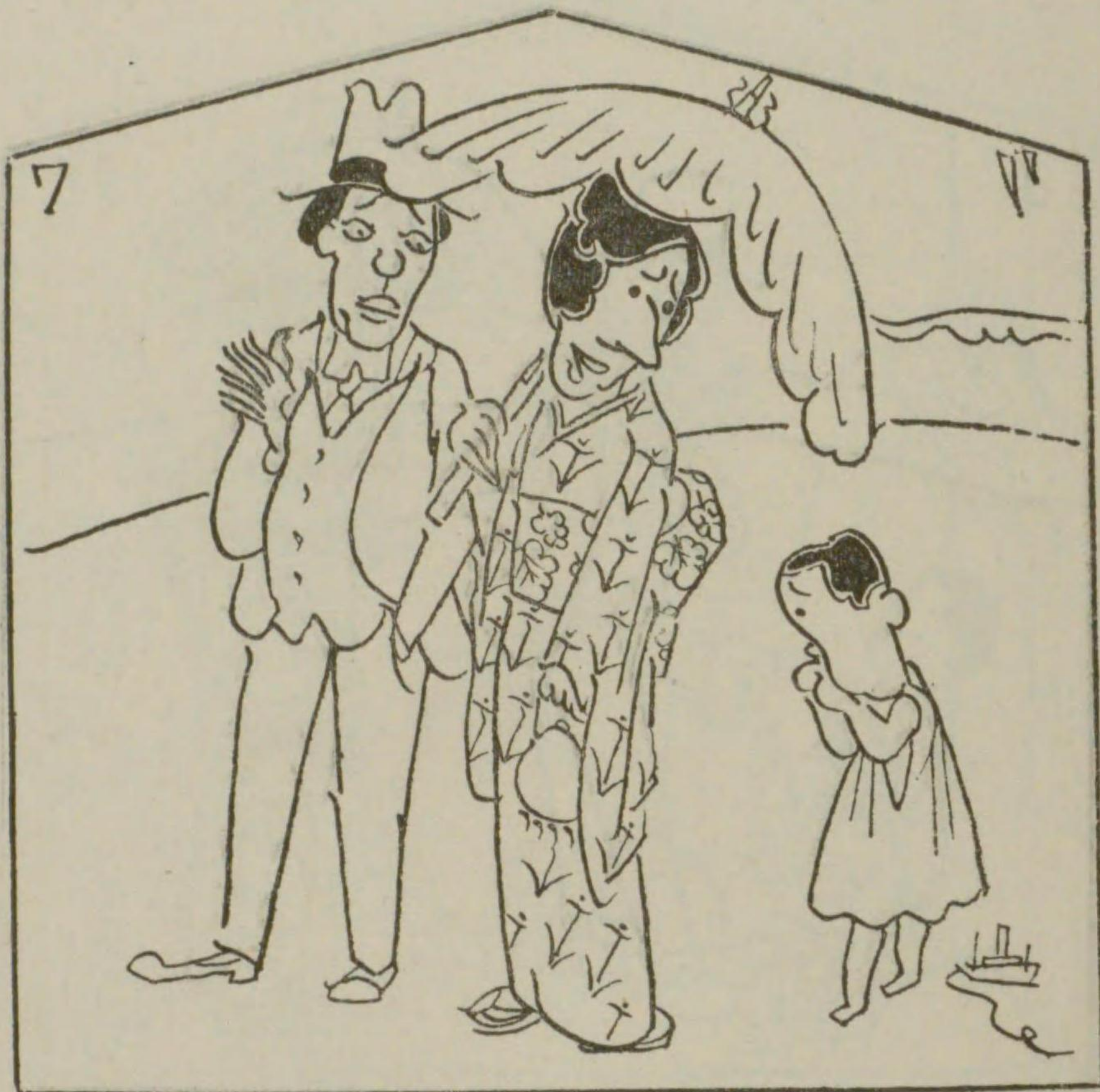
人成は珍らしがつてアブ達ちやんくと青年に附纏ひます。人成をあしらひ乍ら青年は兄弟夫婦とこんな話をして居ます。「で其女に決めようかと思ふのです。」「だが結婚媒介所の口前だけでは危険だぞ。もう二三度其の女にも遇つて、よく身元を取訊して見なくちや。」「その順序もちやんと相手の女と決めて来ました。」「おつめ」達吉さんはあなたなぞよりよつほど確かりなさつて居ますわ。」



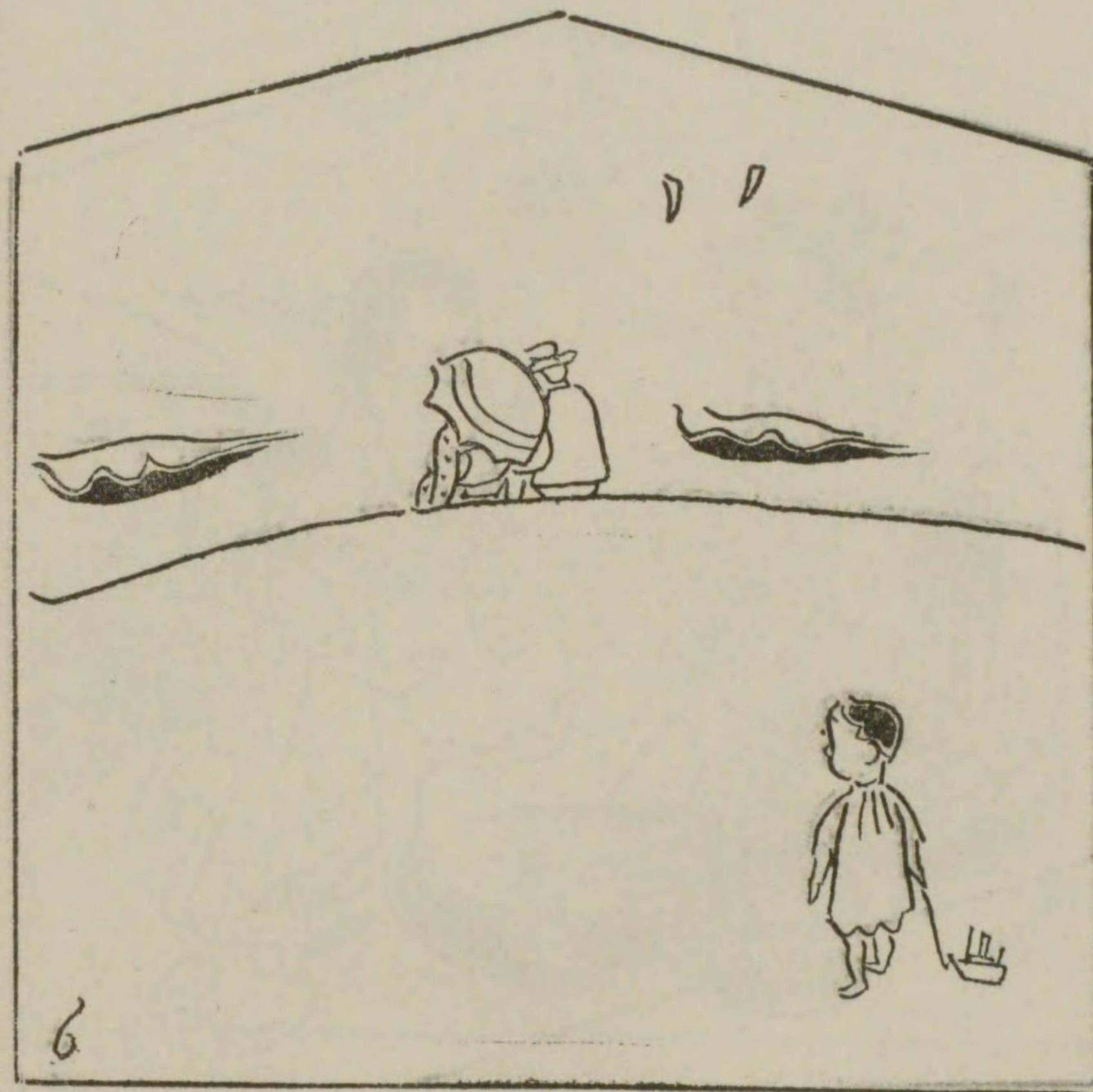
4

四

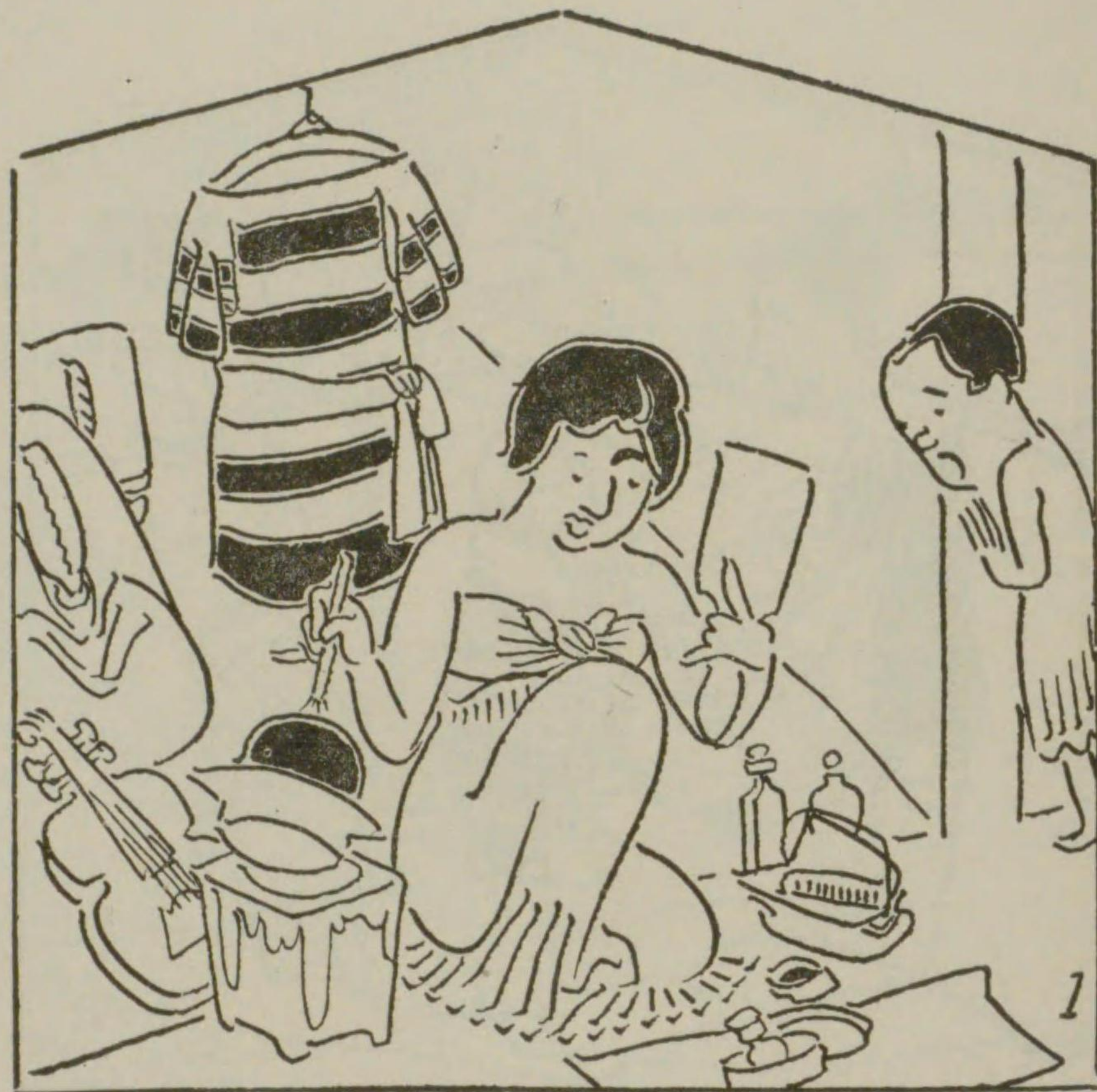
達吉は人成の三つの頃には人成の同町内の油屋の丁稚をして石油罐など運んでました。惻愍な小僧なのでアブ達くと可愛がられて居ました。それが卸問屋―英國の石油會社の日本支店長の英人の眼に留まり、その英人がカナダへ轉任の時コックの手傳ひに連れて行つて呉れました。それが三年目にもどつて来たのですが、給金を貯めて歸つたやうです。



七  
 男女の影は砂丘を立上りこつち  
 の方へ歩いて來ます。それがどう  
 も初宮先生とアブ達ちやんとらし  
 くあります。で人成はそろく近  
 づいて行きました。果して初宮先  
 生！ 人成はなつかしさうに「先  
 生！ 先生！」と抱きついて行き  
 ました。すると女は「オヤどこの  
 子でせう、わたくしを人間違へし  
 て。」冷たい言葉に人成は立ちす  
 くんで仕舞ひました。

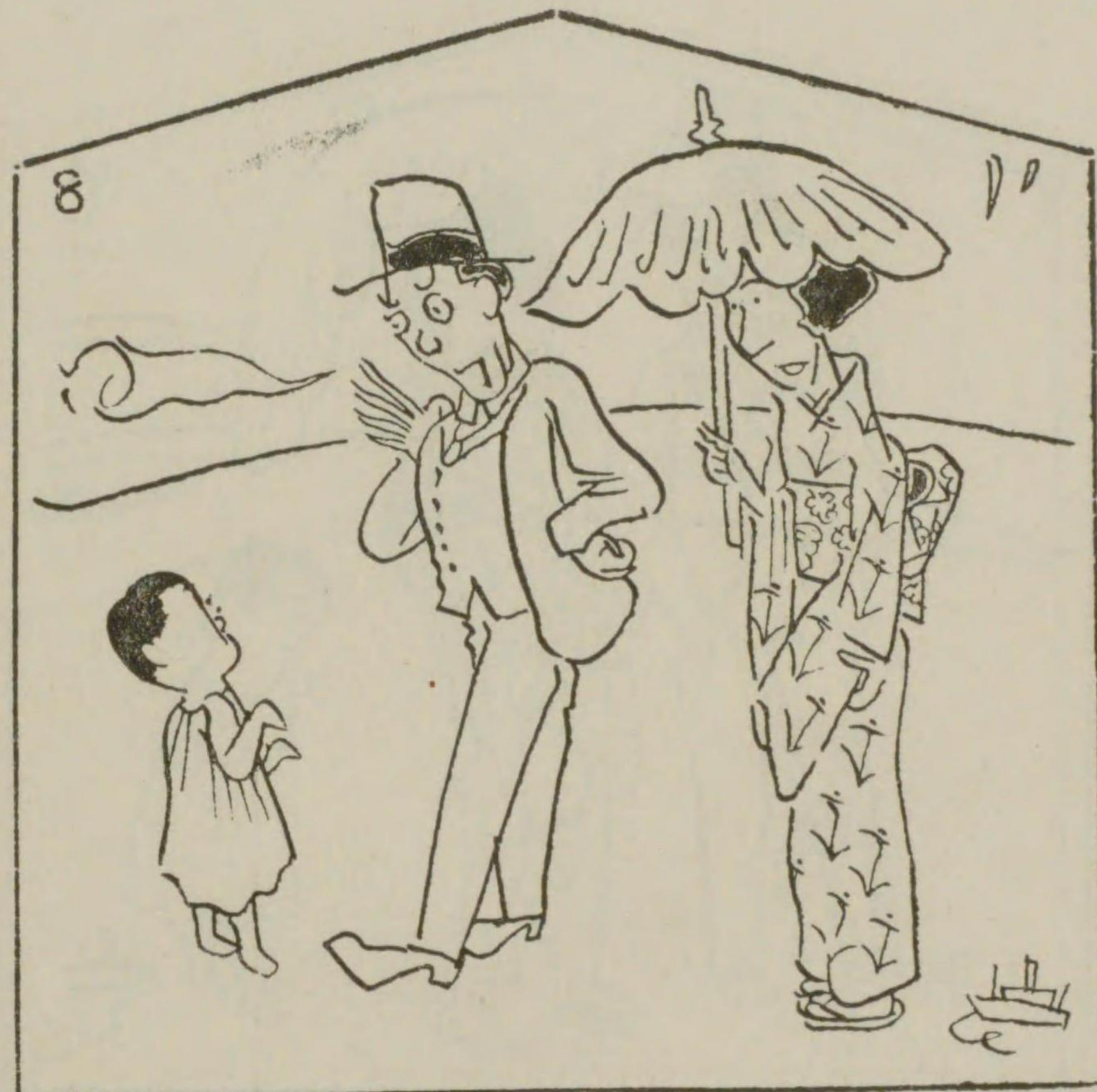


六  
 人成は海戀しく午後こつそり濱  
 へ出て見ました。大人の男女の人  
 影が濱の砂丘に見えます。二人は  
 こんな話しをして居ます。「あたく  
 し二三年自分の主義の爲に教育に  
 従事致して居りましたの。いえそ  
 の、女性大学の教授に頼まれまし  
 て。」「僕もあちらで食物の科學的  
 の研究に従事いたして居りまし  
 た。」「ちや二人は學問的な處で趣  
 味が一致しますのですわね。」「さ  
 うです／＼。」



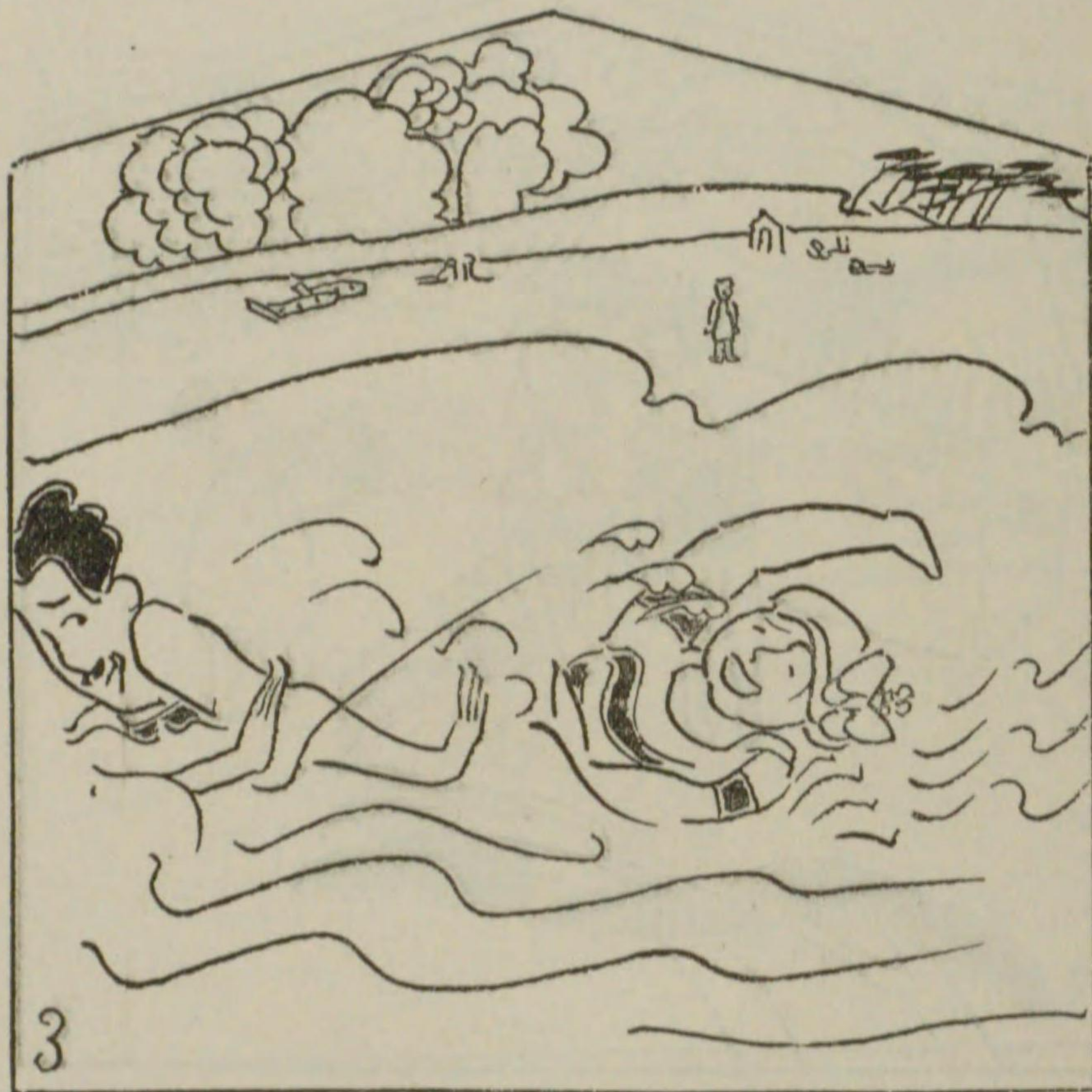
海水浴と黛

木助夫妻と人成が借住の田舎家の襖一重距てた隣の部屋は音楽女学生天津音子が自炊生活をして勉強して居ります。いや勉強とは名のみ派手な海水着を着て濱邊の青年達の心を牽くを得意とする軽い不良少女の一種です。音子は午後濱へ出る時刻になつて、化粧を始めました。生憎彼女の薄い眉は黛を使ひ切つて居ました。音子「誰れも見やしないわ、土



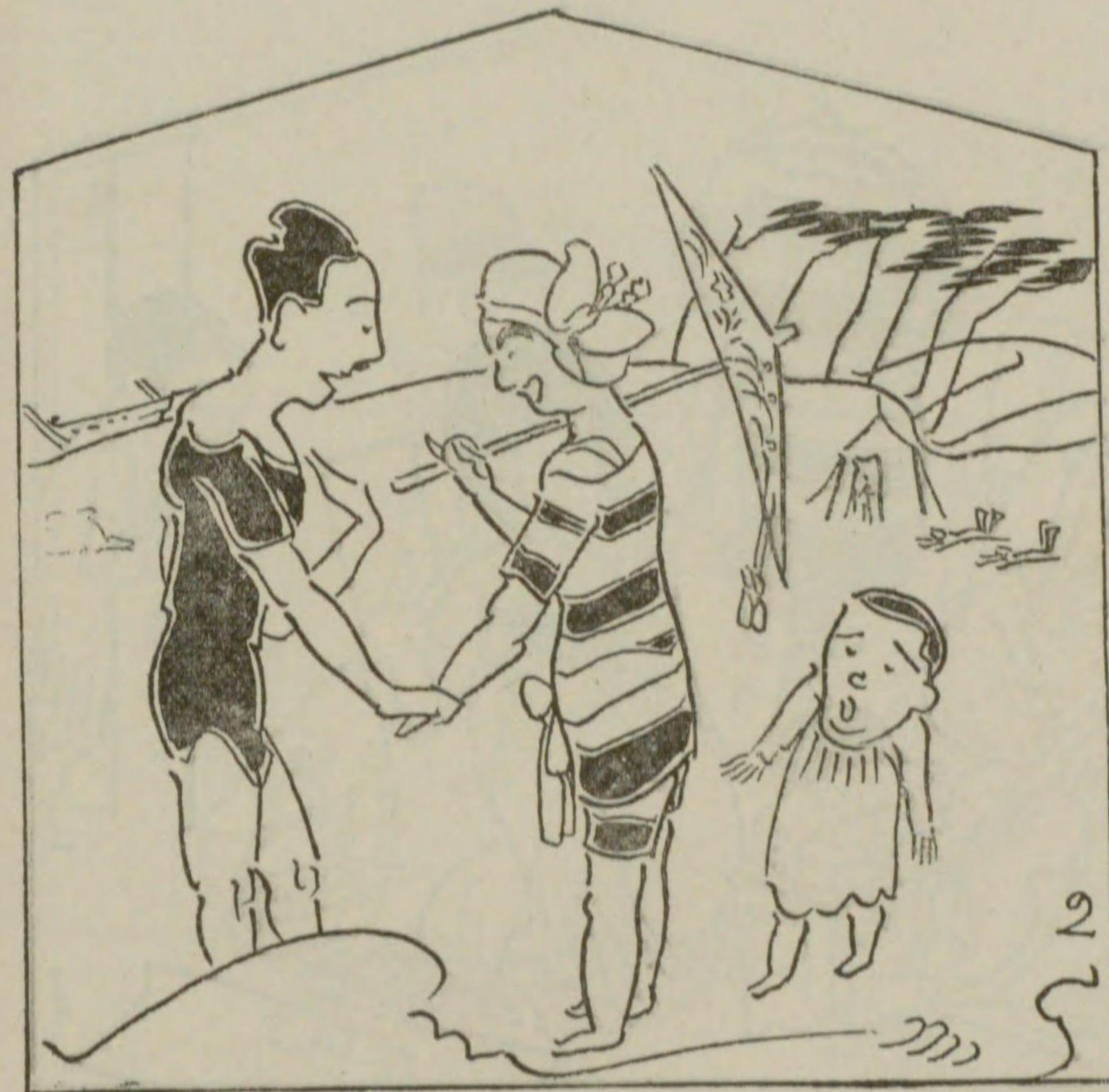
八

人成は口をへの字にして今にも泣き出しさうになり、うらめしさうな眼を移してアブ達ちやんの顔を見ました。アブ達ちやんは少し笑つて居るやうです。でこの人なら親しみを受容れて呉れるだらうと思ひ今度は男の方へ行つて「アブ達ちやんアブ達ちやん」と二度頷をしやくつて小さく呼んで見ました。微笑してたアブ達ちやんの顔が急に赫と凄くなり「バカッあつちへ行けッ！」



3

(浪の中にて)「音子さんあなた、ゆうべ別荘の松田と倶楽部へアイスクリームを飲みに行つたでせう。ケンシカラン。」「嘘よ。」「ちやんと見たんだからしやうがない。罰に水をかけてやれ。」「アレーあなたこそ無實の罪を着せて意地の悪い仕返しよ。」「ウワツは、ム、ム、ム。」「アレーほほ。」「人成はなほ見まもつて居ます。」



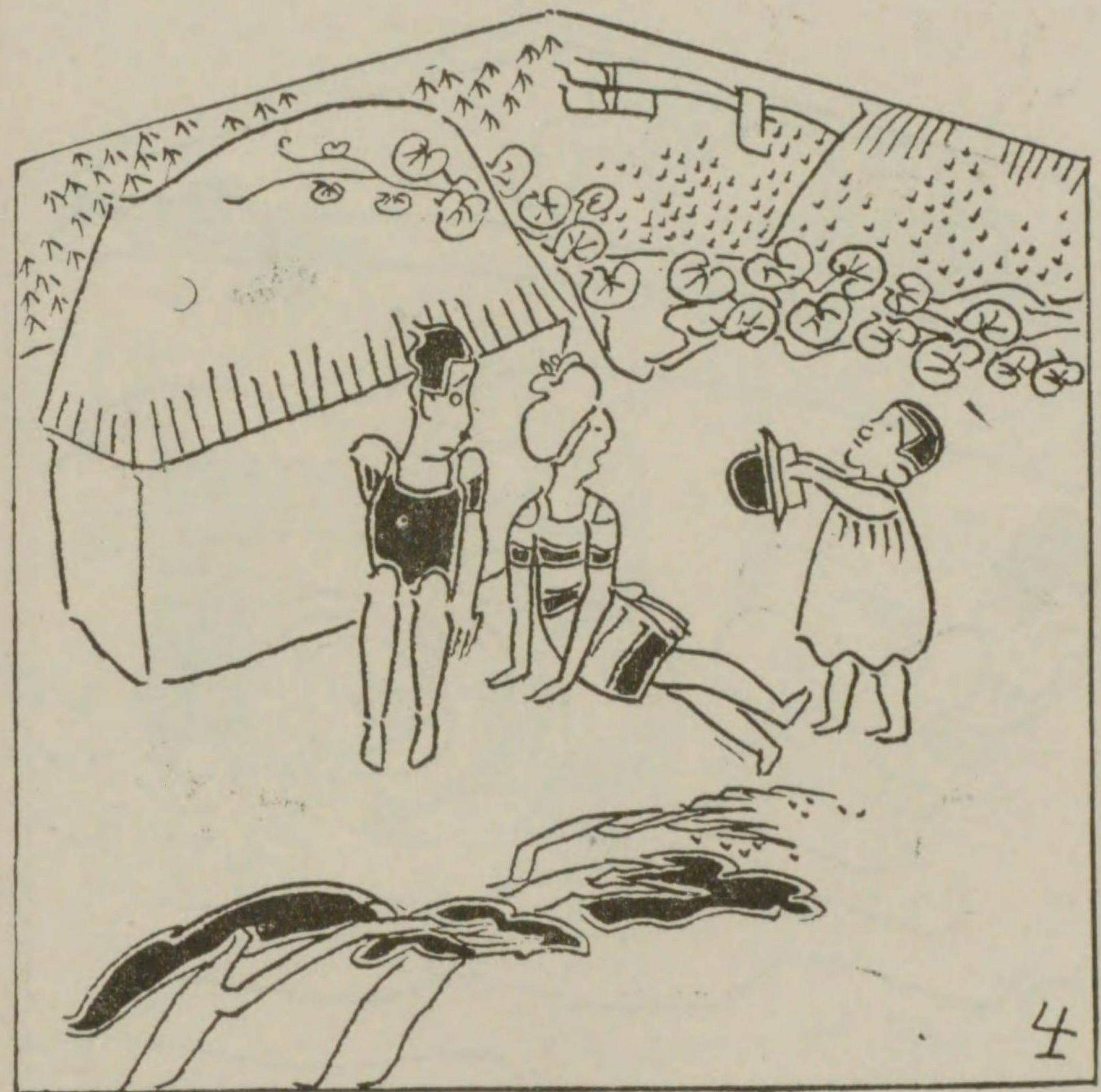
2

化粧は出来上りました。音子は目立つ日傘をさし、鷗のやうに身も軽く溜邊へ押し出しました。待受けて居た青年英雄が走寄つて来て「音子さん今日は是非君を海へ入れて仕舞ふのだ。海へ入らう入らう。」人成が矢張りついて来た。

二

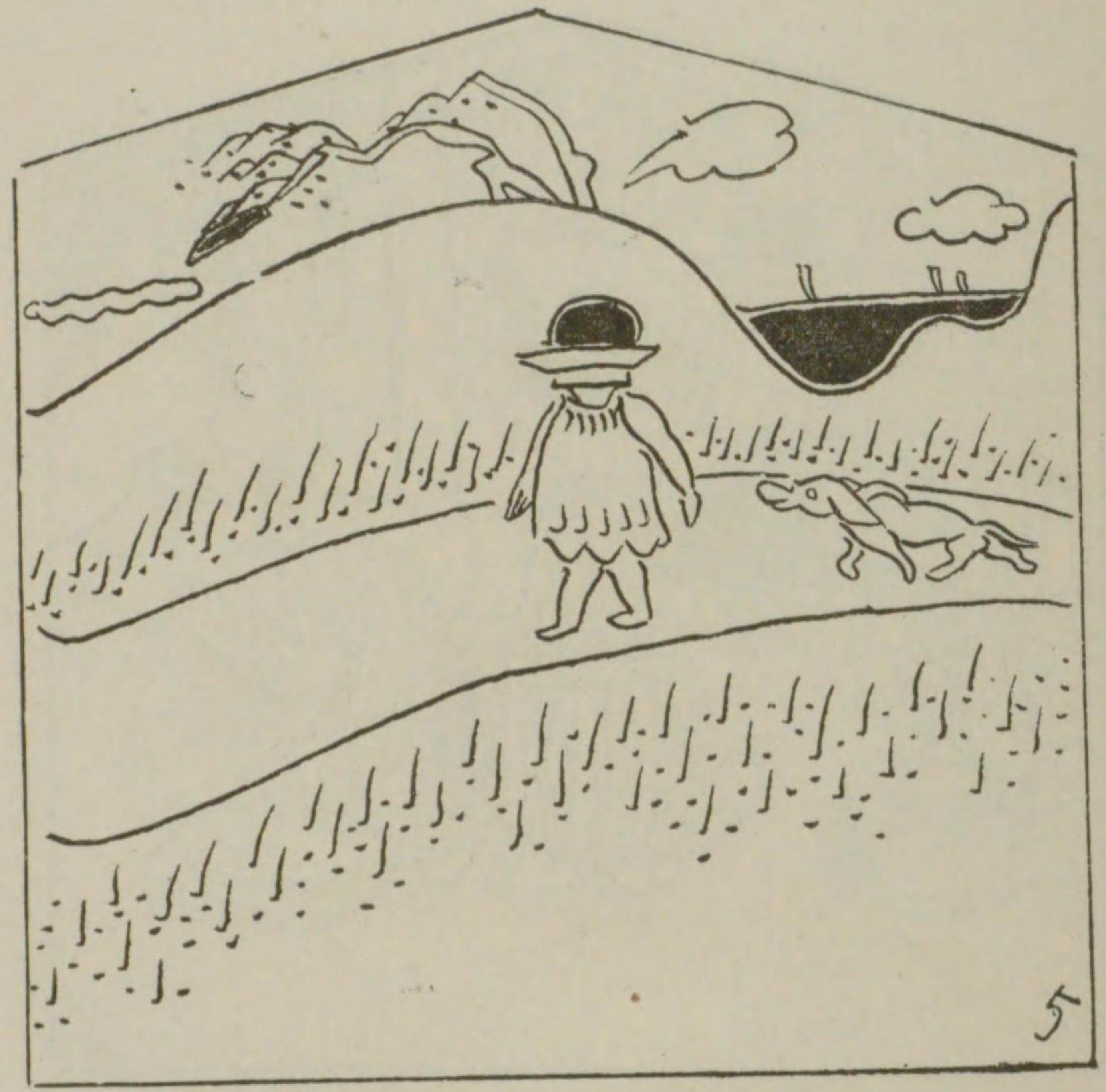
「釜のなべで胡魔化して置かう。」彼女の仕草を隣の人成が不思議な顔をして覗いて居ました。





4

四  
 男女はふざけ疲勞れて濱の網小屋の蔭へ来て一休み。音子は氣付かずに居るが汐で折角の眉が洗ひ落されて居ます。これを見て人成は音子の部屋へ歸り先程の土釜を抱へて来て「隣のおばさん眉毛が落つこちまつたよ。これでお塗りよ。」



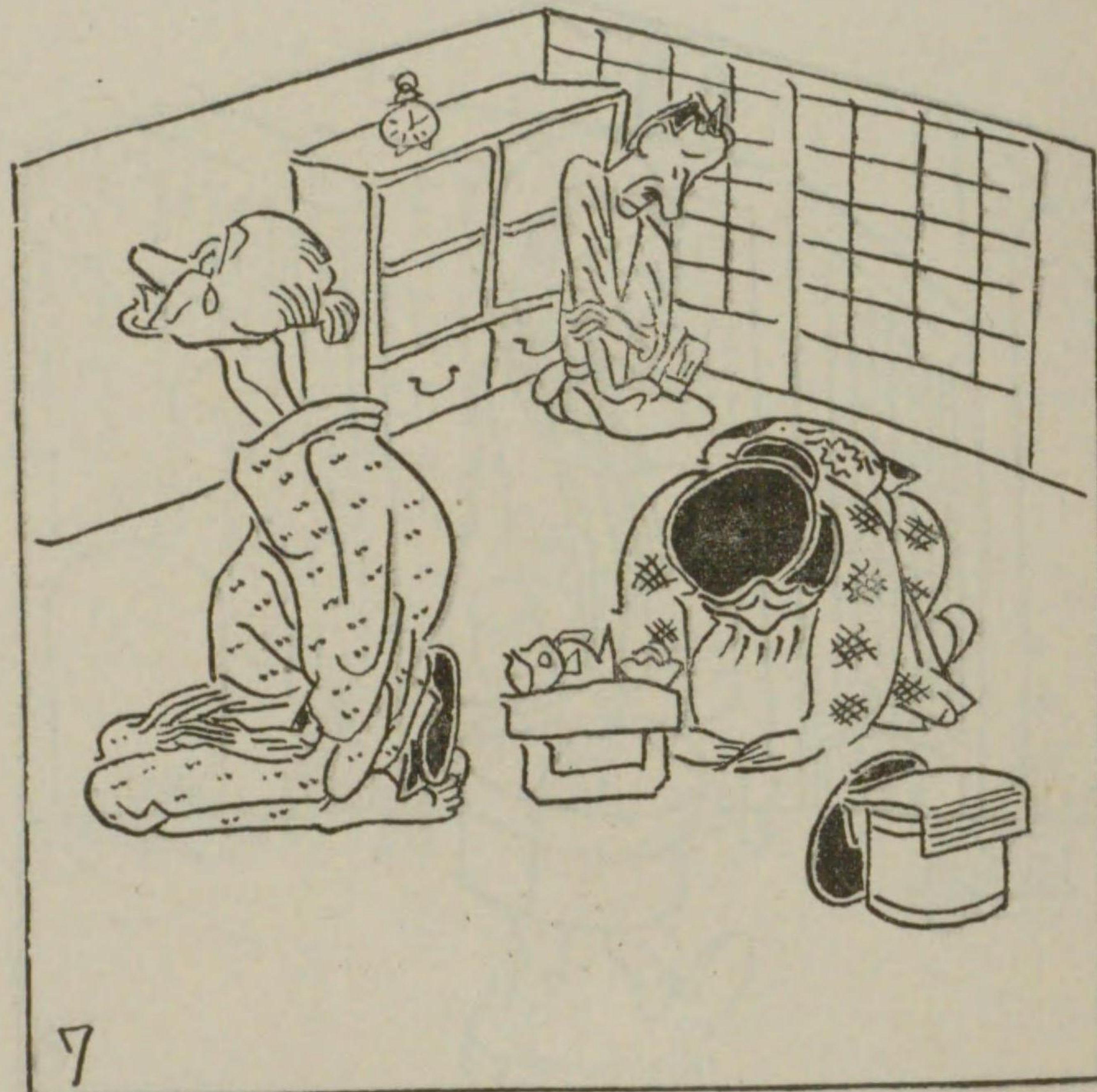
5

五  
 音子は始めは何だか判らずに居たが、聽てそれと氣が付くと眞緒になつて「子供の癖にあたしを侮辱するのよ、葦雄さんこの子をひどい目に遭はしてやつて下さい。」葦雄は「貴様かうしてやる。」と人成の頭へすつほり土釜を冠せました。人成は釜を冠り泣き乍ら家へ歸る途中、いつか機嫌も直り泣聲が唱歌に變りました。



6

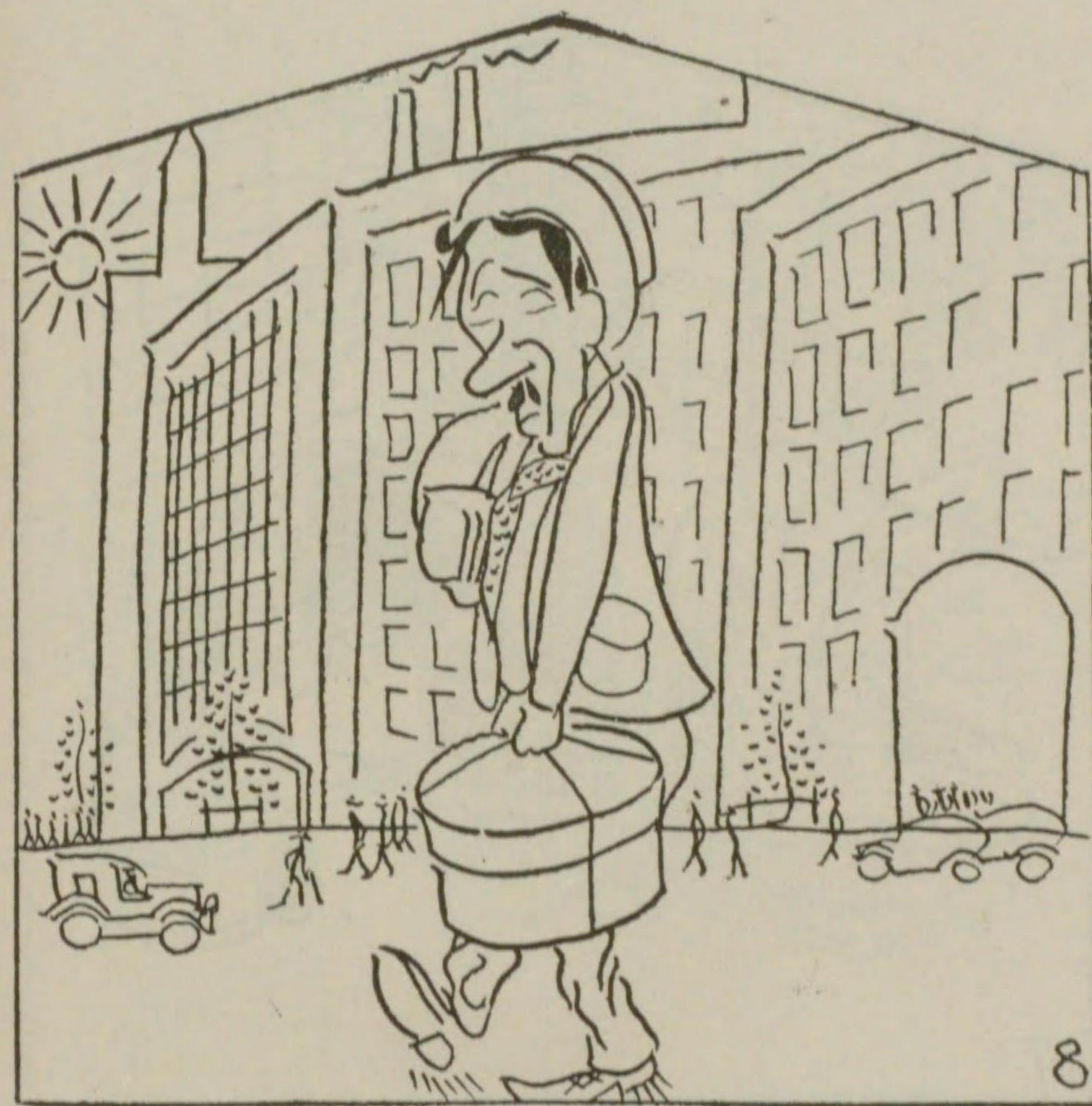
六  
 土釜を冠つて歸つて来た人成の姿を見て、木助の妻「アラ、坊やが帽子が無いものだから土釜なんぞ冠つて歩いてるわ。」木助「帽子は来る時冠つて来たぢや無いか？」妻「いえとつくにどこかへ無くしてるのよ。あんな物冠つて歩かれては、わたし達の處の外聞に係はるわ。」「早速帽子を送るやう唯野へ葉書を出さう。」



7

七  
 (唯野の家にて) おつま「どうも私共の不調法でした。人成の帽子は早速買つて送りますから、どうかおかあさま、ご飯だけはお上りなすつて。」「おひさ」孫が帽子が無いとて土釜を冠つて歩いてるのに、わたしがベン、い、とご飯を頂いて居れますか。孫の帽子も出来ないうちは、私も一粒も頂けません。」「人成のおやぢ唯野は鈴木から来た端書を見て考へ込んで居る。」

少年期



八

子供の帽子を稼ぎ儲け爲めに、  
二晩會社の宿直の身代りを引受け  
二晩泊つた翌朝、宿直料を前受  
取りにして、彼は丸ビルに入つた。  
やがて丸ビル前の廣場を帽子の箱  
を抱へ居ねむりし乍ら歩いて居る  
唯野の姿が認められた。

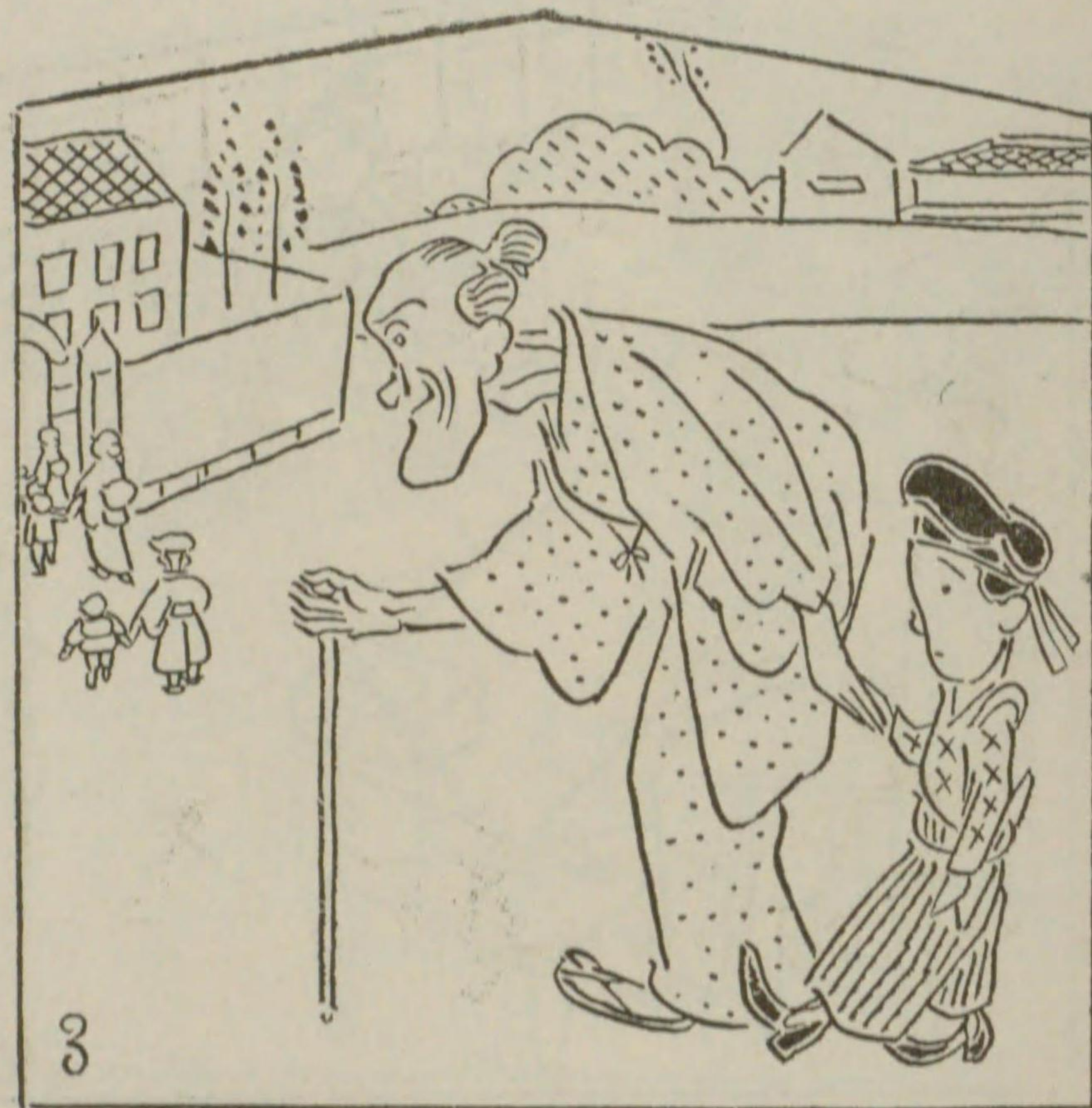


メンタルテスト

— 圓太郎テスト —

—

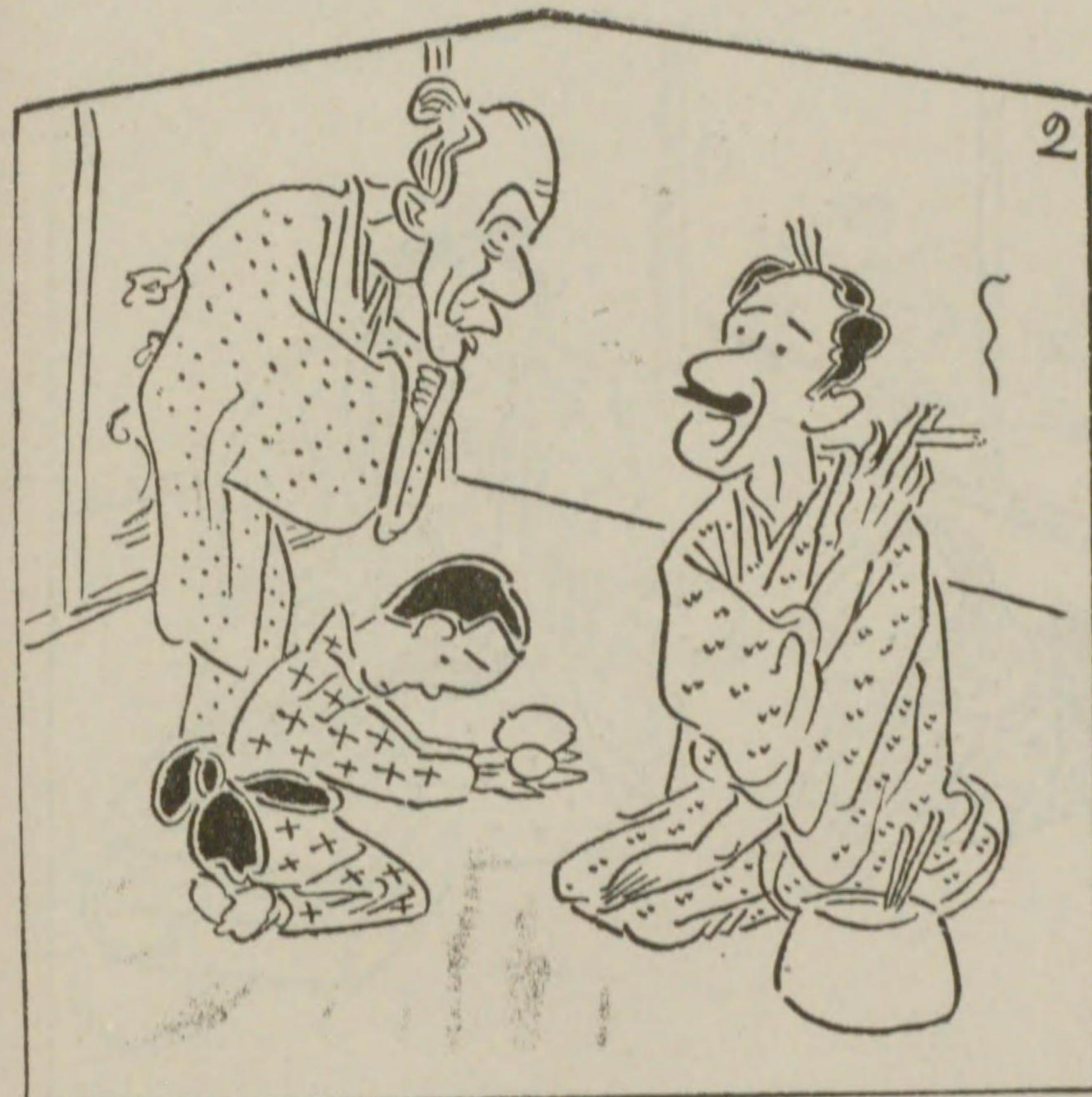
人成は幼稚園を卒業しました。  
 父幹人は人成を模範小學の旭小學  
 校へ入れたいと思ひました。その  
 學校では應募の子供にメンタルテ  
 ストを行ふと聞いて幹人は人成に  
 そつとメンタルテストの下稽古を  
 させます。幹人「さ、人成この二つ  
 の玉子はどつちが重いか掌へ載せ  
 て當てゝ見る重量に對する知覺神



な、其圓太郎、ベストとやらいふのは、」幹人「圓太郎、ベストではありません、メンタルテストです、困つたな。まあ、今度人成が入らうとする小學校でやる入學試験の事です。」老母おひさ「ほうその學校では玉子の手品でもさせて試験にするかの、常節の子供は仲々楽しんでないなう。」

三

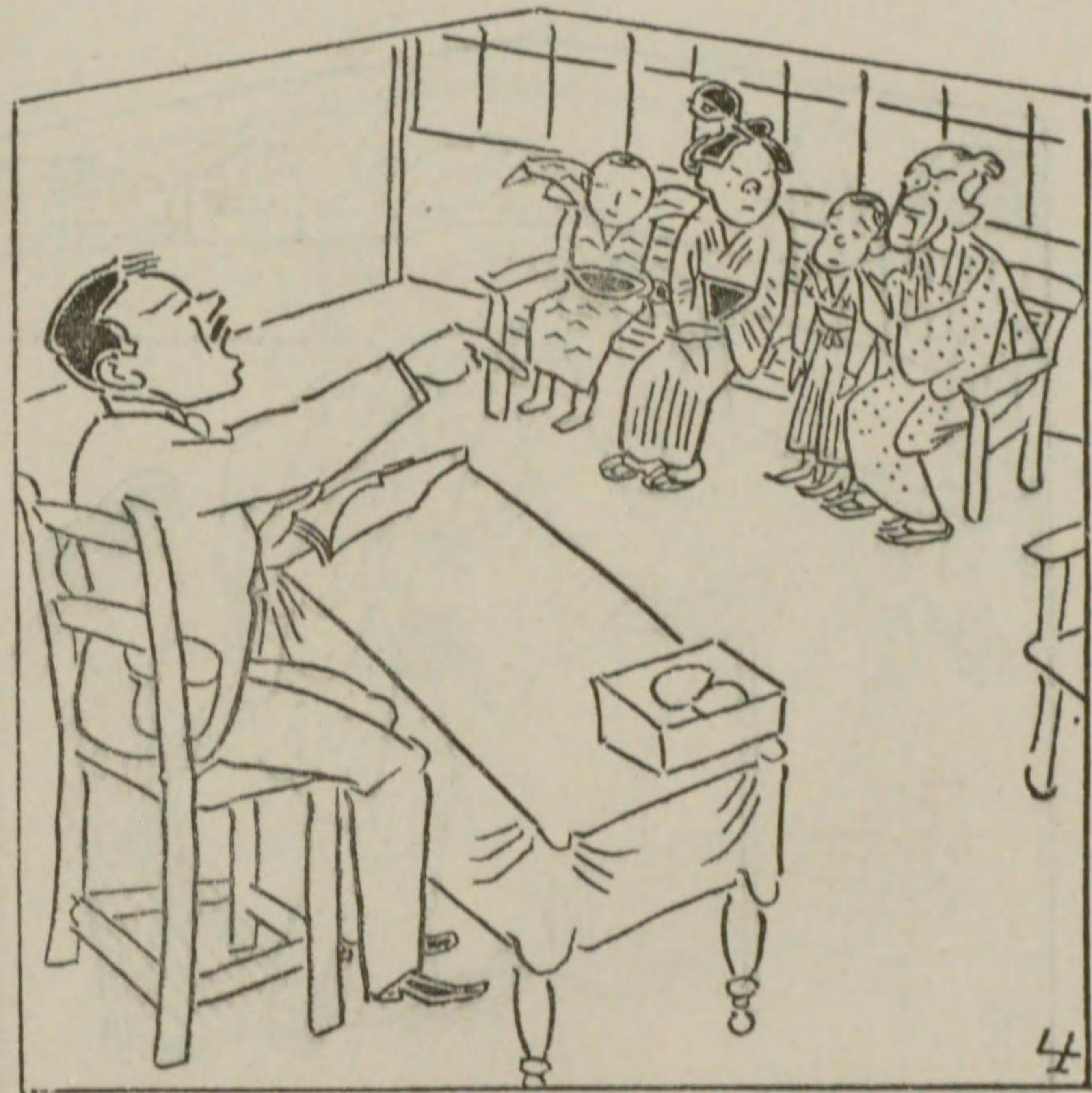
おひさ「それ〜もう學校に來ました。おうおう、大勢、親御さんが子供衆を連れて門を入つて行き



經の判断をしてやる。」人成「おとうさんその玉子の折どうするの。」幹人「そんなことはどうでもよろしい。」人成「あしたの朝たま〜のご飯するの。」幹人「いや、これは鬘斗を貼り換へて他家へ又あけるんです。」

二

老母おひさ「なにをしとるのや、人成に玉子をもてあそびにさせてこはすといけんぜ。」幹人「いやこれはメンタルテストの下稽古をやつてるんです。」老母おひさ「なんや

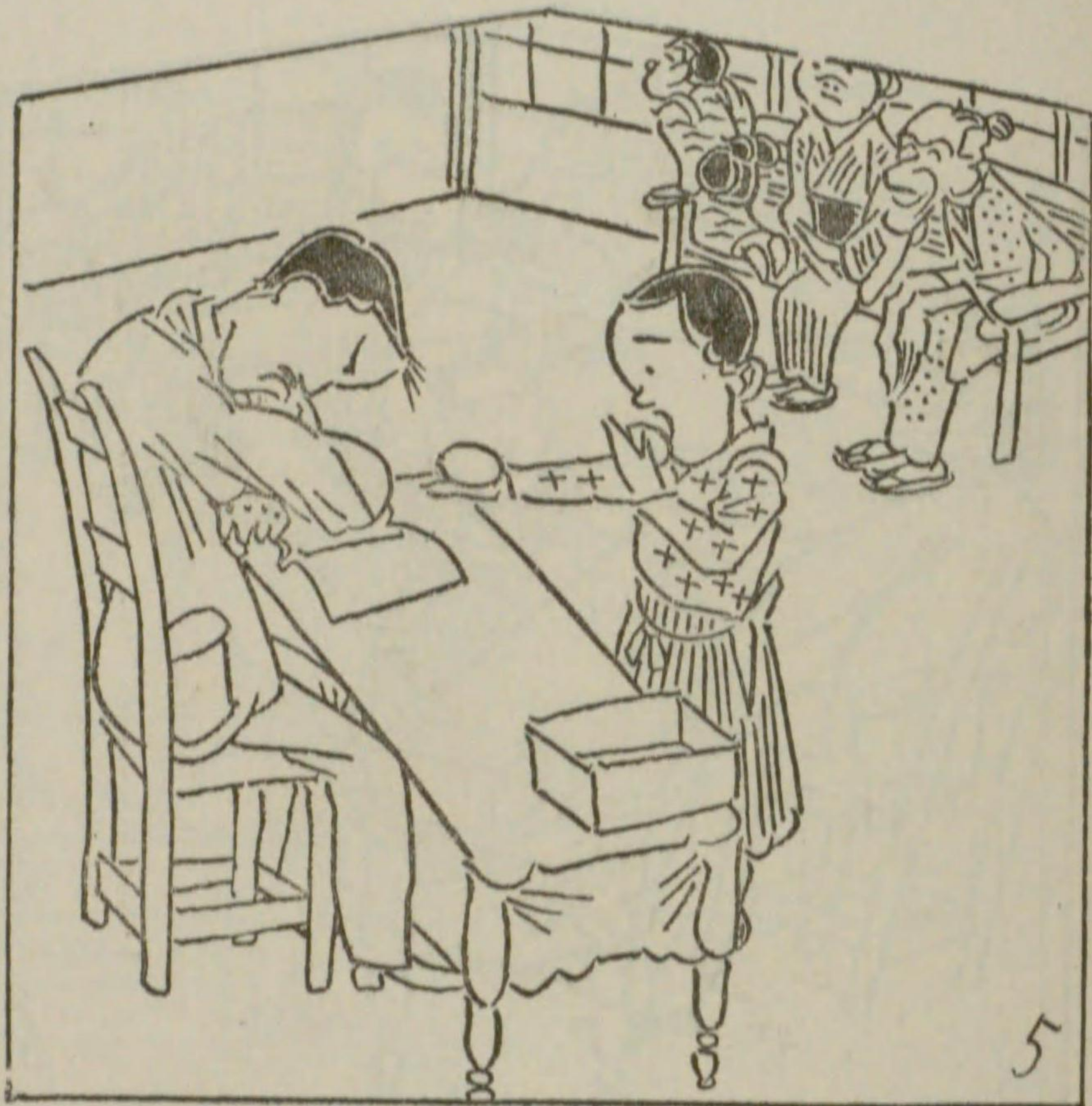


4

なさる。みな圓太郎ベストをしに  
ぢやな。人成、よう氣を落付けて  
手品忘れんやうにな。」人成、おぼ  
あちやん、歸りに何か買つてね。」

四

旭小學校の試験室のある一室、  
大勢の應募の子供は一々メンタル  
テストを試みられ、入學許可、不  
許可の宣告を與へられて歸つた。  
試験委員の先生「あとに残つてるの  
は唯野人成君に佐伯三太郎君の二  
人ですね。お氣の毒ですが定員が  
ありますから、この中でお一人を

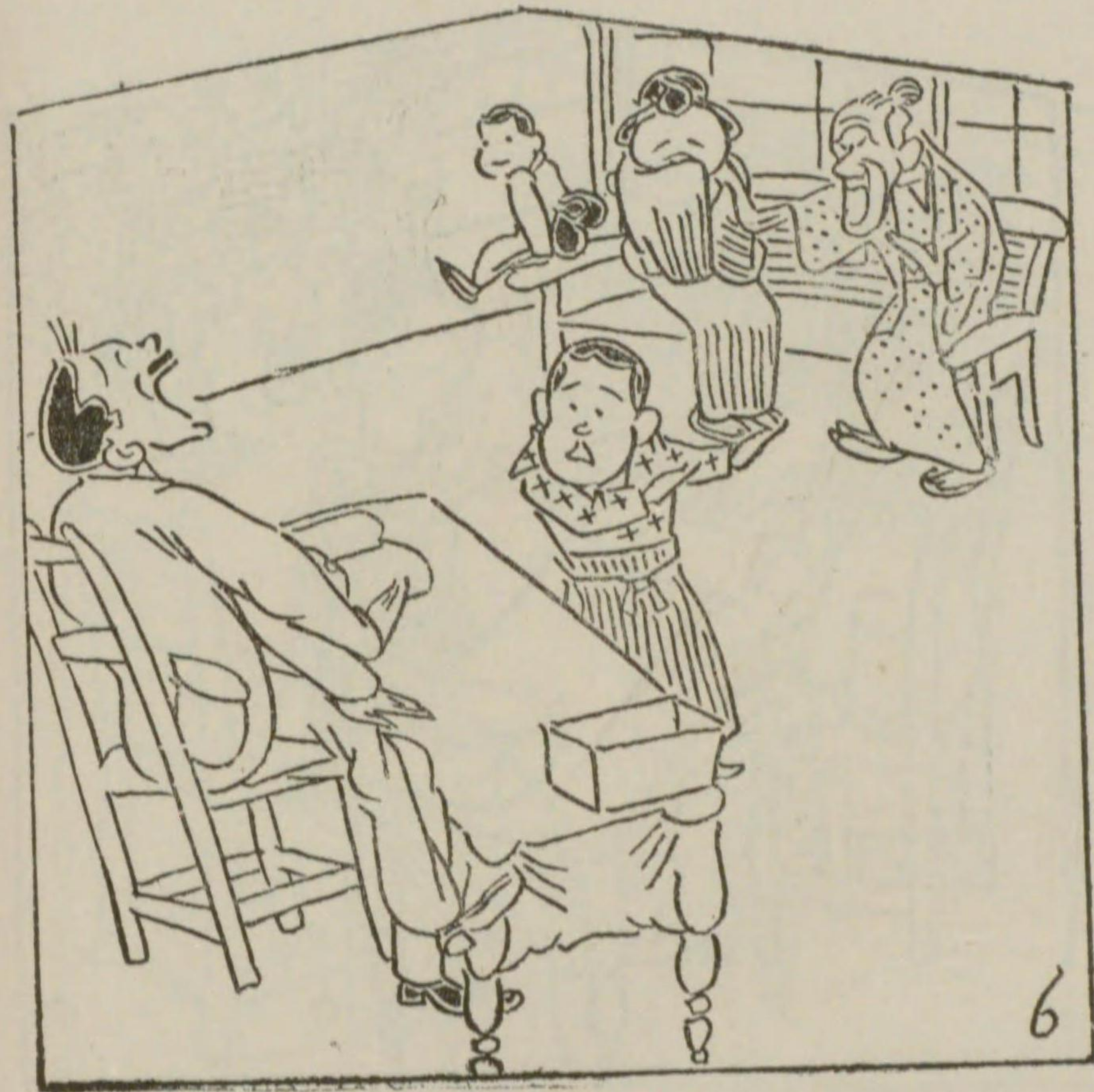


5

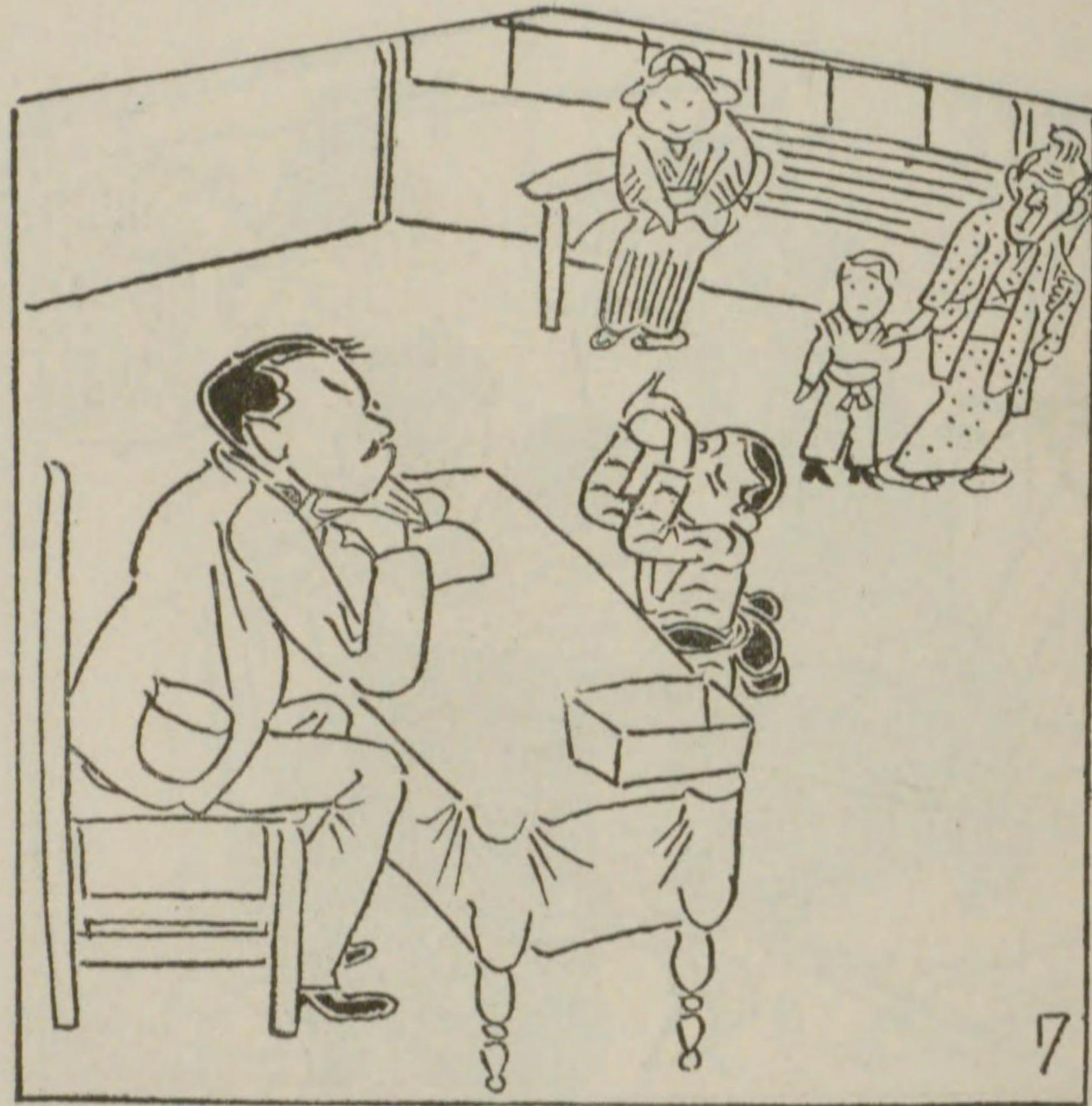
探ります。唯野さんいらつしや  
い。」おひさ「はい。そら、先生が  
お呼びぢや、人成、鼻をかんで、  
お行儀ようしてな。」

五

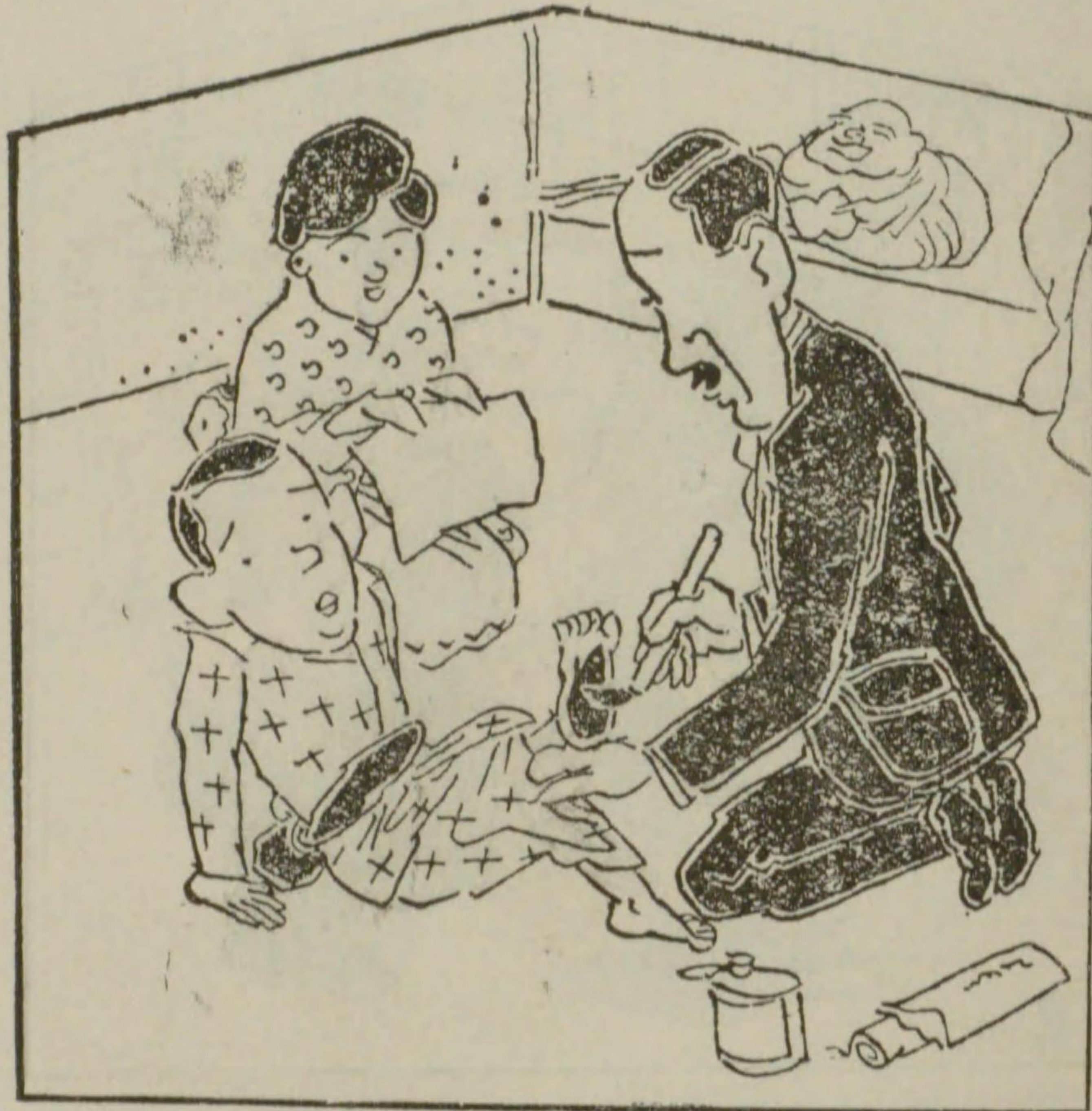
先生から應募生に與へたメンタ  
ルテストの材料は人成には幸運に  
も下稽古をしたと同じの玉子であ  
つた。先生「それを兩方のへ載  
せて、さう、どつちが重いかね。」  
人成「先生、こつちです。」  
先生「よし感覺は可成り鋭敏だ。」



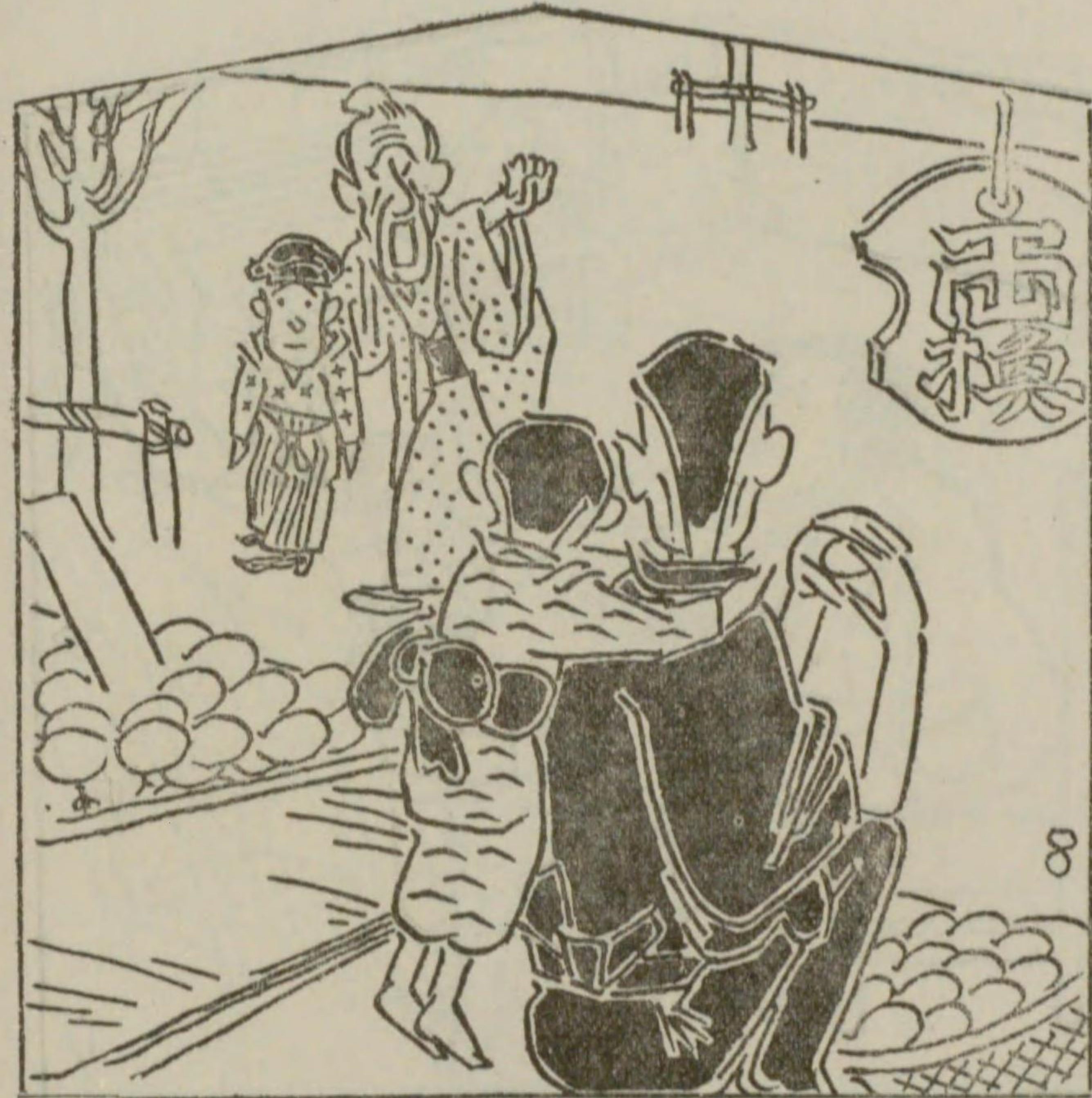
六  
先生「唯野さん、次に訊きますよ。玉子は何から生れますか。」  
人成「には、とり。」先生「よろしい。そしてそれを何に使ひます。」  
人成「……。」先生「お返事は……。」  
……それぢやかう訊きませう、その玉子をあなた貰つたらどうします。」  
人成「……。」先生「エ？エ？」  
人成「あの……あの……玉子の折貰つたら……あの……熨斗貼り代へて他家のうちに又やるの。」  
先生「アハ、ハ、ハ。」おひさ「人成コレ！コレ！」



七  
先生「唯野の御老母さんこのお子さんはすこしこまかい事に気がつき過ぎます。で當小學校へは御入學お断りいたします。これからお家でもなるたけ無邪氣に育て、あけて下さい。」おひさ「大きなお世話です。さよなら。」先生「扱て佐伯三太郎さんいらつしやい。ほう仲々氣かぬ氣の子供だな。あなたこの玉子を貰つたらどうしますか。」三太郎「かうやつて檢るんだい。」と三太郎玉子に兩手をかざし陽に透してみる。先生「これは中頭腦が働く。研究心が旺盛だ。よろしい、よろしい、佐伯さんの」

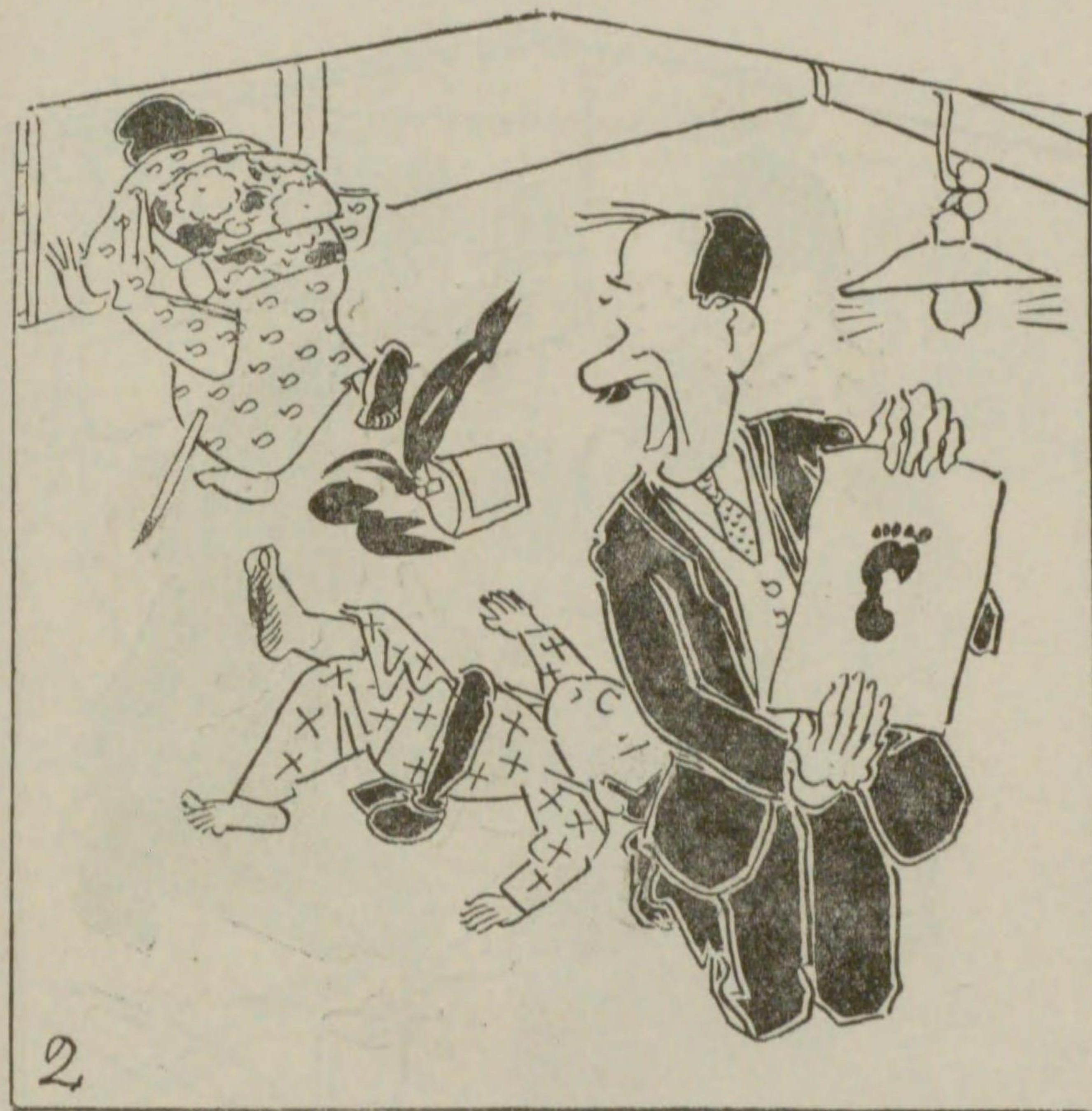


兒童衛生 扁平足  
 アデノイデ  
 人成は圓太郎ベスト（メンタル  
 テスト）の無い他の小學校へ入り  
 ました。ある日小學校の受持先生  
 から人成の學業成績に就いて通知  
 が参りました。「人成は一體に活  
 動力が鈍く物に飽き易い代りに興  
 味の變轉が激しい。ひよつとした  
 ら生理的に疾患があるのでは無い  
 か。一つ調べて欲しい」といふ  
 のでありました。おやぢの幹人大  
 いに心配して先づ人成が扁平足の  
 有無を調べます。



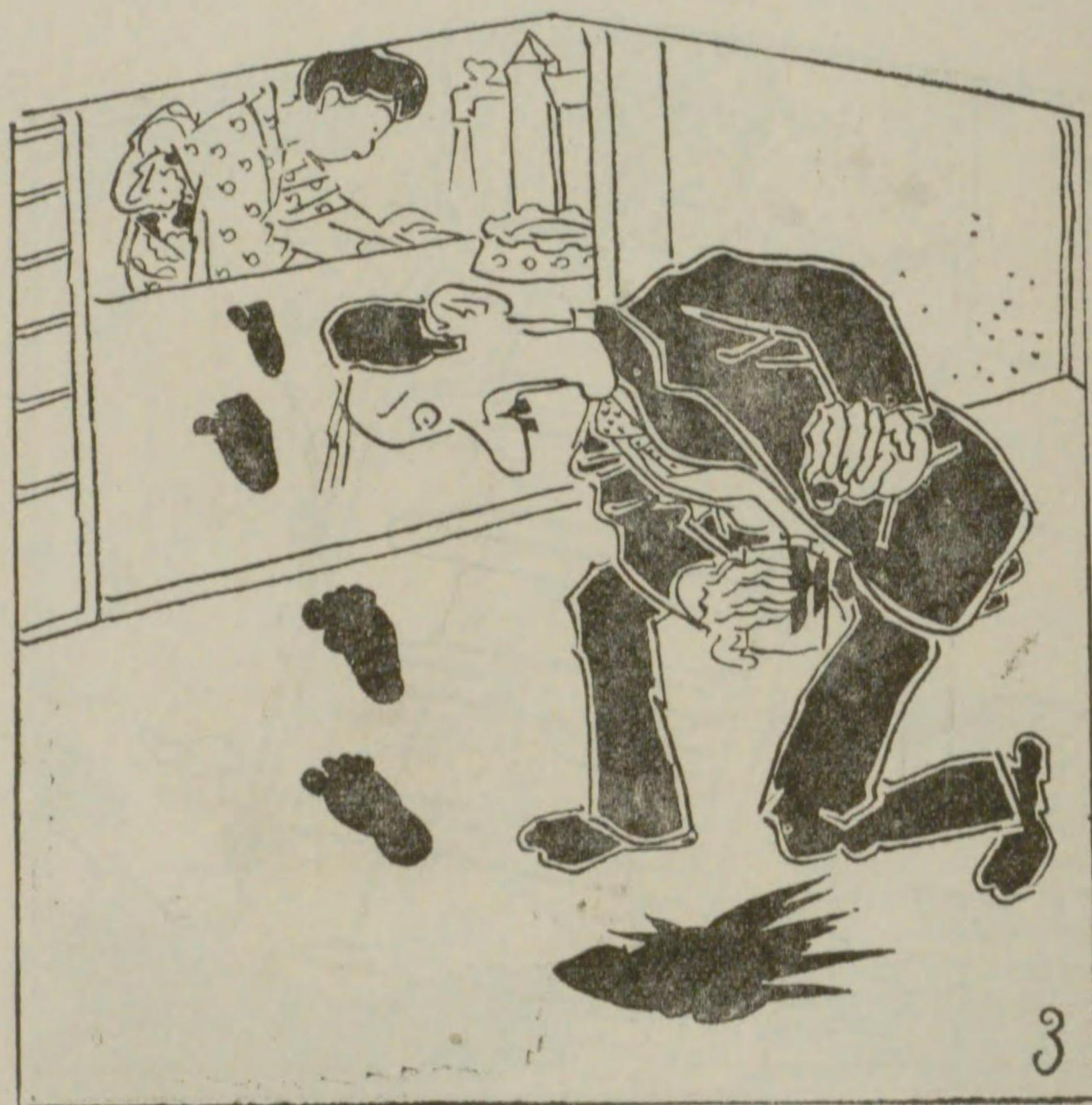
父兄の方、このお子の入學を許可  
 いたします。」  
 八  
 二三日経つておひさ人成を連れ  
 大通りの玉子屋の前を通ると、入  
 學試験で人成と競争者だった佐伯  
 三太郎が店に居る。おひさ思はず  
 「あつ、玉子の圓太郎ベストうま  
 いと思つたら、玉子屋の悴だつた  
 のぢやな。やい、玉子屋の息子、  
 玉子屋の息子が玉子の圓太郎ベス  
 トがうまいのは當り前だぞい。そ  
 れに負けたとて人成の恥ぢやない  
 ぞい。これでよろしく。」と怒鳴  
 つて過ぎた。





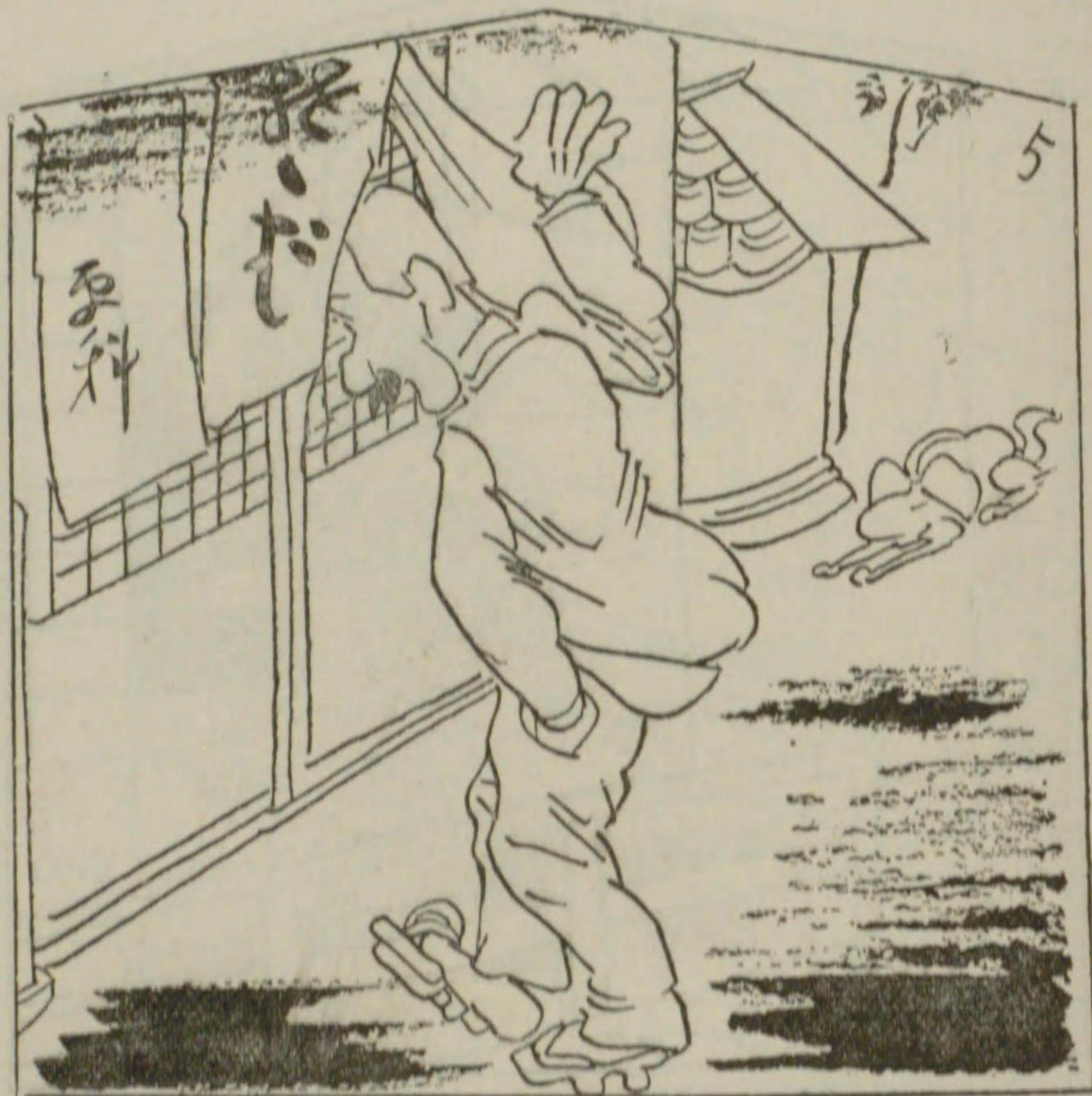
2

二  
 扁平足といふのは土踏ますの無い足をいふので、この足の児童は疲れ易い。幹人半紙へ人成の足型を取って見て「いや扁平足ぢやない。ちやんと土踏ますの處の紙地が開いて居る。」その時母おつま臺所へ雑巾を取りに行かうとして墨汁の罐へ蹴つまづく。幹人「氣をつけないか。そら、墨汁の罐に鼻緒はすわつて居ないぞ。」

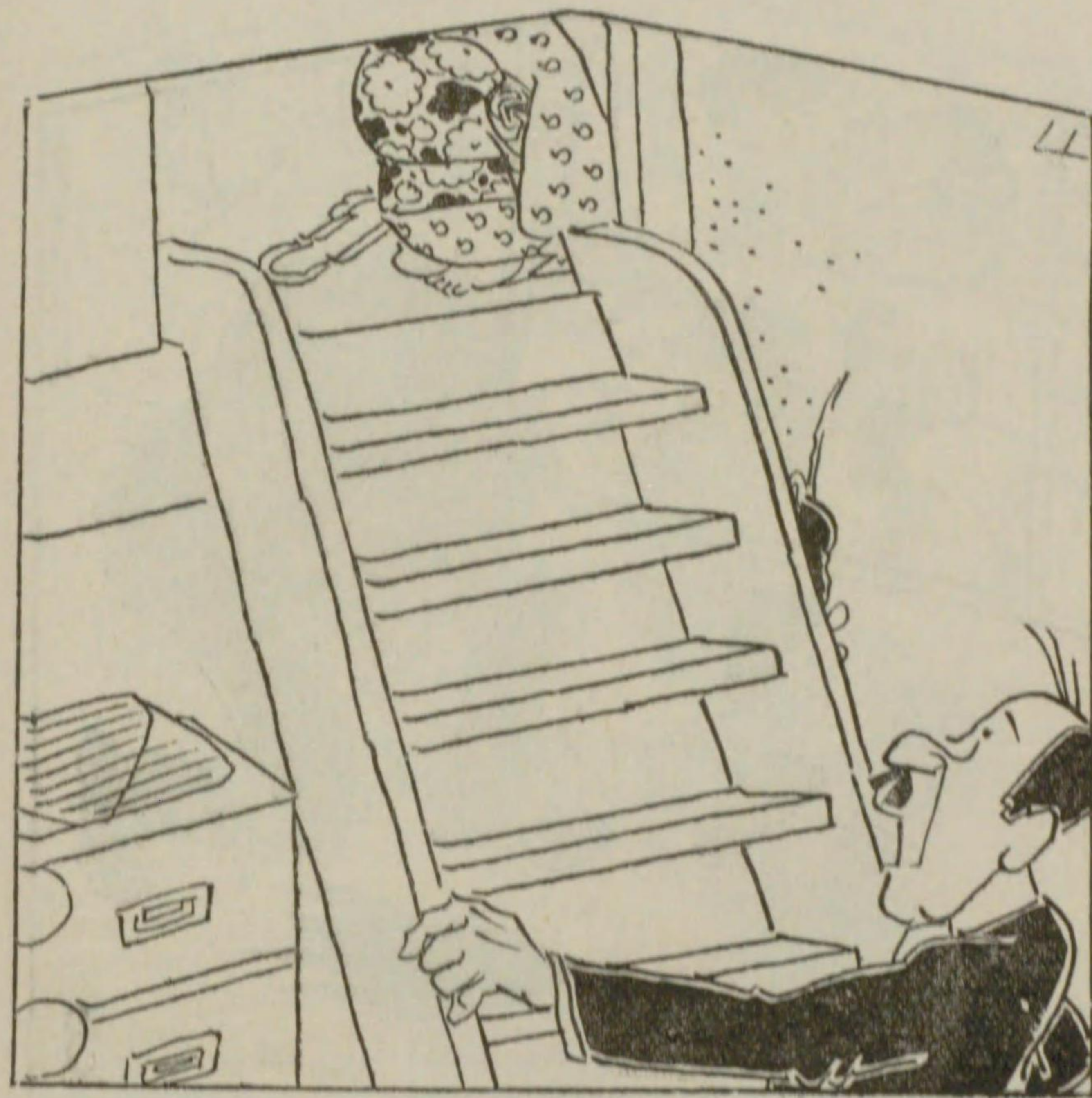


3

三  
 おつまが臺所で掃除の用意をしてる間に、幹人轉けた墨汁の罐の蓋をし乍ら、ふとおつまが疊の上へ残した足痕をみて「やあ、おつまお前の足は扁平足だぜ、見ろ、見ろ、だうりで貴様は頭が鈍いと思つた。こんな事なら嫁に貰ふ時足を調べて貰ふんだつけ。」



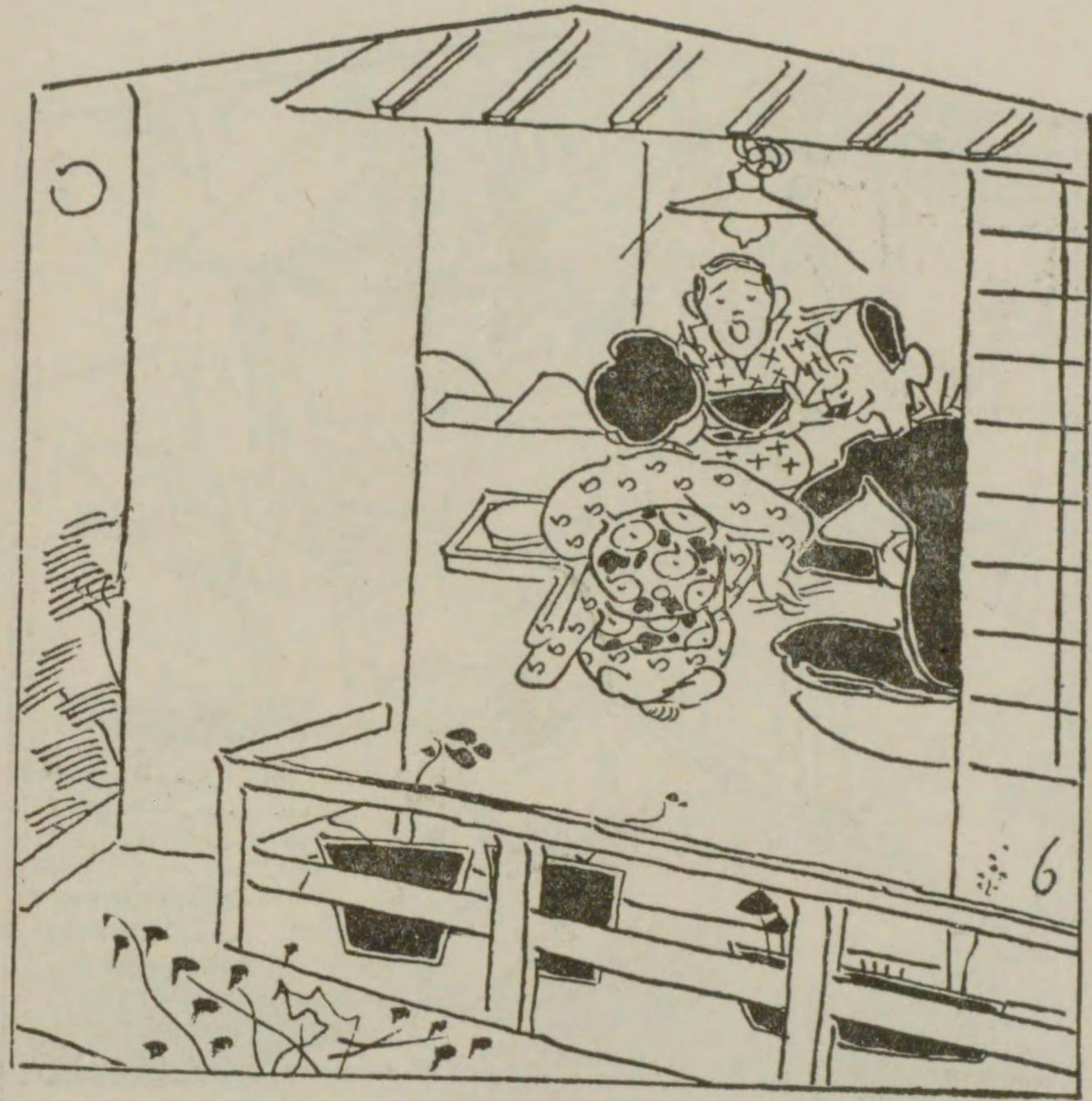
幹人「どんな正常な理由があつても妻を怒らしたら夫は負けだな。直ぐ糧道を断たれるからな。——ご免よ。この先の横町の唯野だがね。玉子とじ四つにもり四つ直ぐに持つて来て呉れ。」  
 「そばの番頭へい、有難うムい。」



幹人「おつま、降りて来て呉れ。もう晩餐の時刻ぢやないか。人成も腹を減らしとる。」おつま「知りませんよ。どうせあたしは頭の鈍い扁平足ですからね。恫巧なあなた方のご飯拵へする資格はありませんのよ。あんまりだつて、何だつて結婚してもう十年にもなる今になつて扁平足だから貰はなければよかつたなんて。薄情ッ！」  
 ア~~~~(泣く)

四

五



六

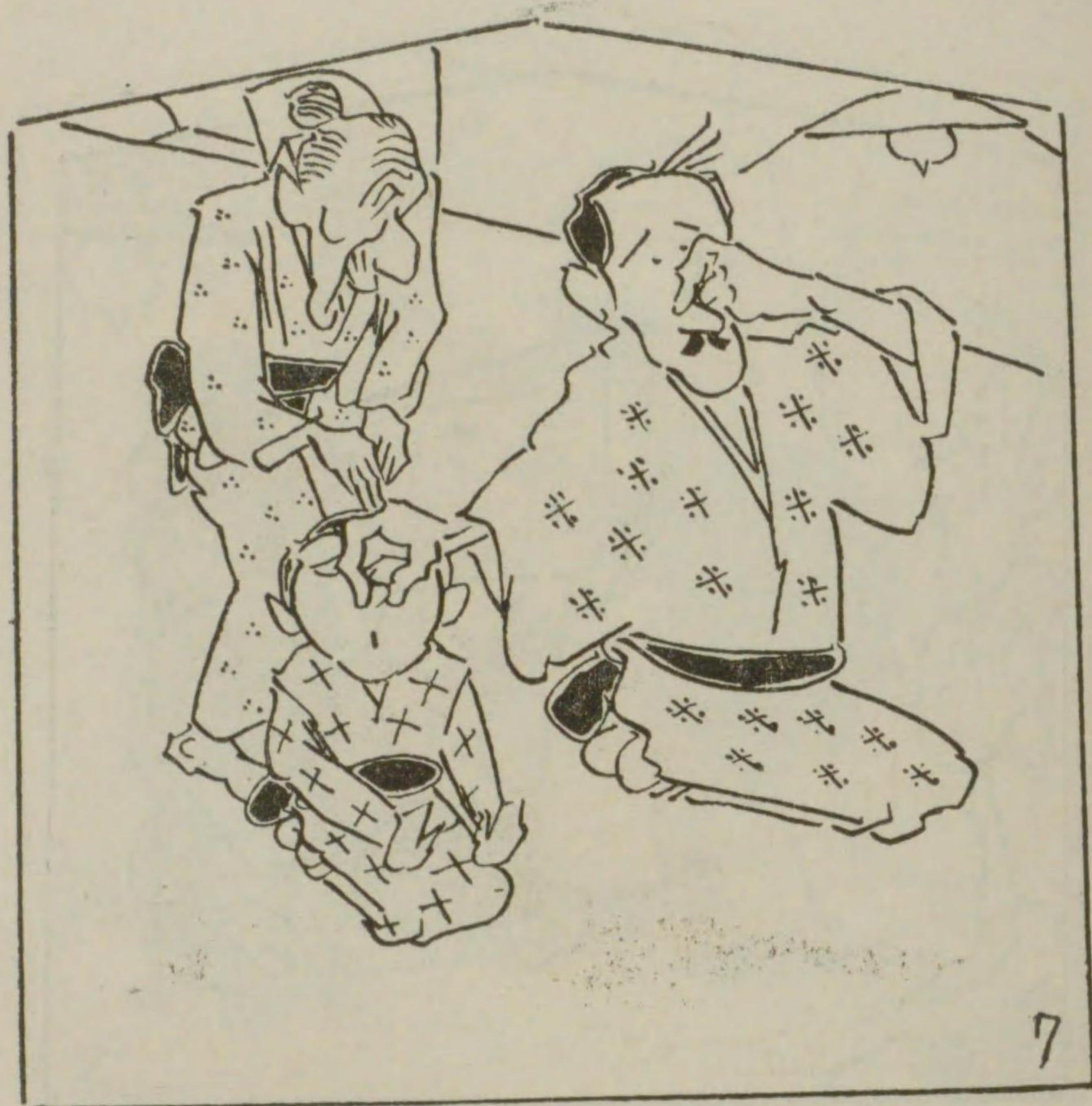
人成「どうして今夜のご飯おそば

なの、僕が扁平足で無かつたお祝

ひ。」此問ひを受け幹人とおつま

肘で互に突き合ひ妙な苦笑を交

す。



七

晚餐後、今度はアデノイデーの  
有無の検査に取りかゝつた。鼻と  
咽喉との間の壁にある扁桃線が肥  
大して子供の心身の發育を妨げる  
ものである。幹人人成の口中を覗  
きて後、自分の鼻と人成の鼻とを  
抓み較べて考へて居る。

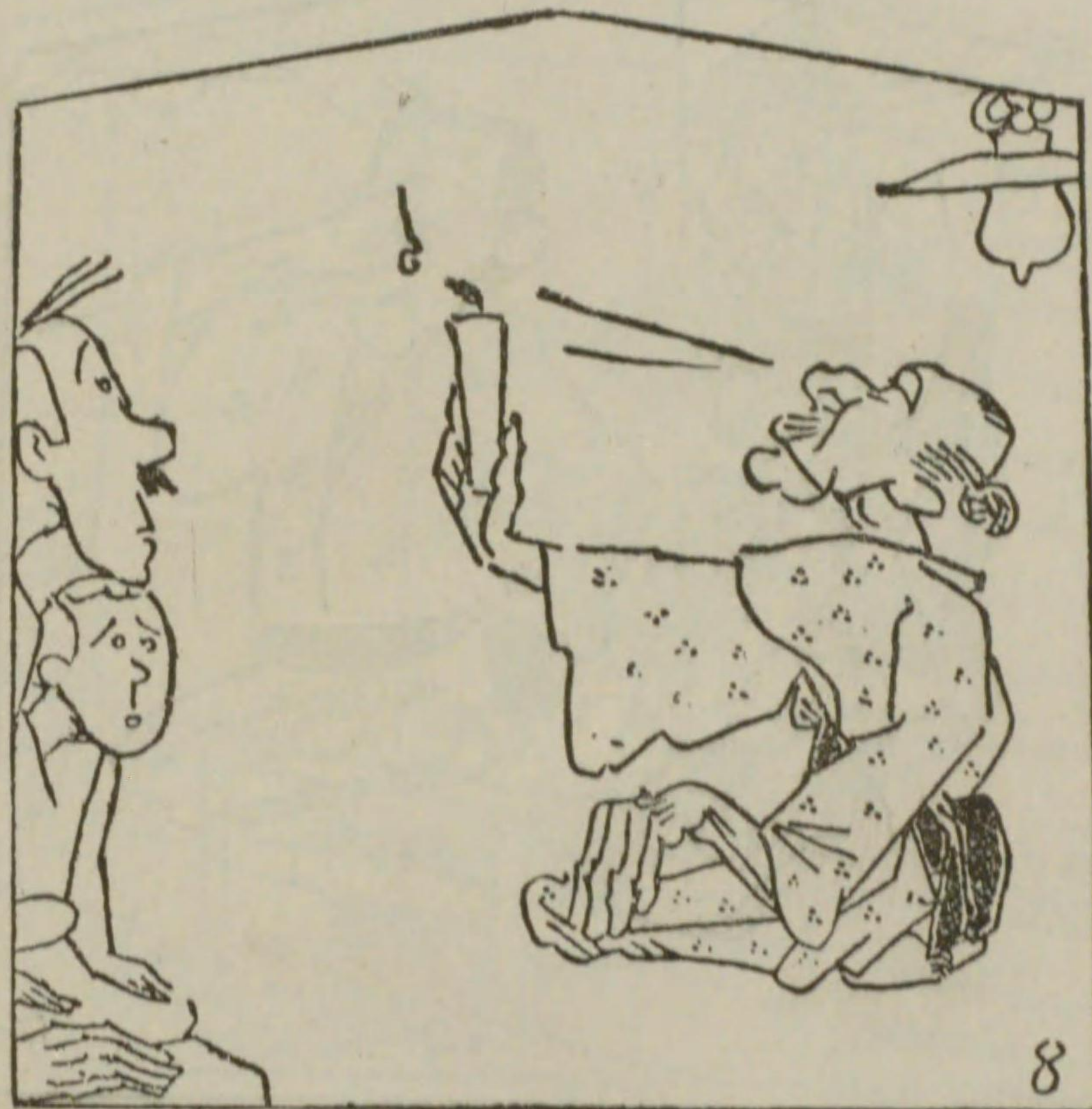
入つて来た老母おひさ「また圓  
太郎ベストの稽古かの。」幹人「い  
や。——あのおつかさん、あなた  
は鼻はお悪くありませんか。鼻の  
悪いのは子や孫に傳はるさうです  
よ。」



1

盗 癖 模造銀貨  
 不良少年狩り

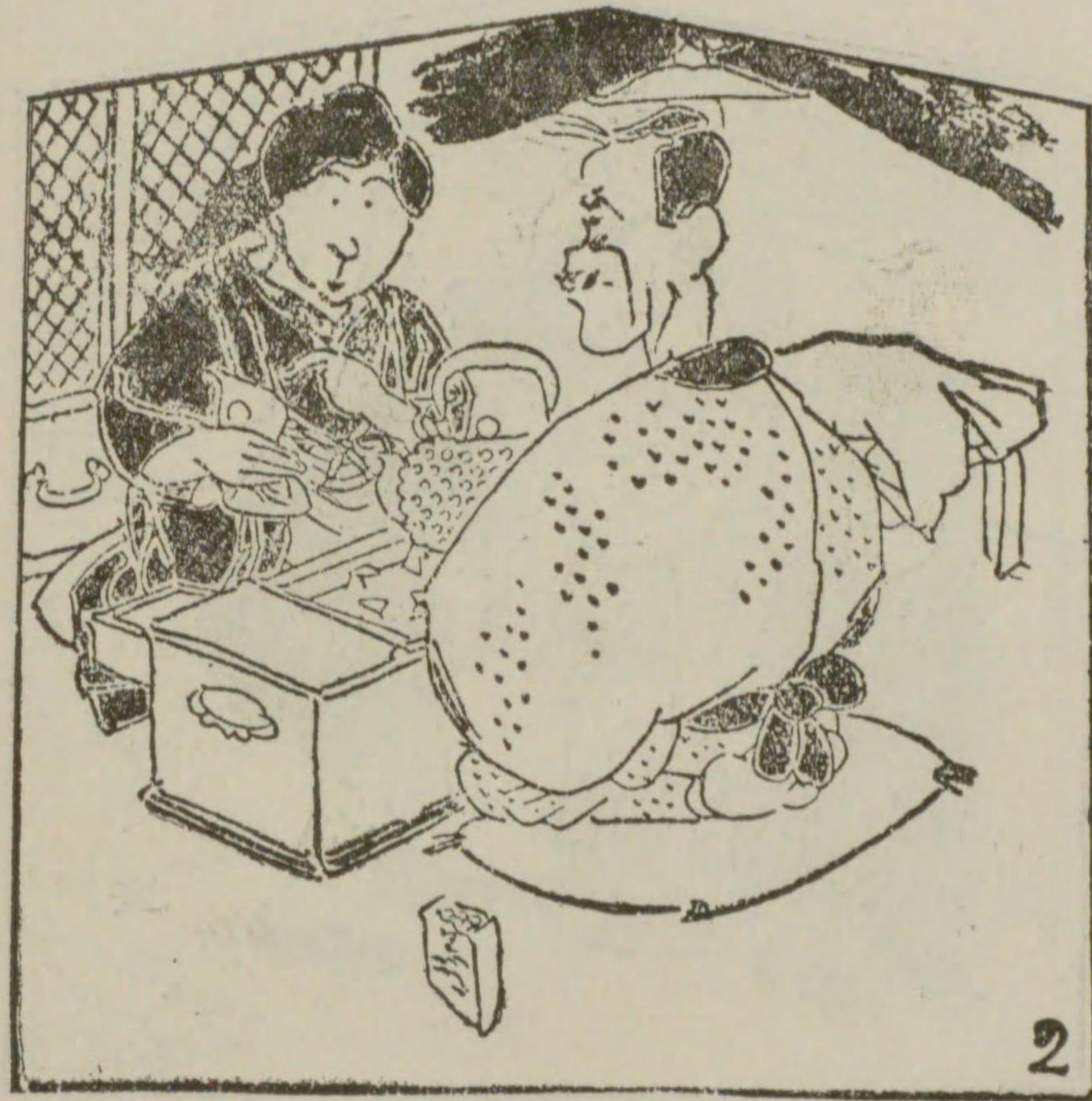
人成が學校の歸り路を待受けてこの界限の不良少年鼻ピコ（平公と地下鐵剛二といふ二人が、河岸の石置場へ引ずり込み脅迫しました。）「やい、人公手前家から錢を盗んで來い。さうしたら俺達の覆面團へ入れてやる。俺達の仲間へ入るとそりや面白えぞ。活動はたゞ見せてやる。義賊も働くんのだ。」錢を持つて來いよ。來ないと（拳固を槌へて）「これだぞ。覚えて居ろ。」



8

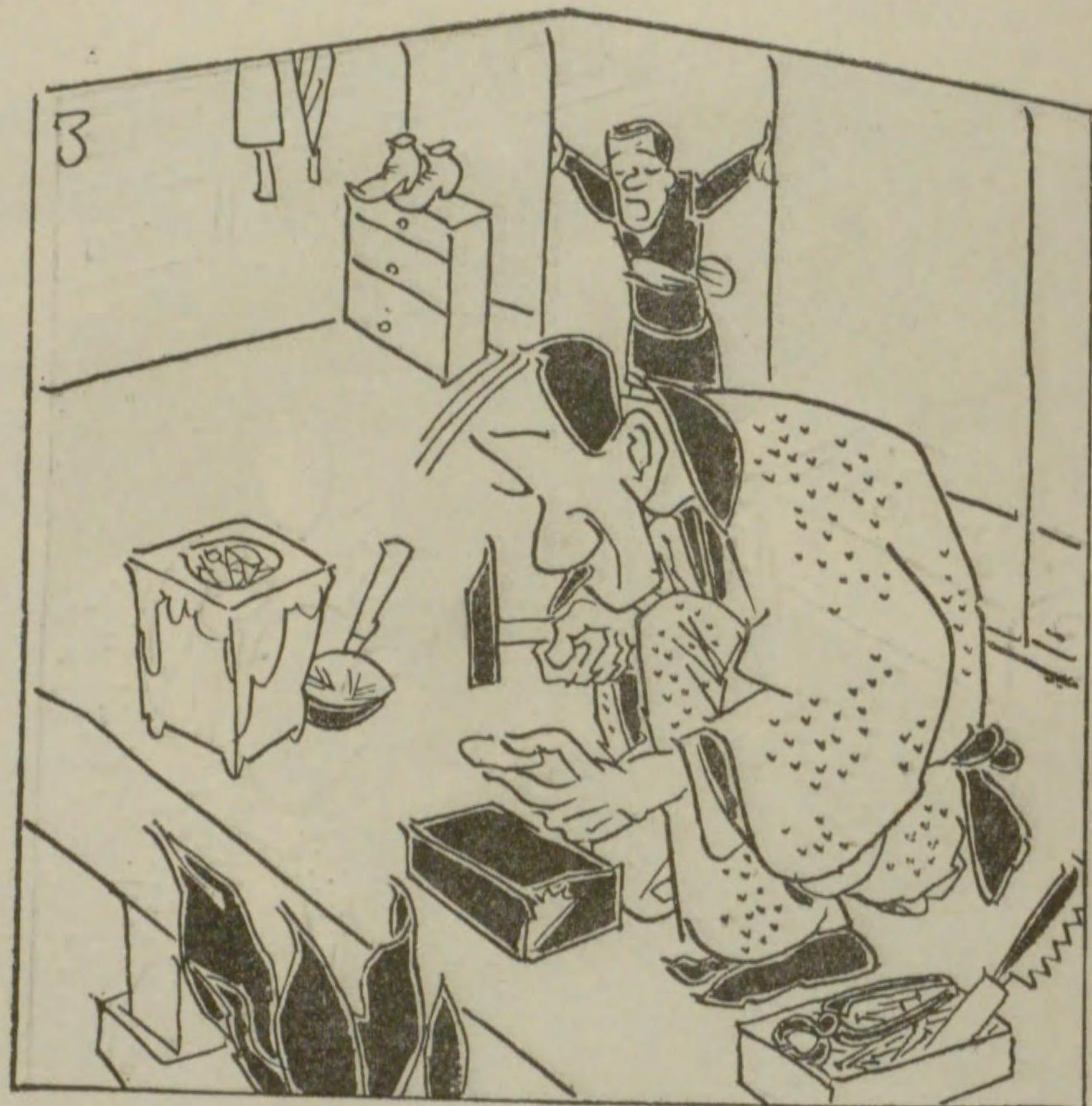
八

おひさ「親に難癖をつけては濟むまいぞな。わしの鼻はよく通りますぞな。今證據を見せてあげうわい。」蠟燭を灯して二三尺離し鼻息一つで吹消して見せる。そして「これが出来る女は胸が強い女ぢやて、一生病にかからぬと昔のいひ傳へちやぞな。それで昔は誰れも安心して嫁に貰うたものぢや。」

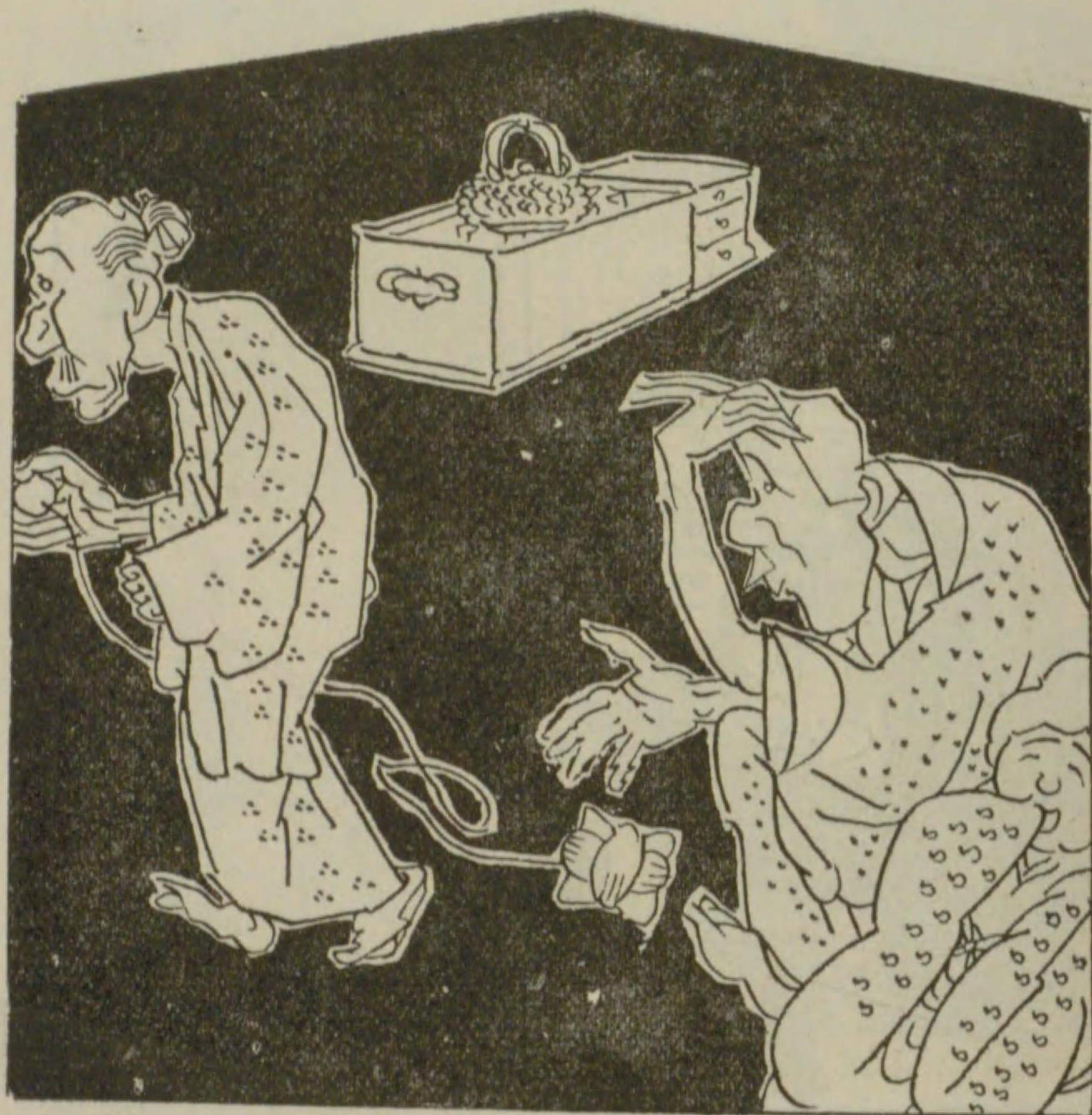


2

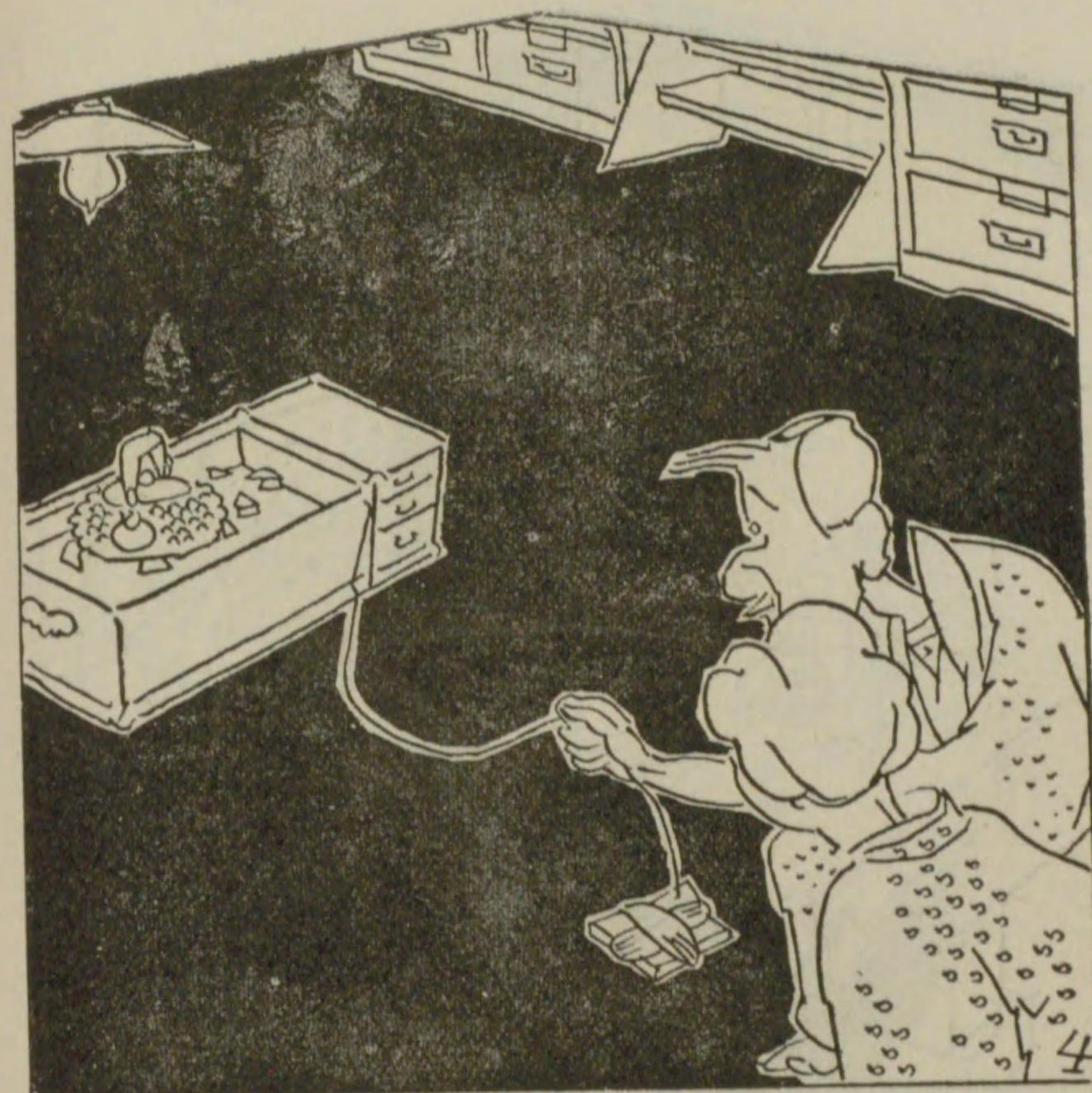
二  
それから半月程経つたある夜母  
おつま、夫の幹人に向ひ「どうも  
このごろ人成が夜遊びしていけな  
いのですよ。それに嫌な話です  
が火鉢の引出しへ入れて置くあた  
しの財布のお金がちよ／＼無く  
なるんです、まさかと思ふん  
です。」「おい／＼無暗に子供を疑つ  
たりなんぞして子供の爲によくな  
いぞ、よく勘定しといたか。」「あ  
たしもさう思ふのですが、勘定を  
しといてそれで無くなつて居るん



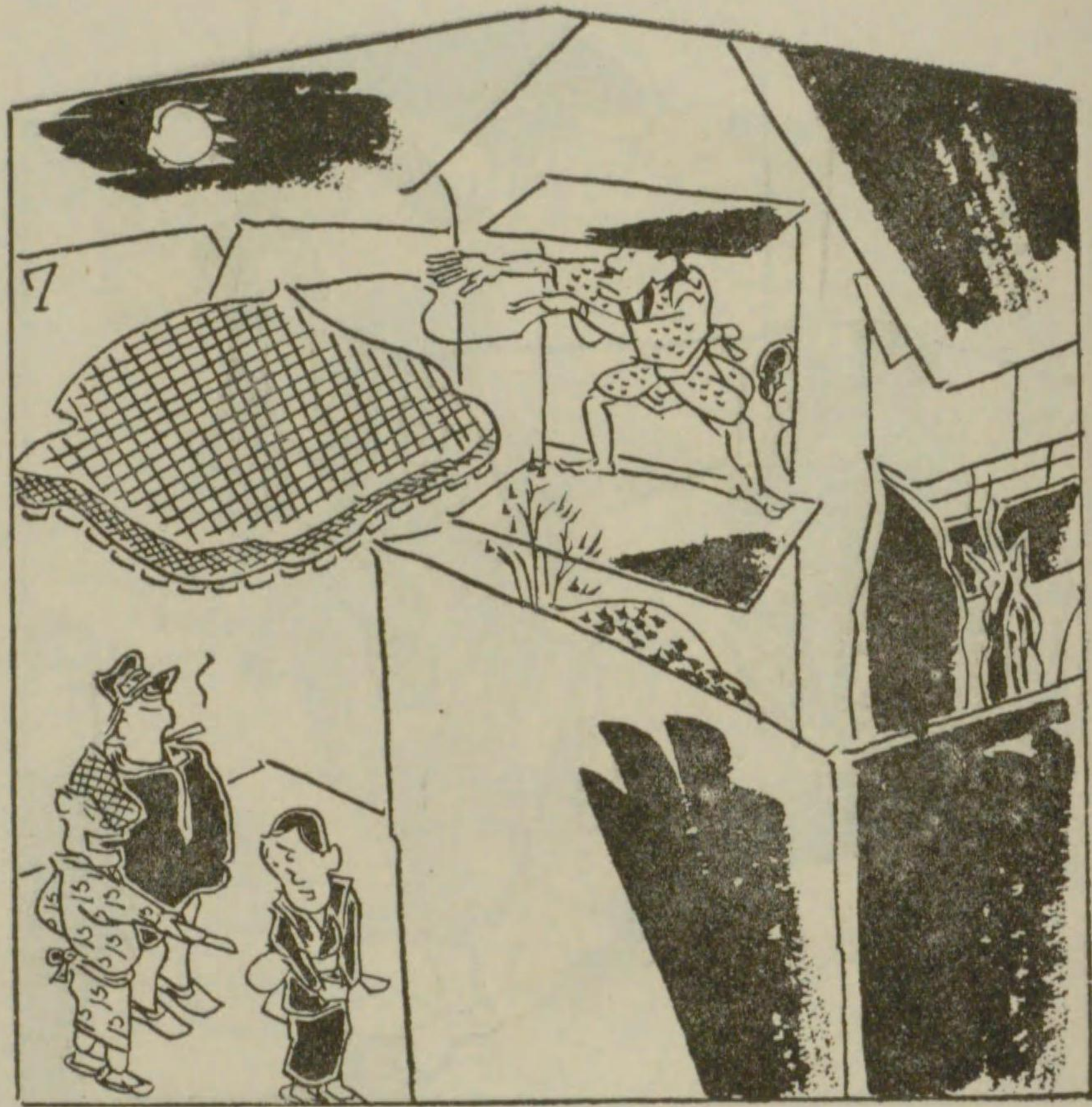
三  
その翌日 人成「おとうさん鉛を  
固めて何慥らへてるの。」父幹人  
小聲にて獨言「貴様が變な眞似を  
始めたのでこんないやな試験道具  
を拵へにやならないのだ。子を持  
つと種々の目に逢ふもんだ。」そ  
れから普通の聲になつて「うむ。  
何でもいゝ。あつちへ行つて居  
る。」



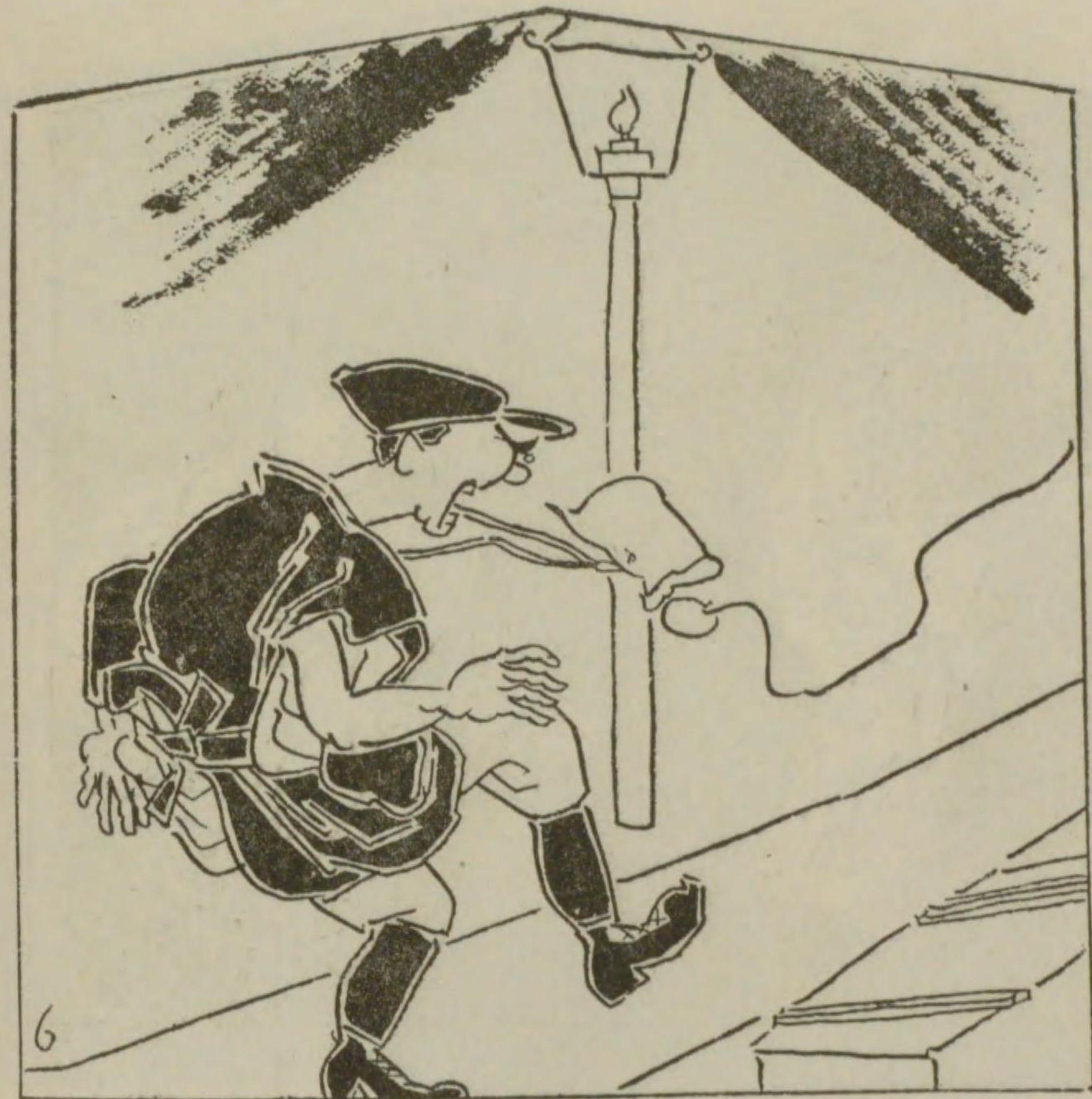
幹人とおつまは良を慥へて待つて居る。其時臺所にてご用聞きの聲「今晚はご隠居さんがお誂への焙茶を持つて参りました。」おつまが立上らうとする時二階から祖母おひさの聲「はいくお茶やさんかね、ご苦勞ぢやつたの、おや眞暗でおつまはどこへ行つたのぢやぞい。此邊に長火鉢があつた筈だ。おゝあつたく。」とおひさ手探りで長火鉢の抽出しのお妻の紙入れより糸のついた鉛を銀貨と思ひ



四  
 其夜、父幹人「鉛で五十錢銀貨の模造を拵へてそれをかうやつておつま、お前の火鉢の引出しの財布の中へ入れて置く、鉛からかう糸をつけてこつちで端を持つてる。電氣を消して呉れ、静にく。今に人成が来て鉛を銀貨と間違へて持つて行く、そこを糸を引つ張つてのつ引きならぬ證據を押へて、思ひ切り折檻してやるのだ。」  
 お妻「あんまり可哀相ですわね。」  
 幹人「それ、さう氣が弱いから子供がいゝ氣になるのだ。」



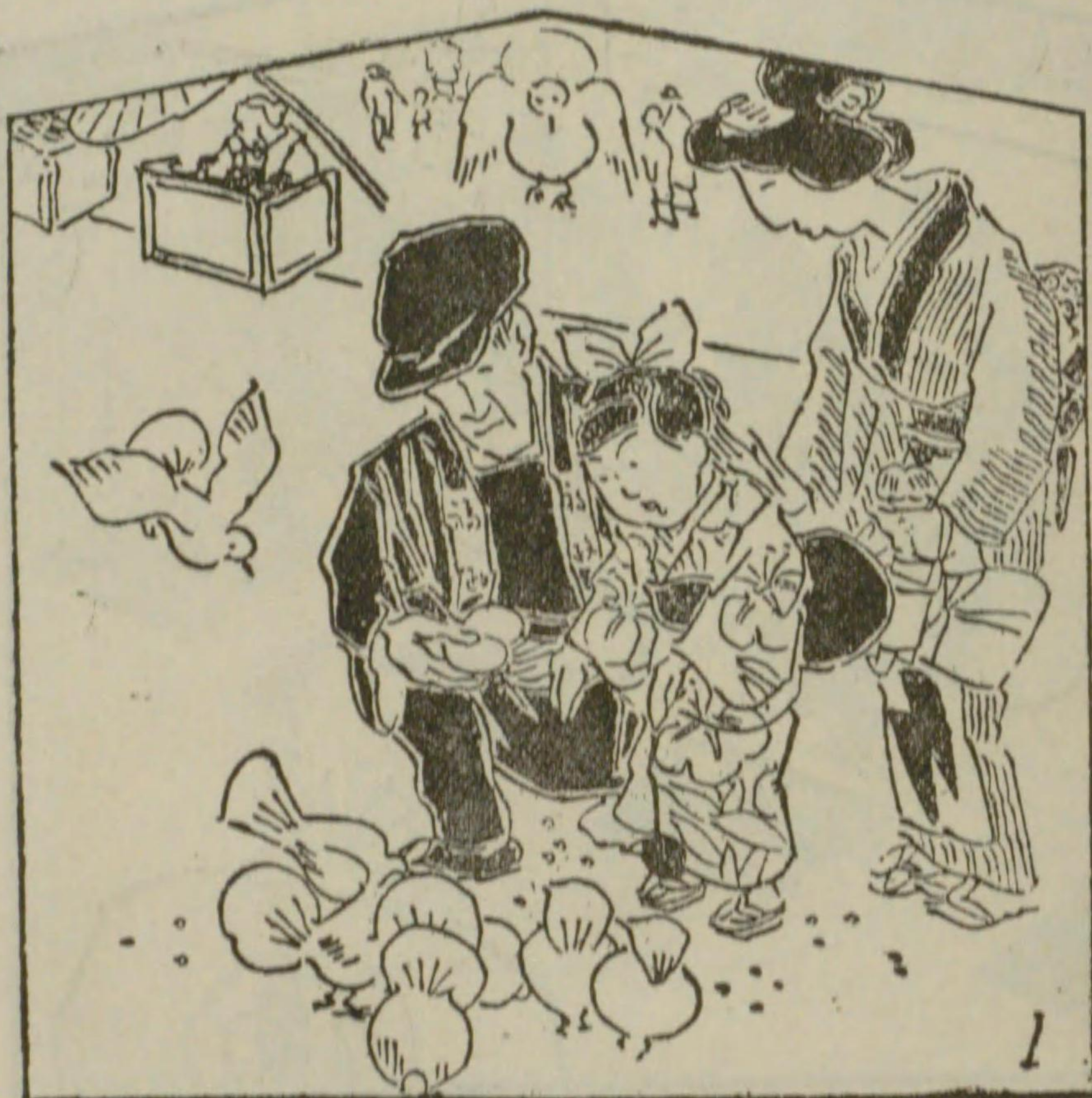
其翌日、おつま「何でも、夜にな  
 ると裏口へ不良少年が来て口笛を  
 吹いて人成を呼出すのですよ。そ  
 して悪い智慧をつけるのです。」  
 幹人「よし捉へてやろう。」  
 お妻「若い者の足が早くて何んで  
 あなたに捉へられるものですか、  
 それに向ふが双ものでも持つてる  
 と飛んだ怪我をしますよ。」父幹  
 人暫らく考へて「俺は國に居た  
 時投網がうまかつたのだ。一ツ不  
 良少年共を投網で捕つてやろう。」



取出して、茶屋の小僧に與へる。  
 「たしか五十錢ぢやつたなう。」  
 小僧「へい左様で△います。」

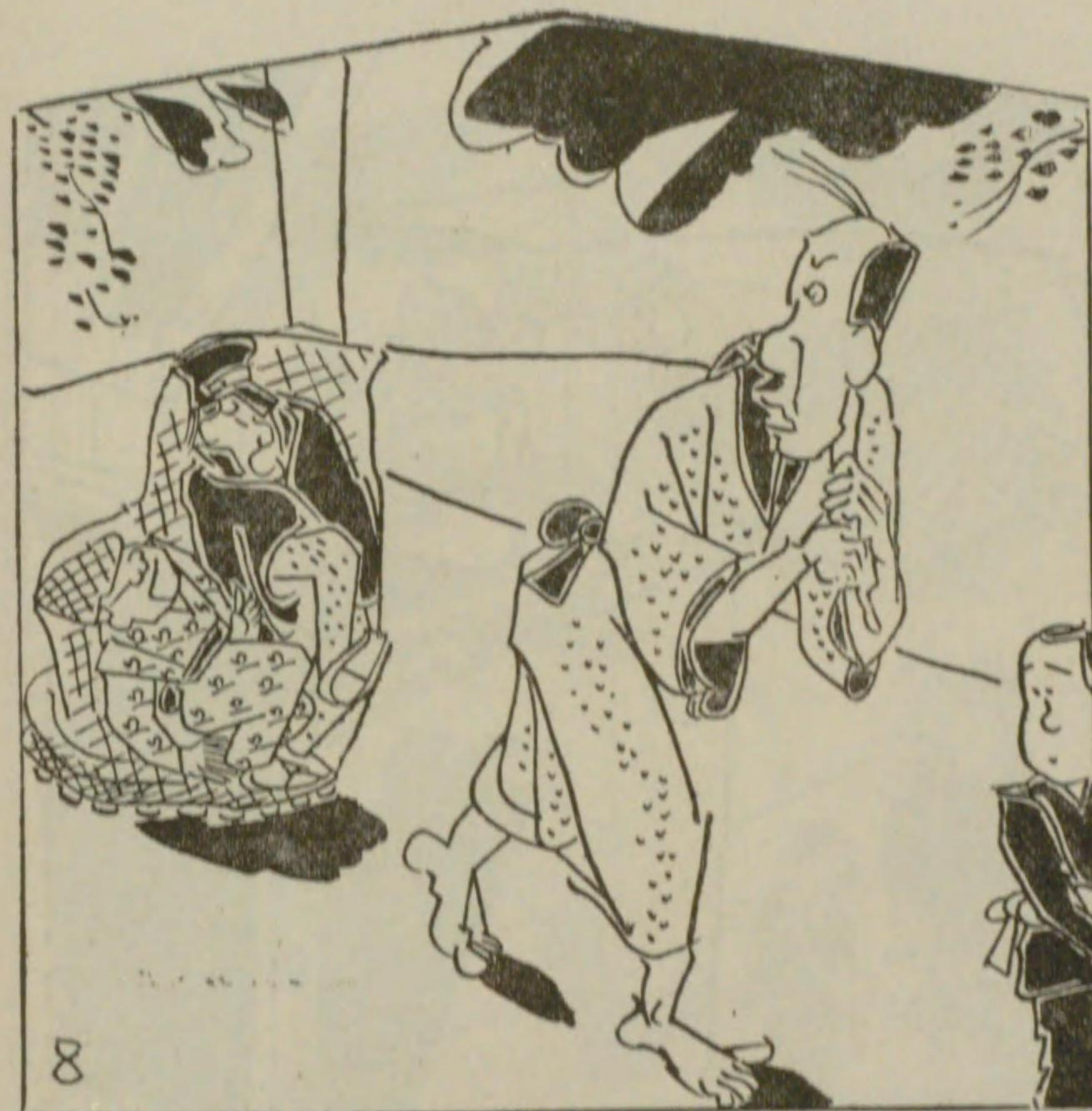
六

茶屋の小僧ストン節の鼻聲混  
 り路地を戻つて行く「ストンス  
 トンと通はせて今更いやとはど  
 うよくないやならいやと最初から  
 聞けばストンで通やせぬスト  
 ン〜。」此時幹人うっかり糸の  
 玉を踏み押へる。小僧の財布より  
 模造銀貨筒り出る。小僧「キヤツ。」



卷ちゃんの生立ち  
 普請落成の家・日本髪に洋装

一人成の隣の幼馴染、卷ちゃんの  
 その後はどうなつたでせう。卷  
 ちゃんの父は福島政八といふ一寸  
 した大工でした。性質も温良で、  
 この職業の人にはまゝある放埒、  
 亂酒といふやうな素行もありませ  
 なんだ。一日十五日の休日には妻  
 お藤、卷ちゃんを連れて淺草觀音  
 へ参詣し、卷ちゃんに鳩へ豆をや  
 らせて楽しむといふ平和な家長で  
 した。お藤は舊日本の典型的の忍

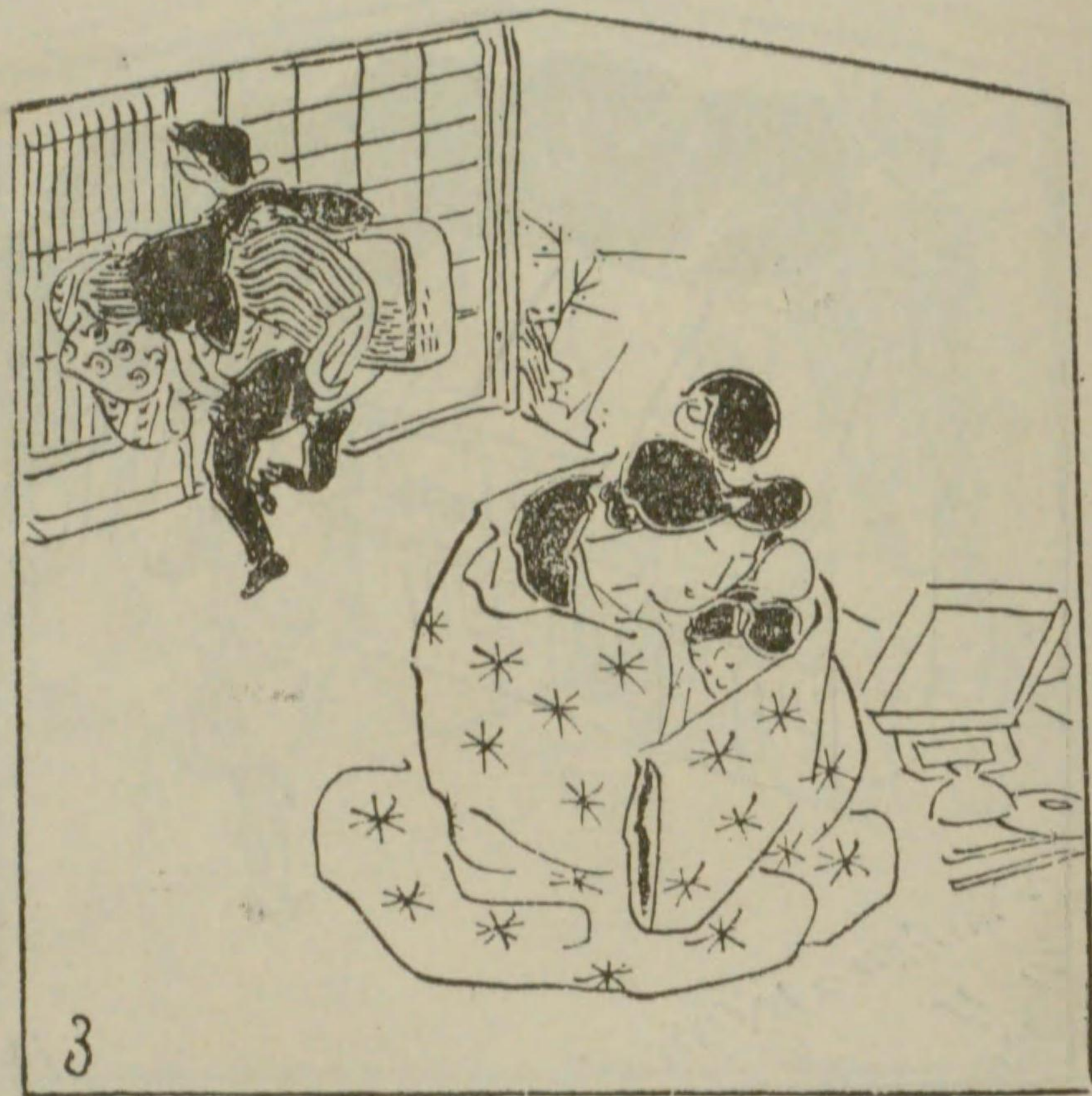


これならば危険はない。」おつま  
 「大丈夫ですか。」

八

幹人の技倆はたしかだつた。首  
 尾よく鼻ピコ（平公）の平公、地下鐵剛二  
 を網へ入れて、「さあ、警察へ連  
 て行くく。」と脅かす、流石の  
 不良少年共も泣聲であやまつて、  
 以來人成を誘惑せぬ事を誓つた。



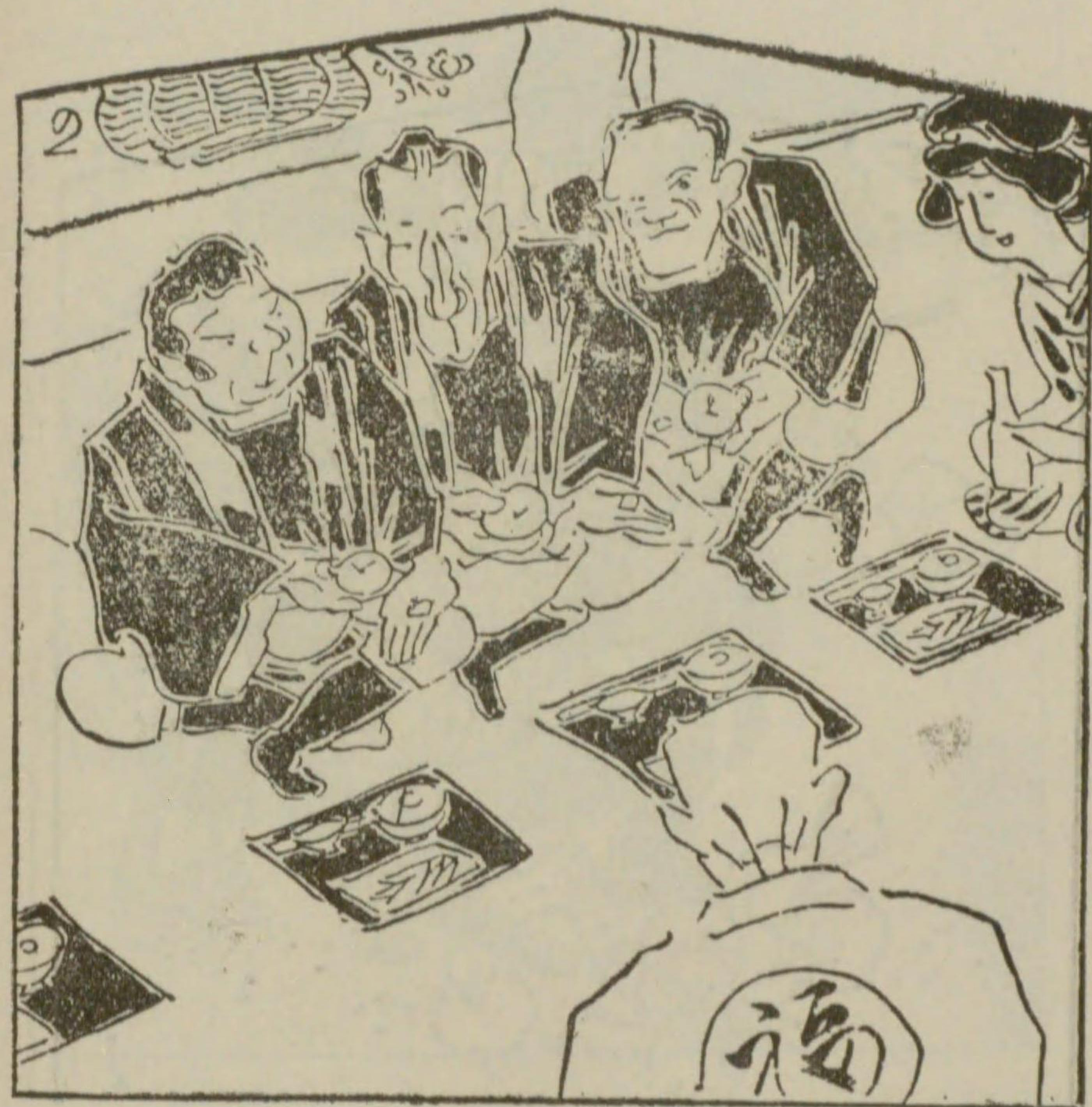


3

して見ました。そしてみんなが政八の顔をちらと見ました。政八は並の働きしかしてないので金の指環も金時計も持つて居ませんでした。

三

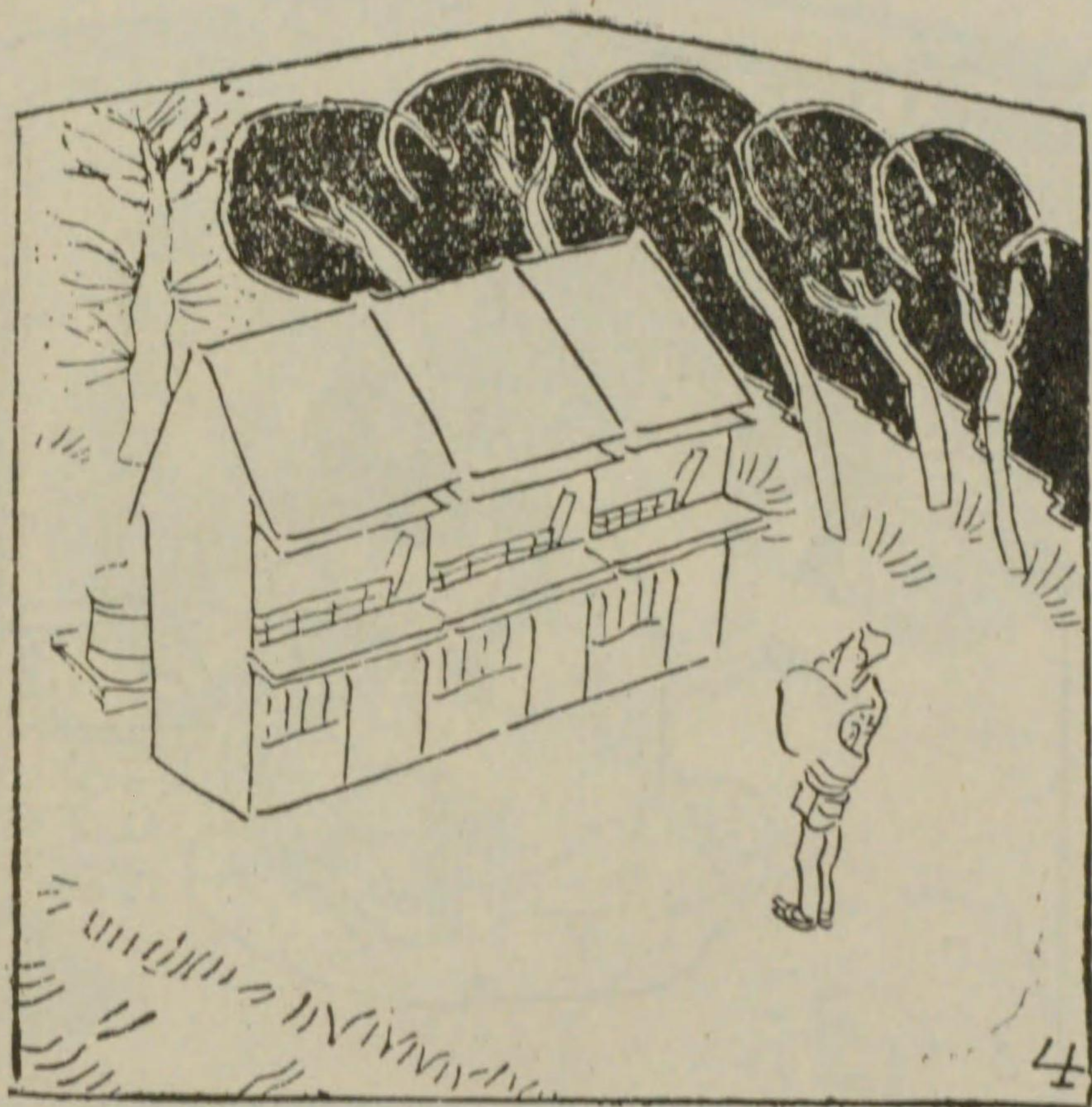
宴會から歸つた政八は蒼い顔をして居ました。それから二三日して彼はありたけの無理算段してこの頃盛に拓かれて来た東京郊外の地所を借り受け、家を建て始めました。材木の代價や下職の手間は出來上るまで手金だけ打てばよいのですが、それだけの金でも政八



二

從な女でした。

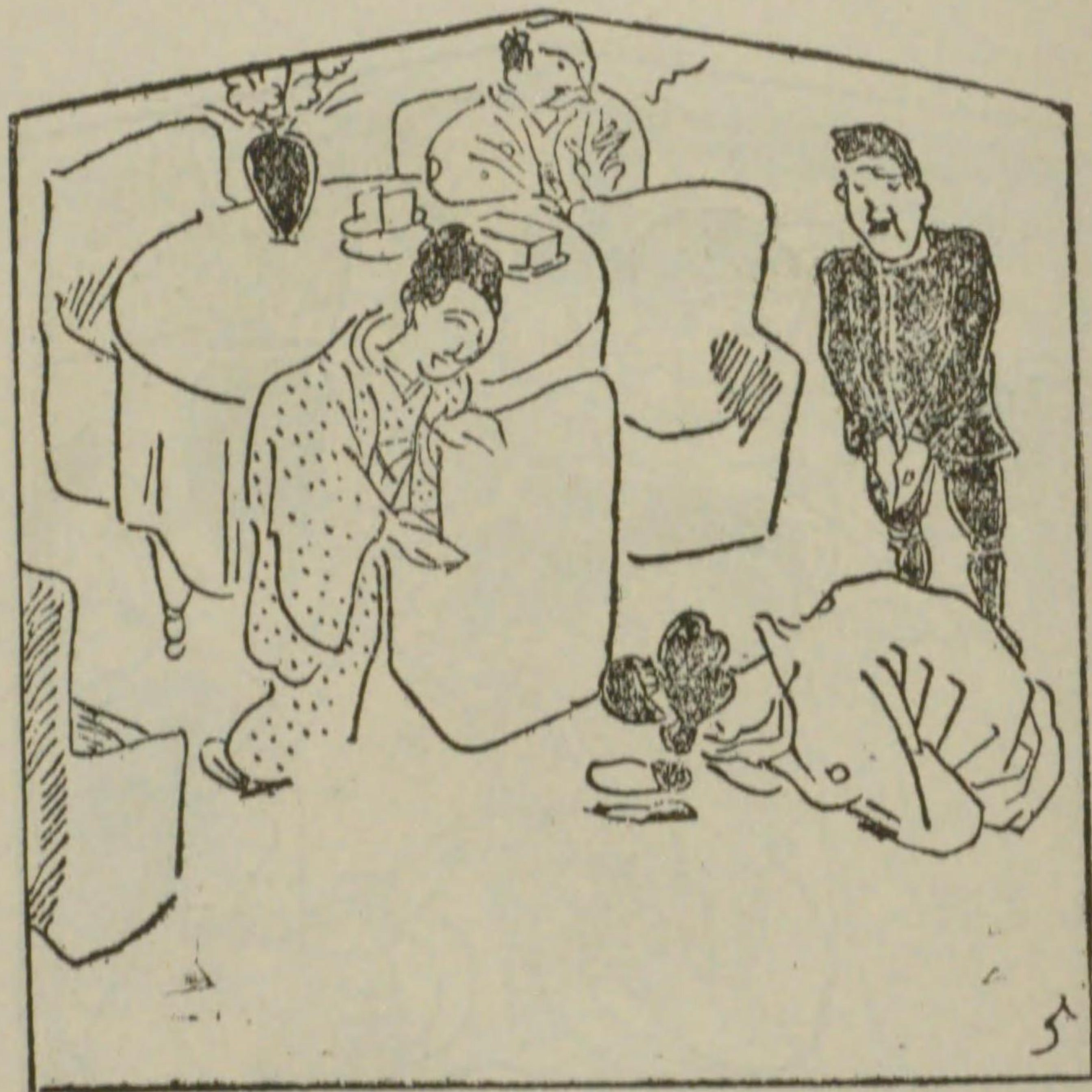
ある時政八は仲間の宴會へ出席しました。その頃世間は上景氣の最中、抜目のない仲間の大工達は福々でした。節の太い手の指に幅廣な金無垢の指環を揃つてはめて居ました。中の一人がふと氣がついた様に、「揃ふのが大分遅い様ぢやないか、今何時だらう。」さういつて縮緬の帯の間から牡丹餅大の金時計を取出して見ました。外の大工も「さうだ何時だらう〜。」と同じく金時計を自慢さうに取出



の家では工面に骨が折れました。最後には巻ちやんやお藤の着物まで質屋へ入れ、お藤は巻ちやんと一枚の掻巻に入り、二三日暮さねばならぬ事もありました。巻ちやんは「おつかちやんと二人達磨ちやんになった。」と却つて悦ぶのを見てお藤は考へ込みました。

四

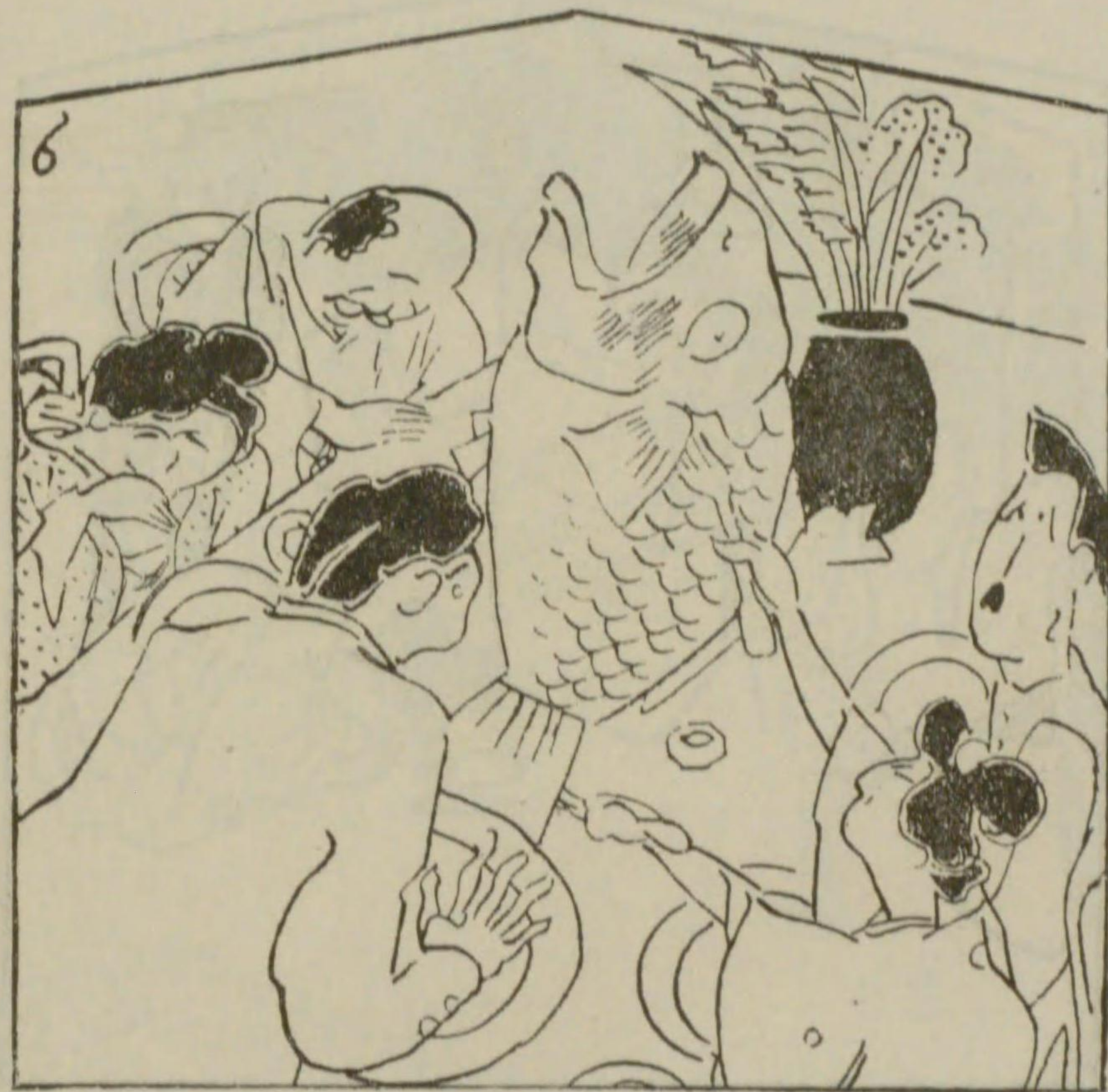
辛くも政八の郊外の家は出来ました。勿論マツチ箱のやうな三軒長屋ですが、家拂底の折柄たちまち買手がつき、政八はほつと息を吐きました。お藤も巻ちやんも達磨さんから逃れました。これを機



會に政八はとんく拍子、一二年のうちに、小さな請負師の仲間まで出世しました。

五

官署の頭株の役人が政八に肩を入れ、引立てかけて呉れました。ある時その役人が政八夫妻を自宅へ晩餐に招いて呉れました。初めてかういふ洋風の應接間へ出た舊日本の女お藤はその儀禮を心得ませんでした。で、先の奥さんが何といつてもお藤は謙遜して床の上に坐り、先の奥さんも困つて「では私もおつきあひに坐つてお話しませう。」とたうとう先の奥



さんをも坐らせて仕舞ひました。

六

一同食卓の席へつきました。ボイルドフィッシュに大鯛を給仕が持つて出ました。フォークとナイフで少しづつ肉を拵り取り、四人で分けるものなのですが、お藤は知らないから一尾フォークに引かけて釣上げ、自分の皿へ運び込んで仕舞ひました。主人側笑ふにも笑はれず。

七

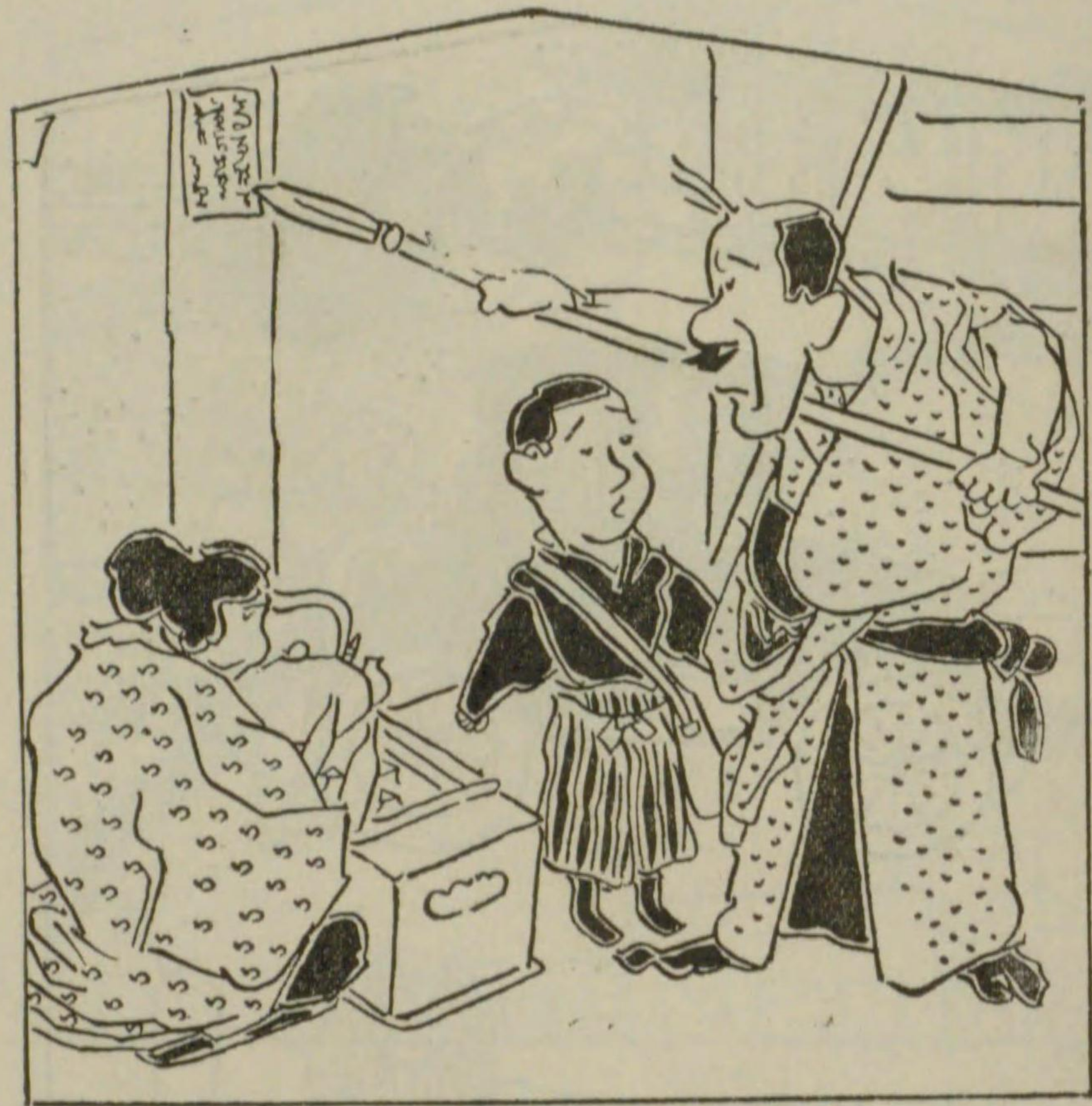
それから一月後のある夜政八の家の裏口からお藤が泣き乍ら出て来ました。そのあとを巻ちやんが



追つて出ました。お藤は溝板の上で巻ちやんの鬚を撫でつけてやり乍ら「巻やおつかさんみたいな馬鹿な女がおとつあんについて居るとおとつあんの外聞にかゝはつて出世のさまたけになるとおとつあんが仰しやるのだよ。無理もない話だ。それでおつかさんはわきへ行くからね。お前もせいおとなしくして、今度来るおつかさんに憎まれないやうにしてお呉れ。」巻「おつかさん行つちやいやよ〜。」

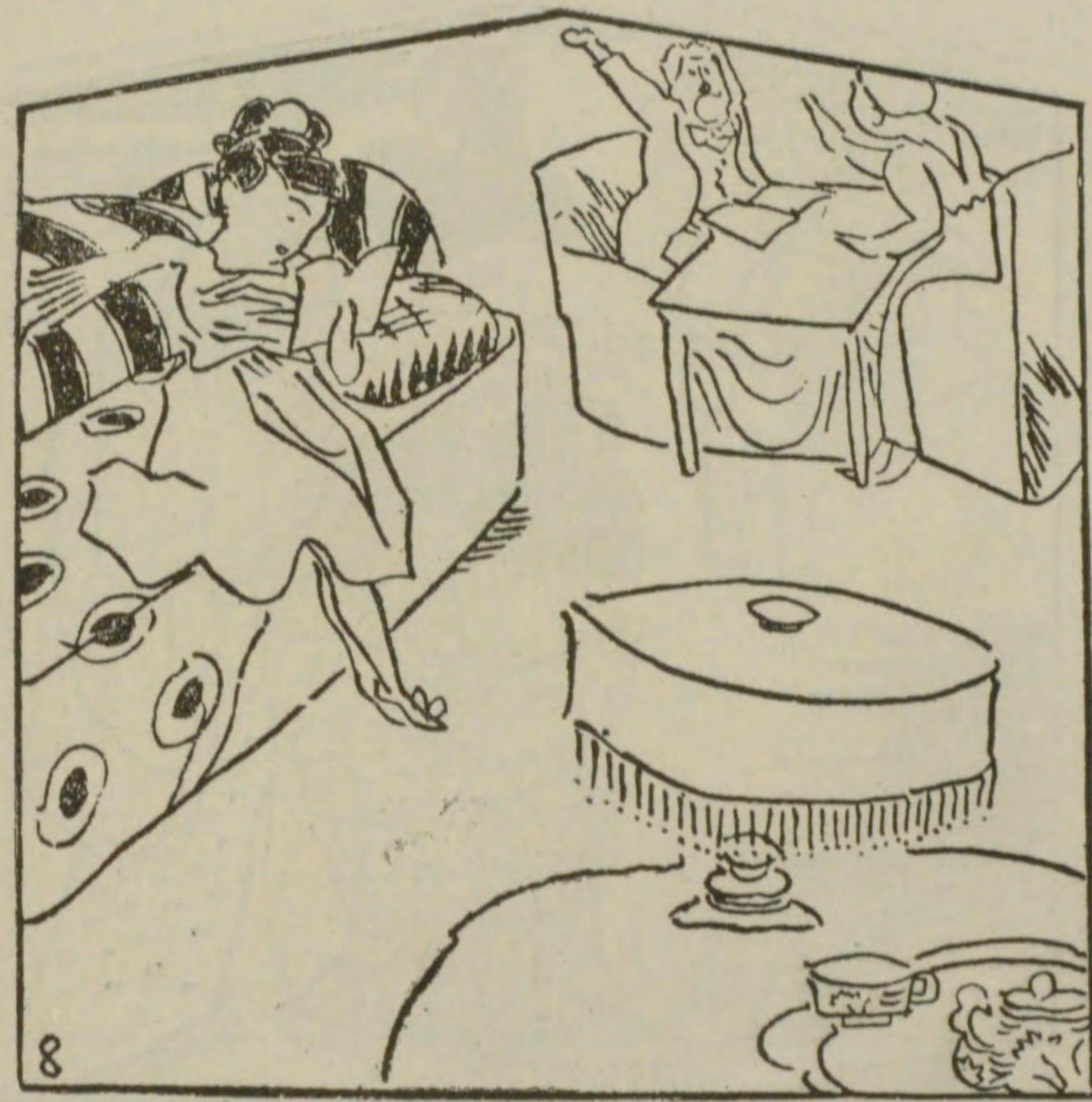
八

政八に後妻が来ました。永く米



7

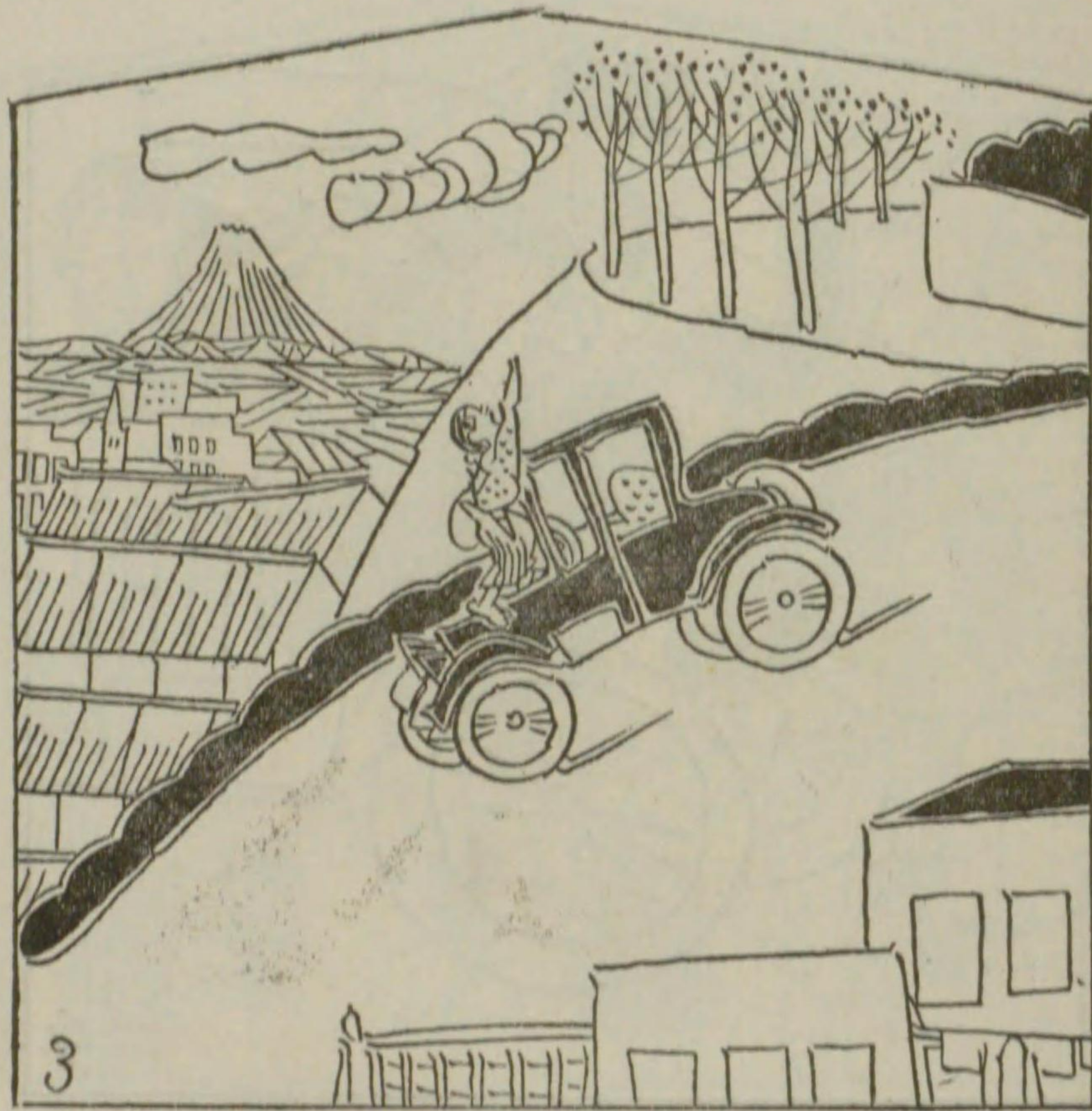
ある朝唯野の玄關に「郵便」といふ聲がしました。父幹人が出てそれを受取ります。幹人は受取った葉書を見て吃驚し顔を蒼くした様です。ご飯も碌々喰べません。人成はご飯を喰べ終へ部屋へ入り學校行の支度をして出て来て見ると、幹人は其葉書を柱に貼りつけおばあさんの槍を持つて来て口惜しさうに突き破つて居ます。そしてこんな事をいつてます。「丸九年も一生懸命勤めたのに葉書一本で免職とはあんまりひどい、いま



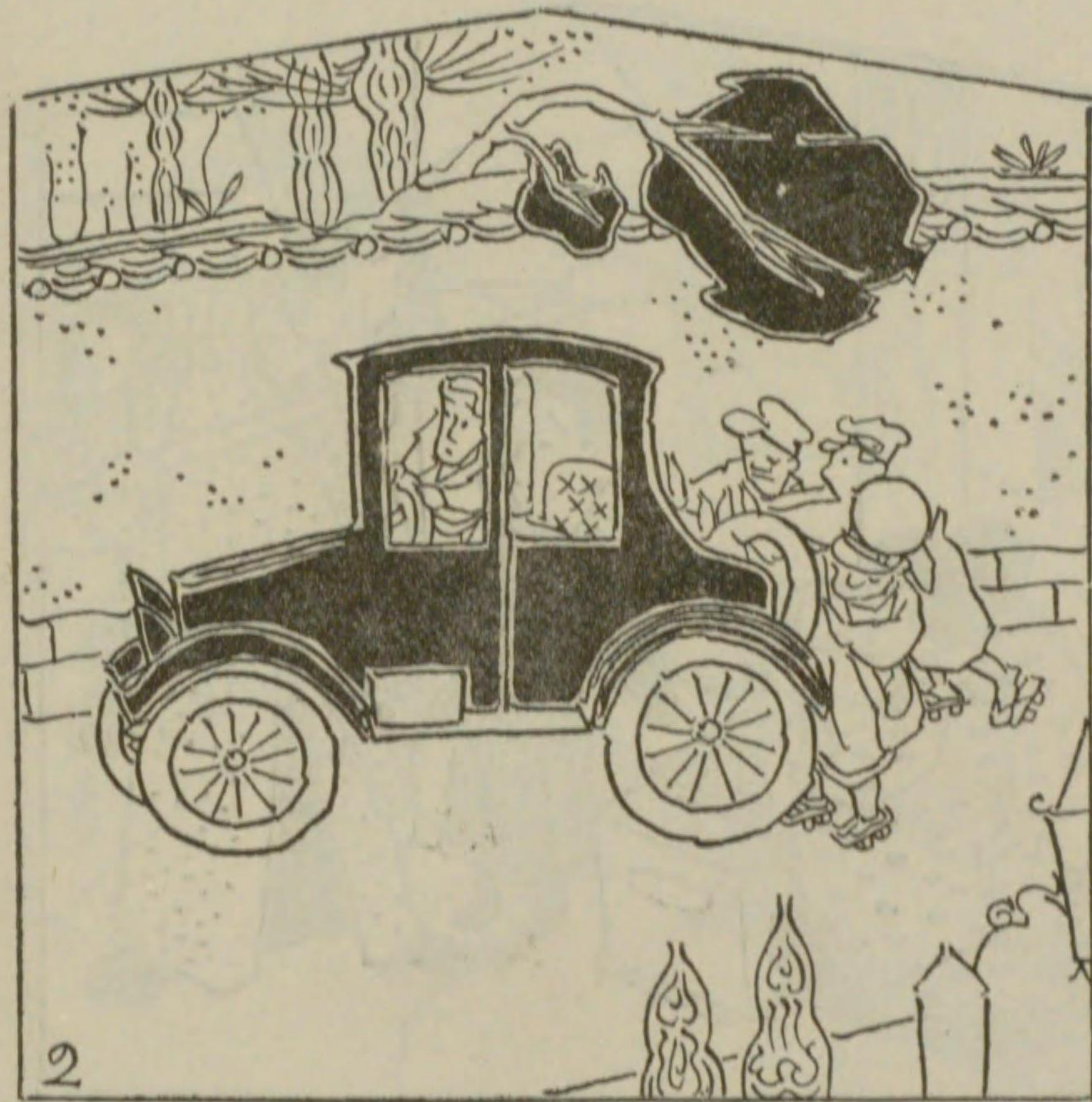
8

國に行つて自分で働いて勉強し、この頃歸朝した女ださうです。政八の家庭の様子がすっかり變りました。卷ちゃんも洋服姿にさせられました。けれども、生みのおつかさんと訣れた最後の晩、おつかさんが手づから撫でつけて呉れた髪が日本髪であるので、卷ちゃんは何といはれても洋髪にしません。洋服で日本髷を結つてます。一生おつかさんの記憶の爲に日本髷に結び通さうと決心してるのです。今廣間で、今度のおかあさんは欠伸をするおとうさんに無理にABCを教へ込んで居ます。

父の失業!! 葉書の磔刑  
小型自動車



達は早速其周圍に蝟集りました。  
 三  
 始めは怖ろしく、悪戯して居た子供達も乗手が来ぬのに追々大膽になつて、中にも人の悪い子は人成を煽動し「人ちゃん、把手へ手をかけたら君偉いや。」人成は煽てに乗りました自動車は動き出す。土堀が盡きる所から坂。自動車はますます速力を早めました。人成「あゝ、いけないく。」と泣聲。  
 四  
 坂は一度谷になり又ゆるい上り坂になるので自動車の速力は鈍りました。けれども坂を上り切つた職業紹介所の建物の扉を破つて中

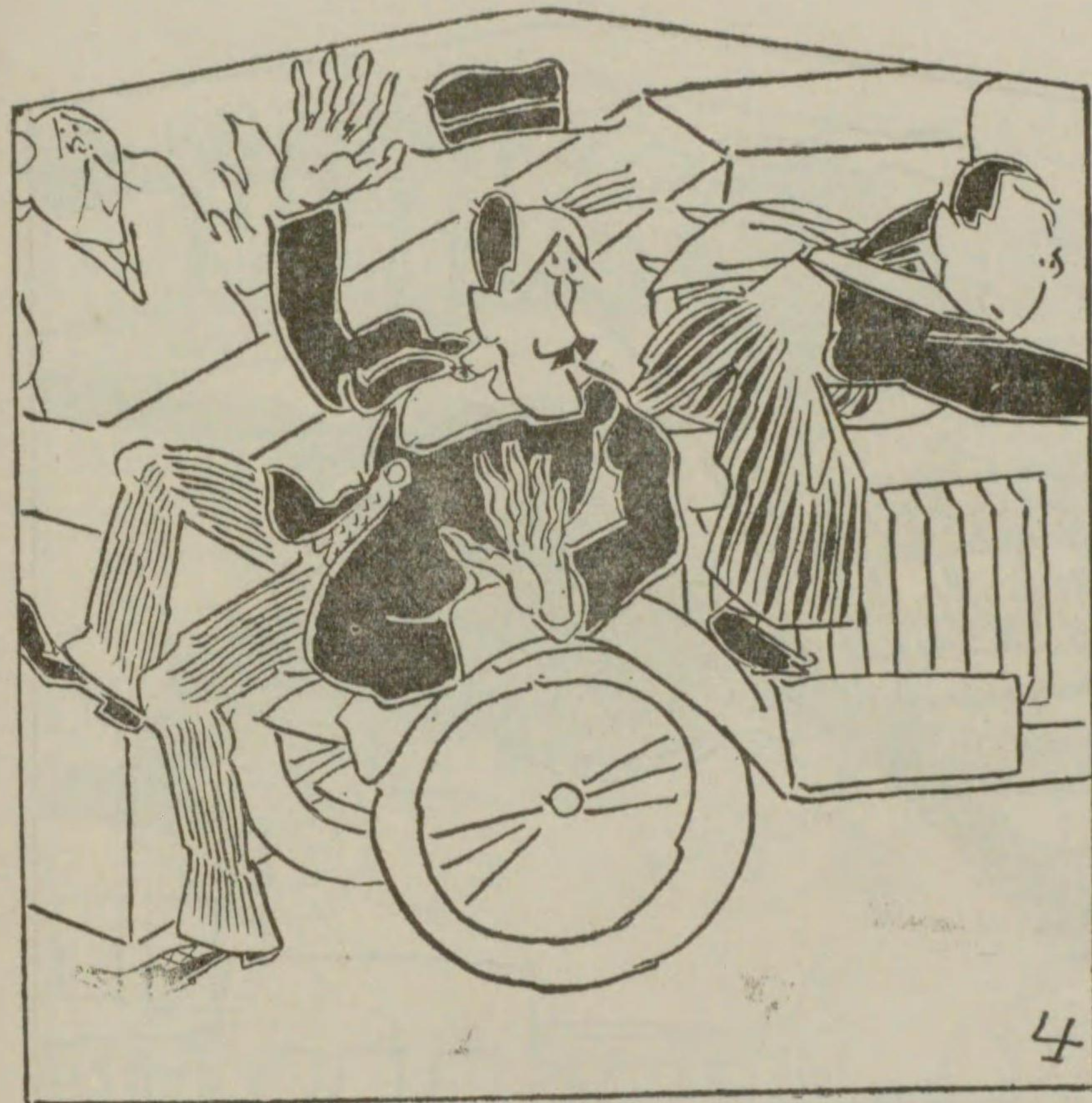


いましい葉書だ。」その券で母おつまはふさいで居ます。  
 二  
 「おとうさん、どうしたの？何？え？」と人成が訊いても父に睨められる許りで、人成はこそく學校へ行つて仕舞ひました。子供の事の急學校の門を潜ればもうその事はすつかり忘れ一日の授業も終り退刻の鈴で生徒達は蜘蛛の子を散らすやうに校門から亂れ出ます。同じ方向へ歸る友達と巫山戯乍ら人成は土堀に沿うて驅けて來ます。一臺の可愛らしい小型自動車が置いてあります。「や、小型自動車、いゝなあ。」「素的！」子供



志で居ましたが、その後手前の方が移轉してしばらくお目にかゝりませんでしたが、こゝへは御用ですか。」幹人「いえ、なに。」幹人は始め口を濁して居たが、聴て頭を掻き乍ら今朝勤め先より臍首された一條、それから此の職業紹介所へ口を探しに来たが、仲々埒開きさうもない話しをすつかり打聞けた。卷ちやんと人成がしばらく振りに仲好く話合ふ姿を見て子煩悩の政八「ようがす、卷のお友達のおとうさんならあつしがお世話をしませう、兎も角あつしの事務所へお勤めなせえ。」

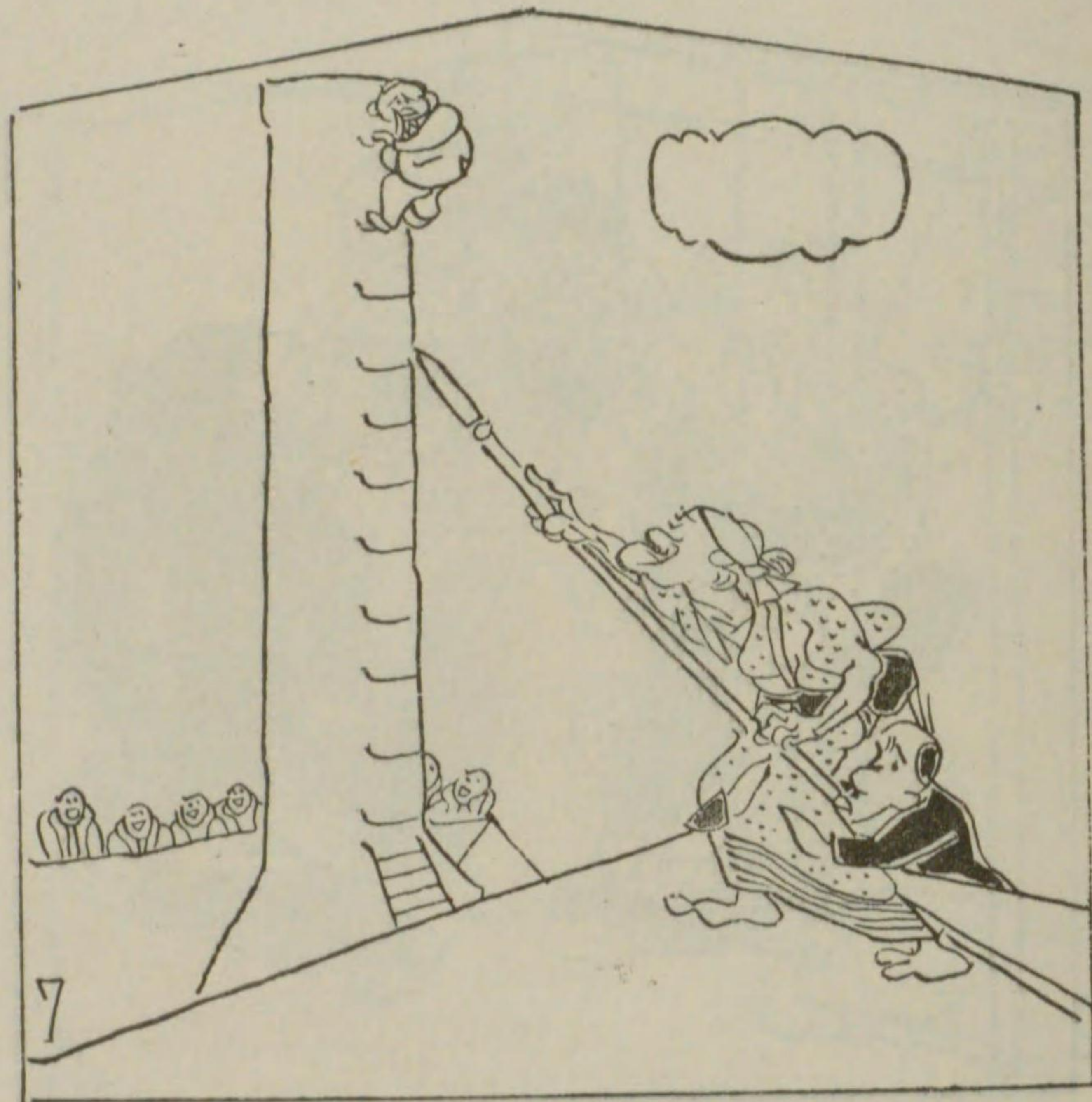
六  
その日の午後祖母おひさは茶の



へ軌り込む程の力はまだ充分ありました。自動車に嚙りついて居た人成が、大人の叫ぶ聲に思はず願つて見ると、闖入した自動車に腰を突飛ばされ周章て居るのは父幹人でした。「おとうさんご免よ。」

五

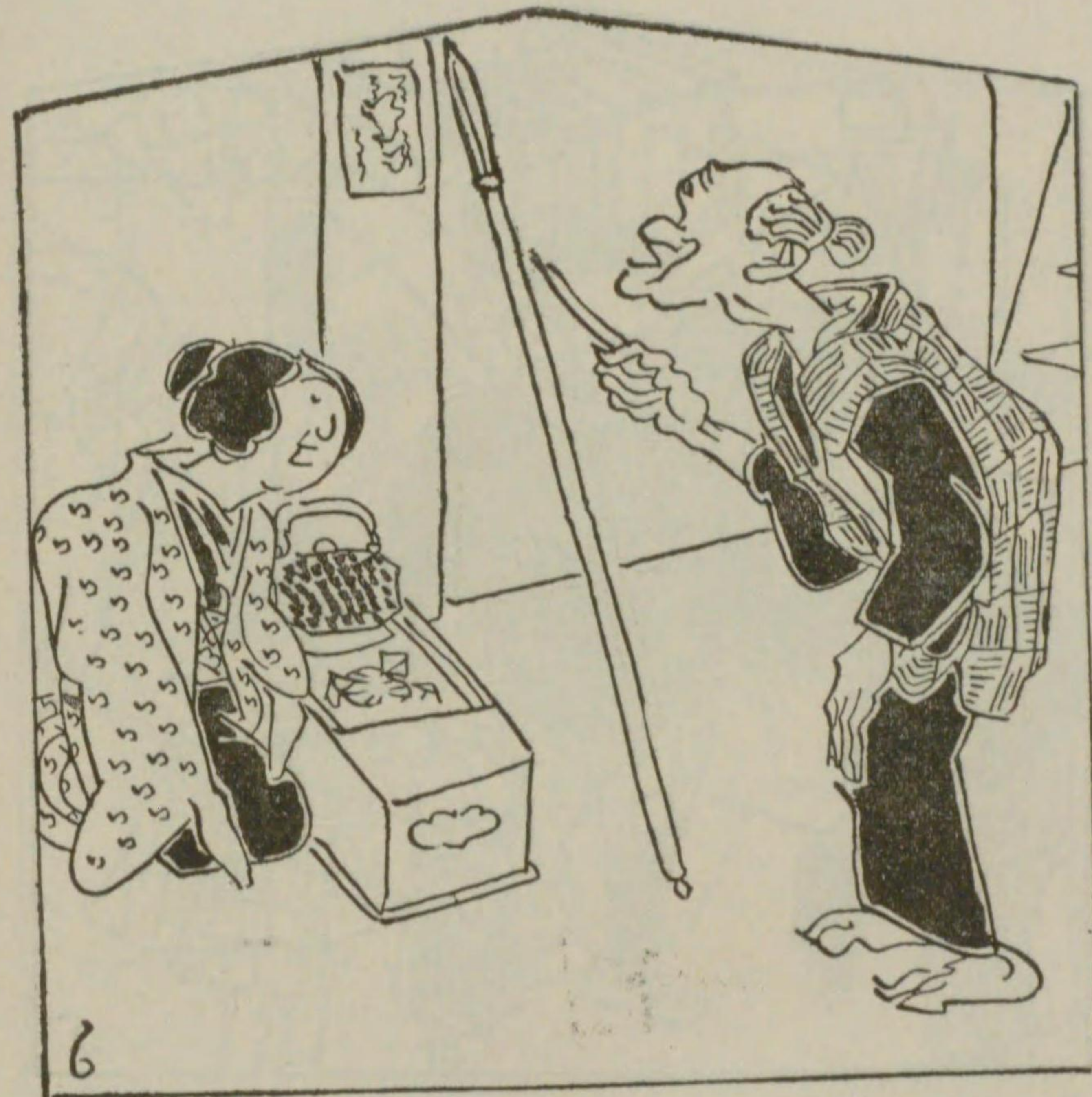
いふ間もなく自動車のあとを追つて持主が飛込んで来ました。それは、卷ちやんとその父親政八。小型自動車は政八が近頃買つて自分で運轉を習ひ、今日も卷ちやんを乗せて用足しに出たところでした。人成と卷ちやんの邂逅。政八と幹人の邂逅。政八以前はお隣同



それをいはんかい。越度あるものなりや、人様の厄介にはなりません。この母が美ン事成敗して除きようぞな。もし又越度ないものを祿から離しなるとしたら、そちらにも覺悟がござらう。どないぢやね。コレ社長さん。社長は煙突の頂上で括猿の様になつて、片手で拜んでる。幹人「おつかさん、もう僕は他に役が見つかりました。こんな薄情な會社に未練はありません」それから一什を話すとおひさは漸く槍を収めた。

八

一同家へ歸つてから老母おひさ「聞けば今度幹人が浪々の身に成るべきを他の出仕につかさせたのは



間の葉書の磔刑と槍を發見して嫁のおつまに訊く。おつま一什を話す何思ひけんおひさはその槍を取上げ、おつまの吃驚留むるを振切つて表へ飛出した。

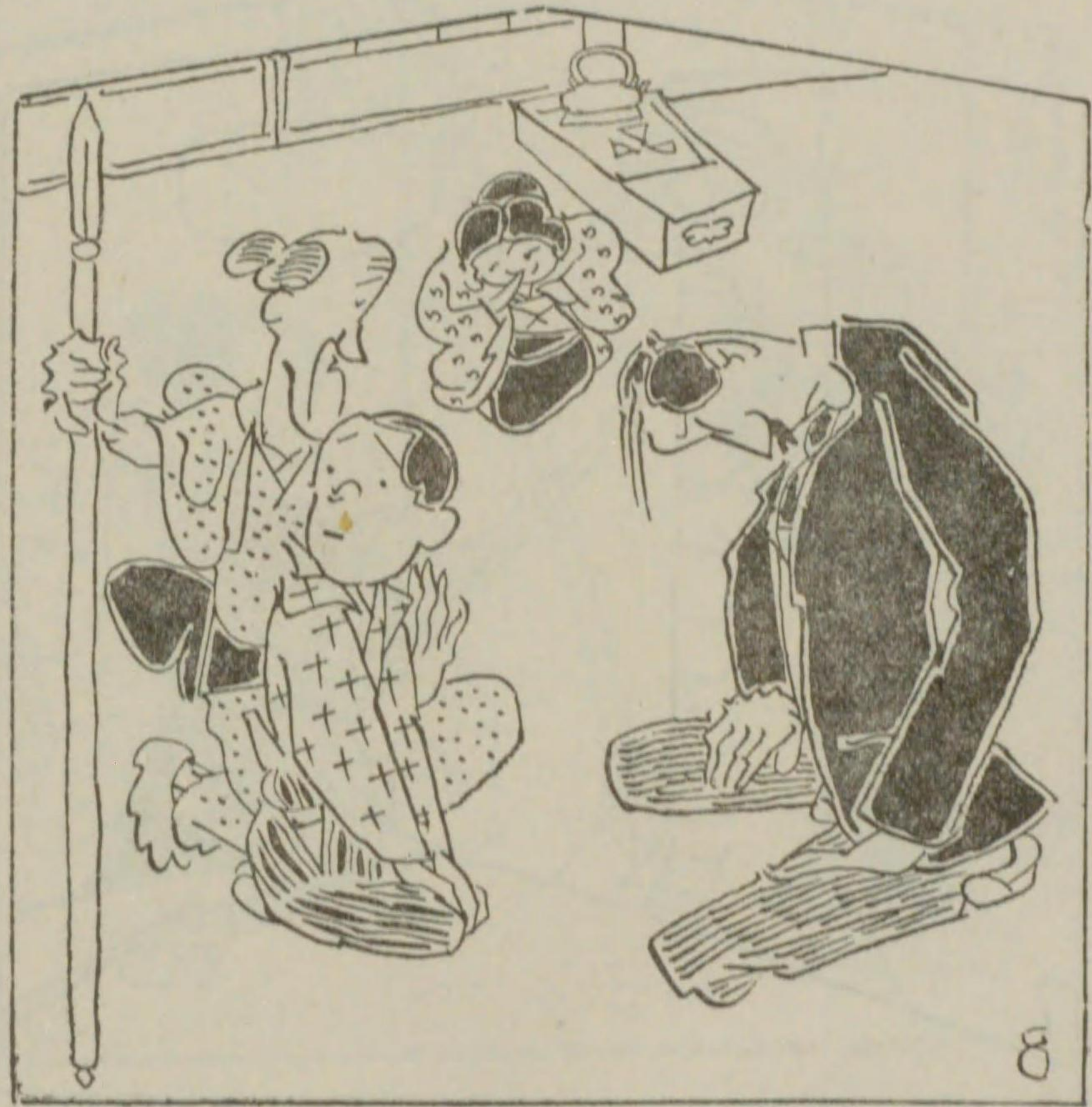
七

こなた幹人は安心し、政八に厚く禮を述べわかれ、會社へ退職金を受取りに寄ると、社内の連中わあく騒いでる。様子を訊くと鹹首された社員の老母が抜身の槍で社長へ談判に來た騒ぎださうな。行つて見ると社長は逃場を失ひ、煙突の頂上へ追上けられてる。其の下で槍を抜いてるのは、擬ふ方なきわが母おひさ。おひさは老の眼を怒らし「わしの忤に何の越度があつて祿を離しなされた。さあ、



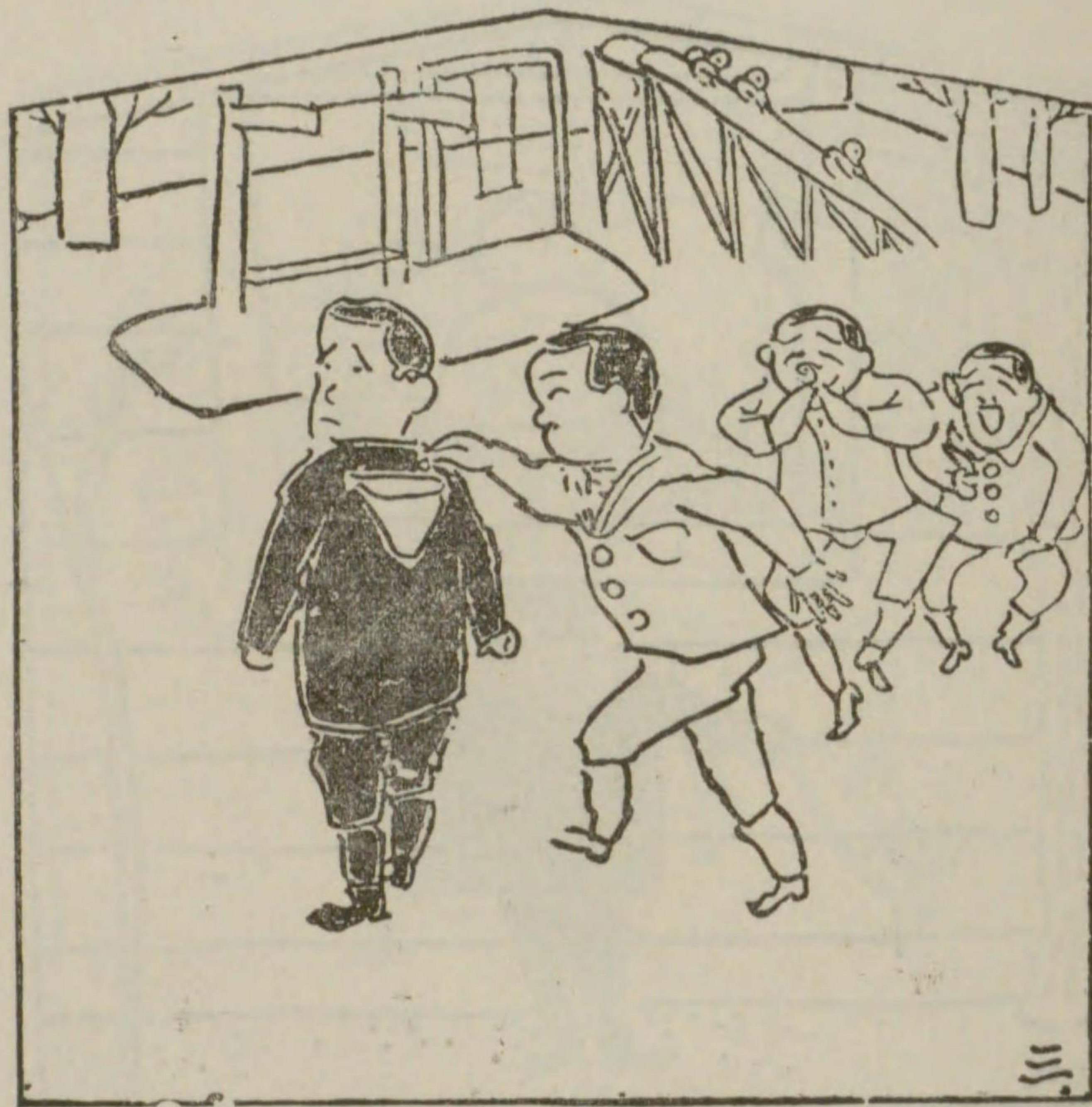
母親おつまは親戚鈴木木助の家に初産があつたので泊りがけで手傳ひに行きました。其間人成の世話は祖母おひさが面倒を見る事になりました。所がどういふものか人成は此頃學校へ行のを嫌つて仕様がありません。おひさが段々理由を問詰ると、此頃小學校の生徒間に洋服が流行り、父兄にねだつてそれを着ます。そして着得ない和服の者は何かと肩身の狭い思ひ

春の眼覚め 洋服流行

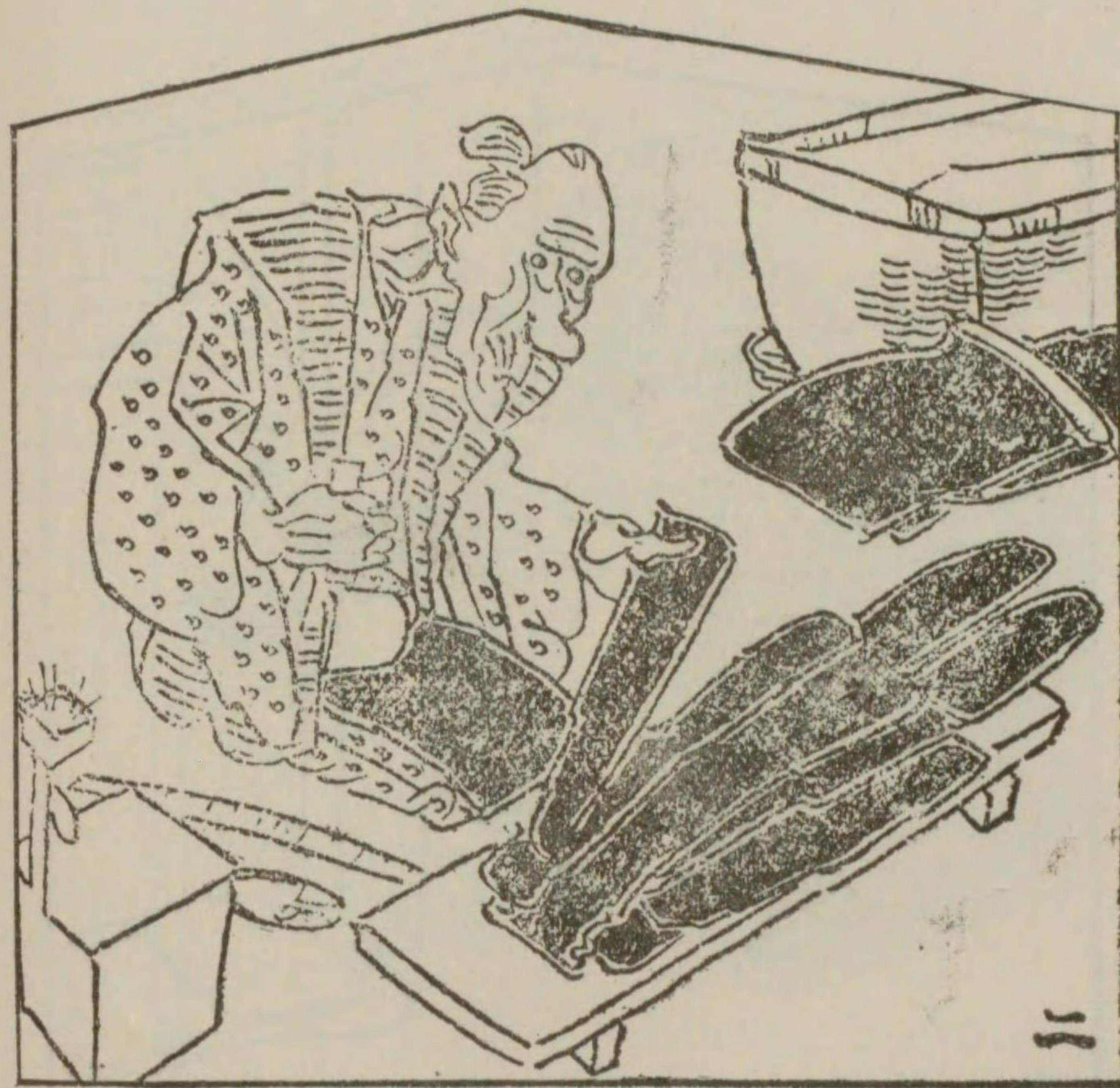


人成の仲介ちやさうな。親子の仲でも義理は義理ちやぞな。幹人は人成に禮をいふがよい。『幹人おつかさん、でも。』おひさ『お手前が義理を缺いて息子に仕付けがなりますか。』幹人『ちや、しかたがない。人成有難う。』おひさ『そないな、挨拶は辭儀にならんぞな。もし。この度び貴殿の御膳煎りにて無事出仕についてゐる。貴殿の御親切、孫子にも申傳へ、生々世忘却は仕りません。とな、男らしくいはんかい。』幹人『孫子にも申傳へてつて、相手が子ですぜ。まあ面倒臭い。やつて仕舞はう。』人成笑ふな。扱てこの度び貴殿の御膳煎りにて無事出仕についてゐる。貴殿の御親切——』





さが拵へて呉れた洋服を着て學校へ出かけました。これは他のところはどうやら洋服らしく出来て居ましたが、たゞ一つ背中に三角の妙な小袋がついて居ます。おひさの考へには、洋服といふものと外套のトンビといふものとが一しよになつて頭に入つて居ました。それで子供の洋服には背中にトンビの頭巾のやうなものをつけてやらないと形が寂しいやうに思へました。それでこんな小袋を取付けたのです。學校朋輩の友達珍らしがり、「やあ、人ちゃんの背中にへんなポケットがついてら。何か入



をするのだ相です。  
 おひさは可哀相がり涙を零し、「おばあさんが具合よってお前の洋服を拵へてやる程に心配せずに行きなはれ。」と宥め賺し人成をやうく學校へ送り出した。留守の間におひさは古行李の中より亡くなつた夫根十郎守景が國會開設祝賀會の時に初めて着たといふ燕尾服を取出した。それに老婦の想像や工夫で裁ち縫ひし、すつかり子供らしい洋服に仕立替へた積り。  
 三

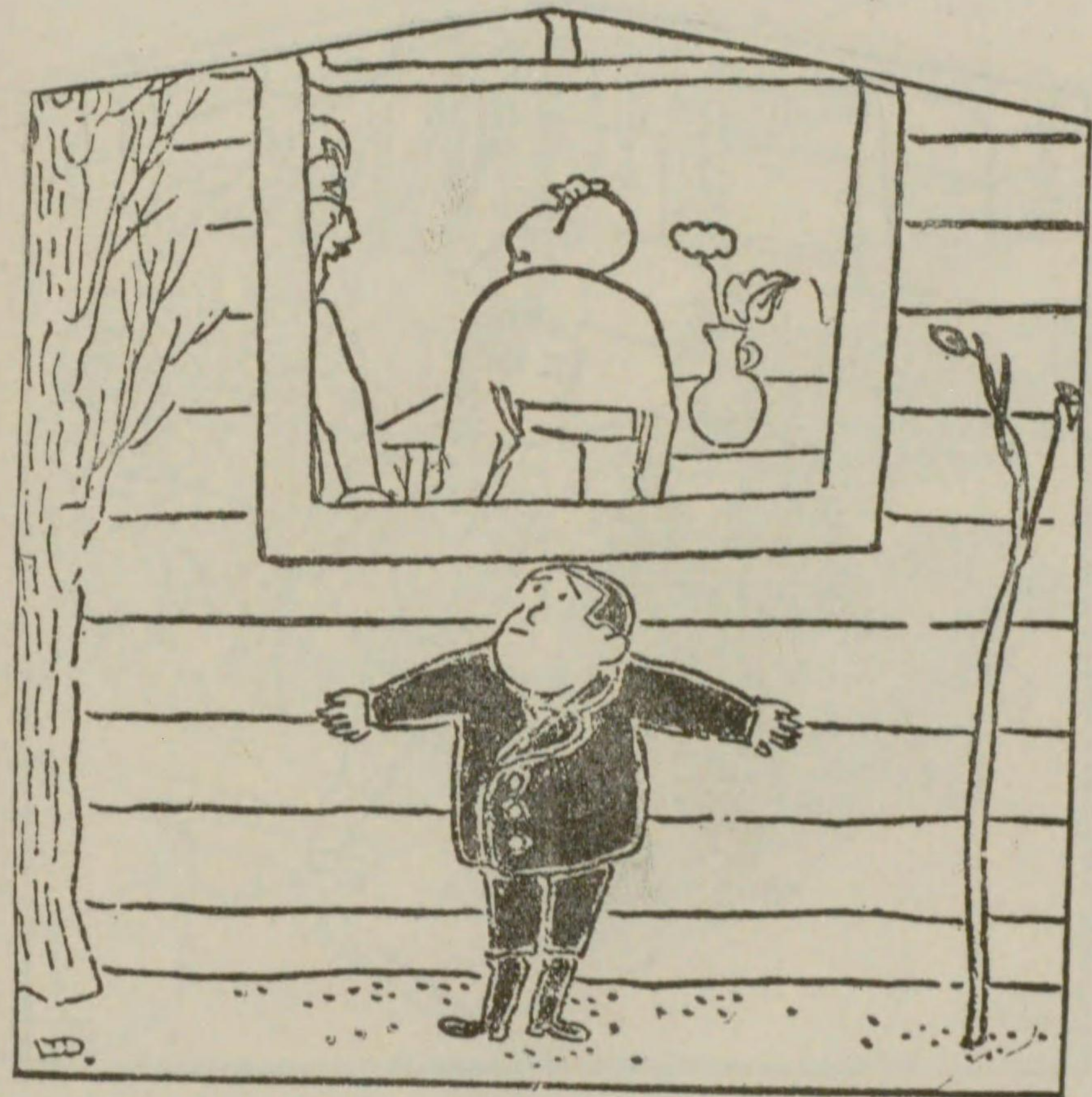
翌朝人成はいそくと祖母おひ



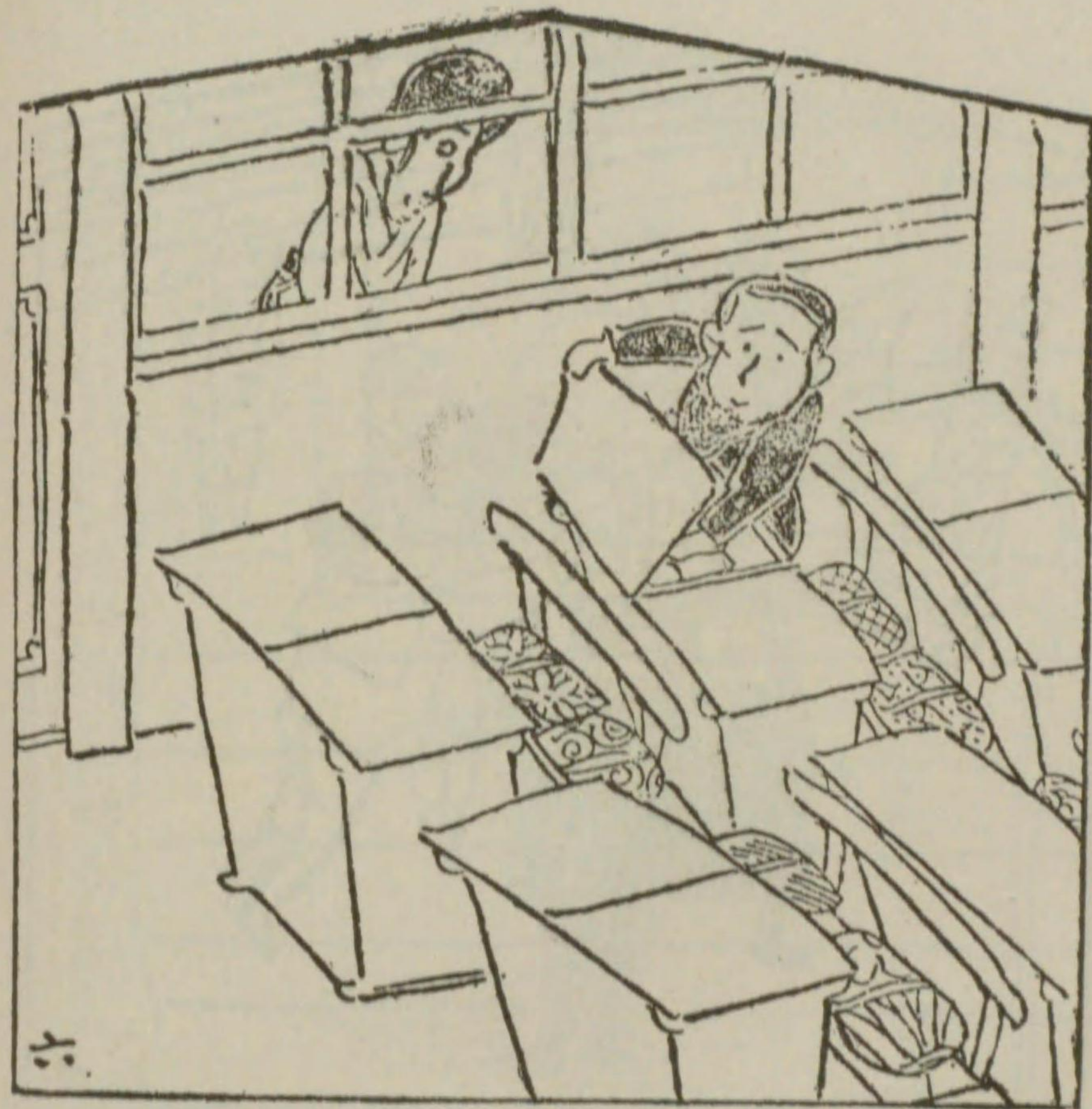
五

この頃人成の同級生の間にをか  
しな事が流行り出して来ました。  
男生の勇氣のあるものが女生の机  
の中へ手紙を入れるのです。する  
とラブだ〜といつて運動場など  
で相手の女生が遊んでゝも居ると  
その手紙を入れた男生を友達が  
勢で掴まへて行つて押しつけるの  
です。ラブとは何の事やら男女間  
の交渉とはどんなものやら勿論無  
我夢中ですが、兎に角かういふ事  
件を惹起す事がこの年頃の子供等  
の心に一種のショックを覚えさせ  
るのでした。

六



れてやれ。」さういつて小石や塵  
の屑を入れます。  
四  
自慢で着て来た洋服が案に相違  
してこの始末に人成は泣顔。それ  
から休課時間中もなるたけ人の來  
ない校舎の壁に背中をつけ、袋を  
隠して居ます。その場が丁度、教  
員應接間の窓の下でした。外に人  
ありとも知らず窓の中では若い男  
の教員の桃井先生が若い女の教員  
の梅園先生に向つてこんな事をい  
つてます。「僕は心からあなたを  
愛してるのです。」すると梅園先  
生は眞つ緒になつて居ます。

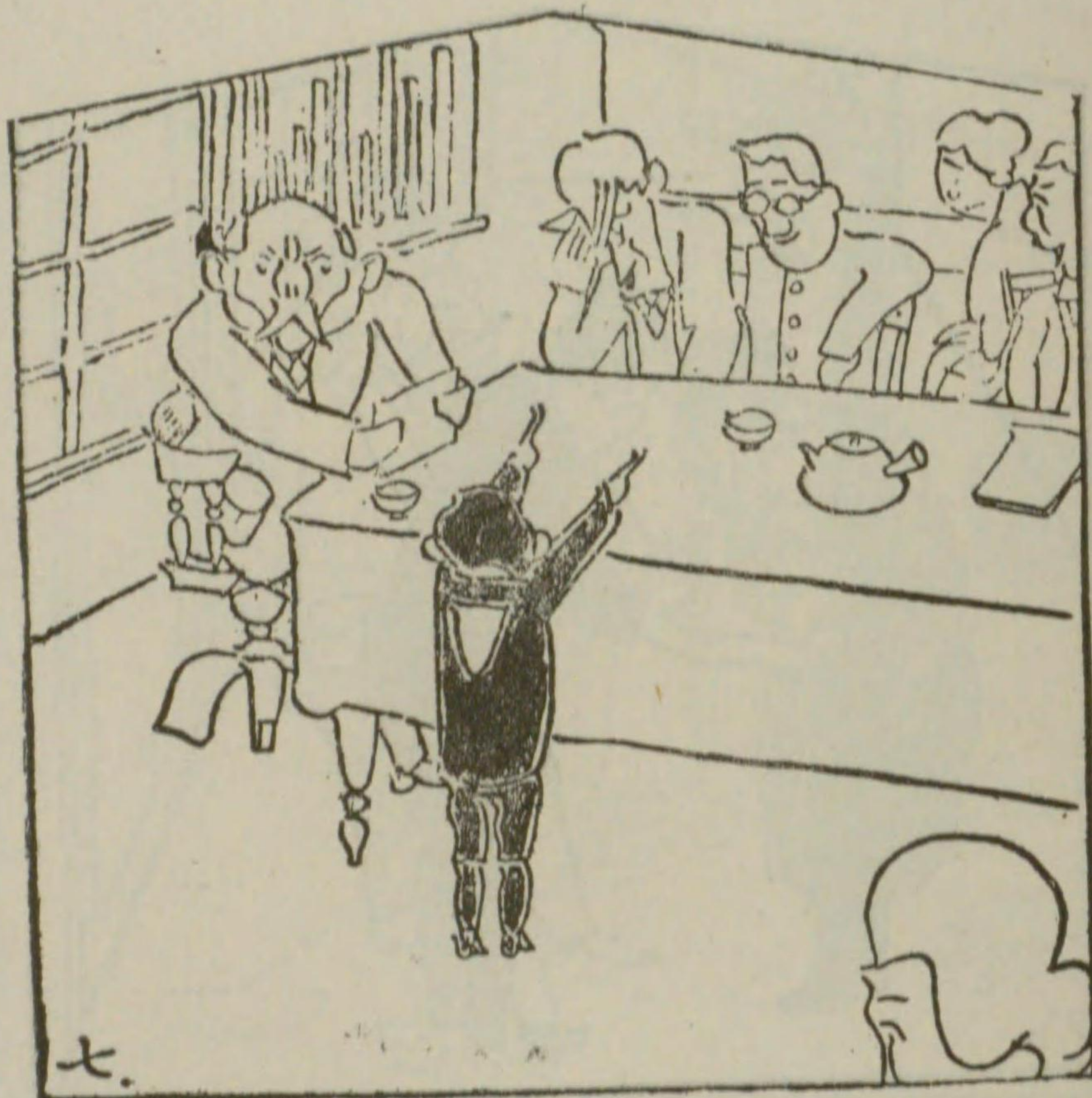


六

人成は自分にラブが無い事がひ  
け目のあるやうに覺えました。そ  
れで一生懸命手紙を書き、他の女  
生徒には怖氣がつき手が出せない  
からこの頃一しよの學校になつた  
馴染平斐の巻ちやんの机の中へそ  
つとゞに行きました。それを受  
持の北村先生に見附かりました。

七

人成は教員室へ連れて行かれて  
校長さんから訊問を受けました。  
校長先生が難かしい顔をして、  
「此紙に書いてあるのがおまへが  
書いたのだな、エート、何だ、ボ  
ク、ハ、コ、ロカラ、アナタ、ヲ、  
ラブ、シテルノデス、ヒトナリヨ

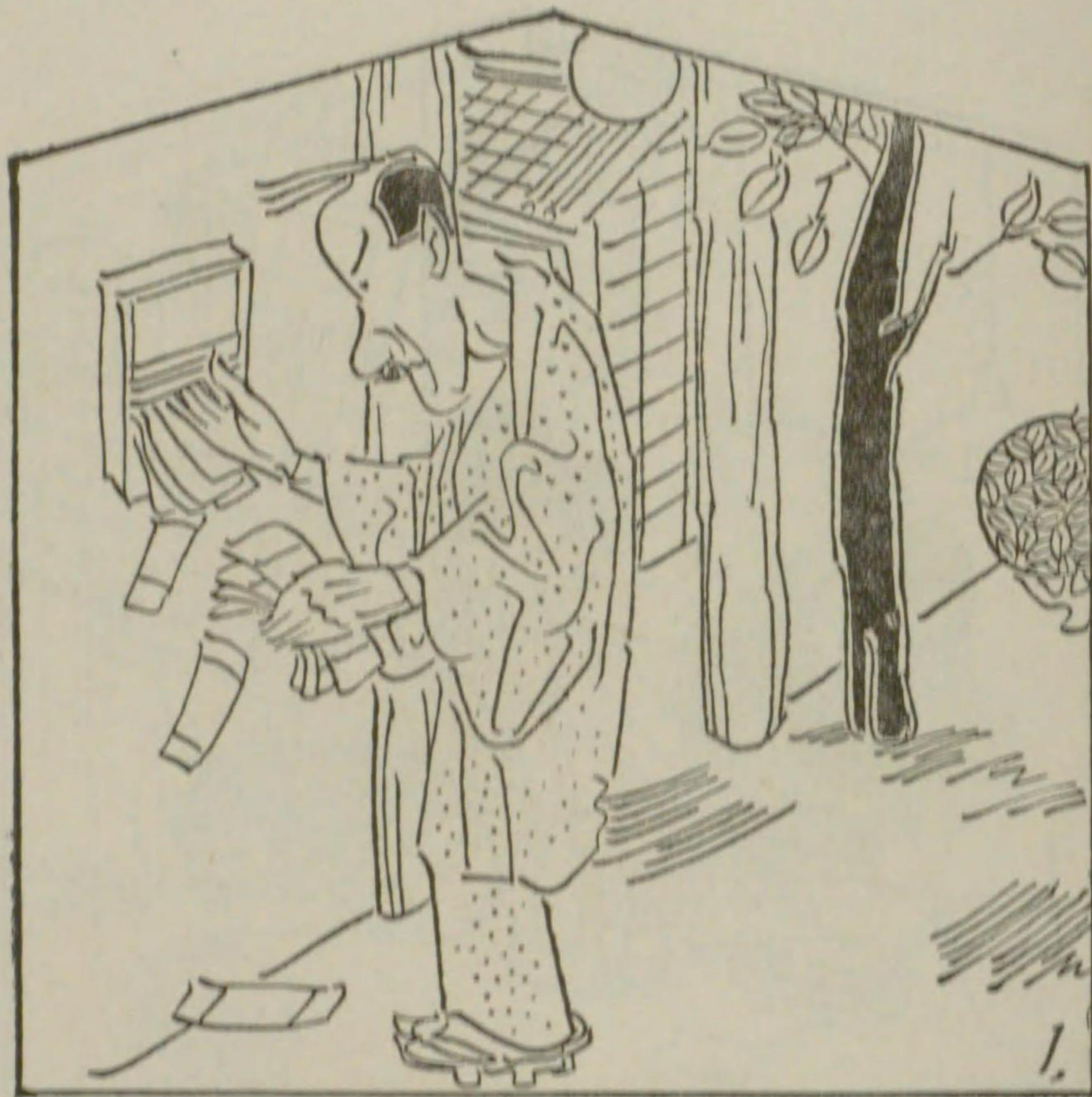


七

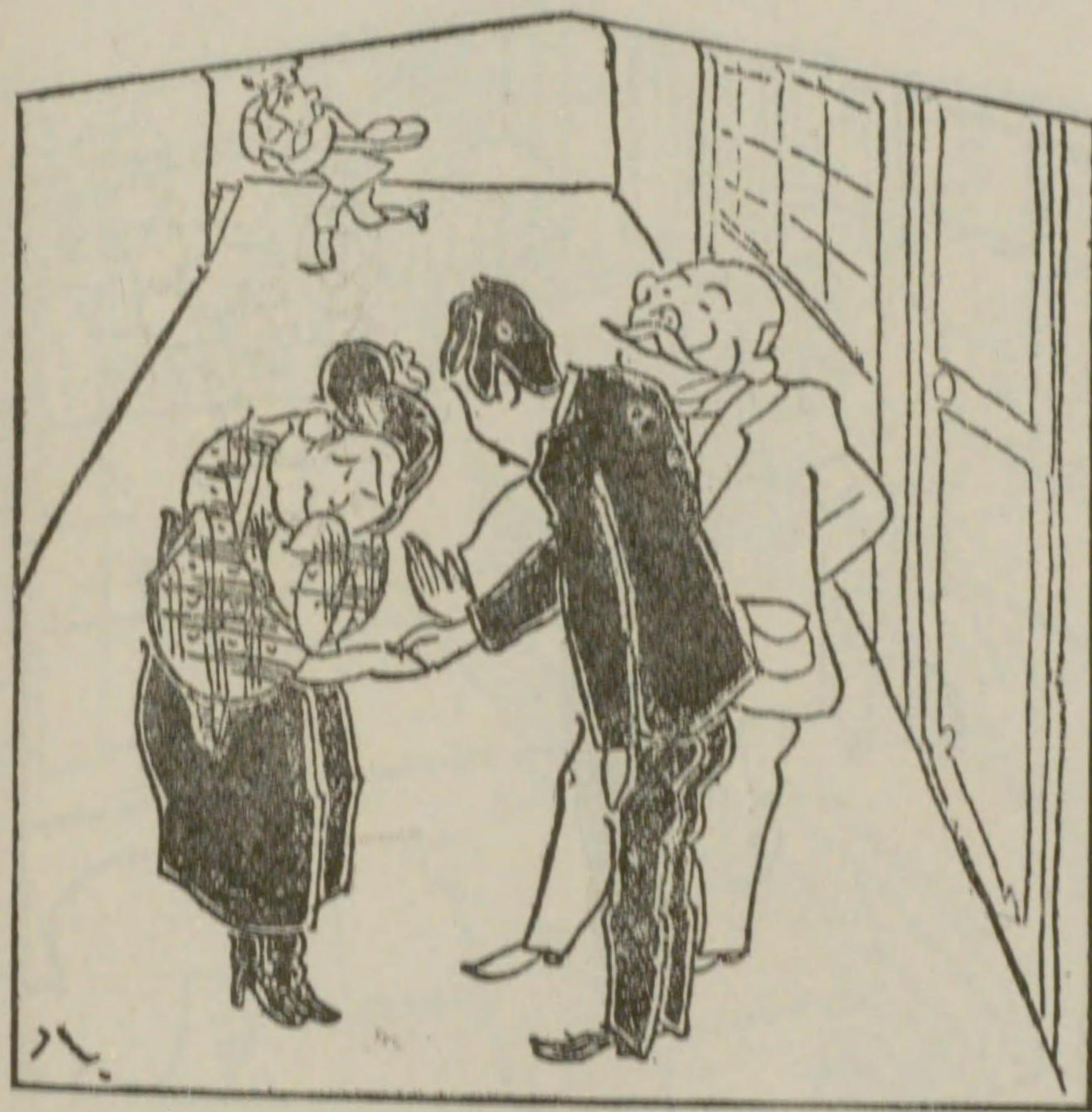
リ、マキチャンへ、こりや大變な手  
紙だ。唯野お前はこんな文句を自  
分で考へたのではあるまい。誰か  
に智慧をつけられたのだらう。誰  
に教へられたのだ。素直にいふが  
よい。」問ひ詰められて人成、「僕  
あすこの窓の下に居たら桃井先生  
が梅園先生にさう仰しやつてゐる  
のを聞いて其を書いたのです。」桃  
井梅園「アツ。」教員達「ウフ……」

八

人成は二時間立たされ、それか  
ら以後を戒められ釋放された。教  
員達を歸して後留めて置いた桃井  
先生と梅園先生に向ひ、校長二人  
共獨身だから、これが本氣なら聞



何とかかんとかいつてるうちに  
 人成は小學卒業間近になりまし  
 た。父幹人は自分がさしたる學歷  
 なく、その爲め處世上とのくらゐ  
 損をしたか、嘗めた苦い經驗を願  
 み、人成だけではどのやうにもして  
 高等教育の課程だけは人並に踏ま  
 せてやらうと決心しました。従つ  
 て中學も成る丈けよいのへ入れ度  
 い。この頃幹人は方々の中學の規  
 則書を取寄せ毎日その比較研究



違ひの無いうち早く結婚したがよ  
 からう。勤務の方は僕が何とか都  
 合をつけよう。翌日から桃井先  
 生も梅園先生も此學校に姿を見せ  
 なかつた。其年の暮のクリスマス  
 に、人成に宛て綺麗なクリスマス  
 カードが届いた、差出人は樺太の  
 或小學校より桃井若介、舊姓梅園  
 顔子として、それから文句は、「人  
 成君、ゴ、ロカラ、ラブするものは  
 北の果の雪をも踏まねばならぬ。  
 われ等は君がいつまでも今の如  
 くラブに無識ならん事を祈る。わ  
 れ等の愛の使童さんへ。」人成に  
 は讀めませんでした但其カードを  
 無くさずに仕舞つて置きました。

入學難 無線電話